

国文学演習（2） a・b

久保朝孝

【授業の概要】

『かげろふ日記』を輪読する。

【授業の目標】

平安時代を範囲とし、日記文学を対象とする。中古文学研究の基本的姿勢・方法を実践的に理解・体得することを目的とする。

作品の「読み」の方法を確立し、問題発見・調査・整理・批判・考察の過程を経て、自らの見解をまとめあげる力を養成したい。

【授業計画】

毎回、以下の手順に従って『かげろふ日記』を精読する。

- (1) 担当者の報告・発表
- (2) 質疑応答
- (3) 批判討論
- (4) 助言

【評価方法】

出席状況、上記(1)(2)(3)及び期末レポート等を総合して評価する。

【テキスト】

授業時に指示する。

【参考文献・資料】

授業時に指示する。

国文学演習（4） a・b

山下宏明

【授業の概要】

『平治物語』を読む。この作業を通して、物語テキストの読み方を訓練する。

【授業の目標】

これまで、どのような研究が行われ、どれをどのように越えてゆくかを考えさせます。

【授業計画】

始めに研究史を展望し、課題の所在を確認する。

第一類本と第四類本の比較に、いくさ物語生成の実態把握につとめ、その表現としての「語り」を文体の課題としてとらえ、解説の方法を指導する。

【評価方法】

各期のレポートにより判定する。

【テキスト】

新日本古典文学大系 保元・平治物語・承久記（岩波書店）

日本古典文学大系 保元物語・平治物語（岩波書店）

国文学演習（3） a・b

岩下紀之

【授業の概要】

『雨夜の記』の講読。

【授業の目標】

大学院レベルでの写本解読能力の育成。

【授業計画】

出席者に調査発表を課する。

【評価方法】

日常の研究成果による。

【テキスト】

教員が用意する。

国文学演習（5） a・b

阿部一彦

【授業の概要】

井原西鶴の『世間胸算用』を影印本で解読し、鑑賞して行く。

【授業の目標】

近世文学の研究能力を高める。

【授業計画】

第1回 西鶴の文学的生涯について。

第2回 以下、受講者の分担により読んで行く。

第3回

第4回

第5回

第6回

第7回

第8回

第9回

第10回

第11回

第12回 『世間胸算用』の研究史と論点

【評価方法】

出席・発表とレポートによる。

【テキスト】

影印本 世間胸算用（興津要編著 おうふう）

国文学演習（6） a・b

小倉 斉

【授業の概要】

〈物語の行方—怪談・奇談を中心に—〉
近代日本の怪談・奇談の系譜をたどることを通して、近代における「物語」の変容を考察する。基本的な観点は、「近代（モダン）」を「プレ・モダン」の側から眺めることにあり、眺めるわれわれは「ポスト・モダン」の立場に立っているということにも意識的・自覚的でありたい。

【授業の目標】

近代日本における「物語」の変容・行方について考察するとともに、物語分析の方法を実践的に身につける。

【授業計画】

- 〈前期〉
- 1 序章
 - 2 (牡丹燈籠) 物語の系譜と三遊亭圓朝の「近代」
 - 3 「神経」の成立
 - 4 ラフカディオ・ハーンの「物語」
 - 5 『夜窓鬼談』の世界
 - 6 『夜窓鬼談』の継承者たち—田中貢太郎・濹澤龍彦—
- 〈後期〉
- 1 怪異譚の時空間—漱石・科学・時間—
 - 2 妖異の絵図—泉鏡花の物語世界—
 - 3 幸田露伴と怪談
 - 4 芥川龍之介と怪談
 - 5 現代のホラー小説ブームの意味
 - 6 日本的近代と「物語」

【評価方法】

レポート、授業への参加状況、レジュメの内容、発表の様子などによる。

【テキスト】

- 〈前期〉：怪談牡丹燈籠（三遊亭圓朝 岩波文庫）、怪談・奇談（小泉八雲 講談社学術文庫）、夜窓鬼談（石川鴻斎著 小倉斉・高柴慎治訳 註 春風社）、田中貢太郎日本怪談事典（東雅夫編 学研M文庫）、日本怪談大全Ⅱ・幽霊の館（田中貢太郎 国書刊行会）、ねむり姫（濹澤龍彦 河出文庫）、うつろ舟（濹澤龍彦 福武文庫）
- 〈後期〉：倫敦塔・幻影の盾（夏目漱石 岩波文庫）、高野聖・眉かくしの霊（泉鏡花 岩波文庫）、鏡花短編集（泉鏡花 岩波文庫）、観画談・怪談・土偶木偶（幸田露伴 プリント）、妖婆・アグニの神（芥川龍之介 プリント）、夜啼きの森（岩井志麻子 角川ホラー文庫）

国文学演習（8） a・b

増井典夫

【授業の概要】

近代日本語研究のありかたを考える。まずは「漢字圏の言語」の問題を考える所から始めていく。

【授業の目標】

日本語研究の水準をよく理解する。

【授業計画】

講義及び出席者の調査発表で進める。

【評価方法】

出席状況とレポートによる。

【テキスト】

漢字圏の近代（村田・ラマール編 東京大学出版会）
その他は授業時の指示による。

国文学演習（7） a・b

都築久義

【授業の概要】

近代作家の著名な作品を毎回とりあげて講義する。

【授業の目標】

近代文学への関心を高める。

【授業計画】

履修者の発表、出席者の質疑、討議を中心に授業を展開する。

【評価方法】

平常の学習態度

【テキスト】

毎時決める

国文学特講（2） a・b

久保朝孝

【授業の概要】

『平中物語』を輪読する。

【授業の目標】

平安時代を範囲とし、物語文学を対象とする。中古文学研究の基本的姿勢・方法を実践的に理解・体得することを目的とする。

作品の「読み」の方法を確立し、問題発見・調査・整理・批判・考察の過程を経て、自らの見解をまとめあげる力を養成したい。

【授業計画】

毎回、以下の手順に従って『平中物語』を精読する。

- (1) 担当者の報告・発表
- (2) 質疑応答
- (3) 批判討論
- (4) 助言

【評価方法】

出席状況、上記(1)(2)(3)及び期末レポート等を総合して評価する。

【テキスト】

特に指定しない。各自使いやすいテキストを用意すること。

【参考文献・資料】

授業時に指示する。

国文学特講（3） a・b

岩下紀之

【授業の概要】

賦物連歌の講読。

【授業の目標】

大学院レベルでの写本解読能力の育成。

【授業計画】

出席者に調査発表を課する。

【評価方法】

日常の研究成果による。

【テキスト】

教員が用意する。

国文学特講（5） a・b

阿部一彦

【授業の概要】

『連句文芸の流れ』を使用し、以下の授業計画に従って、「連句文芸」の変遷と本質について学んで行く。

【授業の目標】

近世文学の研究能力を高める。

【授業計画】

- 第1回 連歌の発生
- 第2回 短連歌から長連歌へ
- 第3回 初期の長連歌
- 第4回 地下の連歌
- 第5回 つくば集から新撰つくば集へ
- 第6回 室町俳諧
- 第7回 連歌の固定
- 第8回 貞門俳諧
- 第9回 守武流の流行
- 第10回 漢詩文調の流行と芭蕉
- 第11回 蕉風俳諧と元禄俳壇
- 第12回 雑俳の成立と展開

【評価方法】

出席・発表とレポートによる。

【テキスト】

連句文芸の流れ（櫻井武次郎著 和泉書院）

国文学特講（4） a・b

山下宏明

【授業の概要】

〈文学研究と批評〉作品批評のために、時代やジャンルを越えて研究の方法を検討する。

入学者は、各自の専攻を有し、論文をも執筆している。それぞれの成果が、現在の学会において、いかなる位置を占め、いかなる意味があるかを考えるべきで、たえず批評史の課題として相対化しなければならない。

そのための研究や批評の錬磨に努め、歴史的な展望が必要である。必要に応じて批評史の展望をも概説し参考を提供する予定である。

【授業の目標】

物語の読み方を教え、各自、論文が書けるよう指導します。

【授業計画】

前期には、まず各自の、これまでの研究経過の報告を求め、あわせて、その研究史上の位置や意味を考えさせる。必要に応じて、批評の方法を指導する。

後期には、各分野の注目すべき論文や著書を紹介し、読解を行うことを課す。時に、具体的な作品を取り上げ、その解読をも平行して行う。

【評価方法】

出席状況と、各期のレポートにより判定する。

【テキスト】

最低の必読文献として、次のものがある。

文学とは何か（T・イーグルトン 岩波書店）

新文学入門（大橋洋一 岩波書店）

新しい文学のために（大江健三郎 岩波新書）

物語のデイスコース（ジェラルド・ジュネット 風の薔薇社）

その他、各種学会誌の論文コピー

国文学特講（6） a・b

小倉 斉

【授業の概要】

〈短編小説の方法—作品をどう読み、どう論ずるか—〉

日本の近・現代を代表する短編小説の精読を通して、「小説を読む」という行為を意識化し、多様な読みを生み出す分析方法や文学研究の方法を実践的に身につける。

【授業の目標】

短編小説の精読を通して、多様な読みを生み出す分析方法や文学研究の方法を実践的に身につける。

【授業計画】

〈前期〉

- 1 『にぎりえ』精読（2回）
- 2 『少女病』精読（2回）
- 3 『半日』精読（2回）
- 4 『サラサーテの盤』精読（2回）
- 5 『百萬圓煎餅』精読（2回）
- 6 『馬』精読（2回）
- 7 『風流夢譚』精読（2回）

〈後期〉

- 1 『だらだら坂』精読（2回）
- 2 『阿久正の話』精読（2回）
- 3 『陽気な夜回り』精読（2回）
- 4 『幼児狩り』精読（2回）
- 5 『木の箱』精読（2回）
- 6 『樹影譚』精読（2回）
- 7 『レキシントンの幽霊』精読（2回）

【評価方法】

授業への参加状況、発表およびレポートの内容によって総合的に評価する。

【テキスト】

〈前期〉：にぎりえ（樋口一葉 プリント）、少女病（田山花袋 プリント）、半日（森鷗外 プリント）、サラサーテの盤（内田百閒 プリント）、百萬圓煎餅（三島由紀夫 プリント）、馬（小島信夫 プリント）、風流夢譚（深沢七郎 プリント）

〈後期〉：だらだら坂（丸谷オー プリント）、阿久正の話（長谷川四郎 プリント）、陽気な夜回り（古井由吉 プリント）、幼児狩り（河野多恵子 プリント）、木の箱（金井美恵子 プリント）、樹影譚（丸谷オー プリント）、レキシントンの幽霊（村上春樹 プリント）

国文学特講（7） a・b

都築久義

【授業の概要】

近代作家の著名な作品を毎回とりあげて講義する。

【授業の目標】

近代文学への関心を高める。

【授業計画】

作家・作品ごとに発表者を決め、発表をもとに討議する。

【評価方法】

平素の学習態度を中心に評価する。

【テキスト】

特に定めず。

国文学特講（8） a・b

増井典夫

【授業の概要】

日本語研究のありかたを考えるために、丹羽一彌の著作を読みながら考えていく。

【授業の目標】

日本語研究の水準をよく理解する。

【授業計画】

講義及び出席者の調査発表で進める。

【評価方法】

出席状況とレポートによる。

【テキスト】

日本語動詞述語の構造（丹羽一彌 笠間書院）

その他は授業時の指示による。

特殊研究（1）国文学特論 a・b

森 正利

【授業の概要】

大学院で学修した国文学に関する専門知識並びに研究の成果を、中等教育の現場に生かすための実践的学力及び指導力を身につける。

【授業の目標】

次の三つの実力を養成する。

1. 教員採用試験（筆記試験・論文・面接等）に対応できる学力。
2. 教育現場から要請される実質的教科指導力。
3. 優れた教育実践を実現する教師の資質と姿勢。

【授業計画】

主として高等学校の教材を活用しながら、発見的、創造的な深い読解力と、それを授業に生かす方法が身につくような指導をしたい。さらに、指導力とはどのようなものかについて考察する中で、望ましい教師像のあり方についても触れてみたい。

授業は講義と演習とによるので、学生の積極的な参加が不可欠である。

【評価方法】

授業への積極的な参加状況、課題の提出状況及び期末のレポートの内容等により、総合的に評価する。

【テキスト】

プリントを用意する。

【参考文献・資料】

分析批評入門（川崎寿彦著 至文堂）

特殊研究（2）日本古典書誌学 I a・b

藤井奈都子

【授業の概要】

日本の古典を研究する者で、古典の原資料（近世やそれ以前の写本、刊本など）を調査し、研究や発表をしない者は少ないであろう。その場合、原資料の紙質、装訂、文字筆跡、印刷などに関する知識が必要不可欠となる。しかるに担当者の不足によってか、歴史分野の古文書学に比して、大学や院での開講が少なく、殆ど個人個人の自己努力で補っている場合が多い。勿論その深い到達は個々の努力となるものであるが、本講義においては、その基礎を会得してもらおうとするものである。

【授業の目標】

古典籍を扱うための基礎知識を習得する

【授業計画】

○近世史での書誌学的作業と研究

○書籍の料紙

・書籍の起源と材料の変遷

・原料による紙の種類、年代

・加工による紙の種類、年代

染色、加工漉造、切紙、金銀、雲母、胡粉、その他の加工紙。

○書籍の形状

・装訂の種類。

・書籍の大きさ。

・書籍の形状に関する部分名称。

○書籍の内容

・書籍の内容に関する種類と用語。

・写本の内容に関する種類と用語。

○刊本

・刊本の種類と名称。

・刊本の歴史。

以上、テキストにより講義を進めるが、殆ど実物を手にさせて理解できるようにする。出来れば装訂の糸綴や修理の実習もやりたい。これは少人数の院でないとは不可能であるから。

【評価方法】

学生の希望も参考にして、レポート、テスト、その他決定する。

【テキスト】

日本古典書誌学総説（藤井隆著 和泉書院）

特殊研究（4）中国文学Ⅰ a・b

寺尾 剛

【授業の概要】

受講生と相談の上、決定したい。漢文読解能力と資料調査能力の向上を主たる目的としたい。ちなみに平成十五年度は『三国志』『楊太真外伝』十六年度は『和漢朗詠集』十七年度は『貞観政要』を読んだ。

【授業の目標】

- ・漢文読解能力、資料調査能力の向上。
- ・和漢比較の視点に立った研究法の育成。

【授業計画】

『史記』『漢書』『白氏文集』『蒙求』『貞観政要』など、あるいは日本漢文（『菅家文草』『本朝文粹』『和漢朗詠集』など）でもよい。

【評価方法】

平常点及びレポート。

【テキスト】

プリント及び授業中に指示。

特殊研究（5）中国文学Ⅱ a・b

寺尾 剛

【授業の概要】

受講生の希望に応じて、研究対象（作品）を決定し、精査・精読してゆく。

【授業の目標】

1. 国文学研究に必要な漢文知識を養う。
2. 日中比較の視点を養う。
3. 中国文献の取り扱い方を養う。

【授業計画】

受講者の希望に沿う。

平成十三、十四、十六年度は『和漢朗詠集』所収の白居易の作品を輪読した。平成十五年度は『三国志』『史記』などを読んだ。

【評価方法】

平常点及びレポート。

【テキスト】

未定。

翻訳論（英語論文作法） a・b

EASLEY, Keith

【Course description】

The course should further develop the ability to write academic papers through critical engagement with individually chosen materials.

Work includes note-taking, the use of sources, understanding and use of academic conventions and language, and the development and presentation of argument. Along with individual tuition there will be class and pair discussion of work in progress and the elements of academic writing.

【Course objectives】

To improve the students' writing of academic papers.

【Course schedule】

The Schedule will be decided according to students' needs.

【Assessment】

A written paper of an agreed length is to be submitted. Evaluation will be based on this.

【Textbooks】

None

英文学演習Ⅱ a・b

大野光子

【授業の概要】

アイルランド文学・文化研究。今年度は特に、19世紀から現代までの小説を中心に読解・分析・批評する。まず、18-19-20世紀アイルランド史の中で、アングロ・アイリッシュ階級とナショナリストたちの立場の変化を概観し、アイルランド文学における階級とジェンダー問題を位置づけた上で、特に Maria Edgeworth の作品と、Frank O'Connor の作品を中心に、精読・解釈・批評する。

【授業の目標】

20世紀アイルランド小説における短編小説の系譜と、「ビッグ・ハウス」文学の伝統を理解することを目指す。

【授業計画】

前期には、18-19世紀アイルランド文化・社会史を概観した後に、Edgeworth と O'Connor の代表的な作品を精読・批評する。

後期には、前期の作業を継続する他、20世紀「ビッグ・ハウス」小説の具体例として、Elizabeth Bowen や Jennifer Johnston、さらには Roddy Doyle 等の作品も比較検討する予定である。

【評価方法】

出席と平常点およびレポートによる。

【テキスト】

テキストは教室にて指示する他、プリント使用。

英米文学演習 a・b

進藤鈴子

【授業の概要】

19世紀及び20世紀の黒人文学を読む。

【授業の目標】

19世紀に奴隷黒人、あるいは自由黒人が書いた黒人文学を読み、『アンクルトムの小屋』との比較により、本当の奴隷制度の姿、自由黒人の生活を理解する。そして、20世紀に描かれる黒人文学を通じて、アメリカ社会における人種の問題をどのように解釈し、また解決していくかを考えていきたい。

【授業計画】

まず Harriet Beecher Stowe の Uncle Tom's Cabin を読み、以下の作品を順番に読んで、それぞれの作品と比較していきます。最後に、アメリカの奴隷問題が、どのような形で表現され、時代や社会の変化と共にどう変化していったかを理解します。

1. Uncle Tom's Cabin
2. Narrative of the Life of Frederick Douglass
3. Clotel
4. The Garies and Their Friends
5. Our Nig
6. Incidents in the Life of a Slave Girl
7. Up from slavery
8. The Souls of Black Folk
9. Native Son
10. Beloved

【評価方法】

講義中の発表、及び各学期末のレポート。

【テキスト】

Uncle Tom's Cabin 以外は追って連絡する。

【参考文献・資料】

『アメリカ黒人の歴史』（著：本田創造／岩波書店）その他は追って連絡する。

英文学演習Ⅲ a・b

柳原佳枝

【授業の概要】

キリスト教の信仰や伝統に目を向けず、英文学の理解を深めることは不可能なことと思う。この演習では、特に英文学とキリスト教文化の関わりに視点をおいて、作品研究を進める。

【授業の目標】

宗教詩を読む。

【授業計画】

G. Herbert, H. Vaughan, W. Blake, C. Rossetti, G. M. Hopkins などの作品を取り上げる。

【評価方法】

出席と平常点及びレポートにより総合的に評価する。

【テキスト】

Christian Literature: An Anthology (Alister E. McGrath, ed., Blackwell) 及びプリントを配布する。

【参考文献・資料】

授業時に紹介する。

米文学演習Ⅰ a・b

池谷敏忠

【授業の概要】

Wallace Stevens の *Opus Posthumous* を用い、そのうち “Adagia” を輪読し、imagination と reality の特質その他を考察します。

【授業の目標】

授業にて明示する。

【授業計画】

一年を通して英文詩論を輪読しますので、受講者は前期・後期とも受講することを希望します。

【評価方法】

レポートまたはテストに各自の出席状況を加味して評価します。

【テキスト】

研究室の原書を貸与します。

米文学演習Ⅱ a・b

横田和憲

【授業の概要】

＜アメリカのイヴの系譜＞について考察します。

【授業の目標】

アメリカ文学には、「エデンの神話」・「成功の夢」・「エデンの喪失」などなど、沢山のアメリカ固有の土着の神話があります。その一つの神話「アメリカのアダム」は、アメリカの文学や文化を理解するための、重要な「鍵」の一つになっています。アダムが居るのであればイヴがいて当然です。

しかしこのイヴのイメージは、何らかの理由で明確なイメージとなりにくく、ごく最近まで研究対象とされることは稀でした。「アメリカのアダム」も「アメリカのイヴ」も「新しいエデン」というピューリタンたちのアメリカ観に源を発しています。ヨーロッパの文明に汚されない、自然のままの無垢な人間のヴィジョンと言っているかもしれませんが、アダムの場合、そのイメージは、アメリカ人の心の中に明確なものとして存在していました。ところが、これに匹敵すべきイヴのイメージは、どこを探してみても今一つ定かではないのです。

実際には、アメリカ文学の中には、ケイト・ショパンなど「アメリカのイヴ」と呼ばたい女性はいっぱいいます。さらに視野を広げれば、ヴィクトリア・ウッドハル、イザドラ・ダンカン、ゼルダ・フィッツジェラルド、またマリリン・モンローといったイヴたちは、皆、アダムたちと同じ様に、原初的な人間の生命を自由に生きようとしたのです。ただ、問題は、これらのイヴたちが楽天的には人生を全うすることができなかったということなのです。それは何故なのでしょうか？

【授業計画】

＜アメリカのイヴ＞を＜アメリカのアダム＞と比較しつつ、文学作品を通して、＜アメリカのイヴ＞の概念を分析します。

1. C. P. S. Gilman, "The Yellow Wallpaper" (1892)
2. May Swenson, "Women" (1968)
3. Kate Chopin, The Awakening (1899)

【評価方法】

授業態度30%、各学期末のレポート70%。

【テキスト】

適宜プリントを配付します。

【参考文献・資料】

授業の最初に詳述します。

英語学演習Ⅲ a・b

大室剛志

【授業の概要】

Noam Chomsky が1987年来日し、一般知識人向けに3つの講演を行った。その3つの講演、Lecture 1 Mentalism and Behavior, Lecture 2 Conceptual Foundations of the Study of Language, Lecture 3 On the Nature, Use and Acquisition of Language を取めた Language in a Psychological Setting という本をテキストとし、それを精読することにより、Chomsky の言語観、Chomsky の言語学の目標などについて学ぶ。Chomsky 言語学のテクニカルな面ではなく、そもそもなんのために言語研究を行うのかという根本的な面について考えていきたい。

【授業の目標】

理論言語学の文献を精読し、言語研究の意義について考える。

【授業計画】

毎時間、上記テキストを数ページずつ精読することで英語学的乱取り稽古を行う。

【評価方法】

毎回の授業時での読みの正確さで判断する。

【テキスト】

Language in a Psychological Setting, Sophia Linguistica XXII (Noam Chomsky, Sophia University (1987))

【参考文献・資料】

授業中に随時紹介する。

英語学演習Ⅱ a・b

若山真幸

【授業の概要】

英語と日本語の基本語順の違い (SVO と SOV) をはじめとする言語観の違いが理論言語学的にどのように説明されるのか、英語学入門書や言語習得に関する文献を使って考察する。

【授業の目標】

専門的な英語読解能力を高める

これまで触れてきた言語観の違いを一步踏み込んだ理論的観点から理解する

【授業計画】

- ・基本語順の違い
- ・主語の空所化
- ・疑問文における語順の違い
- ・言語習得における機能範疇と語彙範疇の違い

これらに関する文献を購読する

【評価方法】

出席状況及び学期末のレポート

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

授業中に随時紹介する

英文学特講 (1) a・b

久野幸子

【授業の概要】

英国18世紀後半から19世紀前半期を生きた女性作家ジェイン・オースティンの作品を中心に、女性文学と当時の社会との関係を深く考察する。

【授業の目標】

- (1) 当時の社会における女性の立場
 - (2) ジャンルとしての小説と女性作家
 - (3) 女性文学と風刺の芸術
- 上記3項目を中心に、幅広く検討する

【授業計画】

授業は前後期とも輪読形式で行なう。

【評価方法】

平常点 (出席、受講態度) とレポートで、総合的に評価する。

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

授業中に指示する。

英米文学特講 (1) a・b

山田幹郎

【授業の概要】

英国ルネサンス文芸批評研究。

【授業の目標】

伝統的なレトリックの基礎を修得し、文芸批評に応用すること。

【授業計画】

英国における文芸批評の源流をなすルネサンス期テキストの講読演習。
今年度は英国初期のレトリック論を主に扱う。

【評価方法】

平常点とレポートによる。

【テキスト】

プリントによる。

【参考文献・資料】

授業時に指示する。

英米文学特講 (2) a・b

COLEBORNE, Bryan

【Course description】

This course will introduce students to graduate study at the level of a master's degree. It will concentrate on the meaning and techniques of research, guiding students in their choice of research topic, primary and secondary reading, research tools and methods, and procedures for the presentation of scholarly work.

【Course objectives】

To assist students to make a successful beginning to their research in the humanities and to bring it to a significant conclusion.

【Course schedule】

To be developed in the sequence of choice of research topic, primary and secondary reading, research tools and methods, and procedures for the presentation of scholarly work.

【Assessment】

Assessment will be continuous, with participation in class, minor research exercises, oral reports, presentations and the submission of completed work used to evaluate students' progress.

【Textbooks】

To be decided.

【Reference】

To be decided.

英語学特講 (1) a・b

樗木勇作

【授業の概要】

英語統語論 (English Syntax)
生成文法による英語の統語分析について基本的知識を得ることを目的とする。この授業では、Noam Chomskyのミニマリストプログラムに重点を置き、初期ミニマリストプログラムやChomsky (1995)の枠組みを中心にして様々な英語の構文の分析を概観する。

英語統語論 (English Syntax)
生成文法による英語の統語分析について基本的知識を得ることを目的とする。この授業では、Noam Chomskyのミニマリストプログラムに重点を置く。特にChomsky (1995)の枠組みからPhaseによる派生までを様々な英語の構文の分析を通じて概観する。

【授業の目標】

授業にて明示する。

【授業計画】

1. Categories
2. Structure
3. Empty Categories
4. Head Movement
5. Operator Movement
6. Subjects
7. A-movement
8. VP Shells
9. Agreement Projections
10. Special Topics
11. Derivation by Phase

【評価方法】

レポート+平常点

【テキスト】

未定

英語学特講 (3) a・b

中野弘三

【授業の概要】

英語の文の意味分析をテーマとして、発話の場における文の意味分析を行うとともに、文の意味と文脈(場面)の関係を用言論的に考察する。

【授業の目標】

1. 発話(コミュニケーション)の場の構成を理解する。
2. 文の意味の語用論的分析方法を理解する。
3. 発話された文の意味構造を理解する。

【授業計画】

前期は文の発話の意味分析に関する最近の研究を紹介し、(文の)発話の意味構造を考察する。それと同時に文の意味と統語構造の関係を検討する。

後期は文の意味の語用論的分析を試みる。発話の場で発話された文の意味、特に、発話行為、文脈(場面)との関連から生じる含意など、文の意味解釈に関わる語用論上の問題を検討する。

【評価方法】

学年末にレポートを提出してもらい、それを基本としながら、平常点を加味して評価する。

【テキスト】

英語の文の意味的、語用論的分析に関する論文のコピーを使用する。

【参考文献・資料】

- Semantics* (2000 Kate Kearns Macmillan Press)
Semantics (2nd Edition 2003 John I. Saeed Blackwell)
Doing Pragmatics (2nd Edition 2000 Peter Grundy Arnold)
Pragmatics (1996 George Yule Oxford University Press)

英文学研究 a・b

山田幹郎

【授業の概要】

修士論文の作成を指導する。

【授業の目標】

修士論文作成。

【授業計画】

研究テーマの検討
先行研究の分析
英語論文の構成と内容の検討

【評価方法】

論文を総合的に評価する。

【テキスト】

未定。

【参考文献・資料】

随時指示する。

英文学研究 a・b

大野光子

【授業の概要】

修士論文作成の指導

【授業の目標】

アイルランド文学研究の基礎となる、綿密かつ批評性・独創性のある論文の完成を目指す。

【授業計画】

前期には、先行する研究の分析をベースに、受講者独自のテーマの設定と検討、資料の収集、論文の構成等、全般について指導し、後期には実際の論文執筆作業の指導を行う。

【評価方法】

論文の内容を総合的に評価する。

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

授業中に指示

米文学研究 a・b

池谷敏忠

【授業の概要】

院生の修士論文について丁寧に指導する。

【授業の目標】

修士にふさわしい論文を完成させる。

【授業計画】

一年を通して米文学研究を指導しますので、受講者は前期・後期とも受講することを希望します。

【評価方法】

レポートまたはテストに各自の出席状況を加味して評価します。

【テキスト】

研究室の原書を貸与します。

翻訳論（英語論文作法） a・b

EASLEY, Keith

【Course description】

The course should further develop the ability to write academic papers through critical engagement with individually chosen materials.

Work includes note-taking, the use of sources, understanding and use of academic conventions and language, and the development and presentation of argument. Along with individual tuition there will be class and pair discussion of work in progress and the elements of academic writing.

【Course objectives】

To improve the students' writing of academic papers.

【Course schedule】

The Schedule will be decided according to students' needs.

【Assessment】

A written paper of an agreed length is to be submitted. Evaluation will be based on this.

【Textbooks】

None

情報学特講 (1) a・b

山崎茂明 岡澤和世 菅野育子 西荒井学 野添篤毅
林 博司 三和義秀 村主朋英 太田 裕

【授業の概要】

院生各自の研究計画・内容の発表、研究の進捗状況の報告と討議、および修士論文の中間発表会の開催、さらには関連学会・討論会等の発表内容の検討など、院生の研究活動を複数の教員が集団指導し、修士論文の完成を支援する。

【授業の目標】

研究内容を、その計画・調査・分析・執筆の各段階での発表と討論を通して、研究調査と論文作成能力の発展をはかる。

【授業計画】

発表者がレジュメを作成配布。

【評価方法】

研究発表と討論への参加度

情報学演習 (1) a・b

山崎茂明 岡澤和世 菅野育子 西荒井学 野添篤毅
林 博司 三和義秀 村主朋英 太田 裕

【授業の概要】

図書館情報学の基礎に関する講義や基礎文献の講読の他に、複数の教員による集団指導により、学術雑誌掲載論文の抄読会およびミニレビューなどを、全院生出席の下に行う。質疑応答や討論を通じて、当該分野の論文・総説等を評価し、研究の進め方および論理的な思考方法や表現方法を学び、修士論文の作成に反映させる。

【授業の目標】

最新の海外原著論文を対象に、テーマ、調査方法、分析手法などから、各自の論文作成に引きつけて、研究論文を読みぬく能力を育成する。

【授業計画】

発表者がレジュメを作成、配布、発表し、それにもとづいて参加者全員で討論する。

【評価方法】

レジュメの発表と討論への参加度

情報学特講 (2) a・b

林 博司

【授業の概要】

生物の情報処理機構に関する基礎的知識の講義、及び関連分野の進歩などをまとめた比較的新しい総説(英文を含む)の輪読を行う。一連の学習により、遺伝情報の複製、暗号化、復元などの過程を理解する。さらに感覚情報の伝達過程、情報変換過程等遺伝情報以外の情報が、生物の体中でどのように扱われているかを理解することにより、情報に関する理解を深める一助としたい。

【授業の目標】

生命情報に関わる最新の研究について理解すること。

【授業計画】

セミナー形式で行うため、構成メンバーに最適な計画を弾力的に立案する。

【評価方法】

慣例に従う

【テキスト】

特になし

【参考文献・資料】

その都度配布

情報学特講 (3) a・b

野添篤毅

【授業の概要】

自然科学分野、とくに生物医学分野での研究過程における情報、知識、メディアなどの諸問題について多面的に考察する。

【授業の目標】

既存の学術論文から、自己の研究への適用を考えていく。

【授業計画】

関連分野の最新の学術論文を読み、討論を行なう。

【評価方法】

レジュメによる発表と討論への参加度

【テキスト】

その都度、指示する。

情報学特講 (7) a・b

西荒井学

【授業の概要】

情報資源の管理・運営システムを構築するのに必要なシステム分析からシステム設計に至る範囲内の問題を追究する。特に、コンピュータ処理を実現するのに最も重要であると思われるプログラム設計部分、言い換えればアルゴリズムの問題を中心に考えていく。

【授業の目標】

情報システムの設計・開発に関わる諸問題を受講者相互の報告、議論を通じて、探求していく。

【授業計画】

- 1) 要求定義（機能設計、情報設計）の問題
- 2) システム設計技法の問題
- 3) プログラム設計技法の問題
- 4) プログラミング技法の問題

各種システムの構築に関わる問題を探究していくための題材として、『システム設計に関する学習プログラム』の作成を課題として与えることとする。受講者は、担当部分のモジュールの特性を考慮した上で、適切なアルゴリズムの展開を図り、最終的にコンピュータ処理段階まで移行させていくことによって、種々の問題点を互いに検討していく。

なお受講者は、ある程度のコンピュータ利用経験、特にプログラミング経験を持つことを希望する。

【評価方法】

課題の進捗状況、報告内容、ならびに最終レポートによって評価する。

【テキスト】

使用せず。

情報学特講 (10) a・b

菅野育子

【授業の概要】

図書館と博物館における「情報源（所蔵資料）に関する情報」について、その識別機能及び記述方法の観点から講義する。特に、両者の資料識別情報（メタ・データ）を相互に運用する可能性（インターオペラビリティ）について論ずる。

【授業の目標】

図書館と博物館が情報提供機関として連携するために、どのような相違点があるかについて理解すること。

【授業計画】

授業は次の2点を中心に行なう。

- (1) 概念モデル間の比較と検討

以下の、図書館と博物館の情報源を対象としたデータベース構築のための概念モデルが提案された。以下の2つの概念モデルを比較・検討することから、両者の資料識別に対する立場の違いについて議論する。

IFLA/FRBR (International Federation of Library Associations. Functional Requirements for Bibliographic Records)
ICOM/CIDOC CRM (The International Committee for Documentation of the International Council of Museums. Conceptual Reference Model)

- (2) 記述データ項目間のマッピング

Getty Research Instituteが作成したCrosswalk of Metadata Element Sets for Art, Architecture, and Cultural Heritage Information and Online Resourcesを対象に、マッピングされた記述データ項目間の関連性について、実際に図書館資料及び博物館資料の記述データを用いて、以下の記述データ群を中心にマッピングとその評価を行なう。

・米国議会図書館のMARC21
・Getty財団のCDWA (Categories for the Description of Works of Art)

【評価方法】

最終レポートで評価する

【参考文献・資料】

IFLA Study Group on the Functional Requirements for Bibliographic Records. Functional Requirements for Bibliographic Records: final report. Munchen, K.G.Saur, 1998, 136p

情報学特講 (9) a・b

山崎茂明

【授業の概要】

科学コミュニケーションの世界を対象に、研究情報とメディアに着目して考察していく。特に、研究活動、論文作成、口頭発表、投稿、編集、論文審査、出版倫理、科学研究の不正行為といった側面から検討する。

【授業の目標】

研究倫理、発表倫理、公正な科学研究といった側面から、科学情報メディアと科学コミュニケーションを深く検討する。

【授業計画】

科学研究をとりまく環境の変化、研究公正局の活動、海外の不正行為事例、国内の不正行為事例、各国の対応、研究機関における倫理ポリシーと対処手順、レフェリーシステム、オーサーシップ、データベース側の対処などをとりあげる。

【評価方法】

発表レポート

【テキスト】

科学者の不正行為 (山崎茂明 丸善)

【参考文献・資料】

生命科学論文投稿ガイド (山崎茂明 中外医学社)
論文投稿のインフォマティクス (山崎茂明 中外医学社)
ORI研究倫理入門 (Steneck, N. 丸善)

情報学特講 (11) a・b

三和義秀

【授業の概要】

前期 (a) では、Webを中心とするコンピュータネットワークに関する技術を習得した上で、人間の感性に関わる実験調査用のデータ収集を行うためのWebアンケート・システムをサーバサイド・プログラミング (ASP:Active Server PagesまたはJSP:Java Server Pages)によって構築し、そのシステムをインターネット上に公開しながらデータ収集を実施する。

後期 (b) では、Webアンケート・システムによって収集したデータを対象にした統計解析 (因子分析、多次元尺度構成法、クラスタ分析等)の方法について解説する。なお、受講者はC言語、またはJavaプログラミングの基礎知識を修得していることが望ましい。

【授業の目標】

研究の方法と意義について研究事例を参考にしながら理解する。

【授業計画】

- (1) Webアンケート・システムの構築に必要なネットワーク技術
- (2) サーバサイド・プログラミングの方法
- (3) 人間の感性の分類方法と情報検索システムの設計方法
- (4) 統計解析の方法

【評価方法】

各受講者が実験調査のテーマを決めてWebアンケートシステムを構築し、その収集データを対象にした統計解析のレポートにて評価する。

【テキスト】

第1回の講義にて指示する。

【参考文献・資料】

第1回の講義にて指示する。

情報学特講 (12) a・b

村主朋英

【授業の概要】

情報史に関する講義および文献講読を行なう。とくに、<情報学基礎論と情報史の歴史像との交差>という問題を強く意識して進める。

【授業の目標】

なお、情報史は幅広い領域であるため、ディシプリンとしての情報学/図書館情報学の歴史、情報・図書館サービスの歴史、情報技術の歴史、コミュニケーション史/メディア史、科学史など、関連歴史概念の中から、動静や受講者の意向を見ながら内容を絞り込む。

また、受講者による発表・報告の回を適宜含める。

【授業計画】

情報学や情報史に関する知識を増進する。また、情報について、幅広く、かつ精緻な理解ができるような枠組みを考究する。

【授業計画】(Schedule)

a (前期)：講義を中心に進める。

- (1) 情報史研究の現状と情報学の境点
- (2) 情報学における「情報」に関する観点
図書館情報学、情報科学、メディア論
社会情報学、吉田民人、北川敏男

b (後期)：以下の内容を予定している。詳細は受講者と相談して決定する。

- (1) 情報史のトピック群
- (2) その他、受講者の関心事項

【評価方法】

平常点とレポートに基づいて行う。

【テキスト】

使用せず。

情報学演習 (6) a・b

岡澤和世

【授業の概要】

この4分の一世紀の間に情報社会が到来し、世界の経済、文化が大きく変化し始めた。情報テクノロジーの発達は我々の生活、仕事、教育に大きな影響を及ぼしている。中でもこの電子環境社会でどうやって情報を見つけたらよいのかとまどっている。本講義の目的は大きく変化している情報環境にどう対応していくのかを考える。

【授業の目標】

情報社会における社会の要求に応えるための教育と実践

【授業計画】

1. 情報と情報行動
2. 情報行動と情報環境
3. 情報行動研究とその枠組み
4. 情報行動のインフラストラクチャー
5. 情報行動モデル
6. 情報行動研究の例
7. 人中心の情報システム設計
8. 情報行動の発展—電子環境への対応
9. 将来の方向と展望

【評価方法】

レポート

【テキスト】

New Review of Information Behaviour Research, Volum 4. (Wilson, T. D & D. K. A ed. Taylor Graham, 2003.)

【参考文献・資料】

From Print to Electronic (Susan Crawford, Julie M. Hurd and Ann C. Weller ASIS. 1996)
情報学講義ノート〈3〉(岡澤和世著 敬文堂 1989.)
インフォ・リッチ：インフォ・ブア (Trevor Heywood, 岡澤和世訳 敬文堂 1997.)
Social Dimensions of Information Technology. (Garson, G. David Idea Group Pub. 2000.)

情報学演習 (5) a・b

太田 裕

【授業の概要】

数値あるいは非数値からなる資料・データがもつ潜在構造を探究し、所与の情報を抽出するための資料・データ処理技法について、実践力の涵養を目標に学習を進める。

したがって、授業形態は関連知見の理解(講義)と資料・データ処理の体得(実習)とを交互的に行うこととする。サンプリングの計画数理・1変量～2変量解析、多変量解析、数値～非数値処理・解析等々が主要学習項目である。

【授業の目標】

1. 資料処理基礎力の体得
2. 資料処理技法活用による課題解決力の涵養

【授業計画】

前期

1. 基礎事項の習得
2. データ処理シミュレーション
3. 演習題の自力解決

後期

1. 小課題の提示と課題解決法の探索
2. 実(資料・データ)の構造解析
3. 数値～非数値データの統合処理

【評価方法】

レポートにより評価する

【テキスト】

随時、必要な文献・専門書を指示する

【参考文献・資料】

同上

情報学特講 (13) a・b

緑川信之

【授業の概要】

図書館情報学の英文テキストを精読し、議論を行う。

【授業の目標】

図書館情報学の基本的なテーマについて理解を深めるとともに、テキストの読解力を高める。

【授業計画】

テキストを段落ごとに読み、内容を理解しつつ、内容の妥当性等について議論をする。

【評価方法】

授業中の発表およびレポートで評価を行う。

【テキスト】

必要に応じて資料を配付する。

【参考文献・資料】

図書館・情報学研究入門(三田図書館・情報学会編 勁草書房)

【Course description】

The course should further develop the ability to write academic papers through critical engagement with individually chosen materials.

Work includes note-taking, the use of sources, understanding and use of academic conventions and language, and the development and presentation of argument. Along with individual tuition there will be class and pair discussion of work in progress and the elements of academic writing.

【Course objectives】

To improve the students' writing of academic papers.

【Course schedule】

The Schedule will be decided according to students' needs.

【Assessment】

A written paper of an agreed length is to be submitted. Evaluation will be based on this.

【Textbooks】

None

国文学特殊研究Ⅱ（中古）

久保朝孝

【授業の概要】

研究発表とその批判を中心にして、博士論文の作成を指導する。

【授業の目標】

博士の学位取得を可能にする独創的研究能力を養成する。

【授業計画】

各自の専攻テーマに関する研究発表とその相互批判及び助言を毎回行う。

【評価方法】

論文の活字化もしくは学会等における口頭発表の有無とその内容。

【テキスト】

なし。

国文学特殊研究Ⅲ（中世1）

岩下紀之

【授業の概要】

受講者の希望する作品を題材とする。

【授業の目標】

研究者としての研究を補助すること。

【授業計画】

上記による。

【評価方法】

レポートによる。

国文学特殊研究Ⅳ（中世2）

山下宏明

【授業の概要】

〈文学研究と批評 課題に向けて〉と題して進める。

後期課程の学生は、すでに各自の研究課題を持ち、学位請求論文執筆に向けて研究を続けている。学位取得を目的に、年間、少なくとも2本の論文は作成しなければならない。その積み重ねが学位請求論文になるはずである。

たえず学界の状況を把握した上で、方向性を考え続けねばならない。学界の動きを知るために、国内にとどまらない、国外の論文にも目を配り、批評に耐えうる成果を生み出すよう志すべきである。一方で、独自の基本的な調査を行うことも必要である。その成果を確認しつつ、論文の執筆を行わせる。必要に応じて、学内外の学会や研究会への報告を促すこともある。

今回は特に、能・狂言について理論面の考察に努める。

【授業の目標】

能・狂言の研究が、学際化の進む現状の中で、どのような変化を示しているかを考えさせます。

【授業計画】

はじめに、これまでの経過（修士論文など）の報告を行わせる。その際に、特に専攻分野の研究状況の報告を求め、その中で各自の成果の位置づけ、意味を重視するよう求める。講義としては、能、狂言、説話のテキストに即しその研究方法をとりあげる。

【評価方法】

出席状況とレポート、もしくは論文提出による。諸種学会への報告実績も勘案する。

【テキスト】

主要な学会誌のなかから注目すべき論文を選択し、コピーをとって使用する。必読の文献は、前期課程の学生に指示したので、参照されたい。

国文学特殊研究Ⅴ（近世）

阿部一彦

【授業の概要】

近世文学全般にわたり、受講者の専攻との関連で内容を決める。

【授業の目標】

近世文学の研究能力を高める。

【授業計画】

上記による。

【評価方法】

レポートによる。

【テキスト】

未定。

国文学特殊研究VI (近代1)

小倉 斉

【授業の概要】

＜物語の行方―怪談・奇談を中心に―＞
近代日本の怪談・奇談の系譜をたどることを通して、近代における「物語」の変容を考察する。基本的な観点は、「近代（モダン）」を「プレ・モダン」の側から眺めることにあり、眺めるわれわれは「ポスト・モダン」の立場に立っているということにも意識的・自覚的であらう。

【授業の目標】

近代日本における「物語」の変容・行方について考察するとともに、物語分析の方法を実践的に身につける。

【授業計画】

（前期）

- 1 序章
- 2 〈牡丹燈籠〉物語の系譜と三遊亭圓朝の「近代」
- 3 「神経」の成立
- 4 ラファディオ・ハーンの「物語」
- 5 『夜窓鬼談』の世界
- 6 『夜窓鬼談』の継承者たち―田中貢太郎・濹澤龍彦―

（後期）

- 1 怪異譚の時空間―漱石・科学・時間―
- 2 妖異の絵図―泉鏡花の物語世界―
- 3 幸田露伴と怪談
- 4 芥川龍之介と怪談
- 5 現代のホラー小説ブームの意味
- 6 日本の近代と「物語」

【評価方法】

授業への参加状況、発表およびレポートの内容によって総合的に評価する。

【テキスト】

（前期）：怪談牡丹燈籠（三遊亭圓朝 岩波文庫）、怪談・奇談（小泉八雲 講談社学術文庫）、夜窓鬼談（石川鴻斎著 小倉斉・高柴慎治訳 註 春風社）、田中貢太郎 日本怪談事典（東雅夫編 学研M文庫）、日本怪談大全Ⅱ・幽霊の館（田中貢太郎 国書刊行会）、ねむり姫（濹澤龍彦 河出文庫）、うつろ舟（濹澤龍彦 福武文庫）
（後期）：倫敦塔・幻影の盾（夏目漱石 岩波文庫）、高野聖・眉かくしの霊（泉鏡花 岩波文庫）、鏡花短編集（泉鏡花 岩波文庫）、観音談・怪談・土偶木偶（幸田露伴 プリント）、妖婆・アグニの神（芥川龍之介 プリント）、夜啼きの森（岩井志麻子 角川ホラー文庫）

国文学特殊研究VIII (国語学)

増井典夫

【授業の概要】

受講者の論文テーマ、あるいは希望する作品に応じて、国語学・日本語学の観点から指導する。

【授業の目標】

国語学・日本語学の学会の水準を知り、それに耐えうる研究を目指す。

【授業計画】

随時、必要に応じて指導する。

【評価方法】

平素の学習態度。

【テキスト】

授業時に指示する。

国文学特殊研究VII (近代2)

都築久義

【授業の概要】

学生の論文テーマに応じて指導する。

【授業の目標】

博士論文が執筆できるように指導する。

【授業計画】

随時、必要に応じて指導する。

【評価方法】

平素の学習態度。

【テキスト】

なし。

中国文学特講

寺尾 剛

【授業の概要】

後期の院生の高度な漢文読解力の向上を目指す。

【授業の目標】

論文作成に直結する実践的な研究法や資料調査能力の育成。

【授業計画】

受講生の需要に合わせて決定する。

【評価方法】

平常点及びレポート

【テキスト】

未定。

英文学特殊研究Ⅰ

山田幹郎

【授業の概要】

英国ルネサンス演劇研究（シェイクスピア）。
受講者の博士論文作成を指導する。

【授業の目標】

受講者が年度ごとに研究成果の一部を公表し、博士論文作成に結実させること。

【授業計画】

各自の専攻テーマについて研究発表とその批評を旨として進める。

【評価方法】

研究発表と論文による。

【テキスト】

未定。

【参考文献・資料】

随時指示する。

英文学特殊研究Ⅱ

大野光子

【授業の概要】

アイルランド文学・文化研究。今年度は特に、現代演劇と現代詩を中心に分析批評する。まず、20世紀アイルランド史と文学史の中に、現代劇作家、詩人たちを位置づけた上で、特にBrian Frielの劇作品と、女性詩人たちの作品を中心に、精読・解釈・批評する。

【授業の目標】

20世紀アイルランド文学の中でも、特にポスト・ナショナリズム世代の作家たちによる異なったジャンルの作品中に、アイデンティティとジェンダーの問題はどのような形あるいは意味合いで表出しているのか、を理解することを目指す。

【授業計画】

前期には、20世紀アイルランド文化・社会史を概観した後に、Brian FrielとEavan Bolandの代表的な作品を精読・批評する。

後期には、FrielおよびMarina Carrの劇作と、Nuala Ni Dhomhnaill, Medbh McGuckian, Paula Meehan等の詩作品およびエッセイ等を、それぞれ比較分析、批評する。

【評価方法】

出席と平常点およびレポートによる。

【テキスト】

テキストは教室にて指示する他、プリント使用。

英文学特殊研究Ⅲ

久野幸子

【授業の概要】

<イギリス風刺文学の系譜>をさまざまな視点から考察する。

【授業の目標】

イギリス風刺文学を時代に沿って考察するが、同時に
(1) 古典・古代の風刺文学
(2) 芸術としての風刺
(3) 風刺と小説・戯曲・映画などとの関係
上記の3項目についても、広く深く検討する。

【授業計画】

前期は中世からルネサンス期までの風刺作品を扱う。
後期は十七世紀から十九世紀までの風刺作品を扱う。

【評価方法】

平常の発表とレポートによる。

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

授業中指示するほか、プリントも配布。

米文学特殊研究Ⅰ

池谷敏忠

【授業の概要】

Contemporary American Literary Theory (1997) および *Introducing Literary Theories* (2001) を用いて、最新の文学理論を研究します。

【授業の目標】

授業にて明示する。

【授業計画】

一年を通して上記の本を輪読しますので、受講者は前期・後期とも受講することを希望します。

【評価方法】

レポートまたはテストに各自の出席状況を加味して評価します。

【テキスト】

研究室の原書を貸与します。

米文学特殊研究II

横田和憲

【授業の概要】

<アメリカ文学における旅の系譜>について考察します。

【授業の目標】

旅—なぜか心をわくわくさせる言葉です。それは、旅が私たちの日常生活、つまり束縛された現実からの脱出の夢をかなえてくれるからなのかもしれません。旅にも色々ありますが、詰まるところ、その本質的な意義は「自己に内在する価値を引き出すための探求」ということになるでしょう。文明は定住を要求します。限られた空間の中に定住し、規格化された生活を余儀なくします。社会が組織を強め、個人の自由と権利が圧迫され、人は日常を越えて旅への夢を育むこととなります。

自らの可能性を求めて泉の深みへと進み、生の境界を踏み越える、ギリシア神話のナルキッソスを思い浮かべてください。この無心の死に、探求 (Quest) の最も純粋な原型、すなわち求道の姿勢を見ることが出来ます。J.Campbell は冒険物語の経路を「離脱/開眼/帰還 [主人公が、何らかの理由で安定した生活を離れ、旅に出る/放浪中、さまざまな思いがけない出来事に出会うが、苦難を切り抜け何かを手に入れる/出発当初よりも成長した姿で帰ってくる]」と説明しました。帰還を必ずしも必要条件としない直線の旅 (Quest) に対して、冒険 (Adventure) は帰還を前提とする円環の旅だと言えますが、冒険は最も根源的な人間の願望の原型を象徴化したものです。

アメリカ文学の固有のロマンスや成功物語もこの原型を基本にしています。アメリカの歴史は移動の歴史であるとよく言われます。アメリカには西部に開かれた広大な自然があり、荒野に向かう者は正義を行なう者であるという感覚が生きています。ただ問題は、成功物語は夢でしかなく、その裏返しが現実だということです。私たちはだれもがみな、旅立ちたいのに旅立せず、同一円周上をただ巡るばかりで、いつまでも離脱を果たせないジレンマに、何らかの形でめり込こんでいます。しかし、合理や秩序に束縛された現実にあっても、いたずらに逃避することなく、放浪の夢を追うこともなく、勇気を持って現実と向き合う姿勢が不可欠なのだと思います。

【授業計画】

<William Austin>を<Nathaniel Hawthorne>と比較しつつ、文学作品を通して、<Peter Rugg tales>を分析します。

1. William Austin, "Peter Rugg tale(s)" (1824~)
2. Nathaniel Hawthorne, "A Virtuoso's Collection" (1842)

【評価方法】

授業態度30%、各学期末のレポート70%。

【テキスト】

適宜プリントを配付します。

【参考文献・資料】

授業の最初に詳述します。

英米文学特殊研究 I

COLEBORNE, Bryan

【Course description】

This course will introduce students to graduate study at the level of a doctoral degree. It will concentrate on the meaning and techniques of research, guiding students in their choice of research topic, primary and secondary reading, research tools and methods, and procedures for the presentation of scholarly work.

【Course objectives】

To assist students to consolidate their research in the humanities and to bring it to a significant conclusion.

【Course schedule】

To be developed in the sequence of choice of research topic, primary and secondary reading, research tools and methods, and procedures for the presentation of scholarly work.

【Assessment】

Assessment will be continuous, with participation in class, minor research exercises, oral reports, presentations and the submission of completed work used to evaluate students' progress.

【Textbooks】

To be decided.

【Reference】

To be decided.

後・英文

英語学特殊研究IV (英語教育学)

松本青也

【授業の概要】

応用言語学 (英語教育)

第二言語習得理論と日英対照言語学を中心に、最近の主な研究について考察すると共に、日本の外国語教育への研究成果の応用を検討する。

【授業の目標】

研究分野の新しい研究成果に幅広く触れ、考察を深める。

【授業計画】

いくつかのトピックについて、内外の研究成果に批判的考察を加えながら、独自の理論を構築する。

【評価方法】

発表内容と論文の評価。

【テキスト】

未定。

情報学特殊研究II (知識情報処理)

野添篤毅

【授業の概要】

自然科学分野における研究・開発過程での種々の知的情報処理について考察する。

【授業の目標】

既存の学術研究から、自己の研究への適用を考えていく。

【授業計画】

知的情報処理分野の最新の学術文献(雑誌論文、モノグラフ)を受講者が選択し、それについて発表と討論を行う。

【評価方法】

研究発表と討論への参加度

【テキスト】

その都度、指示する。

情報学特殊研究IV

林博司

【授業の概要】

学位論文の作成
生命情報・遺伝情報の現状分析と可能性
組織器官の分化研究の現状と21世紀に於ける発展(国際的観点より)
生殖生物学の発展とそれが及ぼす社会的影響(国際的観点より)
遺伝情報の破壊と修復と変化の予測
文献検索、調査
統計処理
予測の設定と確実性
論文の形式
文章の設定
図書館情報学に於いて占める位置

【授業の目標】

学位論文を完成させるために有効な方法論の獲得。

【授業計画】

多くの関係教官と連絡を保ちながら、自分のペースで進める。必要な場合には他大学で研究する。常時、論文の内容、進行状況について発表を行う。

【評価方法】

論文評価と学術論文出版による。

【テキスト】

特に定めない。

【参考文献・資料】

学術雑誌を常に参考とする

情報学特殊研究V (情報関連行動論)

岡澤和世

【授業の概要】

情報システムは人の役に立つためにある。設計されたシステムは人が組み立てたものであり、人が利用するためにある。人々の現実の情報要求をうまく満たすことができればそのシステムは成功したといえる。その意味で、人間の要求を満たすことができないシステム設計はナンセンスである。本講義ではこの様な人間の情報行動と情報システムの関係に注目する。人はなぜ情報を必要とするのか?人は情報システムから何を求められると期待しているのか?情報システム設計者はこれらの情報行動どうやって対処するのか?

【授業の目標】

情報社会における社会の要求に応えるための教育と実践

【授業計画】

1. ヒューマン・オーガニゼーション (Human organization)
2. 人間中心の情報システム
3. システムの評価:単純さ/感性/キャシュ・フロー分析/利用度/評価法
4. 管理とコントロール
5. 人的要因 (Human factors)
6. 人間・機械の相互作用 (HCI) の問題:概説/HCIの特性/HCIとシステム設計の関係/要約
7. 利用者の参画:利用者とは何か/従来の情報システム/なぜ利用者を中心に据えるべきか/コミュニケーションの難しさ/利用者参画型アプローチ
8. 実行:プランニング/利用者参画と訓練/マニュアル作成/システム・テスト手順の変更/実行後評価/メンテナンス

【評価方法】

レポート

【テキスト】

Theories of Information Behavior (Fisher, K. E et al. (ed) ASIST. 2005.)

情報学特殊研究VI (科学情報メディア)

山崎茂明

【授業の概要】

科学コミュニケーションの世界を対象に、研究情報とメディアに着目して考察する。海外の研究論文や文献レビューなどから、近年の研究動向や課題を整理していく。特に、科学政策、研究動向、業績評価などのための分析能力の開発を目標に、調査データの収集と考察を試みる。また、AuthorshipやResearch Integrityをめぐる研究倫理について展開をはかる。

アメリカ、イギリス、ヨーロッパ、日本における主要な科学研究・政策についての主要な調査を分析し、日本の科学研究や科学コミュニケーションの課題や問題を検討する。発表をめぐる出版倫理については、デジタル情報資源も活用し、最近の動向を整理していく。参加者の興味ある視点から発展させてもらいたい。

【授業の目標】

科学研究活動を示す主要な統計資料をもとに、現状を分析し、問題の所在を明らかにできる能力を育成する。

【授業計画】

最初の1-2回は概要を説明した後、参加者による発表形式で行う。発表者はA4版レポート用紙で4枚程度のレジメを提出すること。また、文献レビュー紹介や調査発表を行う上でどのように関連文献を検索したかについても述べる。講義に関係する資料は随時配付する。

【評価方法】

発表レポート

【テキスト】

Science and Engineering Indicators (NSF)、他

情報学特殊研究Ⅷ（異資料情報処理）

太田 裕

【授業の概要】

受講予定者は既に修士論文を終え、博士論文作成に挑戦中の諸君であることに鑑み、情報処理科学の観点から多様かつ異質な資料から所与の情報を抽出する（＝研究支援技法）の習得と実際活用能力の涵養に努めることとする。

したがって、授業形態は必然セミナー形式となるが、博士論文の枠組み・内容に関わって受講者毎に個別のカリキュラムを組むこととなる。

【授業の目標】

1. 資料処理基礎力の補強
2. 資料処理技法活用による課題解決・実践力の向上

【授業計画】

前期

1. 基礎知見学習
2. 受講者別カリキュラムの組立
3. 関連演習課題の実施

後期

1. 課題解決のための個別プログラムの作成
2. 関連実資料の解析支援
3. 課題適合高度解析法の探索

【評価方法】

レポートにより評価する。

【テキスト】

特になし。随時、読解すべき論文・専門書を指示する。

【参考文献・資料】

同上。

情報学特殊研究Ⅸ

西荒井学

【授業の概要】

情報技術の発展と共に、数多くのソフトウェアが開発され、社会において流通している。特に、システム開発ツールに焦点を絞り、これらの技術的基盤ならびに応用技術について考察していく。

【授業の目標】

既存のソフトウェアが持つ特徴や課題を明らかにしていくことにより、ソフトウェア開発の評価基準を探る。

【授業計画】

受講者各自が特定のシステム開発ツールを選択し、その技術的基盤ならびに応用技術についての報告と討論を行なう。なお受講者は、ある程度のコンピュータ利用経験、特にプログラミング経験を持つことを希望する。

【評価方法】

報告内容、討論への参加度、ならびに最終レポートによって評価する。

【テキスト】

特になし

【参考文献・資料】

必要に応じて、指示する。

研究技法Ⅰ（データ解析）

太田浩司

【授業の概要】

この講義では調査によって収集されたデータをSPSSという統計パッケージを利用して解析する手法を紹介する。扱う統計手法は記述統計、ピアソン積率相関、T-検定、分散分析、重回帰分析を予定している。特にデータ分析の結果の読み方と解釈の仕方に焦点を置く。講義の詳しい内容は最初の授業で知らせる。

【授業の目標】

社会で起こる様々な事象を数値化して理解するという調査法の基礎を身につけることを目標としている。

【授業計画】

1. 研究者としての心構え：研究の意義、研究者倫理、社会への貢献と責任、理論構築の重要性などについての理解を深める。研究目的エクササイズと理論探求エクササイズを行う。
2. 研究法概観：質問紙、インタビュー、観察法、実験法の特徴を概観することにより自らが使用する研究法に対する理解を深める。
3. データ解析：記述統計や推測統計、さらにピアソン積率相関、T-検定、分散分析、重回帰分析などの分析法について演習を通して理解を深める。
4. 論文・報告書の作成：与えられたデータを研究課題や仮説などを基に分析し、論文としてまとめる練習をする。

【評価方法】

出席、理論探求エクササイズ、データ分析エクササイズ（タムペーパー）

【テキスト】

特になし

【参考文献・資料】

最初の授業で紹介する

研究技法Ⅲ（質問紙調査法）

榊原國城

【授業の概要】

この授業の主題は、現代社会における様々な問題に対し、科学的な視点に基づいて対処できる基本的な技能を身につけることである。具体的には、担当者が長年学んできた心理学において用いられてきた、科学的資料の収集法としての質問紙調査法の体得である。すなわち、受講学生自身が、質問紙調査法の基礎的な考え方を理解し、その実際を段階的に体験することにより、科学的方法の適用能力を身につけることをねらいとしている。

多くの人々に共通する問題の発見や解決を図る際に、それらの人々に共通する行動の仕方や考え方、興味・関心の方向などを的確にとらえることが必要になる。研究方法としての質問紙調査法の意義はまさにこの点にある。すなわち、多人数を対象として同一質問に対する回答を求め、それらを分類し、分析する手法が質問紙調査法である。

授業内容は、受講学生の設定したテーマに基づく調査票の作成・調査実施・回収・集計・分析・報告書作成までの全過程の演習を中心とする。

【授業の目標】

調査報告書の完成およびプレゼンテーション。

【授業計画】

1. オリエンテーション
2. 調査計画立案
3. 調査票作成と調査実施
4. 調査結果の分析
5. 報告書の作成

【評価方法】

調査報告書の内容によって評価する。なお、演習への参加態度の逐次評価も行う。

【テキスト】

授業中に指示する。

【参考文献・資料】

授業中に指示する。

研究技法Ⅱ（統計分析）

立石 寛

【授業の概要】

統計学の基礎について講義します。

【授業の目標】

詳細は授業にて明示します。

【授業計画】

1. 統計の基礎
2. 確率
3. 条件付確率と事象の独立
4. 確率変数と期待値
5. 標本分布
6. 推定
7. 検定

【評価方法】

期末試験と出席状況で評価します。

【テキスト】

なし。

【参考文献・資料】

適宜指示します。

研究技法Ⅳ（経済分析）

立石 寛

【授業の概要】

経済学の基礎について講義します。

【授業の目標】

詳細は授業にて明示します。

【授業計画】

1. 消費者の行動
2. 生産者の行動
3. を含む一般均衡
4. 独占と寡占
5. 市場制度と最適資源配分
6. 国民所得
7. 所得決定と貨幣市場
8. 国際経済
9. 経済成長
10. 景気循環

【評価方法】

期末試験および出席状況により評価します。

【テキスト】

なし。

【参考文献・資料】

適宜指示します。

地域社会特別講義Ⅰ（地域問題論）

石田好江

【授業の概要】

現在は1970年代の「地方の時代」に対し、「新しい地方の時代」だといわれる。その象徴が地方分権化である。本講義では、地方分権化と、それを契機に認識が高まりつつある地域づくり・住民自治をキーワードに、環境問題、地域福祉、就業問題等を取り上げ、「新しい地方の時代」における地域社会の構造と課題を明らかにする。

【授業の目標】

①「新しい地方の時代」とは何か、何が転換されたのかを理解する。②その上で講義の中で紹介する多くの事例を通して、受講者自身が地域社会の課題を発見し、その解決のための政策提案を行う。

【授業計画】

- 1) はじめに—地域研究の系譜と方法
- 2) 地域の歴史的把握
- 3) 地方分権化
- 4) 地域づくりと地方自治Ⅰ
- 5) 地域づくりと地方自治Ⅱ
- 6) 地域福祉政策
- 7) 高齢社会とまちづくり
- 8) 地域と環境問題Ⅰ
- 9) 地域と環境問題Ⅱ
- 10) 立地競争と地域経済
- 11) 地域と就業構造Ⅰ
- 12) 地域と就業構造Ⅱ
- 13) まとめ

【評価方法】

レポートを課す。評価のポイントについては授業にて説明する。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

授業の中で適宜紹介する。

地域社会特別講義Ⅲ（地域開発論）

竹村 弘

【授業の概要】

従来の「地方開発」は、中央と地方の経済格差の是正を目的として、主として地方への産業開発・企業誘致により実施されてきたが、今日の新しい「地域開発」は、各地域それぞれが、知恵・金・人を自分たちで出し、誰にも頼らず、自律的に発展するような、自立した「地域づくり」を目的としている。

【授業の目標】

従来の「地方開発」が果たした歴史的役割を評価し、現在の「地域開発」の課題を研究する。わが国は高度経済成長を遂げ、世界の有数の経済大国となり、人々の関心は「もの」から「ところ」へ移ってきたと言われるが、暮らしやすい、生活の豊かな地域づくりは、いまだその途上にある。「開発か、自然か」は、永遠のテーマである。

【授業計画】

- 講義主体であるが、院生各自の研究との兼ね合いにおいて、可能な限り課題研究と討議を行う。
1. 「地方開発」の光と影。地方での産業開発・企業誘致が成功し、工業都市が大きな発展を遂げる一方で、農山漁村は、衰退産業とともに疲弊し、人口が流出し、過疎問題が発生した。
 2. 「水俣病」等の産業公害は、高度経済成長期の地方開発の影であった。今日の自動車排ガスによる道路公害、ゴミやダイオキシンによる環境問題は、暮らしやすい豊かな地域を築く上で暗い影を落す。「自分達の地域は自分達で守れ」は、産業公害の歴史的教訓である。
 3. 「過疎」が集落の崩壊まで進んだ「末期過疎」や、地方都市の旧商店街に「新過疎」と呼ばれる空洞化が見られる中で、多くの地域住民が自ら手を携えて、「地域づくり運動」に立ち上っている。その代表的事例を研究する。
 4. 従来のような中央の行政指導・補助金に依存する体制から脱却し、地域の自立を実現するためには、地方分権等の推進と共に、その受け皿となる地方行政や地域住民の意識改革、および、主体的な政策立案ならびに実行能力の涵養が必要である。

【評価方法】

課題とレポートおよび討論参加度。

【テキスト】

講義の中で適宜提示する。

【参考文献・資料】

講義の際に配布する。

地域社会特別講義Ⅱ（地域交通論）

辻 紘良

【授業の概要】

地域交通を対象に、その問題や所在を明らかにするとともに、問題の解決に向けて、交通の情報通信ネットワークの視点から将来の地域づくりのあり方について考察する。

ここでは、情報技術や通信技術の進展を背景に、その可能性や将来性に期待の寄せられているITS技術を取り上げ、その現状を把握するとともに、地域交通への適用の効果や問題解決の方策を探る。また、地域やまちづくりの観点から新しい移動通信システムの可能性の展望とシステム設計の検討を試みる。
* ITS = Intelligent Transport Systems(高度道路交通システム)

【授業の目標】

1. 地域交通体系の現状を把握するとともに問題点や解決策を展望する。
2. 交通の地域分析方法を展望し、分析事例を通して修得する

【授業計画】

地域交通の実態を明らかにするとともに、情報化社会における地域作りに向け、ITSの視点による地域交通の整備の効果と可能性、ならびにシステム提案を議論する。

1. 地域交通の問題と課題
資料、統計等に基づき地域交通の現状と課題を抽出する。また、情報化、高齢化、過疎化、環境などの視点に基づき問題点を指摘する。
2. 地域交通の情報化
国内外のITSの導入状況を把握するとともに、地域交通へ適用したときの効果や問題解決の方策を探る。また、交通の情報化の視点から将来の地域づくりのあり方について考察する。
3. ITSの可能性
ITSや情報化の視点からみた地域交通の高度化やまちづくりの可能性を把握する。例えば、インターネットITS、DSRC、無線LAN、P2Pなどの新しい通信方式を活用したITSの現状と可能性に言及する。
4. システム提案
地域やまちづくりの観点から新しい移動通信システムの可能性の展望とシステム設計の検討を試みる。

講義と並行に最近のITS関連論文を読解し、地域交通システムの普及例や実験例を相互に提示し理解を深める。

【評価方法】

課題の提出や発表内容の結果を総合し成績を評価する。

【テキスト】

使用せず。

【参考文献・資料】

Proceedings of 12th World Congress on Intelligent Transport Systems (ITSO 5)、他

地域社会特別講義Ⅳ（地域文化論）

谷沢 明

【授業の概要】

「風土・歴史・文化を生かした地域づくり」をテーマとした事例研究の講義をする。併せて、受講生によるプレゼンテーションも行なう。

【授業の目標】

個性的な「地域づくり」の在り方を理解するとともに、その応用として自らが取材して事例研究・報告を行う力を養うことを目標とする。

【授業計画】

1. 北海道池田町：ワインによる地域づくり
2. 大分県大山村：「村おこし」の元祖
3. 長野県南木曾町：「町並み保存」の元祖・妻籠宿
4. 滋賀県長浜市：中心市街地活性化について
5. 石川県金沢市：城下町の歴史を生かした景観形成
6. 山口県萩市：城下町の歴史を生かした景観形成
7. 北海道函館市：港町の歴史を生かした都市づくり
8. 長崎県長崎市：港町の歴史を生かした都市づくり
9. 北海道小樽市：小樽運河保存問題と都市景観保全
10. 滋賀県近江八幡市：八幡堀の保全とまちづくり
11. 岐阜県八幡町：水の恵みを生かした地域づくり
12. 受講生による課題の成果発表

【評価方法】

事例研究の成果報告（パワーポイント）による。

【テキスト】

使用しません。

【参考文献・資料】

第1回目の授業で紹介いたします。

国際社会特別講義Ⅰ（国際社会発展論）

藤瀬浩司

【授業の概要】

20世紀の経済と社会の発展を、企業組織、国家機能及び世界経済の各側面から検討する。

1. 20世紀経済社会の段階と局面
2. 大型企業体の生成
3. 福祉国家への前進
4. 世界経済の構造

【授業の目標】

20世紀資本主義の構造、歴史事象について理解する。

【授業計画】

講義形式であるが、質問や討議の時間を適宜とりたい。

【評価方法】

レポートによる。

【テキスト】

改訂新版 欧米経済史（藤瀬浩司著 放送大学教育振興会 2004）

国際社会特別講義Ⅲ（国際関係論）

清水 洋

【授業の概要】

アジア地域では、1960年代後半以降、韓国、台湾、香港、シンガポールの4ヵ国が輸出志向型政策を導入して急激な工業化を達成したが、1980年代後半にはASEAN 4（マレーシア、インドネシア、フィリピン、タイ）が、さらに90年代には中国やベトナムなどが順に産業の高度化を開始した。本講義では、これらの国の社会経済発展において日本が果たした役割を多角的に考察する。

【授業の目標】

アジア経済に関する専門知識を深めるとともに、統計資料や理論を用いて分析能力を養う。

【授業計画】

講義を主体とするが、研究発表、討議も適宜行う。

1. 国際関係論とアジア
2. アジア諸国の経済発展と理論
3. FTAとアセアン・日本関係
4. アジア流通業の国際化
5. アジア観光産業の国際化
6. アジアの建設業、ODA、日系ゼネコン

【評価方法】

発表内容および提出レポートで評価する。

【テキスト】

シンガポールの経済発展と日本（清水洋著 コモンズ）

【参考文献・資料】

Japan and Singapore in the World Economy (H. Shimizu & H. Hirakawa, Routledge) .
その他、必要に応じて指示する。

国際社会特別講義Ⅱ（国際経済システム論）

秦 忠夫

【授業の概要】

国際間の経済取引は經常取引（財・サービスの貿易取引）と資本取引に大別されるが、いずれの面でも取引の自由化が進み、世界経済は相互依存関係を深めている。しかし、発展段階の異なる多くの国からなる世界経済においては、取引の自由化には不断の政策努力が必要であり、一方で国際取引の進展に伴って発生する諸問題は市場メカニズムに委ねるだけでは解決できず、国際的な政策対応が不可欠である。戦後の世界経済がどのような制度的枠組みのなかで発展し、どのように問題解決への取組みがなされてきたか検討し、将来に向けての課題について考える。

戦後の国際経済システムを担ってきた三つの主要国際機関、すなわち国際通貨基金、世銀グループおよび世界貿易機関（その前身としてのガット）が果たしてきた役割をレビューし、それぞれが抱える今日の課題を検討する形で主題テーマに迫る。

【授業の目標】

検討対象である三つの国際機関の役割の変遷と今日の最重要課題につき理解を深める。

【授業計画】

1. 講義が主体となるが質疑応答の時間を十分取り入れたい。
2. 参考文献リストを活用して受講者は独自の研究も行う。
3. 各自指定されたテーマ（選択形式）につきレポートを作成し提出する。

【評価方法】

平常の授業への取り組み姿勢と期末レポートで評価。

【テキスト】

プリントを配布。

【参考文献・資料】

授業の際、適宜紹介。

国際社会特別講義Ⅳ（比較教育文化論）

渡辺かよ子

【授業の概要】

世界における比較・国際教育学研究の最近の水準に即しながら、人間形成の比較・国際的接近を試みる。そのさい、文化史的背景と問題解決への試行的実践事例に注目する。

【授業の目標】

日本を含む世界の人間形成に関する基礎理論と教育制度の概要から現代の教育課題を理解する。

【授業計画】

参加者へレポートを課しながら講義を進めていく。

- 1) 教育の近代化と「新教育運動」の展開
- 2) 第二次世界大戦後の教育改革と脱学校論
- 3) 近代欧米教育文化と近代日本教育文化との関連と課題
- 4) 「発展途上国」の教育と文化：識字運動を中心に
- 5) 地域・学校・企業が連携した教育改革への取り組み

【評価方法】

授業での議論への参加貢献度。

学期末レポート。

【テキスト】

資料配布。

【参考文献・資料】

教育への問い（天野郁夫編 東京大学出版会）
生きる思想（イリイチ 藤原書店）
〈ほんもの〉という倫理（C. ティラー 産業図書）

国際社会特別講義V（比較近代化論）

西尾林太郎

【授業の概要】

東アジアにおける国際体系の変化と中国、韓国、日本の近代史は深く連動しながら展開した。この点を考慮しつつ、政治的近代化論を軸として、中・韓・日三国の近代史と現代の政治システムについて比較分析することを、本講義の目的とする。また、その結果をふまえて、“アジア的国家”と西欧近代国家との比較も試みたい。

【授業の目標】

東アジア近代史を踏まえつつ、比較政治の視点を習得する。

【授業計画】

初回に方法論について述べ、以下、次のように順を追って講義する。

- 1 近代化論から見た近代アジアの歴史
- 2 伝統的東アジアの国際秩序と西洋の国際法秩序
- 3 科挙官僚制と中国の近代化
- 4 両班（ヤンバン）と李氏朝鮮の近代化
- 5 徳川幕藩体制と日本の近代化
- 6 “アジア的国家”とは何か？
- 7 イギリス、ドイツにおける立憲国家の成立とその展開
- 8 ヨーロッパにおける立憲国家とアジアにおける立憲国家
- 9 まとめ—日本、中国、韓国の近代の体験と現代政治—

【評価方法】

レポート（テーマについては7月上旬に発表する）と出席状況を総合的に評価する。

【テキスト】

使用しない。適宜、資料を配布する。

【参考文献・資料】

その都度、紹介する。

メディアプロデュース特別講義II（情報科学論）

親松和浩

【授業の概要】

マルチメディアの原理と応用について“ユーザーの立場から”考察する。また、マルチメディアと基礎科学との関係についても検証し、夢の技術として基礎研究段階にある量子コンピュータ等の紹介も行う。

【授業の目標】

マルチメディア検定3～2級程度の知識を習得し、マルチメディアと基礎科学との関係を理解する。

【授業計画】

- 1) マルチメディア情報とは
- 2) マルチメディア情報の処理技術
- 3) マルチメディア情報システムと通信技術
- 4) マルチメディアの応用と将来

【評価方法】

出席状況と、報告レポート等で評価する。

メディアプロデュース特別講義I（メディア分析論）

石田米和

【授業の概要】

多様化するメディアを、コミュニケーション過程とイメージ・意識の形成・普及過程の視点から捉え直し、社会的影響力を強めつつあるメディアの位置づけ、メディアのあるべき姿およびメディア・リテラシー等について議論する。

主な内容は以下の通り。

1. メディアの動向と背景
2. メディアの機能と影響
3. 映像化の推移と問題点
4. メディア戦略の実態とリアリティ
5. メディアと社会構想、他

【授業の目標】

1. コミュニケーション論、記号論等の基礎を学習・研究し、社会・自然環境までを視野に入れた広義のメディアを検討すること。
2. インターネット上の意見交換や世論形成と社会構造との係わりについて学習・研究すること。

【授業計画】

1. テーマの視点、研究枠組み、研究方法等の検討
2. 各種統計資料、意識調査等を用いた、生活、産業等におけるメディアの浸透（普及と利用）度合いと社会経済的背景との関連性、問題点等の分析
3. 映像を中心としたコンテンツ分析による、発信者側の意図・目的等の把握
4. 世論および社会イメージ形成とメディアとの関連性の検討

【評価方法】

レポート、定期試験および出席状況、受講態度によって評価する。

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

授業内で適宜紹介する。

メディアプロデュース特別講義III（レトリック批評論）

五島幸一

【授業の概要】

レトリック批評とメディア研究との関わりあいについて考察する。とくにメディアを媒介としたメッセージを分析することにより、レトリック批評の理論的枠組を明らかにし、そのメディア分析の有効性について論じる。

レトリック批評理論に関する論文を講読し、その理論的枠組を考察する。また、メッセージ分析に関する実践的研究について考察し、その特質について検討する。

【授業の目標】

レトリック批評理論に関する論文を講読し、その理論的枠組を考察する。また、メッセージ分析に関する実践的研究について考察し、その特質について検討する。

【授業計画】

- 1) レトリックとは
- 2) レトリック批評理論
- 3) スピーチの分析
- 4) 非言語の分析（政治漫画、広告など）

【評価方法】

授業への参加度、および学期末に提出する研究論文にて評価する。

【テキスト】

別途指示する。

メディアプロデュース特別講義Ⅳ（番組開発論）

大西 誠

【授業の概要】

デジタルメディア社会をむかえ、メディアの教育性が注目されている。いわゆる教材・教具から映像をベースにした番組やインターネットまで幅広いメディアの教育利用が求められている。メディアの成り立ちや歴史的發展とともにメディアの教育利用について理論と実習を通じて明らかにする。

【授業の目標】

様々な放送番組や映像作品を通じて、メディアの教育性を理解する。映像表現の制作過程を理解するとともに実際にビデオ表現を体験する。受講者同士でメディアの送り手、受け手の関係を討議することを通じて、メディアリテラシーを深く理解し、市民社会で役立てる能力を身につける。

【授業計画】

近年、市民が番組を制作する機会が多くなっている。取材（ロケ）映像とスタジオ映像とは、それぞれどのような特徴があり、どのように作られているのか。また、それらを効果的に組み合わせて市民に資する番組を制作するには、どうしたら良いか。基本的なモデルを教育番組に求める。

本講では、教育メディアの歴史と理論を学ぶとともに、情報化社会におけるメディアのあり方や教育とのかかわりを、実際に放送された教育・教養番組の内容を分析し、番組を試作したい。

- ・教育番組の制作過程
- ・「日本賞」教育番組国際コンクール ・ドキュメンタリー番組の検討
- ・映像制作技術（実習）
など

【評価方法】

受講態度、グループワークへの参加、作品などを総合的に評価する。

【テキスト】

特になし

【参考文献・資料】

別途紹介する

都市環境デザイン特別講義Ⅲ（情報化建築論）

吉田邦彦

【授業の概要】

現在の都市・建築は、マルチメディア化とネットワーク化により著しく進展した情報化（高度情報化）によって、大きな変革が進みつつある。情報化の観点から、生活空間の変化の方向を探り、それらが今後の都市・建築のあり方およびそこの生活にどのような影響を与えるかを論じる。

【授業の目標】

情報化によって社会・都市・建築がどのように変化しつつあるかを理解するとともに、今後の変化を見通す基礎的な知識・能力を習得する。

【授業計画】

- (1) オリエンテーション・テキスト・著者紹介他
- (2) 「情報革命による都市・建築の変化」について講義し、情報化に関する諸問題についての認識を共有する。
- (3) 「e-トピア 新しい都市創造の原理」について輪読する。テキストを各自が読解し、関連資料等を収集・発表する。ディスカッション形式で理解が深まるように講義を進める。
- (4) 都市・建築の情報化に関する問題点・将来像・可能性などを取り上げ、レポートを作成する。

【評価方法】

分担部分の発表内容・形式、討議への参加、および課題に関するレポートなどを総合して評価する。

【テキスト】

- (1) シティ・オブ・ピットー情報革命は都市・建築をどうかえるかー（ウィリアム・J・ミッチェル著 掛井秀一他訳 彰国社）
- (2) e-トピアー新しい都市創造の原理ー（ウィリアム・J・ミッチェル著 渡辺俊訳 丸善株式会社）

都市環境デザイン特別講義Ⅱ（建築保存再生論）

河辺泰宏

【授業の概要】

文化遺産に対する保存概念の移り変わりについて、ルネサンスの芸術家達が古代遺産の研究を始めてから近現代において文化財修復思想が確立されていくまで、過去に対する歴史観の変遷に照らし合わせながら論じていく。また、西洋と日本を中心に、都市と建築の歴史的遺産の現状について理解を深めるとともに、それらの保存・修復・復原や都市資産としての利活用の方法についても論じる。

【授業の目標】

人類の文化遺産を護ることの意義について認識し、歴史的遺産に対する保存概念の確立に様々な経緯があったことを理解する。また、事例研究を通じて保存現場の実状を実感すること。

【授業計画】

授業は主に講義形式で進めるが、テーマによって担当を決め、報告会を行うことがある。講義の主なポイントは以下の通り。

- 1) 破壊との関わり
文化財が破壊される原因と遺される理由
人類の蛮行と遺産保護への執念
遺産保護に従事する人々
- 2) 変りゆく保存の概念
ルネサンス芸術家達の歴史意識
古典主義時代の考古学的成果
文化遺産保存活動の歴史とユネスコの世界遺産条約
- 3) 開発・建設の時代から維持・再生の時代へ
建築におけるサステナビリティ
20世紀型開発から21世紀型開発へ
- 4) 文化財保存の論理
日本と西洋における文化財保護の歴史と事例研究
- 5) 町並み保存の論理と事例研究
日本における町並み保存の歴史と事例研究
- 6) 近代建築保存の論理
近代建築および近代化遺産の保存・再生の歴史と事例研究

【評価方法】

事例研究のレポートと出席による。

【テキスト】

なし。

【参考文献・資料】

適宜、プリントを配布する。

都市環境デザイン特別講義Ⅳ（都市空間デザイン論）

日色真帆

【授業の概要】

場面のデザインという視点から、望ましい都市空間のデザインを、多様な社会、文化、芸術的文脈の中で実現してゆく方法を学ぶ。特に、生活の場面をデザインすることに焦点をあて、スペースブロックとイベントピクトグラムという手法を用いて、具体的な提案に結びつける。

【授業の目標】

都市空間のデザインの多面性を理解し、様々な理論や方法を具体的な提案の場において利用できるまで習得する。

【授業計画】

- ・場面のデザインという視点から、様々なデザイン分野の比較分析。
 - ・居住環境の様々なデザイン手法の学習。
 - ・都市における「囲まれた空間」の意味や効果を多面的に考察する。
 - ・具体的な生活の場面についての分析とデザイン。
- （講義と議論をふまえて、具体的な生活の場面について分析レポートとデザイン的な提案を作成しプレゼンテーションを行う。）

【評価方法】

分析レポートとプレゼンテーションによって評価する。

【テキスト】

特になし。

地域社会プロジェクトII b

辻 紘良

【授業の概要】

情報化、および環境・生活優先の時代に向けて、それぞれの地域特性に則した地域交通のビジョンを研究する。

ここでは情報通信ネットワーク技術の進歩を背景に昨今進展の著しいITS (Intelligent Transport Systems = 高度道路交通システム) を中心に取り上げ、地域やまちづくりの観点から新しいITSシステムの提案と可能性の評価を行う。

【授業の目標】

1. 地域交通を対象に課題を設定するとともにその解決策を提案し、その可能性を調査・分析し、新たな結果を得るための研究能力を高める。
2. 地域づくりのためのITSシステム制作などを通して総合的な研究能力を高める。

【授業計画】

地域交通の問題点や課題を抽出するとともに、地域に相応しいITSを取り入れた交通システムを提案し、その可能性と効果を考察する。

- (1) 地域の街区形成と車や歩行者の交通流動との関連について分析を加え、問題点や課題を把握する。
- (2) 地域の交通施策の現況を把握するとともに、今後の地域やまちづくりに関する交通施設整備の在り方を考察する。
- (3) 地域や街づくりに関する国内外ITSの技術やシステム普及の現状を調査する。
- (4) 上記課題を解決するためにITSを活用した新しいシステムを提案する。例として、近年進展著しい、インターネットITS、無線LAN、DSRCなどを活用した地区交通あるいは歩行者支援ユビキタスITSのシステム提案などを取り上げる。
- (5) 提案システムについて概要設計を試みるとともに、効果の推定やシステム導入の可能性について評価する。
- (6) システム例としては、インターネットITSに基づく「車椅子の経路誘導システム」および「商店街案内」の複合プラットフォームシステムの提案などを参考とする。

【評価方法】

課題の提出や発表内容の結果を総合し成績を評価する。

【テキスト】

使用せず。

【参考文献・資料】

Proceedings of 12th World Congress on Intelligent Transport Systems (ITSO 5)、他

地域社会プロジェクトIII a・b

谷沢 明

【授業の概要】

テーマは「歴史的文化遺産を活用した地域づくり」及び「伝統的民家の保存・再生・活用」。

河辺泰宏教授担当の都市環境デザインプロジェクトIV a・bと連携して実施する。

【授業の目標】

歴史的文化遺産を活かした「地域づくり」の在り方を理解するとともに、その応用として自らが取材して事例研究・報告を行う力を養うことを目標とする。

【授業計画】

- 1) プロジェクトの課題設定について討議を行い、現代的意義を見出す。
- 2) 文献講読を通じプロジェクト実施上の知識の習得を行う。
- 3) 「概要」に記したテーマに基づくフィールドワークを集中的に実施する。
 - ・調査方法 (観察調査・インタビュー調査・文献調査) の指導。
 - ・フィールドワークは、主として①～④を視点として実施する。
 - ①風俗・習慣や精神生活の歴史を中心とする文化史のアプローチ
 - ②民衆の生活文化の歴史を解明する民俗学のアプローチ
 - ③地域社会の独自性、個性を明らかにする地域社会学のアプローチ
 - ④集落・地域社会の形態や変化の解明をめざす地理学のアプローチ
- 4) フィールドワークのデータ整理とその分析を行う。
- 5) フィールドワーク成果のプレゼンテーションを行う。
 - ・パワーポイントを作成し、成果発表会を行う。

備考：学外教育・フィールドワークを実施する (実費を各自負担のこと)。調査地及び日程の詳細については履修登録時に掲示する。

【評価方法】

フィールドワーク成果のプレゼンテーションにより評価する。

【テキスト】

使用しません。

【参考文献・資料】

第1回目の授業で紹介します。

国際社会プロジェクトI a・b

藤瀬浩司

【授業の概要】

工業化に関する理論を整理するとともに、これまでの歴史過程に現れた工業化の事例を取り上げ検討する。

1. 工業化の理論
 - A. ロストウ (W.W.Rostow) とガーシェンクロン (Alexander Gerschenkron)
 - B. 赤松要とヴァーノン (R.Vernon)
 - C. フランク (G.Frank) とウォラーステイン (I.Wallerstein)
 - D. これからの課題
2. 工業化の事例分析
 - A. (1) イギリス産業革命
(2) 西ヨーロッパとUSA
(3) ロシア、イタリヤ、日本
 - B. (1) 現代工業化の諸問題
(2) 社会主義工業化
(3) ラテンアメリカの工業化
(4) アジアの工業化

【授業の目標】

工業化は現代の発展途上国が目標とするキタムである。歴史過程に現れた様々な工業化と現代の工業化を理論的・実証的に検討する。

【授業計画】

レクチャーと参加者の報告・討論を組合せる。

【評価方法】

授業への参加状況とレポートで評価する。

【参考文献・資料】

講義の際に適時指摘する。

国際社会プロジェクトIII a

清水 洋

【授業の概要】

英文資料 (新聞・雑誌記事、学術論文等) を用いて、アジア社会の諸問題を政治・経済・文化・教育などの視点から多面的に考察し、討議を通じて知識を深める。

【授業の目標】

英文資料の読解を通じてアジア地域の諸相に関する専門知識を身につける。

【授業計画】

1. アジアの社会経済発展の背景についての分析・把握。
2. アジアにおける日本の影響とプレゼンスに関する英文資料の和訳・内容分析。
3. 英文資料の効果的な活用法についての指導。
4. レポートの作成・発表・討議・講評。

【評価方法】

英文資料の読解力およびレポートで評価する。

【テキスト】

必要に応じて英文資料を配布する。

【参考文献・資料】

シンガポールの経済発展と日本 (清水洋著 コモンズ)

Japan and Singapore in the World Economy (H. Shimizu & H. Hirakawa, Routledge)

その他、必要に応じて指示する。

国際社会プロジェクトⅢb

秦 忠夫

【授業の概要】

世界経済の注目される動き、すなわち「活発化する自由貿易地域形成の動き」「中国経済の台頭」「増大する国際資本移動の功罪」などのテーマを、英文資料（新聞・雑誌、学術論文など）に基づき検討する。

【授業の目標】

国際経済・金融問題を英文資料を活用して研究する能力を鍛錬する。

【授業計画】

1. 参考文献の輪読と討議。
2. テーマに関連した補足資料の収集・解析。
3. 最終レポートの作成。

【評価方法】

授業への参加態度とレポートで評価。

【テキスト】

資料配布。

【参考文献・資料】

授業の際、適宜紹介する。

メディアプロデュースプロジェクトⅠa

坂元 多

【授業の概要】

ことばだけでは表現できない思想やアイデアを映像作家は番組やアートの形式で表現してきた。今までのすぐれた映像表現の先駆者たちをとらえて、具体的な作品にそってその表現の形式や手法、考え方を学ぶ。

【授業の目標】

映像によって表現できる概念、思想の可能性の中を広げ創作的映像表現の力を養う。

【授業計画】

映像や資料の提示解説の後、その受けとめ方についての討議をととして理解を深めたい。

【評価方法】

各回の各自の受けとめ方や自主的研究の深め方を見て常時評価する。各回ショートレポートの提出を求めることがある。

【テキスト】

特になし

メディアプロデュースプロジェクトⅠb

太田浩司

【授業の概要】

本プロジェクトでは人間のメディア使用とその心理を主題として扱う。特に、その原因と効果についてコミュニケーション学や社会心理学という視点からアプローチをする。前半では人々がなぜ特定のメディアを使用するのか、また使用した結果どのような心理的影響があるのかを先行研究を通して知識を深め、後半には自ら作った理論的モデルを基にミニプロジェクトを行うことによりメディア使用と人間の心理の関係を探る。

【授業の目標】

この授業の目標はメディアの効果というマスコミュニケーション研究の古典的なパラダイムについてその理論と方法論について概観し実験をすることにより映像が受け手側に及ぼす影響を理解を深めることである。

【授業計画】

学期の最初の講義で提示する。

【評価方法】

出席、口頭発表、学期末プロジェクト

【テキスト】

特になし。

【参考文献・資料】

メディアと暴力（佐々木輝美著 劉草書房）

メディアプロデュースプロジェクトⅡa

大西 誠

【授業の概要】

映像メディアは、フィルム、ビデオ、デジタル画像といった収録媒体の特質を生かしつつニュース、ドキュメンタリー、ドラマ、フィクションなどの形式で、情報・メッセージを伝えている。しかし単に、表現されたものを表面的に捉えただけでは、メディアの本質が見えてこない。本講はメディア理論の展開をたどるとともに、メディア表現について、映画、写真などの映像分析の手法を学ぶ。あわせてメディアが大きな役割を果たしている情報社会のシステムについても考察する。

【授業の目標】

メディアの理論を歴史的に振り返りながら、メディアが社会的に構成されていった経緯を理解する。メディア論の現代社会への適応を検討し、メディアの本質に迫る。またメディア表現の分析の手法を学び、知識を得る。

【授業計画】

19世紀以降のメディア史や理論の系譜に目を向けつつ、現代社会とメディアの関係を以下のような観点から考察する。

- ・プロパガンダ研究から批判理論
- ・マクルーハンの理論展開
- ・カルチュラルスタディーズ入門
- ・メディアの記号論的分析

【評価方法】

課題レポートと討議参加

【テキスト】

別途、指示する

メディアプロデュースプロジェクトⅡb

石田米和

【授業の概要】

大量に生産され流通する、画像を中心とした様々な形態の情報内容（コンテンツ）の多面的な分析を通して、主に以下の点を論議していく。

1. 観察可能な情報内容や社会的事象の、意味論的・記号論的・認知理論的分析の方法論・手法の検討と応用
2. 情報内容と表現方法、それらと社会的文化的文脈との関連性
3. 双方向性とネットワーク化による意識・感覚の共有、暗黙知の形成
4. メディア文化のパラダイム、その他

【授業の目標】

記号論などを中心とした分析手法を、それらの有効性・問題点などの学習・研究、受講生各人のテーマによるプレゼンテーションや論議を通して理解すること。

【授業計画】

1. 記号論や認知科学等によるコンテンツ分析の方法論の検討
2. 多様な表現形態のコンテンツの、意味論的記号論的分析
3. 社会的分化的文脈と社会的認知のギャップ（屈折）との関連性の検討
4. ネットワーク系メディアと世論・共通意識等の形成との関連性の検討

【評価方法】

・レポート、定期試験および出席状況、受講態度によって評価する。

【テキスト】

未定。英文も使用する予定である。

【参考文献・資料】

授業内で適宜紹介する。

メディアプロデュースプロジェクトⅢb

五島幸一

【授業の概要】

メディアから出てくる情報には受け手を説得しようとする戦略が組み込まれている。そこで、受講生が選定する特定のテーマについて、コミュニケーション学またはレトリック批評の観点から論議する。

受講生は具体的なケースをもとに分析をおこない、コミュニケーション上の特徴を実際に調べていく。

【授業の目標】

コミュニケーションの観点からの分析の仕方を学び、受講生が取り組んでいる様々なケースにどのように援用するのかを理解すること。

【授業計画】

問題設定とその解決策をグループによる検討を中心に進める。

【評価方法】

授業への参加度およびレポートにて評価する。

【テキスト】

別途指示する。

メディアプロデュースプロジェクトⅢa

親松和浩

【授業の概要】

情報メディアやロボットなどの先端技術の可能性に関して、受講生が選定する特定のテーマについて議論する。テーマにはシステムの設計/試作や、作品の試作も含める。

【授業の目標】

情報メディア技術に関する基礎知識と技能を習得する。

【授業計画】

受講生は各自の興味に従ってテーマを選定し、受講生による調査報告を中心に進める。過去にこのプロジェクトで扱ったテーマには、Webサイト作成例とその技術的課題、クレイアニメーションの試作、立体視の原理と応用、コンピュータ言語Squeakを使った簡単なゲームの試作などがある。

1. 文献・資料調査に基づくテーマの設定、把握を行う
2. データ収集、システム構築、問題解析等を試みる
3. 成果報告の資料作成とプレゼンテーション

【評価方法】

出席状況と、報告レポート等で評価する。

都市環境デザインプロジェクトⅠa・b

日色真帆

【授業の概要】

都市環境をわかりやすく魅力あるものとする方策を、空間認知研究の成果をふまえて具体的に探る。名古屋の中の複雑な都市空間を対象とし、調査と分析を行い、さらにデザイン的な提案をまとめ、プレゼンテーションをまとめる。一連のプロセスを経験することで、都市環境の改善活動について具体的に学習する。

【授業の目標】

具体的な対象に対して、調査分析から提案をまとめあげる技術を習得する。

【授業計画】

- ・都市環境を対象とした空間認知についての講義。
 - ・複雑な都市空間についての事例収集。
 - ・都市空間のデザイン手法についての学習。
 - ・対象とする都市空間の調査と資料収集。
 - ・分析結果の中間発表と教員による講評。
 - ・環境改善についての提案の作成。
 - ・プレゼンテーション手法についての学習。
 - ・プレゼンテーションの作成。
 - ・最終講評会におけるプレゼンテーションと講評。
- ※対象とする都市空間は授業の中で発表する。

【評価方法】

提出された作品と、講評会におけるプレゼンテーションによって行う。

【テキスト】

特になし。

都市環境デザインプロジェクトIV a・b

河辺泰宏

【授業の概要】

文献講読やフィールドワーク等を通じて、歴史的建造物や伝統的町並みの保存と再生に関して体験的に学ぶことを目的とする。

(授業は谷澤明教授担当の「地域社会プロジェクトIII」と連携して行う。)

【授業の目標】

歴史的遺産の保存・再生について事例研究を通じてその実態を把握すること。

【授業計画】

- 1) 参考文献の輪読。
- 2) フィールドワークの実施とその成果発表。
- 3) 映像資料の視聴と討論。

フィールドワークにおいては、文献に記載された事例を訪ねたり、その他の事例を探して手分けして調査を行い、レポートを作成する。フィールドワークの対象は、授業の中で適宜相談して決めるが、京都、神戸、妻籠、奈良井、熊川、舞鶴、金沢等をはじめ、場合によっては海外へ足を延ばすこともある。

【評価方法】

出席とレポート発表による。

【テキスト】

なし。

【参考文献・資料】

適宜、資料を配布する。

地域社会特別研究 M II-06 a・b

竹村 弘

【授業の概要】

わが国経済社会は、「平成の10年代不況」から「2000年デフレ」へと未曾有の長期不況が継続する中で、行財政改革・金融改革・少子高齢化・地球環境問題など歴史的な大変革に直面している。日本経済・地域開発を中心に諸課題を幅広く取り上げ、実証的に研究する。

【授業の目標】

院生各自の研究の進捗と修士論文の完成。

【授業計画】

院生が主体的に作成した論文作成スケジュールを基に、研究進捗度に応じた助言と指導を行う。

【評価方法】

研究への取り組み姿勢と研究の進捗度。

【テキスト】

必要に応じて個別に使用する。

地域社会特別研究 M I-06 a・b

辻 紘良

【授業の概要】

情報や通信技術の進展を背景にITS※と呼ばれる新しい交通に関する情報通信ネットワークの開発が急速に進められている。ここでは、現在この分野で注目されている中心的なテーマや技術開発動向を取り上げ、地域交通への展開をはかり、テーマを設定すると共に実験・分析を行い、問題の解決方法を提案する。また、ネット通信機能を利用した実験システムを構築し可能性を評価する。

これにより、地域交通の今日的な問題に関し、交通の情報化の視点から将来の地域づくりの在り方について方策を提言し、その効果を明らかにする。

* ITS=Intelligent Transport Systems (高度道路交通システム)

【授業の目標】

1. 車や、歩行者の交通実態を把握するとともに問題点や解決策を展望する。
2. ITSなど交通情報化による問題解決策を提案し、システム開発研究を行いその可能性を確認する。

【授業計画】

- (1) ITSのなかでも地域交通に関する中心的なテーマや技術開発動向に関して文献調査を行い、地区や歩行者交通への展開をはかり研究テーマを設定する。
- (2) 研究計画を立案し、問題解決に必要な実験計画の作成や実験環境を整備するとともに実験を行い、データの収集をはかる。
- (3) データ解析により独自の研究成果を得るとともに、システム構築を検討し導入可能性を評価する。
- (4) 地区交通の視点から将来の地域づくりの在り方についてシステム提案を行い、問題解決の方策を提言する。

(個別テーマの例)

1. 車いすの経路誘導システム
車いすの移動負担度を考慮した車いすの経路誘導システムを研究する。このため、実験計測した筋電生理量データに基づき移動負担度の推定モデルを構築するとともに、携帯電話の通信機能を用いて、携帯端末機に最適な経路を伝達し、表示するシステムの構築を検討する。
2. ネット通信を利用する過疎地のコミュニティーカー
インターネットにより容易に不特定多数の間で対話型通信が可能なることを利用し、交通過疎地に会員制通信ネットワークを形成しコミュニティーカーシステムを構築する。このシステムの可能性について、代表的な過疎地域を対象に実験モデルを構築し、試行実験を行い本システムの成立可能性を評価する。

【評価方法】

研究計画や研究進捗状況ならびに論文の出来映えを総合し成績を評価する。

【テキスト】

テキスト使用せず。

【参考文献・資料】

Proceedings of 12th World Congress on Intelligent Transport Systems (ITSO 5), 他

地域社会特別研究 M III-06 a・b

谷澤 明

【授業の概要】

地域文化の継承に関わる諸問題を取りあげ、その調査分析手法を教示するとともに、学生の研究と論文作成に対する個別的助言指導を行う。フィールドワークを中心とした地域研究を志向し、既往研究を踏まえて独自の調査研究を目指す人を対象とする。専門領域は、地域文化論・民俗学・民俗建築学。

【授業の目標】

フィールドワークを中心とした地域研究に基づき、既往研究の整理・独自の調査研究・論文作成の総合的なプロセスを習得することを目標とする。

【授業計画】

- 1) 調査研究の目的及び社会的意義についての検討。
 - ・調査・研究者の基本的姿勢と、調査研究に参画する自覚を喚起する
- 2) テーマ「地域文化の継承に関わる諸問題」に関する知識の習得。
 - ・既往研究の整理
 - ・関連文献の購読(地域文化論、文化史、民俗学、民具学、生活学、建築学、歴史地理学)
 - ・調査及び分析方法に関わる知識の習得
- 3) フィールドワークを中心とした地域研究を実施。
 - ・調査地における基本的データの収集
 - ・調査地における文献調査の手法
 - ・調査地における観察調査の手法
 - ・調査地における聞き取り調査の手法
- 4) 既往研究を踏まえた独自の調査研究。
 - ・調査データの整理・分類
 - ・調査データの比較検討・解析
- 5) 論文作成指導。
 - ・調査研究成果のまとめ方についての指導

【評価方法】

平生の調査研究への取り組みにより評価する。

【テキスト】

使用しません。

【参考文献・資料】

授業で必要に応じて紹介します。

地域社会特別研究 M IV-06 a・b

榊原國城

【授業の概要】

この授業の主題は、学生自身の個人研究活動を通じて判断力・理解力・総合能力を涵養し、問題に対する客観的、科学的態度を身につけ、研究能力を高めることにある。

受講学生は、産業・組織心理学を専門領域とする担当者の指導を受けながら、自己のテーマについて積極的に学び、問題を発見し、問題の解決に向け、これまでに身につけた科学的方法を適用することによって実証していくという研究活動を行い、その成果を修士論文としてまとめる。

【授業の目標】

修士論文の完成。

【授業計画】

1. 文献・資料調査に基づく研究テーマの設定
2. 研究方法の検討
3. データの収集
4. データの解析および考察
5. 論文完成に向けての指導

【評価方法】

修士論文の内容によって評価する。

【テキスト】

使用せず。

【参考文献・資料】

授業中に提示または指示する。

地域社会特別研究 M VI-06 a・b

千葉善根

【授業の概要】

戦後、日本の食生活や食文化は急激な変化をした。食と人間との関わりを探りながら日本の伝統的な食文化、食の社会的・精神的役割、多様化した現代の食生活などについて研究する。

上記の研究について、その方法を教授するとともに、論文作成の助言を行う。

【授業の目標】

日本の伝統的な食文化を理解するとともに、現代社会における食の現状を十分調査する。

【授業計画】

- 1) 文献、調査資料等による研究テーマ、研究方法の検討。
- 2) 独自の研究方向を決め、問題点を整理し、研究テーマを設定。
- 3) データの収集、作成。
- 4) 得られたデータをもとに論文を作成。
- 5) 論文の完成に向かうよう指導、助言する。

【評価方法】

日常の参加状況から判断する。

地域社会特別研究 M V-06 a・b

石田好江

【授業の概要】

消費、家族、労働、地域福祉などライフスタイルに関するテーマを取り上げ、研究の方法を教示するとともに、受講学生の研究と論文作成に対する個別的な指導を行う。

【授業の目標】

自らの研究課題を発見し、当該分野の知識情報の収集及びテーマへの考察によって修士論文を作成する。また、そのことを通じて研究能力を高める。

【授業計画】

- 1) 研究テーマの設定
- 2) 研究方法の検討と確定
- 3) 文献・資料の収集
- 4) 先行研究の検討
- 5) 論文の構成・内容の検討

上記の作業を通じて論文作成に向けて個別指導を行う。

【評価方法】

研究への取り組み姿勢及び研究論文の内容によって評価する。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

指導上の必要に応じて適宜紹介する。

国際社会特別研究 M I-06 a・b

藤瀬浩司

【授業の概要】

世界経済の構造と発展—20世紀の世界経済の発展を主要テーマとして、研究の方法を教示するとともに、学生の研究に対する個別的な助言を行い、論文作成のための準備作業を指導する。

【授業の目標】

現代の社会と経済の分析方法、論争点を理解するとともに、論文作成方法を学ぶ。

【授業計画】

各学生が自己テーマについて研究の進捗状況を適宜発表し、指導をうける。時間については相談のうえ決定する。

【評価方法】

参加状況と個別研究の進み方で評価する。

【テキスト】

なし。

国際社会特別研究 M II-06 a・b

秦 忠夫

【授業の概要】

国際経済・金融問題

国際経済・金融問題を探り上げ、研究の方法を教授するとともに、個々の学生の研究に対する助言を行い論文作成を指導する。

【授業の目標】

適切な研究テーマの設定、前広な資料収集ならびに時間的な余裕を持った論文作成。

【授業計画】

1. 文献・資料調査に基づく研究テーマの設定、研究方法の把握。
2. データ収集、分析、討議を通じて独自の研究成果を得よう指導。
3. 論文の完成を指導。

【評価方法】

参加状況と研究の進展状況で評価する。

【テキスト】

なし。

【参考文献・資料】

適宜紹介する。

国際社会特別研究 M III-06 a・b

清水 洋

【授業の概要】

授業担当者の専門領域はアジア経済論、日本・アジア経済関係史、および国際労働移動論である。院生が選定した研究テーマを取り上げ、討議を通じて基礎理論の充実と進化をはかり、分析の方法を教示し、論文作成の指導をする。また、統計資料の読み方、英文資料の使い方、インターネットを通じての資料収集の方法、その他基礎的な研究技法を適宜教示する。

【授業の目標】

2年間で修士論文を完成させる。

【授業計画】

1. 基礎理論と研究方法の把握、研究テーマの設定。
2. 研究テーマに関する資料・文献の収集と分析。
3. 研究成果の発表・討議・講評。
4. 論文作成のための個別指導。

【評価方法】

中間報告および論文で評価する。

【テキスト】

なし

【参考文献・資料】

必要に応じて適宜指示する。

国際社会特別研究 M IV-06 a・b

渡辺かよ子

【授業の概要】

教育に関する各自の修士論文の完成に向けた指導を行う。各自の研究テーマに応じた研究方法論、基礎理論の概観、資料収集の方法などについて個別指導と発表討論を並行して行っていく。

【授業の目標】

修士論文執筆に必要な当該分野の基礎知識と研究方法を習得する。

【授業計画】

1. 研究方法論
2. 研究テーマの重要性と先行研究の検討
3. 論文の構想と構成
4. 原稿執筆と内容検討

【評価方法】

中間報告と論文。

【テキスト】

使用せず。

【参考文献・資料】

その都度指示する。

国際社会特別研究 M V-06 a・b

西尾林太郎

【授業の概要】

広く東アジアと日本の近・現代史もしくは比較政治・比較社会論に関する修士論文作成のための基本文献の講読と論文作成の指導を行う。その文献は各自のテーマによって異なるので、個別に選定するが、前期はできるだけ最大公約数的な基本文献、例えばR.Dahl『POLYARCHY』や中村隆英『昭和史』、猪口孝『現代日本政治の基層』などを全員で読み、後期はグループ別又は個別に読んで行きたい。そして随時、修士論文の章または節にあたる部分あるいはそれらに関連するテーマについてレポートを作成し、報告をしてもらう。特に後期はレポート報告が中心となる。

【授業の目標】

各自の研究テーマを踏まえつつ、随時レポートを作成し、修士論文の基礎となる論文または修士論文を作成する。

【授業計画】

- | | | |
|----|---|------------------------------|
| 前期 | a | アジアにおける「中華秩序」の崩壊、国民国家論 |
| | b | 日本、朝鮮、中国における近代国家の形成と西洋の近代国家 |
| | c | 国民国家論や東アジア・日本に関する基本文献講読 |
| | d | 現代の東アジアの各地域に関するデータベース作成 |
| 後期 | a | 国民国家論や東アジア・日本に関する各自のテーマによる報告 |
| | b | 国民国家論、東アジア・日本に関する修士論文の作成 |
| | c | 修士論文のチェック |

【評価方法】

提出を求めるレポートや論文で評価する

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

随時、指示する。

メディアプロデュース特別研究 M I-06 a・b

坂元 多

【授業の概要】

テレビ、映画など映像メディアを取り上げ、研究の方法を教示するとともに、学生の研究に対する個別的な助言を行ない、論文作成又は研究成果の結実を指導する。

一つの映像メディアからどのような研究テーマが抽出できるか、さまざまなケースを例示し研究の分野、方向をさぐる。

【授業の目標】

研究対象から問題やテーマを抽出し仮説をたて論文とする技術を身につける。

【授業計画】

キーとなる先行の論文の読み合わせをベースに質疑など、討議法を加えた進め方をとりたい。

【評価方法】

レポート提出によって評価

【テキスト】

特になし

メディアプロデュース特別研究 M III-06 a・b

五島幸一

【授業の概要】

メディアを媒介としたメッセージをレトリック批評の観点から取り上げ、研究の方法を教示するとともに、学生の研究に対する個別的な助言をおこない、論文作成を指導する。

【授業の目標】

レトリック批評について深く理解し、それを具体的な事象に援用することで、論文作成を目指す。

【授業計画】

研究テーマの設定、問題設定、論文の書き方などを学生との討論を通して指導する。

【評価方法】

論文の進捗状況によって評価する。

【テキスト】

とくになし。

メディアプロデュース特別研究 M II-06 a・b

親松和浩

【授業の概要】

情報メディア技術の可能性を探究する。携帯端末やパソコンのネットワーク利用に中心とするが、受講者の興味に応じて広い範囲からテーマを選定する。研究方法の教示と助言を行い、研究論文作成の指導を行う。研究テーマにはシステム設計/試作を行うものも含める。

【授業の目標】

情報メディア技術に関する基礎知識と技能を習得し、新しい技術のあり方を議論する力を養う。

【授業計画】

テーマごとの個別指導を行う。学部学生との関係も考慮に入れ、研究の進展の度合いに応じて各種学会での成果発表も視野に入れる。

1. 文献・資料調査に基づく研究テーマの設定し研究方法を決定する
2. データ収集、システム構築、問題解析等によって独自の研究成果を得る
3. 論文の完成に向けて指導する

【評価方法】

出席状況と、報告レポート等で評価する。

メディアプロデュース特別研究 M IV-06 a・b

大西 誠

【授業の概要】

メディアは情報やメッセージを伝える媒体でありながら、メディアの形態そのものがメッセージを発信するというマクルーハンが指摘した現象が顕著になっている。理論のよりどころとなるアクチュアルな現実を直接経験することを重視しながら「現代」をプロデュースする感覚・感性を研ぎすます。さらに各自が研究テーマを発掘し、仮説を立て、調査、分析し、検証する。専門領域は「メディア教育」「情報メディア論」

【授業の目標】

個別指導により、以下の目標を達成する。

- ・メディアの現状と個別の研究テーマを関連づけ、レポートおよび論文作成をする。

【授業計画】

- ・焦点化した調査、資料の収集と目標との関連性、仮説の設定あるいは企画立案など実証的アプローチを明確にし、計画を立て実践する。
- ・院生相互あるいは学部学生との連携などによって、論文あるいは制作の構成を検討する。

【評価方法】

課題レポートなど

【テキスト】

特になし

【参考文献・資料】

指導時に指定する

メディアプロデュース特別研究 M V-06 a・b

太田浩司

【授業の概要】

様々なコミュニケーションメディアを通して繰り広げられるグループ間、異文化間のコミュニケーションを研究する。ネット、新聞などで繰り広げられるコミュニケーション上の問題を取り上げて理論的に分析し新しい理論展開を試みる訓練を行う。

【授業の目標】

メディアをコミュニケーションのコンテキストとして捉え、そこで行われているアイデンティティの交渉プロセスとそれらに関する基本的理論について理解を深める。

【授業計画】

詳しい授業予定は学期の最初に説明する。

【評価方法】

学期末ペーパー

【テキスト】

未定

メディアプロデュース特別研究 M VI-06 a・b

石田米和

【授業の概要】

メディアのグローバル化を念頭に置き、認知科学および比較文化論等の視点から、特に映像メディアのコンテンツの普遍性等について、研究の方法を教示するとともに、学生の研究に対する個別的な助言を行い、論文作成又は研究成果の結実を指導する。

【授業の目標】

コミュニケーション、メディア等についての基礎知識や方法論を習得し、修士論文作成に繋げること。

【授業計画】

1. 基本文献の購読による、メディア・コミュニケーションの研究手法、研究枠組み等の把握
2. 修士論文のテーマの設定、データ収集・解析等の技法の習得
3. 研究計画等の指導

【評価方法】

・レポート、定期試験および出席状況、受講態度によって評価する。

【テキスト】

未定。英文も使用する予定である。

【参考文献・資料】

授業内で適宜紹介する。

都市環境デザイン特別研究 M I-06 a・b

河辺泰宏

【授業の概要】

西洋建築の歴史と歴史的建造物の保存と再生を柱として、文献講読を中心に進める。とりわけ、建築の様式的変遷や文化財保存の概念が社会思潮の変化に連動していることを念頭に置いて、デザインの歴史が社会的基盤や技術発展の上に成り立っていることを意識させる。

授業は、参加者の興味と担当者の専門性を考慮して、適宜文献を選びながら進める予定である。また、本演習は修士論文の研究指導を兼ねているので、資料収集の方法や論文の読み方、書き方にも重点を置く。

【授業の目標】

文化財の保存と再生をテーマに事例研究を行い、最終的には論文としてまとめる。

【授業計画】

- 1) 西洋建築史および歴史的建造物の保存と再生に関する論文や書籍を持ち寄り、その中から適切な主題をアツカつたものを選び、読み合わせる。
- 2) 読み合わせには、分担を決めてあらかじめ資料を用意し、理解の助けとする。
- 3) 論文のまとめ方を指導する。

【評価方法】

論文の内容と調査研究の成果による。

【テキスト】

なし。

【参考文献・資料】

適宜、必要に応じて配布する。

都市環境デザイン特別研究 M II-06 a・b

吉田邦彦

【授業の概要】

高度情報社会における都市・建築のあり方、建築設計の方法に関する諸問題の解明、あるいは問題解決のための方法の提案を主要テーマとする。

上記テーマをもとにして、今日の都市・建築の設計および計画におけるさまざまな問題を取り上げて、研究の方法を教示するとともに、学生の研究に対する個別的な助言を行い、論文作成または研究成果の結実を指導する。

【授業の目標】

取り上げたテーマに関する基本的な知識の習得と研究方法の理解と習得、そして論文として成果をまとめることを目指す。

【授業計画】

学生との討論を通して、問題点を明らかにするとともに、学生による修士論文の進行にあわせて、その折々での調査・検討の結果について共同で議論し、指導する。

文献収集、既往の論文の検討、研究テーマに対するアプローチの方法など、研究テーマに関する基本的な事項を中心に指導する。

【評価方法】

提出された論文の内容、形式の水準と、学生の授業中での議論に対する積極性によって評価する。

【テキスト】

使用しない。

都市環境デザイン特別研究 M III-06 a・b

日色真帆

【授業の概要】

建築や都市空間について、既になされたデザインについての分析と、新しいデザイン方法の開発を大きなテーマとして、学生がそれぞれにテーマを絞り込み研究をすすめるための指導をする。

【授業の目標】

実現可能な適切な研究テーマを設定し、着実に研究をすすめるための技術を学ぶ。

【授業計画】

個別指導。

【評価方法】

レポートによる評価。

【テキスト】

特になし。

なお、以下の本は論文をまとめる参考になる。文化系の人にも推薦できる。

理料系の作文技術（木下是雄 中公新書）

レポートの組み立て方（木下是雄 ちくま学芸文庫）

都市環境デザイン特別研究 M IV-06 a・b

垂井洋蔵

【授業の概要】

都市、建築にかかわる種類の事象や具体的な建築作品あるいは建築家を題材として、空間や場所に関わる現象、あるいは建築作品の制作に関わる諸思潮の理解と建築論的解釈をおこなう。題材とする事象は、学生の主体的な志向性に期待するがいくつかの例をあげれば、

- 1) 歴史上あるいは現代の建築家を題材にその作品と思潮を解明する作家論
- 2) 具体的な建築を題材にその成立、歴史的意味、空間の独自性等を論ずる作品論
- 3) 建築作品や集落の空間構造、や諸要素の構成等を論ずる形態論
- 4) 建築空間や場所に関わる儀礼や祭礼を題材にして建築的な現象を読み取る意味論などが考えられる。

【授業の目標】

研究のテーマの発見と研究手法を学び論理的思考方法を身につける。

【授業計画】

テーマの選定への助言と、考察のための基礎となる方法論を提示する。個別に論文の進捗にあわせた指導を行い、前後期継続して、各個人のテーマに合わせ、修士論文として纏め上げるための助言を与える。

【評価方法】

視点の新しさ、推論の論理性、分析の正確さなどを総合的に評価する。

【テキスト】

適宜テーマに沿って参考文献を提示する。

都市環境デザイン特別研究 M V-06 a・b

清水裕二

【授業の概要】

さしあたり、現代社会を読みとる切り口として建築・都市・環境といったフレームを設定する。建築・都市・環境は、社会的存在としての人間（=自分自身）を包含した問題系であることを意識すること。その中で自らの立ち位置を自覚し、主体的に関わるような研究・制作・活動を目指す。具体的な内容は未定であるが、例えば次のような基礎作業が考えられる。

- ・ 建築・都市・環境の事例研究
 - ・ 建築論・都市論・環境論の文献購読
 - ・ 実際の建築設計、街づくり、環境に関わる活動などに参加
- こういった作業を経て、最終的には発展的な提言・提案をまとめ、レポート、模型、映像など様々なメディアを用いてプレゼンテーションを行う。

【授業の目標】

個人的な興味だけでなく、社会性をもったテーマを設定すること。また、提言・提案に関しても、現実的な視点からの検証を行う。

【授業計画】

学生個々のテーマに沿って個別に指導する。

【評価方法】

授業への参加の姿勢、調査・分析の過程、レポートなどの成果物などにより総合的に評価する。

【テキスト】

特になし。

【参考文献・資料】

適宜指示する。

都市環境デザイン特別研究 M VI-06 a・b

齋藤基之

【授業の概要】

都市空間および建築内部空間における熱・空気・光・音環境の快適性や省エネルギー、地球環境への配慮等を基礎的なテーマに置き、受講者各自が課題を設定して研究を行う。

【授業の目標】

論理的思考力と、それを整理しストーリーとしてまとめる能力、人に伝える（プレゼンテーション）能力のさらなる向上を図り、修士論文としてまとめる。

【授業計画】

研究課題の設定、研究計画および調査実施の手法、調査結果の解析手法、論文執筆方法などについて個別に指導する。

なお、研究成果は、各種学会等で発表することを視野に入れる。

【評価方法】

各自の研究への取り組み状況、得られた成果の水準や独自性を評価の対象とする。

【テキスト】

特になし。

海外実地研修特論

清水 洋 秦 忠夫 西尾林太郎

【授業の概要】

今年度は、「東南アジアの社会・経済発展と日本」をテーマに、シンガポールとマレーシアで研修を行なう。シンガポールは、人口400万人余りの都市国家だが、輸出志向型工業化政策をとり、外資に大きく依存して急激な経済発展を遂げている。進出日系企業は約1700社、在留邦人は2万人に上り、高層ビルの多くは日本のゼネコンが建設したもので、丹下健三や黒川紀章が設計した建物もいくつかある。現地教育機関、日本の公的機関の現地出先機関、進出日系企業などを訪れて聴き取り調査・資料収集を行い、机上で学んだ両国の現状および日本との係わりについて現地で確認し、研究を深める。なお、シンガポールをベースとしてマレーシアを訪問し、両国の諸相を比較検討する。

【授業の目標】

レポート作成とフィールドワークを通じて東南アジアに関する専門知識を養う。

【授業計画】

- (1) 事前研修：8月に学内で事前研修を行う（日時は履修者と相談のうえ決めた）。(2) 現地研修：8月27日～9月1日にシンガポールとマレーシアで実施する。(3) 事後研修：帰国後に研修報告会を開催する。

【評価方法】

事前研修での発表、現地研修での活動状況、帰国後の報告・レポートで総合的に評価する。

【テキスト】

シンガポールの経済発展と日本（清水洋著 コモンズ）

【参考文献・資料】

事前研修前に履修者に指示する。

【備考】

旅費は、往復航空運賃（シンガポール航空）、ホテル宿泊費（朝食付き）、マレーシア日帰り貸し切りバス代（日本語ガイド・昼食付き）の合計で約11万5000円。

主題講義Ⅲ

西尾林太郎

【授業の概要】

東北アジアと日本
名古屋から大連まで、飛行機で2時間である。中国と言えば多くの場合、北京や上海が想起されるが、実は旧「満州」（＝東北区）の玄関、大連は沖縄や北海道より近い。大連は遼東半島の中心都市（人口500万）であり、IT関連の企業も多い。日系企業も約2000ある。この大連をはじめとして瀋陽、長春など中国東北の大都市の最近の様子やこの地域と日本との歴史的な関係について検討し、さらに今日の政治・経済に関し講ずる。また、日本と東北アジアについて考える時、韓国とモンゴルを逸することは出来ない。両国の文化と社会は日本のそれと大きく異なる。しかし、関連性や類似性は小さくない。江戸時代における朝鮮通信使と近代における日韓関係史を検討すると共に和紙と韓紙の相互交流を軸に日韓文化交流についても考察したい。さらに、モンゴルの社会や文化について考えてみたい。

【授業の目標】

東北アジアの政治、経済、文化について理解を深める。

【授業計画】

- 講義期間は2月13日～2月16日
- ①国際社会としての東北アジア
—東北アジアの地理的条件—
 - ②政治史・外交史から見た東北アジア
—特に日本を中心として—
 - ③中国を中心として見た東北アジアの経済交流史〔講師 李春利〕
 - ④日本と韓国との文化交流〔講師 パク ヨンソン〕
 - ⑤モンゴルの社会・文化を通して見た日本の社会と文化〔講師 藤井麻湖〕
 - ⑥東北アジアをめぐるフリーディスカッション

【評価方法】

フリーディスカッションを含めた出席状況とレポートによる。

【テキスト】

使用しない。資料を随時配布する。

【参考文献・資料】

随時、指示する。

主題講義Ⅱ

親松和浩 太田浩司

【授業の概要】

情報メディアの影響にもっとも敏感なのは将来を担う子ども達である。社会の情報化は、子ども達の生活する家庭や地域環境に大きな変化をもたらしただけでなく、ライフスタイル、価値観、社会観の形成にも影響を与えている。この講義では、「こどもとメディア」を主題として、メディア技術、社会、教育など様々な観点から議論する。

【授業の目標】

子どもを取り巻くメディア環境について技術、社会、教育など様々な観点から考察する。

【授業計画】

数人の講師による集中講義の形式をとる。講義の前提となる問題の提示の後、さまざまな分野の講師による講義を行い、討論と最終的な総括を行う。詳細なテーマは決定次第別途発表する。

【評価方法】

授業への参加態度と報告レポート等で評価する。

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

未定

国際理解教育Ⅱ

羽場俊秀

【授業の概要】

第2次世界大戦による日本の孤立から、敗戦によるアメリカ軍の日本占領政策としての日本教育の民主化の導入が、日本経済の発展にどのような影響を与えたかを考察するとともに、世界の経済大国となった日本の国際理解教育の現状を分析し、今後の望ましいあり方を求めることを主眼とする。

【授業の目標】

戦後の日本の教育の歩みと国際理解教育について理解すること。（詳細は授業にて解説する。）

【授業計画】

1. 日本の民主化政策としての教育改革
(1) 戦後の民主教育への革命的な移行とアメリカ教育使節団
(2) 男女共学、単線型教育制度の導入の教育的意義
(3) 高等教育機関の充実（新制大学）と日本の飛躍
(4) 教育内容の変化と近代化
2. 日本における国際理解教育の発展と現状
(1) 海外留学制度の変遷と拡充
(2) 中学・高等における国際理解教育の現状と課題
(3) 中学・高校における外国人教員の現状と課題
(4) 外国人留学生の受け入れの現状と課題
(5) 現代の留学事情

【評価方法】

レポートを課す。（評価のポイントについては授業にて説明する。）

【テキスト】

なし

【参考文献・資料】

授業中に紹介する。

都市環境デザイン特別講義 I (建築論)

垂井洋蔵

【授業の概要】

近・現代の建築作品、建築批評、建築家の思潮や理論を紹介し、建築論の基礎を学ぶ。

【授業の目標】

建築理解のための理論的思考方法を身につける。

【授業計画】

Perspecta (イェール大学建築ジャーナル) にとりあげられた建築評論や論文を時代を追っていくつか紹介しディスカッションを通して建築解釈の理論的手法を解説する。

【評価方法】

講義への参加態度、最終的なレポートで評価します。

【テキスト】

論文のコピーを講義中に配布します。

【参考文献・資料】

講義の中で紹介します。

地域社会プロジェクト I b

榎原國城

【授業の概要】

組織心理学およびコミュニティ心理学の研究を中心に、隣接する領域の心理学的研究の諸論文を精読し、その意義や問題点等について討論を行う。その際、研究の基本的な枠組みや科学的研究方法についての解説を行い、受講者の理解を深める。また、後半ではテーマごとに受講者に課題を与え、発表討論を行う。受講者は、積極的かつ主体的に討論に参加してほしい。論文の選択は当初担当者が行うが、演習を進めていく過程において、受講者の関心、理解度に応じて柔軟に変更を加えていきたい。

【授業の目標】

科学的研究論文の作成過程および基本事項の修得。

【授業計画】

1. 講義：科学的研究のプロセス
2. 参考文献の輪読
3. 研究テーマの抽出
4. 研究テーマ関連資料収集
5. 資料分析と発表
6. 講評

【評価方法】

授業中の発表内容および態度に基づいて評価する。

【テキスト】

使用せず。

【参考文献・資料】

授業中に提示または指示する。

地域社会プロジェクト I a

千葉善根

【授業の概要】

温暖多湿で緑の資源に恵まれ、海に囲まれ、四季の区別が明確な日本は新鮮な食材が手近に入手でき他国にはみられない多様な食文化を形成した。

これらの中から伝統的な食品を選び、日本人の知恵や生活との関わり及び現代の食生活との比較研究をする。

【授業の目標】

日本の食文化として、各地で永く受け継がれて来た伝統食品が生活とどのように関わりを持ってきたかを理解する。また、加工、貯蔵の技術など、食品製造上の隠れた「知恵」を理解する。

【授業計画】

- 1) 食文化、食生活、食品加工などの古来からの知恵について、代表的な事例をもとに解説し、調査項目の決め方、調査方法等々について指導。
- 2) 調査項目(テーマ)を決定し、資料の収集・整理。
- 3) 収集した資料より「知恵」の部分を抽出し、現代社会(または修論のテーマ)との関わりについて検討。
- 4) 発表と討論。
- 5) レポートの作成。

【評価方法】

日常の参加状況から判断する。

地域社会プロジェクト II a

竹村 弘

【授業の概要】

21世紀の情報化、国際化および環境・生活者優先の時代に向けて、それぞれの地域特性に則した地域づくりを研究する。

【授業の目標】

わが国の「経済計画」「国土計画」の計画と実績を理解した上で、直面している課題の対策を提言する。

【授業計画】

1. わが国の「経済計画」「国土計画」では、従来どのような課題が提示され、実際にどのような経済および国土が形成されてきたかを、調査・研究する。
2. わが国が現在直面している課題を、各自一つずつ選択して、その対策を実証的に研究する。
3. レポート集「21世紀日本経済の課題」を作成する。

【評価方法】

課題とレポート、および討論参加度。

【テキスト】

講義の中で提示する。

【参考文献・資料】

講義の際に配布する。

国際社会プロジェクトⅡ a

渡辺かよ子

【授業の概要】

教育近代化の過程とその帰結としての今日の教育問題について、世界教育史上の人物の実践と思想の軌跡を手がかりに考察していく。彼らの思想がいかなるものであり、それがいかに今日の教育実践に繋がっているのかを探っていききたい。

【授業の目標】

近代教育思想の特徴をそれ以前の教育思想との比較から理解する。

【授業計画】

1. コメニウス「大教授学」
2. ロック「教育論」
3. ルソー「エミール」
4. ベスタロッチ「隠者の夕暮」
5. デューイ「学校と社会」「民主主義と教育」

【評価方法】

授業での発表とレポート。

【テキスト】

資料配布。

【参考文献・資料】

Perspectives on Learning, (Phillips & Soltis, Teachers College Press)

都市環境デザインプロジェクトⅡ a

齋藤基之

【授業の概要】

建築の持つ主要な役割の一つに、熱・光・音・空気といった物理的環境の調整が挙げられるが、これをデザインするためには、建築物周辺や都市環境の実情を知ることが不可欠である。文献購読や実測調査・気象データ解析等により、都市の物理的環境の現状を把握するとともに、その問題点・改善策について検討する。

【授業の目標】

やや高度な調査やデータ解析等を体験しながら、建築の設計に応用可能な資料の作成を目指す。

【授業計画】

- ・参考文献の輪読。
- ・対象とする都市空間に関する資料収集。
- ・気象データや衛星データ等を用いた解析。
- ・測定器を用いたフィールド調査。
- ・解析結果の発表と講評。
- ・最終レポートの作成。

【評価方法】

プロジェクトへの参加状況と提出されたレポートにより評価する。

【テキスト】

必要に応じて資料を配付する。

国際社会プロジェクトⅡ b

西尾林太郎

【授業の概要】

19世紀半ばから1930年代にかけて日本を訪れた外国人による回想録や日本に関する記録を丁寧に読む。オールコックら外交官、孫文ら政治家、ピゴ、アインシュタイン、B.タウトら学者・文化人、ペーブルスらスポーツマンがそれぞれ日本を訪れ、日本各地で多くの日本人と交流した。彼等は日本を訪れたそれぞれの時代において、日本人や日本の社会に対しどのように感じ、考えたであろうか。彼等が遺した記録や回想録からそれぞれの日本観や日本人観を抽出し、それを手がかりに近代化の進展にともなう国民生活の実相や日本社会の変化について考察してみたい。同時に、外国人の著作物や記録を通して、戦前期日本国内の動向を世界情勢と関連付けて考察したい。さらにこうして得られた知見を基に戦中・戦後の日本の社会や文化について検討する。なお、資料は随時配布する。

【授業の目標】

社会科学の古典をじっくり読んで、アジア社会や欧米の近代社会について考える。

【授業計画】

授業の流れは次の通りである。

- 1～2：幕末から明治時代の日本の社会と文化
- 3～6：幕末から明治時代に日本を訪れた外国人たち
- 7～8：大正時代から昭和初年にかけての日本の社会と文化
- 9～11：大正時代から昭和初年にかけて日本を訪れた外国人たち
- 12：戦前の日本社会と戦後の日本社会
- 13：「外国人が見た近代日本社会」というテーマでフリーディスカッション

【評価方法】

出席状況と授業での活躍を総合的に評価する。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

適宜、配布する。

都市環境デザインプロジェクトⅡ b

清水裕二

【授業の概要】

建築・都市のデザインはきわめて高い社会性を求められる行為であるといえる。この授業では、現代社会に存在する建築・都市に関する現実的課題について調査（フィールドワークを含む）・分析を行い、それに対し単なる机上の空論でなく、社会へコミットするような実践的提案を行うことを目標とする。最終的には実際の社会的実践・活動へと接続することが望まれる。

【授業の目標】

現代的な課題について、ある程度テーマを絞り込んだ上で深く掘り下げる調査・分析を行い、具体性をもった提案を目指す。

【授業計画】

課題の設定、調査・分析、提案のまとめ方などについて学生と議論を重ね、助言を行いながら進めてゆく。

【評価方法】

プロジェクトへの参加の姿勢、調査・分析の過程、レポートなどの成果物、社会的実践・活動の様子などにより総合的に評価する。

【テキスト】

特になし。

【参考文献・資料】

適宜指示する。

主題講義 I

清水裕二 齋藤基之

【授業の概要】

建築空間の形成には、機能的なものだけではなく、それを統御するコンセプトが必要である。建築のデザインには、それが明示的、あるいは暗示的に表現されている。コンセプトの空間化にあたっては、機能との整合性、環境的要求、その空間を成立させる構造なども考慮しなければならない。コンセプトは、それらすべてを含んだメタ概念であるともいえる。この授業では、実際の事例から空間とコンセプトの関係を読み解くことを学び、さらに、自ら決定したコンセプトに基づき、機能、環境、構造的な要求を満たした空間を形成することを目指す。

【授業の目標】

機能、環境、構造がどのように空間デザインと関わっているかを理解しつつ、空間→コンセプト、コンセプト→空間といったデザインプロセスを実践的に学ぶ。

【授業計画】

数人の講師による講義と、模型などの制作、エスキース、討議を経て、最終講評を行う。

【評価方法】

出席状況、授業への参加態度、及びレポート、模型等の提出物により評価する。

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

未定

国際理解教育 I

羽場俊秀

【授業の概要】

開国の実現によって鎖国時代の閉鎖社会から、急速かつ広範な外国文明の積極的な受容社会への変換によって、近代日本の発展がはじまった。

幕末から明治維新にかけて、西洋の進んだ技術文明がどのような教育的経路をたどって日本に導入されたかを学習する。

【授業の目標】

日本の教育の近代化と国際理解について、理解すること。(詳細は授業にて説明する。)

【授業計画】

1. 幕府の近代化政策と日本の近代化に及ぼした教育的効果
 - (1) 近代化への萌芽過程
 - (2) 幕府の海外使節団派遣
 - (3) 海外への留学生派遣
 - (4) 洋学の摂取
2. 明治新政府発足と外国文明の積極的な受容のための教育政策
 - (1) 海外視察団の派遣
 - (2) 明治初期の外国語教育
 - (3) 明治期の海外留学制度の整備

【評価方法】

レポートを課す。(評価のポイントについては授業にて説明する。)

【テキスト】

なし。

【参考文献・資料】

授業中に紹介する。

地域社会特別研究 D II-06 a・b (地域交通論)

辻 絃良

【授業の概要】

現在移動通信技術や情報技術の著しい進展を背景に、いわゆるITS (Intelligent Transport Systems) と総称される自動車交通に関する新たな技術・システムの開発および普及が急速に進められている。この授業では、ITSの地域交通への展開を取り上げ、現在この分野で注目されている中心的なテーマ、技術開発動向等に関し検討し、問題の解決方法を研究する。この過程で学生の優れた問題意識と高度な分析能力を育成する。これとともに、参加学生に対して、授業内での発表・討論、あるいは個別的な助言を通じて、学位論文の作成過程を指導する。

【授業の目標】

1. ITSを対象に課題を設定するとともにその解決策を提案し、その可能性を実験・分析するとともに、新たな結果を得るための研究能力を高める。
2. 歩行者支援のためのITSシステム制作などを通して総合的な研究能力を高める。

【授業計画】

博士後期課程を3年で終了しようとする場合、第1年次で文献・資料調査にもとづく研究テーマの設定、研究方法の把握に主眼を置き、第2年次でデータ収集、システム構築、問題解析等によって独自の研究成果をうることに集中し、第3年次で論文の完成に向かうよう指導する。

【評価方法】

研究計画や研究推進状況ならびに論文の出来映えをみて、総合的に評価する

【テキスト】

テキスト使用せず。

【参考文献・資料】

Proceedings of the World Congress of 11th World Congress on Intelligent Transport Systems (ITS'04), 他

地域社会特別研究 D IV-06 a・b (組織行動論)

榊原國城

【授業の概要】

組織との関わりなしに生きることが非常に困難であることは現代社会の重要な側面である。言い換えれば、組織に対する個人の積極的な関わりが、組織に対する真に自由で創造的な感覚を生むのではなかろうか。そのためには、組織と人間との関わりについて、さまざまな側面から考察することが大切であろう。このような観点から組織内で人々が示す態度や行動を体系的に取り扱おうとする学問が組織行動論である。本授業で扱う主要なテーマは、職業適性および職業選択、仕事への動機づけおよび職務満足、集団とリーダーシップ、コミュニケーションと人間関係、業績評価と報酬システムなどである。参加学生には、これらの研究領域に関連する内外の研究をレビューし、それらに対する評価を中心とする発表や討論を促し、必要に応じて種々の助言を与える。博士後期課程を3年間で終了しようとする場合、第1年次で文献研究、研究テーマの設定、研究デザインの設計を終え、第2年次においてはデータの収集、解析を集中的に行い、第3年次で学位論文の完成に向かうよう指導する。

【授業の目標】

学位論文の完成

【授業計画】

個別指導

【評価方法】

中間報告と論文による評価

【テキスト】

使用せず

地域社会特別研究 D III-06 a・b (地域文化論)

谷沢 明

【授業の概要】

地域社会における物質文化と精神文化の両面を対象とし、人間が自然に対峙し共存しながら築いてきた生活様式と内容を取り上げる。主な指導内容は、次のとおりである。

- 1) 新しい文化と生活様式を創造する機能を有した多様性のある地域づくりの研究。
- 2) 歴史・風土・文化的等の地域特性を生かした自立的な地域づくりの研究。
- 3) 個性と伝統のある地域文化の保存と活用、および歴史的環境の保全を図りつつ行う地域づくりの研究。

上記の研究テーマに基づき、参加学生の学位論文作成を指導する。博士後期課程を3年間で終了しようとする場合、第1年次で研究テーマの設定、既往研究の把握、文献・資料の確認、野外調査の指導に主眼を置き、第2年次で、野外調査の実施、および文献資料の分析によって独自の研究成果を得ることに集中し、第3年次で論文の完成に向かうよう指導する。

【授業の目標】

博士論文作成に向けて、既往研究を踏まえた独創的な調査研究を積み重ね、それをまとめることを目標とする。

【授業計画】

学生が定めたテーマの調査研究と論文作成に対する個別的助言指導を中心とする。定期的に進捗状況の報告を行う機会をもつよう努める。

【評価方法】

平生の調査研究への取り組みにより評価する。

【テキスト】

使用しません。

【参考文献・資料】

参考文献については調査研究の進捗状況に応じて、適宜紹介します。

国際社会特別研究 D I-06 a・b (国際社会発展論)

藤瀬浩司

【授業の概要】

近現代において各国が辿った社会経済発展、および世界システムの構造変化を取り上げ、現在この分野で問題とされている中心的なテーマ、研究方法、論争点、文献・資料を開示し、優れた問題意識と高度な分析能力を育成する。これとともに、参加学生に対して、授業内での発表・討論、あるいは個別的な助言を通じて、学位論文の作成過程を指導する。博士後期課程を3年間で終了しようとする場合、第1年次で、研究テーマの設定、研究史の把握、文献・資料の確認に主眼を置き、第2年次で、文献資料の分析によって独自の研究成果をうることに集中し、第3年次で論文の完成に向かうよう指導する。

【授業の目標】

博士論文作成のため必要な諸点を指導する。

【授業計画】

1. 各テーマについて、最近の研究動向を検討する。
2. 参加学生が自身の研究状況を報告し、指導を受ける。
3. 学位論文の作成に対して助言する。

【評価方法】

報告および討議の参加によって評価する。

国際社会特別研究 D II-06 a・b (国際教育交流論)

渡辺かよ子

【授業の概要】

教育文化交流を国際的視点から検討する各自の博士論文の完成に向けた指導を行う。各自の研究テーマに応じた研究方法論、基礎理論の概観、資料収集の方法などについて個別指導と発表討論を並行して行っていく。

【授業の目標】

博士論文に関連する分野の基礎的知識の習得と中間報告としての研究論文執筆。

【授業計画】

1. 研究方法論
2. 研究テーマの重要性と先行研究の検討
3. 論文の構想と構成
4. 論文執筆と内容検討

【評価方法】

中間報告と論文。

【テキスト】

使用せず。

【参考文献・資料】

その都度指示する。

国際社会特別研究 D IV-06 a・b (日本政治・比較政治論)

西尾林太郎

【授業の概要】

- ①近代日本の政治・外交・社会等の分野の近代化とその特質について、中国、韓国等のアジア諸国や欧米諸国との比較検討を通じて考察する。日本を含め各国の近現代史に関する文献をはじめ、比較近代化論や比較政治に関する文献の講読と各種の歴史資料の解説・分析を通じ、優れた問題意識と高度な分析能力を育成する。同時に、授業内における発表・討論や個別的な助言により、学位論文の作成を指導する。なお、博士後期課程を3年間で修了しようとする場合、第1年次で研究テーマの設定、内外の研究史の把握、文献・資料の収集とその内容の検討、第2年次で文献・資料の分析について指導し、その完成を期したい。
- ②現代の東アジアの諸地域について比較政治論、比較社会論の見地から考察する。
- ③個別指導により博士論文作成に向けて準備をする。

【授業の目標】

- ①各自の研究テーマを踏まえつつ、個別のレポートを随時作成し、洞察力や文章作成能力を高める。
- ②博士論文を作成する。

【授業計画】

1. 基本文献の購読及びレポートの作成
2. 論文作製

【評価方法】

指示された課題達成状況を総合的に評価する。

【テキスト】

使用しない。

国際社会特別研究 D III-06 a・b (国際労働移動論)

清水 洋

【授業の概要】

アジア域内における労働力移動をメインテーマとし、歴史的背景、各国の移民政策、移民送り出し国と受け入れ国への社会・経済的インパクトなどについて、日本との比較を通して多面的に考察する。また、多国籍企業（とりわけ日本企業）の活動の実態と外国人労働者の雇用にまつわる諸問題について民間企業の事例をまじえて検討する。授業内では、研究発表・討議、各種資料の分析、個別的な助言などを通じて論文作成の指導を行なう。論文テーマは、履修者が指導教員と十分に相談のうえ設定する。なお、初年度から論集や学外の学術誌への論文投稿を後押ししたい。

【授業の目標】

3年間で博士論文を完成させる。

【授業計画】

個別指導を行う。

【評価方法】

中間報告と論文による評価。

【テキスト】

使用せず。

【参考文献・資料】

必要に応じて適宜指示する。

メディアプロデュース特別研究 D I-06 a・b (映像表現論)

坂元 多

【授業の概要】

映像表現に関わる内外の中心的な論文の読み合わせを行う。論文の内容把握が一つの狙いであると同時に、その論理の組み立て方、資料の使い方、結論への導き方、用語や、概念の定義の仕方など論文執筆のための枠組みも学びとらせる。論文のジャンルとしては、映像番組制作に重点をおき、番組分析の基本となるエンコーディング、デコーディングに関する論文、番組制作の基本となる映像編集やナレーションに関する論文、具体的な番組論としてのケーススタディなどを扱う。

【授業の目標】

映像に関する内外の論文の解説をとおしてこれまでの映像研究の成果全体像の概念を得させる。

【授業計画】

進度、年次によって個別にアサインメントを考える。論文の完全理解を目指すので、文中にでてくる概念、用語、固有名詞の意味など細部にわたる学習結果の相互発表と討議によって授業はすすめられる。

【評価方法】

担当発表部分に関しての理解度を示すショートエッセイをもって評価する。

【テキスト】

必要に応じて個別に用意する。

【参考文献・資料】

Cult Movies and Intertextual Collage (Umberto Eco ; Casablanca)
The Cellu Loid Closet (vito Russo)
Explorations in Film Theory (Ron Burnett)

メディアプロデュース特別研究D II-06 a・b (メディア文化史論)

山田登世子

【授業の概要】

現代メディアの生産と需要を歴史的に把握することを目的とするメディア文化史は優れて学際的な学問領域であり、幅広い知識が要求される。第1年次では、複製技術論、読書論等々、広領域にわたる基礎文献の習得を徹底させるとともに、研究対象をいかなるメディアに焦点化するか、テーマ選択を指導する。つづく年度は、選択した研究テーマに従って、文献資料の探索・分析、ならびに実際のメディア体験の理論的分析を課題とし、その成果を逐次授業で報告させつつ、学位論文にまとめさせる。

【授業の目標】

新聞、写真からインターネットまで、さまざまなメディアの生成を歴史的に把握すること。

【授業計画】

ゼミ (あるいは個人指導) 方式をとる。

上記授業概要に従って、毎回報告レポートを提出すること。

その報告を指導するかたちで授業をすすめる。

場合によって、長文のレポート提出を課す。

【評価方法】

授業の平常点を重視する。評価は授業時のレポートおよび期末レポートによる。

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

メディア論 (マクルーハン みすず書房)

複製技術時代の芸術 (ベンヤミン ちくま文庫)

写真論 (ベンヤミン ちくま文庫)

メディア都市バリ (山田登世子 ちくま学芸文庫)

メディアプロデュース特別研究D IV-06 a・b (レトリック批評論)

五島幸一

【授業の概要】

古代ギリシャ・ローマ時代からの流れを受け継ぐレトリック批評は、元来スピーチ批評として発達してきた。しかしながら、現代のメディアの発達に伴い、様々なメディア (テレビ、映画、広告など) の中身 (コンテンツ) も分析するようになり、その分析対象は言語のみならず非言語にも及ぶようになった。このレトリック批評の流れを把握し、その理論を現実の問題の解決に応用できうる知識を養う。

第1年次では、レトリック批評理論の歴史的な流れに焦点を当てて、その特徴を考察する。つづく第2、3年次では、現代レトリック批評を視座の中心とし、文献資料の探索・分析、ならびに実際のメディアのメッセージを理論的に分析することを課題とし、その成果を授業で報告させ、学位論文にまとめさせる。

【授業の目標】

レトリック批評についてより深く学ぶとともに、具体的な事象をレトリック批評の観点から分析できるようにすること。

【授業計画】

研究テーマの設定、問題設定、論文の書き方などを学生との討論を通して指導する。

【評価方法】

論文の進捗状況によって評価する。

【テキスト】

とくになし。

メディアプロデュース特別研究D III-06 a・b (メディア環境論)

大西 誠

【授業の概要】

現代の映像文化をメディア表現との関係に注目し、展示映像などの事例や研究文献を通じてメディア環境を理解する。また各自の課題の深化と解決のプロセスを明らかにする計画を立案。あわせて、現在の高度情報化社会の映像文化の特質やテクノロジーのディテールを取り上げ、メディア環境の個別的課題を社会的・文化的文脈の中で分析する手法を開発・養成していく。具体的には、各自の課題レポートの発表・討論などを通じて、研究方法や分析方法、ひいては論文作成を個別的に指導する。年次を追うごとに課題発見から調査研究、分析と論文作成を段階的に指導する。

【授業の目標】

事例研究により、メディア環境について論述できる能力を身につける。調査研究をまとめて学会で発表する。その結果をふまえ、各自の課題と問題を明らかにする。

【授業計画】

フィールドワークなどをふくめ実践的に調査する。また個別の指導による論文作成を行う。

【評価方法】

研究ノート及び学会発表などで総合的に評価する。

【テキスト】

なし

【参考文献・資料】

別途指定する。

都市環境デザイン特別研究D I-06 a・b (情報化建築論)

吉田邦彦

【授業の概要】

最近の情報通信技術 (IT) の進歩は著しく、建築のあらゆる領域に大きな影響を与えつつある。建築とITとの関わりにおける問題など建築計画上の諸課題を取り上げ、優れた問題意識と高度な分析能力を育成する。

学生は、修士論文で扱った問題を中心に各自が関心を持つテーマを設定し、既往の研究の確認、研究方法などを中心に調査研究する。その上で、新たな研究調査を実施させ、独自の研究成果を得るように、そしてそれらの結果をもとに研究をさらに深化させ、学位論文として完成するように研究指導する。

【授業の目標】

取り上げたテーマに関する優れた問題意識と高度な分析能力の習得、そして学位論文として成果をまとめることを目指す。

【授業計画】

上記授業概要に従って、各自の研究テーマに関する研究発表とその討論および助言・指導を行う。

【評価方法】

1年間の研究活動を総合的に評価する。

【テキスト】

使用せず。

【授業の概要】

古代から近代に至る建築の歴史とデザイン様式について、文献講読や資料収集、現地調査等を通じて学び、特定のテーマについて新しい見地を得て論文等にまとめる。

【授業の目標】

文化財の保存と再生をテーマに事例研究を行い、最終的には論文としてまとめる。

【授業計画】

受講生の関心と先進的な研究課題とを考え合わせて、講読すべき文献や資料を選んでセミナーを行う。また、必要があれば調査などを計画していく。

【評価方法】

研究成果をまとめたレポート、論文、研究発表等によって総合的に判断する。

【テキスト】

必要に応じて指定する。

【参考文献・資料】

必要に応じて指定する。

【授業の概要】

建築・都市空間のデザインに関して、環境行動研究、人間環境系の計画理論、設計方法論などの成果を踏まえて考察を進める。その一方で、都市居住に関わる現代都市の具体的問題を対象に行う調査分析と、様々な共同作業を支援する新しい設計手法の開発とを実践的課題として掲げる。これらの研究分野について指導し、それを受けて学生は、教員および他の学生と協力して研究を進める。学生との論議を重ねて個別の学位研究テーマを絞り込むよう指導する。調査分析、研究発表、学位論文の作成等に関する技法上の指導も併せて行う。

【授業の目標】

有意義で独自性があり、かつ達成可能な研究テーマを設定し、着実に研究を進めるための技術を学ぶ。

【授業計画】

個別指導。

【評価方法】

論文による評価。

【テキスト】

特になし。

生体情報心理学特講1・2 (脳と認知情報処理)

沖田庸嵩

【授業の概要】

社会的コミュニケーションに関わる脳内認知情報処理を精神生理学的観点から探る。

【授業の目標】

脳研究全般の概略を把握するとともに事象関連脳電位 (ERP) の特性と基本的な研究パラダイムについて理解を深める。さらに、注意・記憶・言語・顔認知に関わる近年の知見とモデルを学ぶ。

【授業計画】

1. 認知神経科学に関する総説を受講者が分担して報告し、講読を進める。
2. ERPで脳内認知情報処理を探る方策について講義する。
3. 注意・記憶・言語・顔認知、各テーマの総説を取り上げ、受講者が分担してその内容を紹介し、全員で討論する。

【評価方法】

分担報告の内容と授業への参加度により評価する。

【テキスト】

使用しない。適宜プリントを配布する。

生体情報心理学特講5・6 (認知神経心理学)

吉崎一人

【授業の概要】

まず心理学研究法の基礎を学び、さらに認知心理学、認知神経心理学に関連する研究論文を精読する。これらを通じて、実験パラダイム並びにその理論的背景について学習する。

【授業の目標】

実験的な研究法の基礎知識を身につけ、認知心理学、神経心理学の1つあるいは2つのトピックについて、知識を深める。

【授業計画】

- 前期
心理学研究法、特に実験的な研究法について学習する。
- 後期
Psychological Science, Trends in Cognitive Sciences等の欧文誌を輪読する。

【評価方法】

レポーターの内容、授業へ取り組む姿勢を総合的に評価する。

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

適宜紹介する。

生体情報心理学特講3・4 (感情の精神生理学)

清水 遼

【授業の概要】

生体が感覚刺激として受容する外界情報やそれらを処理する過程で派生する内部情報は様々な生理・心理的反応を惹起する。これら生体内外の情報のコミュニケーション過程で生じる情動のプロセスを精神生理学的観点から検討していく。

【授業の目標】

欧文論文を輪読することで、精神生理学の基礎的知識の習熟をめざす。特に神経活動、内分泌系活動および免疫系活動との関連性についての知見を深める。

【授業計画】

前期 (特講3) は神経系の機能や生理指標に関する欧文書を講読、適宜解説を加える。

後期 (特講4) では、これまでになされてきた情動プロセスの精神生理学的研究に関する欧文書を輪読する。

【評価方法】

授業への積極的参加度、文献内容理解力により評価する。

【テキスト】

使用しない。適宜テーマに関連する文献を紹介する。

生体情報心理学演習1・2

沖田庸嵩

【授業の概要】

脳内認知情報処理を扱う精神生理学的研究のうち、主として事象関連脳電位 (ERP) を測定とする領域で、修士論文作成に向け個別指導を行う。

【授業の目標】

修士論文を完成させる。

【授業計画】

各自が関心のあるテーマに沿って先行研究を調べ、論文を読み、そしてその発表・討論を繰り返すなかで修士論文のテーマを決定する。

また、修士論文の作成に向けた予備実験・本実験の計画・結果についても発表し、討論する。

【評価方法】

発表討論と研究活動により評価する。

【テキスト】

使用しない。

生体情報心理学演習 3・4

清水 遵

【授業の概要】

環境の快適性や情動ストレスとその精神生理学的及び神経化学的測定法に関する内外の文献を広く講読し、修士論文に向けての研究計画、および研究経過中に生じる問題点についてレポーター形式で発表する。

【授業の目標】

発表討論を行う中で各人のテーマ決定の方向づけと問題点を指導することで、各自の研究を深化させる。

【授業計画】

1. 環境の快適性に関する研究
2. 高齢者感情コントロールに関する研究
3. パーソナリティとストレスの関連性に関する研究
4. 唾液中感情関連物質の同定
5. その他

【評価方法】

発表討論内容、研究活動の報告レポートなどにより評価する。

【テキスト】

使用しない。

社会心理学特講 3・4 (対人行動論)

斎藤和志

【授業の概要】

社会的認知や他者に対する関心や反応性、社会的事象に対する思考や態度の研究を中心に検討する。対人行動や社会的事象をクリティカル（批判的）に考えるプロセスに焦点をあてる。いわゆる論理的思考や社会的認知の諸問題に加えて、人間や社会を考えようとする姿勢の重要性、社会心理学的な知見や考え方を現実社会の中に取り入れていくことの可能性などについてさまざまな視点から検討していきたい。

【授業の目標】

社会心理学的な観点で論理的に考え、現実の問題を捉え直すこと。（詳細は授業にて解説する。）

【授業計画】

テキストを受講者で分担し、発表者はその内容の紹介と引用文献や関連領域からの示唆などを合せて発表し、全員で討論していく。取り上げるテキストのキーワード（領域）としては「社会的認知」「クリティカルシンキング」「心理学教育」などがある。また、特に社会心理学の研究法についての文献は随時取り上げていく予定である。

【評価方法】

発表と討論への参加によって評価する。

【テキスト】

未定。決まり次第 URL: <http://www2.aasa.ac.jp/~saitok/> で告知する。

【参考文献・資料】

授業時に適宜紹介する。

社会心理学特講 1・2 (コミュニティ心理学)

植村勝彦

【授業の概要】

コミュニティに内在する諸問題を、福祉臨床社会心理学ともいえる視点から扱うコミュニティ心理学は、一つには従来の個人臨床心理学の限界を補完しないし打開するものとして、また個人を取り巻く各種組織や小社会のシステムの実践的変革を目指す心理学として期待されている。ただ、わが国においてはまだなじみが薄く、研究実績的にも乏しいという現状に鑑みて、当面は、この新しい心理科学の実際を紹介することを課題と目標とする。

上記の理由から、啓蒙の意味を込めて、コミュニティ心理学の全体的概要を紹介することから始める。コミュニティ心理学の成立に至る背景・歴史、研究理念・目標、独特の研究手法、過去を中心テーマであった精神保健問題、今日の解決課題・テーマなど、主にアメリカのデータに基づきながら進めるが、これはまた日本の現在および近未来の姿でもあろう。

【授業の目標】

コミュニティ心理学の理念を理解すると共に、現代の諸種社会問題にそれらを適用する場合、いかなる点を考慮するべきか、またどうすれば可能になるか、を実践的に考察できる目を養うこと。

【授業計画】

日本コミュニティ心理学会編『コミュニティ心理学ハンドブック』（東京大学出版会）をテキストに、受講者に分担してもらいながら、また引用文献の紹介も分担してもらいながら討論を含めて進める。前後期とも継続で進行する。

また、Duffy & Wong 著・植村勝彦監訳『コミュニティ心理学』（ナカニシヤ出版）、スキレピラ著・植村勝彦訳『コミュニティ心理学』（ミネルヴァ書房）などの参考書を随時資料としながら補足する。

【評価方法】

前期、後期にそれぞれ課すレポートと、分担発表の成績により評価する。

社会心理学特講 5・6 (比較文化心理学)

高井次郎

【授業の概要】

文化に関連する心理学の主要 3 領域を取り上げます。文化心理学、比較文化心理学および異文化間心理学の主なテーマを取り上げ、それぞれの領域の特異性について検討し、それぞれの研究のアプローチについて考えます。

【授業の目標】

授業目標は、1) 文化心理学、比較文化心理学および異文化間心理学のそれぞれの性格の違いの理解、2) 各領域の研究の手法の紹介、3) 文化関連の心理学の社会的および学問的意義の理解、4) 人間の心理に対する、文化の役割とその影響力の検討、および 5) 文化関連の心理学の諸理論の紹介である。

【授業計画】

前期および後期

1. 文化の心理学について
2. 文化心理学の特徴
3. 文化心理学の研究の紹介とその検討
4. 異文化間心理学の特徴
5. 異文化間心理学の研究の紹介とその検討
6. 比較文化心理学の特徴
7. 比較文化心理学の研究の紹介とその検討
8. まとめ

【評価方法】

授業における参加とレポートによって評価します。

【テキスト】

適宜論文やプリントを配布します。

【参考文献・資料】

適宜紹介します。

社会心理学演習 1・2

植村勝彦

【授業の概要】

コミュニティ心理学が扱う領域のトピックスについて、深い学識と緻密な論理構成のもとに、各自が関心を持つテーマを設定し追究することによって、最終的には修士論文を作成することを課題と目標とする。

コミュニティ心理学のトピックスを扱っている専門誌である『American Journal of Community Psychology』、『Journal of Community Psychology』、『Journal of Community and Applied Social Psychology』、『コミュニティ心理学研究』掲載の論文を中心に、内外の著書、論文の輪読を通じてコミュニティ心理学の理解を深めること、また各自の修士論文につながる研究の展開を目指す演習とする。

加えて、実証的研究に不可欠な、データの統計的処理方法や、多変量解析の理論とその実際についても解説する。

【授業の目標】

参加メンバー全員で、各自の研究テーマを徹底的に追求し、学会誌に受理されうる修士論文に仕上げる。

【授業計画】

毎回個人発表を行い、取り上げられた論文やテーマについて徹底した討論によって、その内容や方法、論旨の展開を批判的に読みとり、論理的・実証的に再構築できる力を養う。とくに2年次学生については、修士論文作成に向けての助言・指導に当てる。

【評価方法】

毎回の個人発表、およびレポートによって評価する。

【テキスト】

使用せず。

臨床心理学特講 2 (家族療法)

西出隆紀

【授業の概要】

家族を対象とした心理臨床について学ぶ。最初に家族臨床に関する概説を講義し、以降は家族に対して独自の立場から臨床実践を行ったマスターセラピスト達についてレポーターが調べ、その発表に対して受講者全員で討論する。またロールプレイによって、体験的理解ができるようにも工夫していきたい。

【授業の目標】

家族療法各派の特徴を理解し、解決志向的家族療法の技法を学ぶ。

【授業計画】

0. 現実の家族と心的現実としての家族 (講義)

1. 精神分析から見た家族

Freud,S. Klein,M. Winnicott,D.W.

2. 精神分析的家族療法

Ackerman,N.W. Bowen,M.

3. 戦略的家族療法

Erickson,M.の影響 MRIモデル Haley,J.

4. 構造派家族療法 (Minuchin,S.)

5. システムック家族療法 (ミラノ派)

6. 解決志向的家族療法 (BFTCモデル)

【評価方法】

レポーターとして発表したときのレポートの出来具合と討論への参加度、出欠を考慮して評価する。

臨床心理学特講 1 (精神分析的な心理療法)

米倉五郎

【授業の概要】

精神分析的な心理療法について、その面接技法である面接契約、面接構造、面接途中で生じる転移と抵抗や逆転移、解釈などについて解説・討議していく。

【授業の目標】

精神分析的な心理療法の基礎的な文献を講読しながら精神分析療法の基本的な面接技法について講義する。受講生から報告される事例検討のなかで実務的な技法についても概説する。

【授業計画】

面接技法と方法については、主にテキストを中心とする講義を行うが、事例を取り上げながら臨場的に解説していく。

【評価方法】

授業内容の理解度、レポートにより成績を評価する。

【テキスト】

授業時に指示する。

【参考文献・資料】

参考文献はその都度提示する。

臨床心理学特講 3 (児童臨床)

西出隆紀

【授業の概要】

児童に対する心理療法、特に精神分析的なプレイセラピーについて学ぶ。レポーターが児童の分析家について調べ、発表する形式と、児童に対する精神分析的な心理療法の実践論文の講読を週毎に交互に行う。実践論文に関してはHunter,M.著 Psychotherapy with young people in care.を読む予定である。

【授業の目標】

児童の心理臨床に対する理解を深め、自身の臨床実践に応用する準備を整える。

【授業計画】

・レポーター形式

1. Klein,M.のPlay technique

2. Freud,A.のChild analysis

3. Winnicott,D.W.の臨床実践

・Psychotherapy with young people in care.の講読

1. Joseph-a therapy in pictures.

2. Charlotte-Early deprivation and abuse.

3. Restless children-Hyperkinetic disorder.

4. Identity in crisis.

5. Child sexual abuse.

【評価方法】

レポーターとして発表したときのレポートの出来具合と討論への参加度、出欠を考慮して評価する。

臨床心理学特講 4 (医療心理臨床)

米倉五郎

【授業の概要】

医療・病院の心理臨床の職場における医師や看護師などの他職種のスタッフとの共同治療やコンサルテーション・リエゾン心理臨床での臨床心理士の実務と面接技法について講義する。

【授業の目標】

心理臨床の基礎である医療心理臨床における心理アセスメントと心理面接法の技法について事例検討を含めて説明する。

【授業計画】

まず、精神科領域における個人心理療法、家族療法、集団心理療法および心理検査法をめぐるコンサルテーション・リエゾン心理臨床の実際とその技法について、事例報告をまじえ講義する。次に他の一般科との心理臨床の実務についても事例を中心に解説していく。

【評価方法】

授業内容の理解度、レポートにより成績を評価する。

【テキスト】

使用せず。参考図書はその都度提示する。

【参考文献・資料】

必要に応じて配布する。

学校臨床心理学特講

江口昇勇

【授業の概要】

現代の小学校から中学、高校の学校が置かれている状況とそこで学ぶ児童・生徒の健康水準を伝達し、あわせて保護者の最近の様子を話してみたい。臨床的には不登校、非行、いじめや学級崩壊の過程、さらに最近、話題の軽度発達障害について詳述する。

【授業の目標】

スクールカウンセラーとして学校現場に入って活動する際、臨床心理士が最低限、身につけておかなければならない学校という場に対する知識と学校現場で教師と対応する場合に必要となる技術、そしてなによりも一市民として身につけるべき礼儀を修得することを目標としている。

【授業計画】

- 第1講 スクールカウンセラーの導入にいたる経過
スクールカウンセラー黎明期の苦難；学校側の困惑
- 第2講 「スクール・カウンセラー」になる準備
スクールカウンセラー体験から学んだこと
- 第3講 現代中学生の健康度
思春期危機をもたらすもの
- 第4講 現代高校生の健康度
今どきの高校生はと言われる行動の背後にあるもの
存在不安とそれへの対処
むかつかずに授業に出ていけない教師の苦悩
- 第5講 教師とのかかわりにおけるポイント
現場教師といかに渡り合うか
- 第6講 スクールカウンセラーの活動実践
「影の仕事人」としてのスクールカウンセラー
- 第7講 スクールカウンセラーの新しい地平
コミュニティ・アプローチの試み
不登校の子どもをもつ保護者の自助グループ
- 第8講 不登校へのグループアプローチ
不登校とキャンプ、キャンプにおける子どもたち
- 第9講 教師への現職教育；講義の場合
教師対象の現職教育と研修プログラム
- 第10、11講 教師への現職教育；訓練プログラムの工夫
対象理解と自己理解
- 第12、13講 スクールカウンセラーの現在と未来
学校側が期待するSCとは？
SCの研修プログラムとSVの必要性

【評価方法】

授業での質疑等、積極的受講態度を評価対象とする。

【テキスト】

テキストは使用しない。必要な資料を授業中、配布する。

臨床心理面接特講 1・2

後藤秀爾

【授業の概要】

臨床心理面接の基本は、「相手を正しく理解する」ということである。面接場面でのかかわりを通して、多面的に、多層的に、多次的に、クライアントの姿を理解する視点と、理解を深めるために必要な知識や知見を学習する。

【授業の目標】

心理面接の実際場面で対象理解のために使えるよう、基礎概念の理解を深める。

【授業計画】

前期：

- 1) 精神分析にかかわる基礎的な概念を整理して理解を深めるため、テキストとなる文献を定めて講義を行なう。
- 2) テキストの内容理解を基礎において、関連思想についての学習へ発展させる。
- 3) 具体的な事例を理解するための知識として使いこなせるよう、事例を紹介しながら学習内容の理解を深める。

後期：

- 1) 発達の基本を理解することを含めて、精神分析的オリエンテーションをもった児童臨床にかかわる文献をテキストに定めて講義を行なう。
- 2) テキストの内容理解を基礎において、関連思想についての学習へ発展させる。
- 3) 各自の関与している臨床事例について理解を深めるポイントを学ぶ。

【評価方法】

授業への参加状況（出席回数のことではない）による。

【テキスト】

前期 精神分析理論と臨床（北山修著 誠信書房）

後期 母親の心理療法（橋本やよい著 日本評論社）

人格心理学特講

富安玲子

【授業の概要】

人格の変容・発達と関わるカウンセリングと、人格理解の方法のひとつとしての面接について取り上げ、面接過程について考察する。主にメタ理論としてのマイクロカウンセリングの面接技法の基本的かかわり技法について学習し、実践性も高めている。

【授業の目標】

テキストによる説明、ビデオによるロール・プレイングの検討などにより、基本的かかわり技法を中心にマイクロ技法を習得する。

【授業計画】

1. 人格心理学とカウンセリング
 2. マイクロカウンセリングとは
 3. マイクロ技法の意味と基本的かかわり技法
 4. かかわり行動
 5. 会話への誘い・質問技法
 6. 明確化へはげましといいかえへ
 7. 感情の反映
 8. 要約技法
 9. 意味の反映
 10. 基本的かかわり技法の統合
- 初回と最終回にロール・プレイングを実施し、技法の意味を考える。

【評価方法】

ロール・プレイングの逐語録検討レポートと授業への参加関与度による。

【テキスト】

マイクロカウンセリング（アイビイ著・福原他訳編 川島書店）

【参考文献・資料】

授業の中で紹介する。

教育心理学特講

富安玲子

【授業の概要】

教育という価値を伴う働きかけの効果は、働きかける人と働きかけられる人との人間関係のあり方が関わっている。人間関係のひとつとしてカウンセリングを取り上げ、特に、働きかける側の影響を考えるために、マイクロカウンセリングの積極技法を中心に学習し、実践性を高めていく。

【授業の目標】

テキストによる説明、ビデオによるロール・プレイングの検討などにより、マイクロ技法の積極技法を中心に習得する。

【授業計画】

1. 教育心理学とカウンセリング
2. マイクロ技法の意味と積極技法
3. 基本的傾聴技法の連鎖
4. 焦点のあて方技法
5. 対決技法
6. 指示技法と論理的帰結
7. フィードバックと自己開示
8. 解釈／再構成
9. 積極的要約と助言
10. 技法の統合/面接の5段階

最終回にロール・プレイングを実施し、技法の意味を考える。

【評価方法】

ロール・プレイングの逐語録検討のレポートと授業への参加関与度による。

【テキスト】

マイクロカウンセリング (アイビー著 福原他訳編 川島書店)

【参考文献・資料】

授業の中で紹介する。

グループアプローチ特講

担当者未定

【授業の概要】

- 1) まず、エンカウンター・グループ、集団心理療法、セルフヘルプ・グループ等々、「グループ・アプローチ」の概念について検討、整理する。
- 2) 担当者が10数年来、取り組んできた「不登校生徒のためのグループ・アプローチ <ヨコ体験グループ>」を取りあげ、数人の生徒の歩みに即して、グループの動きを紹介する。
- 3) その詳細な検討を通して、この活動の心理療法としての意味、治療要因、治療条件、構造論、個人心理療法との関係、個人心理療法論の集大成としての面と独自の治療的グループ・ダイナミクス等々の主題について考察したい。

【授業の目標】

授業にて明示する。

【授業計画】

- 第1回から第3回：上記の1) について講義
第4回から第8回：上記の2) について講義
第9回から第13回：上記の3) について講義

【評価方法】

授業への参加態度およびレポートの内容から評価する。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

適宜、授業の中で、参考文献は紹介し、資料は配布する。

投影法特講

米倉五郎

【授業の概要】

ロールシャッハ法のスコアリングや解釈は片口法、名大法、阪大法、秋谷法、エックスナー法、米倉法などさまざまなアプローチがなされている。もとより心理臨床の実務ではクライアント・患者への援助とサービスが優先されるので、それぞれの技法の長所を学び活用するという折衷的なアプローチが有効である。われわれは名大法をとりあえず基本的な技法と学習しつつ、他のロールシャッハ法の技法と解釈法をも積極的に学んでいく。

【授業の目標】

ロールシャッハ法を中心とした投影法 (TAT, SCT, 描画法) について講義した後に、受講生自身が検査者ならびに被検査者となる実習研修を行い、そのプロトコルのスコアリングと解釈を検討する。

【授業計画】

- 第1回から3回：投影法およびロールシャッハ法の実施法とスコアリングについての講義
第4回から8回：ロールシャッハ法と投影法の体験学習と報告 (実施法とスコアリング)
第9回から13回：ロールシャッハ法と投影法による事例報告、その解釈と報告書の作成

【評価方法】

授業への参加姿勢、発表の内容、レポートの内容により総合的に評価する。

【テキスト】

授業の中で紹介する。

【参考文献・資料】

適宜、授業の中で、参考文献は紹介し、資料は配布する。

障害児発達心理学特講 1・2

二宮 昭

【授業の概要】

人の「からだ」の動きを本人の主体的な身体運動制御という心理学的な活動として捉え、そのような制御能力を高めることを目的として行われる「動作法」の理論と方法、および「動作法」の実践にかかわる重要な概念である「間主観性」の問題について検討する。

【授業の目標】

「障害児」の発達援助における「やりとり」およびそれを成立させる基盤としての「からだ」のもつ意義などについて理解を深めるとともに、その批評を行う。

【授業計画】

前期は動作法に関する文献を担当者がその内容を報告し、それに基づいて討論するという形式と、講義形式の併用で授業を進める。
後期は下記の参考書籍を中心に、主として討論形式で授業を行う。

【評価方法】

報告の内容、および討論への参加の仕方によって評価する。

【参考文献・資料】

Intersubjective Communication and Emotion in Early Ontogeny.
(Braiten, S. (Ed) Cambridge University Press, 1998)

精神医学特講

古井 景

【授業の概要】

精神医学一般について診断体系を述べ、乳幼児、小児期、思春期・青年期、成人期、老年期などに好発する各疾患について、診断と治療を解説する。

【授業の目標】

精神医学における『病気（障害）』の概念を正しく理解することを目標とする。

【授業計画】

- I. 総論
 1. 精神医学の概念
 2. 精神障害の成因と分類
 - (1) 内因、外因、心因とICD-10、DSM-IV
 - (2) 人格・神経症・心身症・精神病
 3. 脳と精神機能（大脳生理・神経学）
 4. 精神症状学
 - (1) 意識障害 (2) 知能障害 (3) 記憶障害 (4) 知覚障害
 - (5) 思考障害 (6) 感情・情動・気分障害 (7) 意欲と行動の障害
 - (8) 巣症状と症候群
 5. 診断
 - (1) 病歴と現症 (2) 生理・生化学的検査 (3) 心理査定
 6. 治療
 - (1) 薬理的療法 (2) 精神療法 (3) 環境調整
- II. 各論
 - a 乳幼児期 b 小児期 c 思春期・青年期 d 成人期 e 老年期の各時期に於いて好発する疾患・障害について、下記の項目に沿って説明していく
 - (1) 器質脳疾患に伴う精神障害 (2) 身体疾患に伴う精神障害
 - (3) 中毒性精神障害 (4) 心因性精神障害（心因反応・神経症）
 - (5) 統合失調症（精神分裂病）、感情障害、他の精神病
 - (6) 人格と行動の障害

【評価方法】

毎回の授業のテーマ・内容に沿ったレポートを、次回の授業時に提出する。このレポート及び授業に取り組む姿勢をもって評価する。

【テキスト】

使用せず。

【参考文献・資料】

現代臨床精神医学（大熊輝雄著 金原出版）
臨床精神医学講座（中山書店）
精神症状学（濱田秀伯著 弘文堂）
標準精神医学（野村総一郎・樋口輝彦編集 医学書院） など

臨床心理学演習1・2

米倉 五郎

【授業の概要】

指導院生が関心をもつ心理臨床の事例やテーマに関して、臨床面接法や心理査定法などの技法を活用する事例研究や心理査定法などによる修士論文の作成を目標とする。

【授業の目標】

1 および2年次学生によるグループ検討と指導教官による指導により、2年次学生での修士論文の作成と完成を目指す。

【授業計画】

院生の各自が研究テーマを設定し、事例研究法および調査研究法などの方法論の特定が検討される。そして心理臨床の研究対象の選定がなされる。演習では、毎回その面接過程と考察が各人より報告され、グループスーパービジョンがなされる。こうしたグループ検討と指導により2年次学生での修士論文の完成を目指していく。

【評価方法】

授業における発言の姿勢、発表の内容およびレポートにより評価する。

【テキスト】

使用せず。

【参考文献・資料】

必要に応じて配布する。

心身医学特講

古井 景

【授業の概要】

生物学的理解に加え、力動精神医学の立場から、心のメカニズム（自我機能）に目を向け、「適応」についての知識を深め、「適応困難（不適応）」となった者が現れていく『症状・疾病状態』について言及していく。

更に、医学的及び臨床心理学的治療のあり方について学んでいく。特に、成人の社会適応として『産業保健』を中心に上げていく。

【授業の目標】

心身両面から『健康』『適応』の概念を理解することを目標とする。

【授業計画】

- ・神経とホルモン
- ・精神力動とストレス
- ・意識的行動と無意識的行動、身体症状化
- ・自我機能と防衛機制
- ・心身症：気管支喘息、アトピー性皮膚炎、腰痛症、過敏性腸症候群、メンデル症候群、顎関節症、舌痛症など
- ・職場不適応：産業精神保健
 - 労働安全衛生法・労働基準法
 - 過重労働・過労死
 - 長期欠勤、鬱病
- ・幼児期不適応：夜尿、夜驚、自家中毒、チック
- ・学校生活不適応：不登校
- ・家庭内暴力
- ・摂食障害：拒食症・過食症
- ・児童虐待：虐待する母親、される子供
- ・職場不適応：長期欠勤、鬱病
- ・薬物依存：有機溶剤、麻薬・覚醒剤、アルコール

【評価方法】

毎回の授業内での質疑をもとに評価する。

【テキスト】

使用せず。参考図書はその都度提示する。

臨床心理学演習3・4

後藤 秀爾

【授業の概要】

修士論文作成に向けて大学院指導生の研究指導を行なう。

大学内の相談活動にとどまらないで、自分の問題意識を深めるための実践の場を確保することを、まずは考えるといふ。心理臨床は、対象となるケースとのかかわりの中にすべての答えがある。実践を通して自分の取り組むべき問題意識を絞り込み、研究方法を工夫し、自己内の体験と格闘しつつ言葉に置き換えるという作業である。自分なりの理解が基本であるが、それを裏付ける理論の学習にも十分な目配りが必要である。そのための方向付けが、研究指導である。

【授業の目標】

卒業後の心理臨床実践を続ける自分自身を支えることとなる研究論文の完成を目指す。

【授業計画】

1年次のうちに問題意識の概略を定めて、2年次のこの授業に臨んで欲しい。授業は原則的に個別指導である。2年次の早い時期に、実現可能な研究計画を練り上げる段階にまで進む。最終的に、対象となった人たちに結果をフィードバックして、深い共感の得られるようなものを目指す。

【評価方法】

論文に反映される、学習内容の視野の拡がり具合、研究テーマの深まり具合、今後の展開への可能性の拓かれ具合などを考慮して、総合的に判断する。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

個別に指示・提示するものをベースに、自ら検索して発展させる。

臨床心理学演習 5・6

古井 景

【授業の概要】

自我機能・精神力動に関する知識を深めていく。自我機能の健全な発達と障害について学び、臨床心理面接技法へと繋げていく。様々な論文・著書を活用し、積極的な討議を行っていく。

また、修士論文の作成に関しても、参加者自らの積極的取り組みを前提として、互いに検討・議論を積み重ねていく。

【授業の目標】

臨床心理士として『病理』を見極める眼を身につける。

【授業計画】

以下の項目を中心として、参加者の発表と討論を通して、知識を深めていく。

- ・自我心理学の歴史
- ・対象関係論への発展
- ・自我構造モデルと自我機能
- ・対象喪失と取り入れ
- ・分裂的機制
- ・抑鬱の態勢、躁の防衛
- ・乳幼児期の自我・対象・分裂
- ・移行対象と移行現象
- ・分離個体化理論

【評価方法】

知識の深さ、理論の構築能力、言語的表現力など総合的に評価する。

【テキスト】

使用せず。参考図書はその都度提示する。

臨床心理査定演習 1・2 (臨床心理アセスメント)

米倉五郎

【授業の概要】

臨床心理士として様々な事例に関わって行く中で、事例の抱える問題点を的確に把握することは極めて重要な作業である。この演習では、神経心理学的障害、情緒的障害、人格障害の心理アセスメントのために、様々な検査法を理解し可能な限り実習体験を行っていく。

【授業の目標】

心理査定と心理査定法に関する文献講読しつつ事例報告による心理アセスメントの検討と研究法を説明する。

【授業計画】

資料配付に基づいて講義を行い、演習として実際の査定方法を体験していく。

- 1 心理アセスメント・心理査定法について
- 2 知能のアセスメント
 - ウェクスラー知能検査 (成人・小児)
 - 乳幼児精神発達診断検査
 - 老人の知能の評価
 - など
- 3 パーソナリティーのアセスメント
 - 自己記入式質問紙法
 - 投影法 (自我の構造モデルと自我機能の理解)
 - 精神作業検査
 - など
- 4 テストバッテリーについて
 - 心理査定法からの情報と統合的な解釈法

【評価方法】

授業内容の理解度により、成績を評価判定する。

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

授業の中で紹介する。

臨床心理学演習 7・8

二宮 昭

【授業の概要】

内外の「障害児」と呼ばれる子どもたちの発達援助に関する著書・論文の講読を行い、彼らにみられる障害とは何か、また、その障害の改善とはどうということかについて検討する。

【授業の目標】

「障害児」についての理解を深めるとともに、「障害児」を対象とした実践的研究のまとめ方を学ぶ。その中で各自の修士論文の研究テーマを決定し、具体的な研究計画を立てる。

【授業計画】

受講者が読んだ文献の発表と討論を行いながら、研究テーマの検討、および具体的な研究方法の特定というかたちで展開される。

【評価方法】

発表内容、討論への参加の仕方、および研究計画やその方法論の内容などによって評価する。

【テキスト】

使用しない。

臨床心理基礎実習 1 a

古井 景 二宮 昭 富安玲子 西出隆紀 米倉五郎 後藤秀爾

【授業の概要】

臨床心理学の実践に必要な基礎知識・技能・態度を身につけるための実習である。

本実習内容を修得した者のみが、本学併設の心理臨床相談室での臨床活動を行うことが許される。

【授業の目標】

心理臨床相談室での臨床心理面接の実践にあたり、必要な基礎知識・技能・態度を身につけることを目標とする。

【授業計画】

1. 心理臨床入門講義
 - 1-1 カウンセリングにおける心構え
 - 1-2 受理面接 1 (幼児期・児童期)
 - 1-3 受理面接 2 (思春期・青年期)
 - 1-4 受理面接 3 (成年期・老年期)
 - 1-5 受理面接 4 (障害児)
 - 1-6 受付・契約・限界設定・危機介入
 - 1-7 心理検査・クリニカルレポート・カルテの記載と管理・守秘義務
 - 1-8 医療機関との連携・リファー・診断と見立て・治療方針・共同治療
2. ロールプレイ実習
 - 入門講義は、講義・演習方式に加えて実習形式も適宜取り入れていく。ロールプレイ実習は入門講義の後の時間に開講し、相互にカウンセラー・クライエント役を演じ、参加者の講評を受ける。

なお、すべての内容について守秘義務が課せられているので、その点に留意すること。

【評価方法】

受講態度と提出物で評価する。特殊な実習なので、やむを得ない事情がない限り、1回でも遅刻・欠席があれば単位は認めない。

【テキスト】

その都度、指示する。

臨床心理基礎実習 1 b

二宮 昭 古井 景 後藤 秀爾 米倉 五郎

【授業の概要】

臨床心理基礎実習 1a を基にして、心理臨床の実践を行い始めた学生を対象として、その臨床実践に対するスーパービジョンを受ける。そのため、受講は臨床心理基礎実習 1a を履修したものに限られる。

【授業の目標】

心理臨床家（臨床心理士）となっていくための基礎的な能力の修得をめざす。

【授業計画】

1. 心理臨床実践

本学併設の心理臨床相談室における外来相談実習。

2. スーパービジョン体験

スーパーバイザーとしてスーパービジョンを受ける。原則として指導教員がスーパーバイザーとなり、セッション 1～3 回につき、最低 1 回のスーパービジョンを受けることになる。また、必要に応じて、スーパーバイザー以外にケース・コンサルテーションを受けることもあり得る。

このように完全な実習であり、当然のことながら、割り当てられた授業時間以外に、相当の時間をとられることを覚悟しておいてもらいたい。

なお、すべての内容について守秘義務が課せられているので、その点を留意されたい。

【評価方法】

実習態度によって評価する。

臨床心理実習 1 a・b

後藤 秀爾 西出 隆紀 二宮 昭 古井 景 米倉 五郎

【授業の概要】

病院や福祉施設など外部の施設において心理臨床の実習を行い、それに対する専門的な指導を受ける。

【授業の目標】

一人前の心理臨床家（臨床心理士）となるための幅広く、より高い能力の修得をめざす。

【授業計画】

心理臨床実習

1 年間の間に病院での実習と福祉施設などでの実習の両方を行う。実習先では、その現場の臨床心理士による指導を受ける。

完全な実習であり、実習先によって日程が集中して行われたり、週 1 回定期的に行われたりというように実施形態が異なることもあるので、割り当てられた授業時間以外にかなりの時間をとられることになる。

なお、すべての内容について守秘義務が課せられるので、その点についても留意すること。

【評価方法】

実習態度によって評価する。

臨床心理基礎実習 2 a・b

後藤 秀爾 二宮 昭

【授業の概要】

本学併設の心理臨床相談室における外来相談実践を行なうための基礎的な能力の修得を目指し、ケース・カンファレンスに参加する。また、所定の条件を満たし、相談活動に関与するようになって後は、ケース・カンファレンスに事例報告し指導を受ける義務を負う。

【授業の目標】

実際の心理臨床相談に対応するための基盤を自己内に作ると同時に、実践を通して自己研鑽を深めるための視点を確立する。

【授業計画】

1. 心理臨床実践

本学併設の心理臨床相談室における外来相談実習を行なう。

2. ケース・カンファレンス

本学心理臨床相談室で行われるケース・カンファレンスに参加し、ケース・プレゼンテーションと討議を通して、相互学習を深める。

3. スーパービジョン体験

ケース毎に、スーパーバイザーとしてスーパーバイザーの指導を受ける。

また、スーパーバイザーの了解の下、ケース・コンサルテーションを受けることができる。

なお、相談ケースにかかわるすべての情報に、守秘義務が課せられる。

【評価方法】

実習態度から評価する。

特別な理由なくケース・カンファレンスに欠席した場合、受講資格を失う。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

ケースの理解にかかわる文献は出来る限り幅広く目を通すことは当然であるが、実践と理論のバランスを大事にし、自分の言葉で自分の実践を語る事が出来るような学習の仕方に心がける。

なお、相談事例にかかわる資料の管理にあたっては、個人情報の保護について十分な配慮を求める。

臨床心理実習 2 a・b

古井 景 米倉 五郎 西出 隆紀

【授業の概要】

臨床心理基礎実習で修得した基礎的な臨床能力に加え、臨床における応用能力を身につけるための高度な実習内容を目指す。

積極的にケースを持ち、専門的な理論・モデルに基づいた臨床心理面接技法の実践を行う。

【授業の目標】

臨床心理面接において、専門的な理論・モデルに基づいた臨床心理面接技法が実践できるようになることを目標とする。

【授業計画】

1. 心理臨床実践

本学併設の心理臨床相談室における外来相談実習。

2. ケース・カンファレンス

本学心理臨床相談室で行われるケース・カンファレンスに参加し、ケース・プレゼンテーションを行って、討議を通して指導を受ける。また、他者の提示したケース資料について討議する。

3. スーパービジョン体験

スーパーバイザーとしてスーパービジョンを受ける。原則としてセッション 1 回につき、1 回のスーパービジョンを受けることになる。また、必要に応じて、スーパーバイザー以外にケース・コンサルテーションを受けることにもなる。

上記のように、完全に実習中心で進める。当然のことながら、割り当てられた授業時間以外に、相当の時間をとられることを覚悟して欲しい。

なお、全ての内容について守秘義務が課せられているので、その点を留意されたい。

【評価方法】

実習態度から評価する。なお、特別な理由もなくケース・カンファレンスに欠席した場合は、その場で失格となる上、今後いかなる場合も受講を認めない。

【テキスト】

使用しない。しかし、参考文献としてかなりの文献を読むことをスーパーバイザーなどから指示されることになろう。

心理学研究法特講

二宮 昭 清水 遵 植村勝彦 後藤秀爾
沖田庸嵩 古井 景 米倉五郎

【授業の概要】

心理学における主要な研究法である1) 実験法、2) 観察法、3) 調査法、4) 面接法、5) 心理検査法および事例研究法について、それぞれの教員が分担して講義する。

【授業の目標】

修士論文作成の基礎となる心理学の研究法を習得する。

【授業計画】

実験法に関しては、清水遵、沖田庸嵩が分担し、清水はストレスや感情をテーマにした具体的な実験例を紹介しながら実験に伴う実験計画法について、沖田は認知・生理的な測定法について、講義をする。観察法については二宮昭、調査法については植村勝彦、面接法については後藤秀爾が担当する。古井景と米倉五郎は心理検査法と事例研究法を担当する。

【評価方法】

各研究法ごとにレポートを提出させ、評価する。

【テキスト】

プリントの配布による。

心理統計特講

斎藤和志 西出隆紀 吉崎一人

【授業の概要】

心理統計に関わるいくつかの問題を大きく3つの側面から扱う。心理統計の基礎的な部分については斎藤が、実験計画法を中心とした領域については吉崎が、多変量解析を中心とした領域については西出が担当する。基本的な事項の講義に加えて、統計ソフトSPSSを使用した具体的な事例の検討も行う。

【授業の目標】

基礎的な心理統計の知識の獲得と、具体的な解析技法を習得すること。(詳細は授業にて解説する。)

【授業計画】

1. データの種類と特徴
2. 代表値と散布度
3. 変数間の関係、変数の分布と変換
4. 統計的検定の基礎
5. 実験計画法の基礎
6. 平均値の差の検定
7. 分散分析
8. カテゴリカル・データの検定
9. 多変量解析の考え方
10. 予測と説明
11. 変数の分類
12. 尺度構成と信頼性・妥当性
13. まとめ

【評価方法】

受講態度とレポートによって評価する。

【テキスト】

指定しない。

【参考文献・資料】

授業時に適宜紹介する。

応用言語学特講 1 (英語教育)

松本青也

【授業の概要】

言語教育の一環としての外国語教育という視点から、日本における英語教育を経済的、文化的、政治的な状況の中で捉え、そのさまざまな課題を検討するとともに、外国語運用の技能を検証することで、コミュニケーション能力養成に向けての英語教育をどのように位置づけるべきかを考察する。

【授業の目標】

日本の英語教育を中心に、外国語教育の諸問題について、主に理論的な側面から考察する。

【授業計画】

以下の点について考察する。

1. 外国語教育の歴史
2. 諸外国の外国語教育政策
3. 日本における外国語教育政策の変遷
4. 言語教育の一環としての外国語教育
5. 外国語運用の技能
 - ・Listening
 - ・Speaking
 - ・Reading
 - ・Writing
6. 異文化コミュニケーション能力

【評価方法】

研究発表及び論文。

【テキスト】

未定。

応用言語学特講 3 (Topics in Applied Linguistics)

DONAHUE, Ray T.

【Course description】

Explorations of the interface between language, communication and community. A major goal is to acquire an informed perspective on sociolinguistic matters, particularly those international and intercultural in scope. By gaining knowledge of concepts and principles of sociolinguistics, one will be better able to avoid stereotyping or other cultural biases. An allied goal is to sharpen critical cultural analysis for effective research applications whether as a consumer or producer of academic research.

【Course objectives】

- 1 to learn essential concepts and principles of sociolinguistics and intercultural communication;
- 2 to increase perceptual skill and cultural awareness
- 3 to learn essential discourse analysis
- 4 to improve English comprehension skills through an academic content study

【Course schedule】

Tentatively, course content includes these major topics (the instructor reserves the right to make changes in the course where appropriate):

- ・ Course Introduction
- ・ Culture in World Perspective
- ・ Bases for Critical Communication
- ・ Misattributions
- ・ Avoiding "Isms"
- ・ Communication Style I

【Assessment】

Class participation and assignments 25%, research project 75%

【Textbooks】

To be announced in class

応用言語学特講 2 (英語教育)

松本青也

【授業の概要】

世界における外国語教授法の歴史と多様性を概観し、主要な教授法について詳しく検証しながら、日本固有の言語状況に適合した理想的な英語教授法と、日本の学習者の立場から考えた理想的な英語学習法とは何かを考察する。

【授業の目標】

日本の英語教育を中心に、外国語教育の多様な教授法について考察する。

【授業計画】

以下の点について考察する。

1. ESLとEFL
2. 外国語教授法の変遷
3. 日本の外国語教授法
4. 外国語教授法の理論的背景
5. 動機付けと学習法
6. 教授法の原則
7. マルチメディアの活用
8. 教師の役割と評価

【評価方法】

研究発表及び論文。

【テキスト】

未定。

応用言語学特講 4 (Topics in Applied Linguistics)

DONAHUE, Ray T.

【Course description】

Explorations of the interface between language, communication and community. This course is a continuation of 応用言語学特講3. A major goal is to acquire an informed perspective on sociolinguistic matters, particularly those international and intercultural in scope. By gaining knowledge of concepts and principles of sociolinguistics, one will be better able to avoid stereotyping or other cultural biases. An allied goal is to sharpen critical cultural analysis for effective research applications whether as a consumer or producer of academic research.

【Course objectives】

- 1 to learn essential concepts and principles of sociolinguistics and intercultural communication;
- 2 to increase perceptual skill and cultural awareness
- 3 to learn essential discourse analysis
- 4 to improve English comprehension skills through an academic content study

【Course schedule】

Tentatively, course content includes these major topics (the instructor reserves the right to make changes in the course where appropriate):

- ・ Overview
- ・ Communication Style II
- ・ Communication, Rhetoric, and Language
- ・ Major Linguistic Approaches
- ・ Discourse Applications I
- ・ Discourse Applications II

【Assessment】

Class participation and assignments 25%, research project 75%

【Textbooks】

To be announced in class

応用言語学特講5 (中国語教育)

馮富榮

【授業の概要】

本講義では、主として日本における中国語教育について以下の角度から検討する。

1. 日本における中国語教育の現状
2. 日本における中国語教育の問題点
 - (1) 教材の問題
 - (2) カリキュラムの問題
 - (3) 教育者間の連携の問題
3. 日本における中国語教育の展望

【授業の目標】

この講義を受講することによって、学生の問題意識を養成し、問題解決へと導くアプローチの仕方を身に付けてもらうことが目標である。

【授業計画】

この授業は、下記のステップを踏んで展開していく。

1. 日本における中国語教育の現状を調べる。主として日本の大学での中国語教育に焦点を当てる。
2. 日本の大学での中国語教育における問題点について討論を行う。具体的には、
 - 1) 教材に関する問題；
 - 2) カリキュラムに関する問題；
 - 3) 中国語教育者間の連携の問題。という3つのカテゴリーに分けて、それぞれ具体的に議論し、改善案を検討する。
3. 日本における今後の中国語教育への提案にまとめる。

【評価方法】

受講態度やレポートなどで、総合的に評価する。

【テキスト】

論文のコピーや新聞などを使う。

応用言語学特講7 (日本語教育)

山内啓介

【授業の概要】

日本語教育の現在と将来の課題を考察する。

日本語教育方法とその背景にある諸問題を概観し、テーマに応じて議論を深め問題の解決を探究する。

【授業の目標】

日本語教育の教授理論を理解する。

【授業計画】

次についてテーマを定めて講義をおこなう。

- 日本語教育の歴史
- 日本語教育の方法
- 日本語教師の使命
- 日本語ボランティア
- 日本語と文化

【評価方法】

出席、レポートによる。

【テキスト】

特に定めない。
プリント資料を用いる。

【参考文献・資料】

授業時に紹介する。

応用言語学特講6 (中国語教育)

馮富榮

【授業の概要】

本講義では、主として日本における中国語教育について以下の角度から検討する。

1. 日本における中国語教育の現状
2. 日本における中国語教育の問題点
 - (1) 教材の問題
 - (2) カリキュラムの問題
 - (3) 教育者間の連携の問題
3. 日本における中国語教育の展望

【授業の目標】

本講義を受講することによって、日本の大学における中国語の現状や日本の大学における中国語教育の問題点を知ることができるだけでなく、その問題点を解決するために、どんな改善策をすればいいかを考える姿勢が身に付くことを狙っている。

【授業計画】

この授業は、下記のステップを踏んで展開していく。

1. 日本における中国語教育の現状を調べる。主として日本の大学での中国語教育に焦点を当てる。
2. 日本の大学での中国語教育における問題点について討論を行う。具体的には、
 - 1) 教材に関する問題；
 - 2) カリキュラムに関する問題；
 - 3) 中国語教育者間の連携の問題。という3つのカテゴリーに分けて、それぞれ具体的に議論し、改善案を検討する。
3. 日本における今後の中国語教育への提案にまとめる。

【評価方法】

受講態度やレポートなどで、総合的に評価する。

【テキスト】

論文のコピーや新聞などを使う。

応用言語学特講8 (日本語教育)

山内啓介

【授業の概要】

日本語教育の現在と将来の課題を考察する。

日本語教育方法とその背景にある諸問題を概観し、テーマに応じて議論を深め問題の解決を探究する。

【授業の目標】

日本語教育の実際を知る。

【授業計画】

次についてテーマを定めて講義をおこなう。

- 日本語と文化の問題
- 日本語教育文法理論
- 日本語とコミュニケーション
- 日本語と地域
- コンピュータ利用の日本語教育

【評価方法】

出席、レポートによる。

【テキスト】

特に定めない。
プリント資料を用いる。

【参考文献・資料】

授業時に紹介する。

応用言語学特講 9 (日本語学)

窪田守弘

【授業の概要】

日本語の文構造の特徴の一つとして、終止形と連体形が同形ということがあげられる。例えば、「飛ぶ」は「鳥が飛ぶ」の場合に終止形で、「飛ぶ鳥」の場合に連体形になる。また、形容名詞の「こと」をつければ、「鳥が飛ぶこと」という名詞句になる。本講ではこのような現象の成立と歴史的な背景を考え、動詞文、形容詞文、名詞文などの基本的な文型を分析し、文構造の在り方を考察する。

【授業の目標】

日本語の研究で先駆的な理論を展開し、現代日本語の発展に貢献した三上章の文法論の概略を学ぶ。

【授業計画】

本講では、まず動詞や形容詞が示す活用という現象がどのような意味をもっているかを考える。そして、それぞれの活用形はどのようにして成立したのかについて概観する。特に、三上章の文法論を中心に、現代の日本語の構造がどのような輪郭になっているかについて考察する。

【評価方法】

講義の出席状況、レポート等の内容で評価する。

【テキスト】

日本語基礎講座・三上文法入門 (山崎紀美子著 ちくま新書)

【参考文献・資料】

講義時に紹介する。

応用言語学特講 11 (対照言語学<日英>)

松本青也

【授業の概要】

日本語と英語について、音、語彙、文法、発想、背景文化といった側面から、言語体系と言語行動の対応を明らかにすることで、それぞれの言語の特質を浮き彫りにする。

【授業の目標】

日英語の比較対照を通して個別言語への理解を深め、外国語教育への応用を考える。

【授業計画】

以下の点について考察する。

1. 英語教育における対照言語学の役割
2. 日英語の音声
3. 日英語の語彙
4. 日英語の文法
5. 日英語の発想
6. 日英語の背景文化

【評価方法】

研究発表及び論文。

【テキスト】

未定。

応用言語学特講 10 (日本語学)

山内啓介

【授業の概要】

日本語学の分野から、音韻論、文法論、意味論を講義する。

音韻論：音声科学と日本語音韻論

文法論：形態文法と統語文法

意味論：歴史的文献実証研究、現代意味論のとらえかた

【授業の目標】

日本語学を応用言語学の分析を通して理解する。

【授業計画】

本年度は、日本語教育の文法論を概観し、日本文法の統語論へ進める。

受講生との議論を通して日本語共時論の記述分析、日本語教育用文法を考える。

【評価方法】

出席、レポートによる。

【テキスト】

特に定めない。

プリント配布。

【参考文献・資料】

授業時に紹介する。

応用言語学特講 12 (対照言語学<日中>)

馮富榮

【授業の概要】

言語を構造面(文法)といった側面から捉えるだけでなく、文化や社会といった側面からも多角的に捉えることをテーマとする。この授業では、中国語を柱とし、主として日本語との比較をしながら、両言語の違い、また両言語を支えている両国の文化・習慣及び思考様式の違いを探ってみる。いわば、言語学のみではなく、語用論という視点からも日・中両言語の言語現象を分析してみる。

【授業の目標】

本講義を受講することによって、日本語と中国語のそれぞれの特徴及び、その特徴を生み出した歴史や文化習慣に関する背景を深く理解することができるようになる。

【授業計画】

授業は、主として以下のステップを踏んで展開していく予定である。

1. 日・中両言語に関する比較研究を幅広く読んで、ディスカッションを行う。
2. 日・中両言語の共通点と相違点を検討する。文法などという言語学的な側面だけでなく、文化や思考様式などという語用論的な側面からも捉える。
3. 上記した日・中両言語の相違点は、すなわち中国人の日本語学習の問題点となるか否か、または日本人の中国語学習の問題点となるか否かを検討する。

授業は、輪読という形で展開される予定である。もちろん、講読の材料となる研究論文についても議論をする。よって、論文によって解明された問題を確認すると共に、まだ残っている研究課題を絞りだす。

【評価方法】

受講態度やレポートなどで総合的に評価する。

【テキスト】

論文のコピーを使用する。

応用言語学特講 13 (児童英語教育法)

高橋美由紀

【授業の概要】

公立小学校の英語教育において、指導的な立場を担う人材を養成することを目的として行う。授業は、小学校英語活動の意義や効果的な指導法、カリキュラムや年間計画、授業プランの立て方、小・中連携の英語教育の在り方、教材・教具研究等の講義と、ワークショップ、小学校での授業観察等の実践研究から構成される。毎時間、英語の歌やダンス等を紹介する。

【授業の目標】

小学校英語教育において、理論に裏付けされた実践を指導できる人材を育成することを目標としている。

【授業計画】

1. オリエンテーション：小学校英語活動と児童英語教育
2. 「総合的な学習の時間」の枠組みの中での小学校英語活動、国際理解教育
3. アジア諸国、ヨーロッパ諸国での小学校英語教育の取り組み
4. 文部科学省「小学校英語活動実践の手引き」を読む
5. 小学校における英語（外国語）教育の目的と意義、研究開発校の事例研究等から
6. 小学校英語活動における学習者に対する効果的な教授法
7. 早期外国語教育プログラム（イマージョン、FLES、FLEX）
8. 小学校英語の指導者について・ALTとのTT授業について
9. 発達段階に応じた効果的な英語活動・中学校の英語教育との連携について
10. 小学校英語活動の教材・教具・設備について
11. 小学校英語活動の視覚教材・聴覚教材研究
12. 小学校英語活動のコンピュータ教材やビデオ教材の研究
13. テキストと授業計画、指導案の書き方について
14. 模擬授業の具体例と指導案（その1）
15. 模擬授業の具体例と指導案（その2）、まとめ

【評価方法】

テストは実施しない。出席状況、授業態度、課題レポート、模擬授業

【テキスト】

小学校英語活動実践の手引き（文部科学省 開隆堂出版）
Sunshine Kids Book 1（山岡多美子・高橋美由紀 開隆堂出版）
Sunshine Kids Book 2（高橋美由紀・山岡多美子 開隆堂出版）
Curtain, H & C.A.Dahlberg 2004 Languages and Children: Making the Match: Third Edition (Pearson)
その他、絵本、カセット、CD、文献等は授業内に紹介する。

【参考文献・資料】

English for Primary Teachers: A handbook of activities & classroom language (Slattery, M. & J. Willis Oxford 2003)

応用言語学演習 1 (英語教育)

松本青也

【授業の概要】

応用言語学の分野の中でも、特に第二言語習得理論、日英対照言語学、および外国語教育政策に焦点を絞り、英語教育に関する最新の研究成果を検証しながら、研究課題の選択、文献調査から研究方法と論文の構成・形式まで、独創的な研究のための指導を行う。

【授業の目標】

理論的な側面を中心に各自の研究内容と方法について検討を加える。

【授業計画】

それぞれの研究題目に関連した内外の研究成果に批判的考察を加えながら、項目ごとに研究発表と議論を積み重ねる。

【評価方法】

研究発表、論文の総合評価。

【テキスト】

未定。

応用言語学特講 14 (日本語教授学)

山内啓介

【授業の概要】

外国語としての日本語教育および日本語を目標言語とした第2言語教育について日本語教授の理論と実践法、教授法について講述する。

【授業の目標】

日本語教育実践と日本語教授理論の構築を目指す。

【授業計画】

次のテーマにそって行う。

- 1 日本語教育・研究の流れ
- 2 日本語と社会
- 3 日本語と学習ストラテジー
- 4 異文化コミュニケーション
- 5 日本語教授法
- 6 日本国内の日本語教育
- 7 海外の日本語教育
- 8 言語テスト
- 9 日本語教授学の課題

【評価方法】

出席、レポートによる。

【テキスト】

プリント資料を用いる。

【参考文献・資料】

日本語教科書・参考書・教材用資料

応用言語学演習 2 (英語教育)

松本青也

【授業の概要】

第二言語習得理論、日英対照言語学、および外国語教育政策について、英語教育に関する最新の研究成果を検証しながら、独創的な研究論文作成のための指導を行う。

【授業の目標】

具体的な実践面への提言を含めて、各自の研究をまとめる。

【授業計画】

それぞれの研究内容に関連した内外の研究成果に批判的考察を加えながら、修士論文作成のための個別指導を行う。

【評価方法】

発表内容と論文の評価。

【テキスト】

未定。

応用言語学演習3 (中国語教育)

馮 富榮

【授業の概要】

応用言語学特講3・4と平行して、当「演習」講座では、受講者の高度な中国語コミュニケーション能力の養成に重点が置かれる。最終的な目標は、中国語の話す能力、聞く能力、書く能力と翻訳する能力の4つの能力を極めるだけでなく、中国語で考えることができ、それをすぐ中国語で表現できるようなレベルまで養成していく。要するに、立派な中国語の教育者と研究者としての素質を培っていく。

【授業の目標】

本講義を受講することによって、自分の関心のある研究テーマを絞りだすことができるだけでなく、論文を書く際に必要とされている問題意識、研究方法及び考察の仕方などを学ぶことができる。

【授業計画】

授業は、主として以下のステップを踏んで展開していく予定である。

- ①中国語研究や、日本語と中国語の比較研究、そして対外中国語教育に関する論文を幅広く読んで、ディスカッションを行う。
- ②受講者の関心のある研究テーマを搾り出す。その研究テーマに関連のある研究論文を読んで、先行研究の問題点についてディスカッションを行い、整理する。
- ③受講者の研究目的をはっきりさせ、その研究目的に達することができるように、最適の研究方法を検討する。
- ④中間発表に向けて、具体的な研究作業に入る。そして、研究過程において、受講者の持っている問題点や疑問に対して、随時アドバイスをを行う。

【評価方法】

努力や研究成果などで、総合的に評価する。

【テキスト】

関連の論文のコピーを使用する。

応用言語学演習5 (日本語教育)

山内啓介

【授業の概要】

応用言語学の研究手法を用いて量的研究、質的研究をあわせて実践する。演習の授業はプレゼンテーションによる。各自のテーマについて発表し参加者と議論する。

【授業の目標】

先行研究、資料調査および実験などを実施して論文を構成し、執筆作成を行う準備をする。
なお10月入学生は演習を6、5と受講するが、授業は演習の5と6の内容で行う。

【授業計画】

受講生は各自の発表テーマについて資料を作成して、プレゼンテーションを行う。

【評価方法】

出席、プレゼンテーションを評価する。

【テキスト】

特に定めない。
発表資料などハンドアウトを配布。

【参考文献・資料】

発表テーマに応じて紹介する。

応用言語学演習4 (中国語教育)

馮 富榮

【授業の概要】

応用言語学特講3・4と平行して、当「演習」講座では、受講者の高度な中国語コミュニケーション能力の養成に重点が置かれる。最終的な目標は、中国語の話す能力、聞く能力、書く能力と翻訳する能力の4つの能力を極めるだけでなく、中国語で考えることができ、それをすぐ中国語で表現できるようなレベルまで養成していく。要するに、立派な中国語の教育者と研究者としての素質を培っていく。

【授業の目標】

本講義を受講することによって、自分の関心のある研究テーマを絞りだすことができるだけでなく、論文を書く際に必要とされている問題意識、研究方法及び考察の仕方などを学ぶことができる。

【授業計画】

授業は、主として以下のステップを踏んで展開していく予定である。

- ①中国語研究や、日本語と中国語の比較研究、そして対外中国語教育に関する論文を幅広く読んで、ディスカッションを行う。
- ②受講者の関心のある研究テーマを搾り出す。その研究テーマに関連のある研究論文を読んで、先行研究の問題点についてディスカッションを行い、整理する。
- ③受講者の研究目的をはっきりさせ、その研究目的に達することができるように、最適の研究方法を検討する。
- ④中間発表に向けて、具体的な研究作業に入る。そして、研究過程において、受講者の持っている問題点や疑問に対して、随時アドバイスをを行う。

【評価方法】

努力や研究成果などで、総合的に評価する。

【テキスト】

関連の論文のコピーを使用する。

応用言語学演習6 (日本語教育)

山内啓介

【授業の概要】

応用言語学研究の手法を用いて量的研究、質的研究をあわせて実践する。演習の授業はプレゼンテーションによる。各自のテーマについて発表し参加者と議論する。

【授業の目標】

論文を構成し、執筆作成を行う。

【授業計画】

受講生は各自の発表テーマについて資料を作成して、プレゼンテーションを行う。

【評価方法】

出席、プレゼンテーションを評価する。

【テキスト】

特に定めない。
発表資料などハンドアウトを配布。

【参考文献・資料】

発表テーマについて紹介する。

コミュニケーション学特講1 (Practicum in Communication Studies)

MOLDEN, Danny T.

【Course description】

Rhetoric is the study of how humans can communicate more clearly and debate more effectively.

It is the study of how we decide what to say and when to say it.

Of course, rhetoric and debate are very broad methods - they are really ways of studying or thinking about a topic.

So, the class will focus first on the study of rhetoric and debate, then it will look at specific examples of debates.

The students will decide what topics they have an interest in studying, then they will examine the various forms of communication about that subject.

We will study speeches, newspapers, magazines, books, music, television programs, movies, plays, art, etc.

【Course objectives】

1. To introduce students to the ideas of rhetoric in communication.
2. To improve the students' use of English.
3. To help the students understand the variety of ways people can communicate.

【Course schedule】

Class meetings will consist of lectures and discussion about rhetoric and communication studies.

Topics covered will include:

1. Classical rhetoric
2. Contemporary rhetoric
3. Studies of persuasion
4. Contemporary communication studies

【Assessment】

Assessment will be based on attendance, quizzes, written papers, and oral presentations.

【Textbooks】

There is no assigned textbook for this course although readings may be provided

コミュニケーション学特講3・4 (Academic Writing)

McDANIEL, Edwin R.

【Course description】

The course is designed to improve student skills in planning, drafting, revising, and editing academic essays/reports. Emphasis is placed on the purpose, structure, and style of academic writing. Learning to compose and support arguments using multiple source materials will be stressed. The course will also help improve students' ability to read and analyze complex academic texts and exercise critical thinking.

【Course objectives】

- Developing and improving academic writing skills
- Developing and improving academic research skills
- Developing and improving critical thinking skills

【Course schedule】

Topics examined may include, but are not limited to, the following:

- Determining an essay topic of interest.
- Identifying and using research source material.
- Reviewing the literature
- Preparing an outline
- Constructing and writing the report.
- Source citation requirements.
- Proper source citation format.

【Assessment】

Course assessment will be through a series of writing exercises culminating in an academic research paper.

【Textbooks】

Course material will be drawn from contemporary academic journals and books.

コミュニケーション学特講2 (Practicum in Communication Studies)

MOLDEN, Danny T.

【Course description】

Rhetoric is the study of how humans can communicate more clearly and debate more effectively.

It is the study of how we decide what to say and when to say it.

Of course, rhetoric and debate are very broad methods - they are really ways of studying or thinking about a topic.

So, the class will focus first on the study of rhetoric and debate, then it will look at specific examples of debates.

The students will decide what topics they have an interest in studying, then they will examine the various forms of communication about that subject.

We will study speeches, newspapers, magazines, books, music, television programs, movies, plays, art, etc.

【Course objectives】

1. To introduce students to the ideas of rhetoric in communication.
2. To improve the students' use of English.
3. To help the students understand the variety of ways people can communicate.

【Course schedule】

Class meetings will consist of lectures and discussion about rhetoric and communication studies.

Topics covered will include:

1. Classical rhetoric
2. Contemporary rhetoric
3. Studies of persuasion
4. Contemporary communication studies

【Assessment】

Assessment will be based on attendance, quizzes, written papers, and oral presentations.

【Textbooks】

There is no assigned textbook for this course although readings may be provided

コミュニケーション学特講5 (Multilingual Communication)

STEPHENSON, Brett

【Course description】

This course is designed to enable students to improve their English abilities through translation and interpreting exercises. Students will be given the opportunity to translate and interpret a wide variety of materials. By focusing on comprehension of the central message of each exercise students will improve both their textual, note-taking and presentation skills.

【Course objectives】

The primary object of this course is to improve English textual and oral skills. Students of any level will definitely benefit from the design of this course. The focus is on identifying each student's strengths and weaknesses and building on past learning. The course has a very practical focus.

【Course schedule】

To be announced.

【Assessment】

To be announced.

【Textbooks】

No set textbook will be used in this course. Handouts and recorded material will be provided at each class. Students will be given the opportunity to explore areas own interest.

【Reference】

In order to improve their English comprehension, students should try to read English material regularly. Daily listening to news or current affairs is also highly recommended.

コミュニケーション学特講6 (Multilingual Communication)

STEPHENSON, Brett

【Course description】

This course is designed to enable students to improve their English abilities through translation and interpreting exercises. Students will be given the opportunity to translate and interpret a wide variety of materials. By focusing on comprehension of the central message of each exercise students will improve both their textual, note-taking and presentation skills.

【Course objectives】

The primary object of this course is to improve English textual and oral skills. Students of any level will definitely benefit from the design of this course. The focus is on identifying each student's strengths and weaknesses and building on past learning. The course has a very practical focus.

【Course schedule】

To be announced.

【Assessment】

To be announced.

【Textbooks】

No set textbook will be used in this course. Handouts and recorded material will be provided at each class. Students will be given the opportunity to explore areas of their own interest.

【Reference】

In order to improve their English comprehension, students should try to read English material regularly. Daily listening to news or current affairs is also highly recommended.

コミュニケーション学特講9 (Media Communication)

McGEE, Jennifer J.

【Course description】

This class will focus at a graduate level on the effects of media on our daily lives and ways of looking at the world. We will look at various theories about life in a highly mediated world and look at concrete areas in our lives that it affects. Students will focus on developing critical thinking skills about analyzing modern (or postmodern) life.

【Course objectives】

To learn specific theories of media and apply them to media in our daily lives.

【Course schedule】

We will look closely at various theories in turn, then analyze specific examples of how those theories explain life and the media. Exact theories and practices will vary depending on student interest and the world situation.

【Assessment】

Grades will be assigned based on attendance, participation, and reports.

【Textbooks】

There will be no set textbook, but there will be various readings in both Japanese and English.

コミュニケーション学特講7・8 (Intercultural Communication)

McDANIEL, Edwin R.

【Course description】

This course will examine the concepts of intercultural communication. The class will focus on the worldviews, values, beliefs, and communication styles of differing cultural, ethnic, and national groups. Students will examine how culture influences perception, social organization, language, and nonverbal messages, during intercultural interactions.

Although the course emphasizes social and behavioral science orientations in its approach, it also draws from other perspectives such as history, economic, business, management, and human resources.

【Course objectives】

- Instill students' with an in-depth understanding of the concepts, principles, and skills regarding communication between persons from different cultures.
- Provide opportunities for students to apply those precepts to contemporary, practical situations.
- Create a greater awareness of cultural diversity

【Course schedule】

Topics examined may include, but are not limited to, the following general areas:

- Globalization
- Culture and Communication
- Cultural Perception and Values
- Language and Culture
- Culture and Nonverbal Communication
- Intercultural Cultural Context
- Intercultural Adaptation and Assimilation
- Intercultural Competence

【Assessment】

Attendance, class participation, short written or oral reports, and one short research paper on an intercultural topic of individual interest will be used to evaluate student progress.

【Textbooks】

The textbook will be announced at the first class meeting.

コミュニケーション学特講10(Media Communication)

McGEE, Jennifer J.

【Course description】

This class will focus at a graduate level on the effects of media on our daily lives and ways of looking at the world. We will look at various theories about life in a highly mediated world and look at concrete areas in our lives that it affects. Students will focus on developing critical thinking skills about analyzing modern (or postmodern) life.

【Course objectives】

To learn specific theories of media and apply them to media in our daily lives.

【Course schedule】

We will look closely at various theories in turn, then analyze specific examples of how those theories explain life and the media. Exact theories and practices will vary depending on student interest and the world situation.

【Assessment】

Grades will be assigned based on attendance, participation, and reports.

【Textbooks】

There will be no set textbook, but there will be various readings in both Japanese and English.

コミュニケーション学特講 11 (日中翻訳技術)

杜英起

【授業の概要】

翻訳は単なるある言語から他の言語に転換する単純な作業ではない。翻訳する際、原文の真意を理解し、それを他の言語圏で生活している人に理解しやすい形に変えて翻訳しなければならない。そのためには、双方の言語を熟知するだけでなく、双方の文化習慣、表現様式などをよく検討する必要もある。本講義では、中国語から日本語訳にまた日本語から中国語訳に、という翻訳の練習をしながら、日中双方の言語の違い、文化習慣の違い、そして日本人と中国人の表現様式の違いについて、検討する。

【授業の目標】

日本語から中国語へ、また中国語から日本語への翻訳練習を通じて、翻訳の技能を磨き、日中翻訳の専門知識を身につけることができる。

【授業計画】

日中翻訳基礎
日中文化翻訳 (初等)
ビジネス関係文章の翻訳 (一)
即席通訳基礎

【評価方法】

平常点及びレポートにて評価する

【テキスト】

プリント配布

【参考文献・資料】

日中翻訳教程—基礎編 (北京語言文化大学)
即席通訳 (大連理工大学)

コミュニケーション学特講 13 (中国語コミュニケーション)

杜英起

【授業の概要】

言葉が通じなくても、同じ漢字を使って、筆談できるという点においては、日本語と中国語は世界でほかにはないと言える。しかし同じ漢字圏に属していても、日本と中国では、文化も違うし、人々の価値観もかなり違っている。ゆえに、同じ漢字であっても日本語と中国語に内包されている意味はそれぞれ異なる場合がある。その違いを理解することは日本人と中国人の円滑なコミュニケーションを図るには不可欠なことである。本講義の目的は、こうした日中の違いを紹介し、日本人と中国人のコミュニケーションに生じやすい誤解や思い違いをいかにすれば解消することができるかを検討することにある。

【授業の目標】

日・中両国の漢字文化、国民の生活習慣、価値観などの違いを研究し、相手国を理解するのに必要な知識を把握し、両国の友好交流のための配慮すべき点を検討することによって、異文化コミュニケーション能力を高めることができる。

【授業計画】

日本における中国文化の伝来と現状
(言語、医学、民俗、食、茶、酒など)
“集団性”における日本人と中国人の相違
“外国との付き合い”における日本人と中国人の相違
中国の地域性と中国人の気質 (一)
中国ビジネスで成功と失敗の人為要素 (一)

【評価方法】

平常点及び学期末レポートにて評価する

【テキスト】

プリント配布

コミュニケーション学特講 12 (日中翻訳技術)

杜英起

【授業の概要】

翻訳は単なるある言語から他の言語に転換する単純な作業ではない。翻訳する際、原文の真意を理解し、それを他の言語圏で生活している人に理解しやすい形に変えて翻訳しなければならない。そのためには、双方の言語を熟知するだけでなく、双方の文化習慣、表現様式などをよく検討する必要もある。本講義では、中国語から日本語訳にまた日本語から中国語訳に、という翻訳の練習をしながら、日中双方の言語の違い、文化習慣の違い、そして日本人と中国人の表現様式の違いについて、検討する。

【授業の目標】

日本語から中国語へ、また中国語から日本語への翻訳練習を通じて、翻訳の技能を磨き、日中翻訳の専門知識を身につけることができる。

【授業計画】

日中翻訳実践
日中文化翻訳 (中等)
ビジネス関係文章の翻訳 (二)
即席通訳応用

【評価方法】

平常点及びレポートにて評価する

【テキスト】

プリント配布

【参考文献・資料】

日中翻訳教程—実践編 (北京語言文化大学)
即席通訳 (大連理工大学)
中国経済新論 (日本新報社)

コミュニケーション学特講 14 (中国語コミュニケーション)

杜英起

【授業の概要】

言葉が通じなくても、同じ漢字を使って、筆談できるという点においては、日本語と中国語は世界でほかにはないと言える。しかし同じ漢字圏に属していても、日本と中国では、文化も違うし、人々の価値観もかなり違っている。ゆえに、同じ漢字であっても日本語と中国語に内包されている意味はそれぞれ異なる場合がある。その違いを理解することは日本人と中国人の円滑なコミュニケーションを図るには不可欠なことである。本講義の目的は、こうした日中の違いを紹介し、日本人と中国人のコミュニケーションに生じやすい誤解や思い違いをいかにすれば解消することができるかを検討することにある。

【授業の目標】

日・中両国の漢字文化、国民の生活習慣、価値観などの違いを研究し、相手国を理解するのに必要な知識を把握し、両国の友好交流のための配慮すべき点を検討することによって、異文化コミュニケーション能力を高めることができる。

【授業計画】

日本における中国文化の伝来と現状
(言語、医学、民俗、食、茶、酒など)
“家庭”に対する日本人と中国人認識の相違
“宗教”に対する日本人と中国人認識の相違
中国の地域性と中国人の気質 (二)
中国ビジネスで成功と失敗の人為要素 (二)

【評価方法】

平常点及び学期末レポートにて評価する

【テキスト】

プリント配布

コミュニケーション学特講 15 (中国語学)

周 国龍

【授業の概要】

現代中国語の文法を一通り概観して、中国語の文法の基礎的な知識を身につける。演習形式で一緒に議論して中国語の文法をより深く認識し理解できるように進めていく。

【授業の目標】

中国語はどのように文法的に分類されているか、なぜこのように分類されるかを理解すること。

【授業計画】

- 第1講 授業プログラムの概説
- 第2講 中国語についての概説
- 第3講 品詞の分類及び名詞などについて
- 第4講 動詞について
- 第5講 形容詞について
- 第6講 副詞について
- 第7講 前置詞・接続詞について
- 第8講 助詞について
- 第9講 文成分及び主語、述語、目的語について
- 第10講 修飾成分(定語、状語、補語等)について
- 第11講 単文について
- 第12講 複文について
- 第13講 総括

【評価方法】

出席状況、授業のための準備状況、レポート
以上の3点を総合して評価する。

【テキスト】

適宜資料配付

【参考文献・資料】

現代中国語文法総覧(劉月華他著 相原 茂監訳 くろしお出版)

コミュニケーション学特講 17 (日本語表現)

窪田守弘

【授業の概要】

身のまわりで話されている何げない言葉に心をとどめ、その意味や背景を調べていくと、意外にも奥行きが深くおもしろい発見をすることが多い。特に、現代日本語の変化は激しくてその実態はなかなか把握しにくいのが、映画やテレビの画像の様々な場面では、多くの表現形式が台詞として発せられていることによっても分かる。そこで本講義では、日本語の談話分析という視点から、テレビや映画というマスメディアにおける言語表現を考えていく。

【授業の目標】

日本語における「談話分析」について毎回テーマを提示し、それに従って発表を行なう。そこから文章を作成するための専門的な知識や技術を身につける。

【授業計画】

- 1) 本講義では、日本と外国の言語や文化の基礎的な知識を有名な映画やテレビのドラマを教材として学ぶ。そして、映像の中でなされる言語表現の基本的な談話分析をして、理解を深めるようにする。
- 2) 日本語コミュニケーション
日本語コミュニケーションの新しい講義の方法として談話分析をさらに進める。映画やテレビを通して種々の言語や文化の在り方を調べ、その背後ではたらくメカニズムや日本語の変化を観察することになっている。そして、日本語コミュニケーションは、日常生活のコミュニケーションの在り方を、第二言語習得という視点から研究する考えである。

【評価方法】

講義における授業態度、レポートの内容、出席状況によって評価する。

【テキスト】

プリントを配布する。

【参考文献・資料】

談話分析を学ぶ人のために(マルコム・クールタルド他著 世界思想社)

コミュニケーション学特講 16 (中国語学)

周 国龍

【授業の概要】

言語学の文法理論で中国語を分析する方法を紹介し、実際に使われている中国語の実例を持って、それぞれの分析する方法の長所と限界を演習形式で一緒に考えていく。

【授業の目標】

中国語の文法理論、及び今までどのような分析方法を用いて分析してきたかを概観し、中国語研究の現状を理解すること

【授業計画】

- 第1講 授業プログラムの概説
- 第2講 品詞の分類について(1)
- 第3講 品詞の分類について(2)
- 第4講 文の分析方法について
- 第5講 層次分析法
- 第6講 変換分析法
- 第7講 語義特徴分析法
- 第8講 配価分析法
- 第9講 語義指向分析法
- 第10講 語義範疇について
- 第11講 虚詞について
- 第12講 第二言語としての文法について
- 第13講 総括

【評価方法】

出席状況、授業のための準備状況、レポート
以上の3点を総合して評価する。

【テキスト】

適宜資料配付

【参考文献・資料】

現代漢語語法研究教程(陸俊明 北京大学出版社)
文法講義(朱德熙著 杉村博文・木村英樹訳 白帝社)

コミュニケーション学特講 18 (日本語表現)

窪田守弘

【授業の概要】

身のまわりで話されている何げない言葉に心をとどめ、その意味や背景を調べていくと、意外にも奥行きが深くおもしろい発見をすることが多い。特に、現代日本語の変化は激しくてその実態はなかなか把握しにくいのが、映画やテレビの画像の様々な場面では、多くの表現形式が台詞として発せられていることによっても分かる。そこで本講義では、日本語の談話分析という視点から、テレビや映画というマスメディアにおける言語表現を考えていく。

【授業の目標】

日本語における「談話分析」について毎回テーマを提示し、それに従って発表を行なう。そこから文章を作成するための専門的な知識や技術を身につける。

【授業計画】

- 1) 本講義では、日本と外国の言語や文化の基礎的な知識を有名な映画やテレビのドラマを教材として学ぶ。そして、映像の中でなされる言語表現の基本的な談話分析をして、理解を深めるようにする。
- 2) 日本語コミュニケーション
日本語コミュニケーションの新しい講義の方法として談話分析をさらに進める。映画やテレビを通して種々の言語や文化の在り方を調べ、その背後ではたらくメカニズムや日本語の変化を観察することになっている。そして、日本語コミュニケーションは、日常生活のコミュニケーションの在り方を、第二言語習得という視点から研究する考えである。

【評価方法】

講義における授業態度、レポートの内容、出席状況によって評価する。

【テキスト】

プリントを配布する。

【参考文献・資料】

談話分析を学ぶ人のために(マルコム・クールタルド他著 世界思想社)

コミュニケーション学演習1 (日本語表現)

窪田守弘

【授業の概要】

私たちのまわりで話されている何げない言葉に心をとどめ、その意味や背景を調べていくと、意外にも奥行きが深くてももしろい発見をすることが多い。特に、現代日本語の変化は激しくてその実態はなかなか把握しにくいのが、映画やテレビの画像の様々な場面では、多くの表現形式が台詞として発せられていることによっても分かる。そこで本講義では、日本語をカルチュラル・スタディーズという視点から、テレビや映画というマスメディアを通して考えていく。

【授業の目標】

カルチュラル・スタディーズ分野での文節の解説という視点は、コミュニケーションは多様な面から研究にも十分適応できる。そこで、この視点をコミュニケーションの分析に活用して新しい方向を考えてみる。

【授業計画】

毎回テーマを提示し、学生はそれに従って発表を行なう。そこからコミュニケーションの場面分析を身につけていく。本講義では、日本と外国のコミュニケーションの在り方を、著名な映画やテレビのドラマを素材として学ぶ。そして、映像の中でコミュニケーションの内容と構成を分析し、理解を深めるようにする。言語と文化の実態は複雑であるが、映画やテレビというマスメディアを通して比較し、その背後ではたらくメカニズムや日本語の変化を観察することになっている。そして、カルチュラル・スタディーズという立場から日常生活のコミュニケーションの在り方を検討する考えである。

【評価方法】

講義における授業態度、レポートの内容、出席状況によって評価する。

【テキスト】

実践カルチュラル・スタディーズ (上野俊哉著 ちくま新書)

【参考文献・資料】

講義時に紹介する。

コミュニケーション学演習3 (Intercultural Communication)

McDANIEL, Edwin R.

【Course description】

This course examines the concepts and applications of intercultural communication. The course will: (1) instill students with an in-depth understanding of the concepts, principles, and skills regarding communication between persons from different cultural backgrounds, and (2) provide opportunities for students to apply those precepts to contemporary, practical situations. The class will focus on the worldviews, values, beliefs, and communication styles of differing cultural, ethnic, and national groups. Students will examine how culture influences perception, social organization, language, and nonverbal messages, during intercultural interactions.

Although the course emphasizes social and behavioral science orientations in its approach, it also draws from other perspectives such as history, economic, business, management, and human resources.

【Course objectives】

- Provide an in-depth understanding of culture.
- Explore the interaction between culture and communication.
- Learn the skills needed to become a competent intercultural communicator

【Course schedule】

Topics examined may include, but are not limited to, the following general areas:

- Globalization
- Culture and Communication
- Cultural Perception and Values
- Language and Culture
- Culture and Nonverbal Communication
- Intercultural Cultural Context
- Intercultural Adaptation and Assimilation
- Intercultural Competence

【Assessment】

Attendance, class participation, short written or oral reports, and one short research paper on an intercultural topic of individual interest will be used to evaluate student progress.

【Textbooks】

Short reading assignments will be provided in class.

コミュニケーション学演習2 (日本語表現)

窪田守弘

【授業の概要】

現代日本語の変化は激しくてその実態はなかなか把握しにくいのが、実際のコミュニケーションの場面では、多くの新しい表現形式として発せられていることによっても分かる。マンガや携帯電話のコトバなどはその典型的な例である。そこで本講義では、さまざま言語現象を整理し、それを専門的に分析していく。

【授業の目標】

カルチュラル・スタディーズ分野での文節の解説という視点は、コミュニケーションは多様な面から研究にも十分適応できる。そこで、この視点をコミュニケーションの分析に活用して新しい方向を考えてみる。

【授業計画】

毎回テーマを提示し、学生はそれに従って発表を行なう。本講義では、日本人と外国人のコミュニケーションの在り方を、アニメ・マンガ・携帯言語などを素材として学ぶ。さらにマスメディア中に見られる複雑なコミュニケーションの内容と構成を分析し、理解を深めるようにする。その一つの方法論として、カルチュラル・スタディーズという立場から日常生活のコミュニケーションの在り方を検討する考えである。

【評価方法】

講義における授業態度、レポートの内容、出席状況によって評価する。

【テキスト】

実践カルチュラル・スタディーズ (上野俊哉著 ちくま新書)

【参考文献・資料】

講義時に紹介する。

コミュニケーション学演習4 (Intercultural Communication)

McDANIEL, Edwin R.

【Course description】

This course examines the concepts and applications of intercultural communication. The course will: (1) instill students with an in-depth understanding of the concepts, principles, and skills regarding communication between persons from different cultural backgrounds, and (2) provide opportunities for students to apply those precepts to contemporary, practical situations. The class will focus on the worldviews, values, beliefs, and communication styles of differing cultural, ethnic, and national groups. Students will examine how culture influences perception, social organization, language, and nonverbal messages, during intercultural interactions.

Although the course emphasizes social and behavioral science orientations in its approach, it also draws from other perspectives such as history, economic, business, management, and human resources.

【Course objectives】

- Provide an in-depth understanding of culture.
- Explore the interaction between culture and communication.
- Learn the skills needed to become a competent intercultural communicator

【Course schedule】

Topics examined may include, but are not limited to, the following general areas:

- Globalization
- Culture and Communication
- Cultural Perception and Values
- Language and Culture
- Culture and Nonverbal Communication
- Intercultural Cultural Context
- Intercultural Adaptation and Assimilation
- Intercultural Competence

【Assessment】

Attendance, class participation, short written or oral reports, and one short research paper on an intercultural topic of individual interest will be used to evaluate student progress.

【Textbooks】

Short reading assignments will be provided in class.

コミュニケーション学特講 19 (研究方法論)

石橋善弘

【授業の概要】

コンピュータを用いた統計解析能力の育成を念頭において、統計学、推計学の基本的概念を講義し、統計と社会の関わりあいについて学ばせる。

【授業の目標】

統計学の応用能力の習得

【授業計画】

第1回 講義の目的と授業計画の提示

第2回～第11回 以下の項目について講義する。

1. 統計分析
2. 平均値、代表値、標準偏差
3. 相関係数
4. 回帰分析
5. 統計的推測

第12回 まとめ

いずれも講義とコンピュータを用いた実習を組み合わせて授業を行う。

【評価方法】

出席状況およびレポートまたは試験の成績により総合的に評価する。

【テキスト】

未定

コミュニケーション学特講 20 (研究方法論)

石橋善弘

【授業の概要】

コミュニケーション学特講19(研究方法論)で習得した統計学、推計学の基礎およびコンピュータを用いた統計解析能力を前提に、統計学、推計学の応用について講義する。コンピュータによる解析能力の向上をはかる。

【授業の目標】

統計学の応用能力の習得

【授業計画】

第1回 本講義の目的と授業計画の提示

第2回～11回 以下の項目について講義する

1. 重回帰分析
2. 因子分析
3. クラスター分析

第12回 まとめ

いずれも講義とコンピュータを使った実習をくみあわせて授業を行う。

【評価方法】

出席状況およびレポートまたは試験の成績により総合的に評価する。

比較文化論 1 (日米)

McDANIEL, Edwin R.

【Course description】

The history of Japanese-U.S. relations is characterized by periods of close cooperation, estrangement, and even hostilities. Many of the problems affecting the relationship are the result of diverse cultural influences and dissimilar communication styles.

This course will compare Japanese and U.S. culture with emphasis on how varied culturally based values produce different social norms, behaviors, and communication styles. The emphasis will be on examining and comparing the difference in Japanese and U.S. cultural values, beliefs, and attitudes and how they influence communication across different contexts.

【Course objectives】

- Create an appreciation for the role of culture in national and international settings.
- Create an understanding of the varying cultural based worldview, values, and beliefs of Japan and the U.S.
- Creating an awareness of how Japanese and U.S. cultural differences produce varied communication styles.

【Course schedule】

Class meetings will be a combination of lecture and discussion. Topics examined may include, but are not limited to, the following:

- Geographical and historical factors influencing Japan and U.S. culture
- Japanese and U.S. cultural characteristics
- Japanese and U.S. communication styles (verbal and nonverbal)
- Japanese and U.S. communication across contexts
- Communication and culture in contemporary Japanese-U.S. relations

【Assessment】

Attendance, class participation, quizzes, short written or oral reports, and one research paper on a topic of individual interest will be used to evaluate student progress.

【Textbooks】

- Different Games, Different Rules (1999) (Haru YAMADA ; Oxford Press)
- Other readings will be provided

【Reference】

- American Cultural Patterns (1991) (Edward C. STEWART & Milton J. BENNETT ; Intercultural Press)
- American Ways (2000) (Gary ATHEN ; Intercultural Press)

比較文化論 2 (日欧)

山井徳行

【授業の概要】

日本と欧州の関係や日本人の中に生成されてきたヨーロッパのイメージを点検する。そのような関係性の中に、日本人としてのヨーロッパ理解の実態が浮かき上がる、と思うからである。ヨーロッパ精神の源流をギリシャ文化とキリスト教さらには近代合理主義の中に求めて探求する。

以上のような知的準備をしようとして、フランス、イギリス等のヨーロッパの主な国々と日本を、文化の生産物としての文化財や文化現象を具体的に比較しながら、抽象的な一般論にまで高めたい。しかし、フランスについて語るが多くなると思う。ただ比較するだけでなく、そこから現代の日本やヨーロッパの持つ問題点を明らかにしたい。

【授業の目標】

ヨーロッパの多様性に内在する共通性を把握し、日本と比較することによって世界を見る複眼的視点を獲得すること。さらに、将来の研究に有益な文化比較の特定の対象を学生が自ら獲得すること。

【授業計画】

- 第1週 授業のやり方や準備の仕方を説明する。
- 第2～3週 日本とヨーロッパの関係を歴史的に探る。
- 第4～5週 ヨーロッパ文明の根幹をなすキリスト教や科学主義について。
- 第6～8週 生活の具体的な諸側面の比較考察。
- 第9～10週 日本人の人生、ヨーロッパ人の人生。
- 第11～12週 日本の問題、ヨーロッパの問題。
- 第13～15週 整理とまとめ。

学生は課題図書をしっかり読み発表し、それを土台に討論が可能になるような授業にしたい。

【評価方法】

発表とレポートで行う。

【テキスト】

特になし。プリントや論文を用意する。

【参考文献・資料】

- 沈黙のことば (エドワード・T・ホール著 [The Silent Language (Edward T. Hall)])
- 英語と日本人 (太田雄三著 講談社学術文庫)
- 「ことばと文化」「教養としての言語学」(鈴木孝夫著 岩波新書)

比較文化論 3 (日中)

周 国龍

【授業の概要】

中国語の表現方法と日本語の表現方法を比較し、その共通点と相違点を見出す。その違いから中国語話者と日本語話者との発想と考え方の違いを考え、そこから中日両言語の背後にある文化の特徴について考えてみる。

【授業の目標】

中国語と日本語との表現上における表現方法の違いを通して、両方の考え方の違いを理解すること。

【授業計画】

- 第1講 授業のプログラムの概説
- 第2講 日本語話者の視点、中国語話者の視点
- 第3講 受身表現から見る日中の違い
- 第4講 使役表現から見る日中の違い
- 第5講 授受表現から見る日中の違い
- 第6講 敬語表現から見る日中の違い
- 第7講 自・他動詞の使用から見る日中の違い
- 第8講 婉曲表現から見る日中の違い
- 第9講 省略の方法から見る日中の違い
- 第10講 比喩表現から見る日中の違い
- 第11講 中国語と比べて、日本語は曖昧か
- 第12講 日本語話者の考え方、中国語話者の考え方
- 第13講 総括

【評価方法】

出席状況、授業のための準備状況、レポート
以上の3点を総合して評価する。

【テキスト】

適宜資料配付

【参考文献・資料】

日本語の視点 (森田良行 創拓社)
日本人の発想、日本語の表現 (森田良行 中公新書)

比較文化論 4 (日韓)

窪田守弘

【授業の概要】

日韓両国は、これまで「近くて遠い国」として相互の文化交流はあまり円滑には行なわれてこなかった。しかし、1988年のソウル・オリンピック以来、韓国は外国に対する閉鎖的な態度を改め、日本にも積極的に門戸を開放し始めた。そして、2002年のワールド・カップでは日韓共同開催もあつて、スポーツを通じた両国の関係は大幅に改善された。それに伴い文化交流も盛んに行なわれるようになり、最近日本では韓国のTVドラマや映画や音楽などが大変なブームとなっている。しかし、それは単に熱狂的なファン層に支えられた現象とも思えないので、このような現象が何故生じたのかについて考えていく。

【授業の目標】

日韓両国の人々の言語行動は似て非なる部分が少ない。それを映像という素材を使って専門的に分析していく。

【授業計画】

日韓の映画やドラマの中から、いくつかのジャンルの作品を選び、それを教材として内容を分析し、カルチュラル・スタディーズの視点から文化比較を試みる。本講義では日韓のTVドラマや映画を教材として文化比較を行い、両国でみられる文化的要素の、共通点もしくは相違点について考察を加えていきたい。

<使用映画のジャンル>

歴史、戦争、伝統芸能、ラブ・ストーリー、アクション、コメディ、社会ドラマなど

【評価方法】

出席状況とレポートなどで評価する。

【テキスト】

配布プリント、ビデオ、DVDなど。

【参考文献・資料】

講義時に紹介する。

生体情報心理学特殊研究 1

沖田庸嵩

【授業の概要】

各自の研究に応じて、その展開方向、実験・調査計画、および結果の分析・解釈について討論し、博士論文の作成に向けて指導を行う。

【授業の目標】

学術雑誌に論文を少なくとも年に1つは発表し、学位論文につなげる。

【授業計画】

各自が研究を進めるなかで、(1) 関連領域の最新の論文、(2) 実験(調査)の計画立案、(3) 実験結果の分析・解釈、それぞれについて発表し討論を行う。これらの過程を経て、各自が論文を執筆する。

【評価方法】

研究活動により評価する。

【テキスト】

使用しない。

生体情報心理学特殊研究 2

清水 遵

【授業の概要】

情動喚起刺激によって賦活される生体システム(神経系、内分泌系、免疫系)の反応メカニズムを電気生理学、精神内分泌学、精神神経免疫学的指標からとらえる方法論について検討する。また、情動体験とこれら生体システムの活性指標との関連性について条件発生的検索を行なうことで、情動が心身の健康に及ぼす影響についても考察する。

【授業の目標】

各年次の授業計画に基づき、学位論文に向けて研究の深化を目指す。

【授業計画】

1年次は、各自の研究テーマについて、研究方法及び文献資料等について指導を行なう。

2年次は、各自の研究テーマについて、具体的な研究計画書に基づき予備実験を行ない、学年末には中間発表が出来るよう研究指導を行なう。

3年次には、中間発表を踏まえ、更に研究方法の問題点について、より研究を深化するよう指導し、学位論文に結実するよう指導する。

【評価方法】

1年間の研究活動を総合的に評価する。

【テキスト】

使用せず。

生体情報心理学特殊研究 3

吉崎一人

【授業の概要】

博士學位論文に値する研究をまとめ上げることを目標として、進行中の実験、並びに研究計画、論文執筆等に助言、指導を行う。また、テーマと関連する最新の研究論文等を読み、議論する。

さらに研究の視点を広げ、研究指導を体験するために、学部生の卒業研究指導にも参加する。

【授業の目標】

1年次

博士學位論文に向けての研究計画を立てるため、テーマをしばらくその研究のレビューを行う。それを踏まえた研究計画について助言する。

2年次

学術論文への投稿の支援を行う。

3年次

発表、掲載された論文をもとに博士學位論文を完成するための支援を行う。

【授業計画】

特に定めない

【評価方法】

1年間の研究活動を総合的に評価する。

【テキスト】

使用しない

【参考文献・資料】

使用しない

社会心理学特殊研究 1

植村勝彦

【授業の概要】

コミュニティ心理学が扱う領域のトピックスについて、修士論文で扱った問題を中心に各自が関心をもつテーマを設定し、深い学識と綿密な論理構成のもとに、その最先端を拓き追究することを可能にするよう、支援・助言すること。そして、最終的には学位審査に値する博士學位論文に結実するようすることを目標とする。

第1年次においては、修士論文およびその後の展開を含めて、学会誌に投稿する論文の作成指導を中心とする。

第2年次においては、各自が選んだ個別のテーマについて、研究方法および文献レビューなどについて指導を行い、加えて、新たな研究を調査として実施させ、学年末には中間発表ができるよう、研究指導を行う。

第3年次においては、第2年次に実施した調査をまとめ、学会誌に投稿するための支援を行うとともに、これらの論文を含めて、博士學位審査論文として提出するに必要な事柄の指導を行う。

また、他者を指導するという経験が、自己の研究を高めるうえで有効であることを確認させる目的で、博士課程学生には研究指導として、学部学生の卒論指導にも参加する。

【授業の目標】

課程博士の学位を取得すること。

【授業計画】

特に定めない。

【評価方法】

1年間の研究活動を総合的に評価する。

【テキスト】

使用せず。

【授業の概要】

障害児臨床を中心に、臨床心理学領域における学術的価値の高いユニークな研究論文を作成するための指導・助言を行う。

【授業の目標】

最終的には学位論文の作成をめざす。

【授業計画】

第1年次では、研究テーマの設定、方法論の検討などをより深め、各自が修士論文で扱った問題をさらに展開させる。

第2年次では、各自が選んだ個別テーマに沿って、研究方法および文献研究等の指導を行い、学年末には中間発表ができるようにする。

第3年次では、中間発表を踏まえ、さらに研究方法の問題点について、研究がより深化するように指導し、後期には学位論文予備審査が行えるようにする。予備審査の結果に基づき、学位審査に値する学位論文に結実するようにさらに指導を行う。

【評価方法】

1年間の研究活動を総合的に評価する。

言語コミュニケーション特殊研究 1

松本青也

【授業の概要】

応用言語学（英語教育）

第二言語習得理論と日英対照言語学を中心に、最近の主な研究について考察すると共に、日本の外国語教育への研究成果の応用を検討する。

【授業の目標】

研究分野の新しい研究成果に幅広く触れ、考察を深める。

【授業計画】

いくつかのトピックについて、内外の研究成果に批判的考察を加えながら、独自の理論を構築する。

【評価方法】

発表内容と論文の評価。

【テキスト】

未定。

言語コミュニケーション特殊研究 2

山内啓介

【授業の概要】

新しい要請にこたえる日本語学、日本語教育文法学、日本語教育方法、日本語コミュニケーション、またマルチメディアを用いた教育と学習法について、それぞれの理論を構築し実践についての考察を行う。

【授業の目標】

言語研究の方法を実践する。

【授業計画】

1年次では、日本語教育をめぐる状況についてとりあげ、日本語が必要とされる要因を分析する。あわせて、日本語による発想、日本語の文化がもたらすコミュニケーションの問題を議論し解決を得る。

2年次では、各自の選ぶテーマをもとに研究立場、研究手法を設定し、方法論、文献探索についての指導を行う。研究発表など、プレゼンテーションの機会を得て自らの論点を深化させる。

3年次では、自らの論考の関連テーマについて論を展開し、研究を進める。学位論文に結実するよう、指導を行う。

以上について個別指導する。また、受講生の希望を取り入れ、日本語教育の実践的教授方法の追求を行いたい。

【評価方法】

論文作成のための課題レポート、また議論の参加など。

【テキスト】

特に定めない。

【参考文献・資料】

研究に応じて紹介する。

言語コミュニケーション特殊研究 3

馮 富榮

【授業の概要】

中国語教育及び日・中両言語の比較

【授業の目標】

本講義を受講することによって、日本語と中国語に関する幅広い知識を得られると共に、両言語の違いを生み出している文化的背景を深く探求する力が培われる。さらに、日本の大学中国語教育に置ける問題点に突き止め、中国語教育のあるべき将来像を探ることができればと期待している。

【授業計画】

本講義では、日・中両言語について、主として統語論、語用論、語彙論という3つの側面から検討する。輪読という形で講義を進めていくが、先行研究を幅広く講読する。そしてディスカッションを交えながら先行研究に残っている問題点や日・中両言語のそれぞれの特徴、両言語を機能させている文化的な背景、そして両言語の相違点を生み出した歴史的な原因、思考様式の相違による原因などについても議論する。

本講義では、また日本の大学での中国語の教育についても検討する。具体的に言うと、今の日本の大学の中国語教育には、どのような問題点（教材、やカリキュラムの編成、そして教育の方法や教育目標の設定など）があるか、そういった問題点を解決するにはどうすればよいか、今後の日本の大学の中国語の教育をどう展開させるべきか、そして日本人を対象とする中国語教育の特色はどこにあるかを検討していきたい。

要するに、本講義は中国語の教育者と日・中両言語の比較に関する研究者を養成することを目的としている。

【評価方法】

受講態度やレポートなどで総合的に評価する。

【テキスト】

【教材】

論文のコピーなど使用する。

言語コミュニケーション特殊研究 4

窪田守弘

【授業の概要】

日本人は、日常生活のさまざまな場面で複雑な表現活動をしているが、実はそれを無意識に行なっていることが多い。そこで、日本人が場面に応じて使い分ける一種独特の表現やジェスチャーについて、心理学、社会学、コミュニケーションなどの関連する学問分野の成果を取り入れながら、詳しく検証していく。

【授業の目標】

日本人のコミュニケーションが、マスメディアの中でどのように展開されるかを分類しながら、分析を進めていく。

【授業計画】

日本人の言語活動が視覚的にわかりやすく表現される媒体として映画やテレビなどがある。そこで、代表的な日本映画やテレビドラマを厳選して、その会話の部分を中心に会話文の構造から、日本人の文法意識の実態について分析を行なう。その際に「第二言語習得（Teaching Japanese as a Second Language）の視点を中心にして分析し、これからの日本語教育の教授法として、実際に適用できる方法論となるか否かという可能性について考察する。

【評価方法】

本講義の発表内容や参加態度、レポートなどの結果などで評価する。

【テキスト】

配布資料を使用する。

【参考文献・資料】

講義中に紹介する。

[Course description]

Special research in language communication is designed to facilitate in depth exploration of a communication topic of interest. Through student-instructor interaction, the student will be guided in applying philosophy of knowledge concepts to a selected research subject.

[Course objectives]

- Expand student understanding of the communication discipline
- Increase academic research capabilities
- Promote critical thinking skills
- Train students to conduct independent research

[Course schedule]

Topics examined may include, but will not be limited to, the following, which will be explored from the perspective of the student's specific communication research interest.

- Ontology
- Epistemology
- Axiology
- Methodology
- Theoretical Paradigms
- Theoretical application
- Research resources

[Assessment]

Progress will be assessed through periodic student-instructor discussions and a comprehensive research paper on the student's selected topic.

[Textbooks]

A reading list will be constructed jointly by the student and the instructor. Reading materials will be drawn from relevant journal articles, books, and other sources as may be decided.

統計特講 I・II

石橋善弘

【授業の概要】

コンピュータを用いた統計解析能力の育成を念頭において、統計学、推計学の基本的概念を講義し、統計とビジネスとの関わりあいについて学ばせる。

【授業の目標】

統計学の応用能力の習得

【授業計画】

第1回 本講義の目的および授業計画の提示

第2回～第11回 以下の項目について講義する。

- 1 統計分析
- 2 平均値、代表値、標準偏差
- 3 相関係数
- 4 回帰分析
- 5 統計的推測

第12回 補足とまとめ

また、随時 Excel の利用の訓練を行う。

【評価方法】

出席状況およびレポートまたは試験の成績により総合的に評価する。

経営学特講 I・II

浅井敬一郎

【授業の概要】

経営学の中でも、とくに企業革新に焦点を当てる予定です。まず、企業革新を論じるにあたって必要なフレームワークを概観します。その後、最近になって大きな企業革新を遂げた企業の、ケース・スタディーを取り上げます。ケース分析に基づき、既存のフレームワークの拡張をめくり、ディスカッションをしていきたいと考えます。

【授業の目標】

ケース・スタディーをフレームワークによって分析し、その上でディスカッション（あるいはディベート）を行い、企業経営には1つの事象にも多面的な見方が可能であることを実感する。

【授業計画】

学期の最初に提示する

【評価方法】

出席、レポート、議論の内容によって評価する

【テキスト】

適宜指示する

【参考文献・資料】

リーディングス日本の企業システム 第II期、第1巻～第5巻（伊丹敬之、藤本隆宏他著 有斐閣）

マーケティング特講 I・II

大塚英揮

【授業の概要】

企業による顧客創造活動として体系づけられる現代マーケティング論の全体像を把握するために、マーケティング論の基本的テキストである P.Kotler の「マーケティングマネジメント」を輪読する。これにより、マーケティングに関する基本的な知識を得ることを目指す。なお、P.Kotler の考え方を実際の事例にあてはめる「ケース分析」を適宜行い、応用力の涵養にもつとめたい。

【授業の目標】

マーケティングにまつわる専門的知識を習得し、現実に行き起きている諸問題を理論的に分析、意志決定を行うスキルを習得する。

【授業計画】

- (1) オリエンテーション
- (2) マーケティングマネジメントの理解
- (3) マーケティング機会の分析
- (4) マーケティング戦略の立案
- (5) マーケティング上の意志決定
- (6) マーケティングプログラムのマネジメント
- (7) ケーススタディ（随時）

【評価方法】

出席状況、および授業における積極性、レポートにより評価する。

【テキスト】

最初の授業で指示する。

【参考文献・資料】

授業内で適宜指示する。

ファイナンス特講 I・II

藤井正志

【授業の概要】

日本銀行による金融の量的緩和政策にもかかわらず、企業部門のマネーフローの変化から銀行貸出残高は減少を続け、マネーサプライ残高の伸び率も低い水準にとどまってきた。その中で、日本経済は2002年以降緩やかな景気回復過程に入っている。本講義においては、エクセルを用いて日本経済・金融の現状を分析し、金融システムの問題点を論ずる。

【授業の目標】

経済・金融のデータをエクセルを用いて分析することにより、日本の経済・金融の現状を把握し、金融システムの問題点を考える。

【授業計画】

第1講～12講 エクセルを使った経済・金融のデータ分析を通して日本の経済・金融の現状を把握し、金融システムの問題点を研究する。

【評価方法】

授業への積極的貢献および期末レポート等により総合的に評価する（評価の詳細については授業にて説明する）。

【テキスト】

適宜指定する。

【参考文献・資料】

適宜指定する。

国際ビジネス特講 I・II

石坂綾子

【授業の概要】

経済のグローバル化が急速に進展しており、国境を超えた競争が激化している。貿易や労働力の国境を超える動きは、金融の動きとも結びついて進んでいる。この授業では、国際的なビジネスの展開、特にアメリカ・ヨーロッパ諸国（EUの動向を含む）を経済のグローバル化から考察する。

【授業の目標】

アメリカ・ヨーロッパ諸国は、国際経済や国際政治を主導する有力な国々である。その全体像を把握し、日本との関わり合いについて理解する。

【授業計画】

産業毎に基本的特徴と現在抱えている課題について明らかにし、新しい動向をトピックスとして紹介する。その上で、授業で取り上げたトピックスについて議論する。

【評価方法】

授業への取り組み姿勢とレポート（または期末試験）により総合的に評価する。授業への積極性については、特に重視する。

【テキスト】

特に指定しない。必要に応じてプリントを配付する。

【参考文献・資料】

特に指定しない。授業の中で、適宜紹介する。

アジア経済特講 I・II

真田幸光

【授業の概要】

東アジア地域経済の発展と日本経済、日本の地域経済、そして日本企業の発展をリンクさせ、東アジア地域経済の共存共栄システムを構築する為の研究を行う。主要研究分野は以下の通り。

- (1) 担当教員がアドバイスをする韓国政府関連機関、モンゴル政府関連機関などの東アジア諸国と日本の経済交流促進スキーム構築に関わる研究。
- (2) 担当教員がアドバイスをする政府関連機関、地方自治体等が進める国際化、地域経済活性化に寄与する東アジア経済の活用に関わる研究。
- (3) 担当教員がアドバイスをする個別企業の経営戦略全般に於ける国際戦略構築に関わる研究。

【授業の目標】

本授業では院生が高度な知識と判断能力を以って国際情勢を分析していくスキルを体得していくことを第一の目標としている。その上で、アジアのあり方、日本のあり方といったものを考察しつつ、倫理観と国際秩序に基づいたアジア経済の発展の方向性を考察することを目標とする。

【授業計画】

1. ガイダンス
2. アジア各国に於ける日本企業のビジネス展開に関する個別研究（韓国）
3. 同上（北朝鮮）
4. 同上（モンゴル）
5. 同上（中国1）
6. 同上（中国2）
7. 同上（台湾・香港・シンガポール）
8. 同上（フィリピン、タイ、インドネシア、マレーシア）
9. 同上（ベトナム、カンボジア、ミャンマー）
10. 同上（インド、パキスタン、スリランカ）
11. アジアビジネスに於ける米国の影響に関する考察
12. アジアビジネスに於ける欧州の影響に関する考察
13. 日本企業のアジアビジネスを支援する政府・地方自治体の政策
14. 日本企業のアジア戦略（ケーススタディー）
15. 総括

【評価方法】

平常点及び必要に応じて論文内容にて評価する。

【テキスト】

特になし。

【参考文献・資料】

特になし。

現代ビジネス特講 I・II

森下允之

【授業の概要】

特講 I（前期）

1999年から欧州統一通貨ユーロが導入された。世界の主要国が国家主権の重要な要素である通貨主権を放棄したのは歴史上初めてのことであり、画期的である。現在、EUはさらなる拡大と深化を模索しているが、その現状と課題を論ずる。

さらにポーランド、チェコ、ハンガリーなどの中東欧諸国は、社会主義、ソ連圏経済から、資本主義、西欧経済へと180度の劇的な転換を試み、2004年念願のEU加盟を果たした。これら諸国の政治、経済の変化と現状について、日本企業の直接投資先としての魅力と課題を論ずる。

特講 II（後期）

アセアン、韓国は、1980年代後半より97年7月の通貨危機前まで目覚ましい経済成長を達成し、「東アジアの奇跡」と称賞されていた。

そのアセアン経済崩壊の原因と再生の過程を危機の引き金となった通貨下落、各国金融システム、企業債務問題に焦点をあてて論じる。

さらに、プレゼンスを増す中国経済の現状・問題点、日本と東アジアとの共生への方策を論ずる。

【授業の目標】

皮相的なニュース、マスコミに惑わされず、正確に世界のビジネス環境を理解すること。

【授業計画】

関連文献、データを読み、それぞれ 12回にわたって講義する。

【評価方法】

平常点

【テキスト】

シンクタンク、専門誌の記事を適時配布

アントレプレナー特論 I

上野允久

【授業の概要】

日本のベンチャー企業に関連する諸課題を解明しつつ起業のあり方について幅広く研究する。

講義は、具体的事例を豊富に交えて、起業方法論からリスク回避策そして知的財産まで、法学、経営学など複合的な視点からベンチャー企業経営を考察する。受講者には、ベンチャー企業1社の分析を課題として与え、共同研究を行う。

【授業の目標】

起業に関して、知識面から自ら確信できるレベルに到達する。

【授業計画】

1. 日本のベンチャー企業を取り巻く状況概観
2. 起業方法論の学習
 - (1) 起業の種類と特徴
 - (2) 起業に必要な経営資源
 - (3) 起業の具体的方法
 - (4) 起業と資金調達
 - (5) 起業とガバナンス
3. アントレプレナーシップ
4. 起業に関する諸課題の検討
5. ベンチャー企業のマーケティング
6. 起業のリスクマネジメント
7. 株式公開概観
8. ベンチャー企業と知的財産
9. ケーススタディ

【評価方法】

1. 講義時における関心・態度・質問等の評価
 2. 課題（レポート）の評価
- 1および2の総合判定

【テキスト】

起業論テキストブック（上野允久著 三恵社）
単価 1000円 講義開始時に販売

アントレプレナー特論II

都島忠比古

【授業の概要】

新規上場の現場を見ることを通して、起業家にとって成長ステップとして重要度の増す株式公開のあり方、問題点を研究する。

【授業の目標】

「貯蓄から投資へ」の流れの中で今後証券市場へ資金導入が図られる一方で、将来の日本経済を担う新しい企業群の出現が期待されている。起業家達にとっても事業規模の拡大とそのスピードアップの手段として、リスクマネーの導入と株式公開は避けられないテーマとなっている。IPOの現場、特に新興市場での新規上場の実際に照準を合わせてその実態を研究し、問題点の把握に努めるとともに個人投資家の育成、持続可能な社会の一員としての企業のあり方にも触れ、産・官・学の連携による起業のための環境整備も授業の対象とする。

【授業計画】

1. 起業と株式公開
2. 間接金融から直接金融への模索
3. リスクマネー育成
4. 株式公開基準と審査
5. 上場準備現場の実際と受審
6. IOSCOと証券行政
7. 投資家への説明義務とIR
8. SRIとCSR・ISO

【評価方法】

レポートによる

【テキスト】

なし。プリント配布

マネジメントゲームII

増田賀照

【授業の概要】

インターネットを通して複数の参加者と対戦する経営シミュレーションゲームを実施する。製造業をモデル化しており、経営戦略、マーケティング戦略、生産戦略、人事戦略、財務戦略の立案と経営情報の見方を体験的に学ぶ。

【授業の目標】

- 体験的授業により次の経営技法を習得する。
- ・経営資源である人・物・金・情報の有効活用とバランス
 - ・競争市場で勝ち残るための情報分析と差別化
 - ・中期経営計画の策定とその実現に向けた戦略
 - ・株主価値最大化を目指す株式時価総額最大化
 - ・決算書や経営指標に表れる経営情報の理解と活用

【授業計画】

1. 概要説明
2. 取締役会・株主総会
3. 中期経営計画立案
4. 第1期意思決定
5. 第2期意思決定
6. 第3期意思決定
7. 第4期意思決定
8. 中期経営計画修正
9. 第5期意思決定
10. 第6期意思決定
11. 第7期意思決定
12. 第8期意思決定
13. 経営分析
14. 取締役会・株主総会

【評価方法】

参加の積極性とレポートによる

【テキスト】

配布

マネジメントゲームI

増田賀照

【授業の概要】

ひと・もの・かね・情報という経営資源をどのように活用すればよいか、実践的、体験的に学ぶ。流通業をモデル化したマネジメント・ゲームを実施し、一人一人が社長として資材調達、生産設備、販売、経理、人事、決算とすべての経営プロセスを模擬的に体験する。

【授業の目標】

体験的授業により、経営者に必要な判断力、計数力、情報力を養う。

【授業計画】

1. 概要とルール説明
2. 創業準備
3. 第1期ゲーム
4. 第1期決算
5. 原価計算
6. 第2期ゲーム
7. 第2期決算
8. 損益分岐点分析
9. 第3期ゲーム
10. 第3期決算
11. 経営計画策定
12. 第4期ゲーム
13. 第4期決算
14. 経営戦略
15. 第5期ゲーム
16. 第5期決算
17. 経営分析
18. 株主総会

【評価方法】

参加の積極性とレポートによる

【テキスト】

当日配布

異文化コミュニケーション特講I・II

ジョリー幸子

【授業の概要】

当コースはビジネスコミュニケーションの分野を異文化コミュニケーションの理論的背景から分析、考察を行う講座である。従って学生は、21世紀のボーダレス社会において、国際間でのビジネス取引や外資系企業において起こりうる Intercultural Communication 分野に関連する諸問題を取り上げて学習する。

【授業の目標】

最近「異文化コミュニケーション」の分野が元来持つダイナミズムが矮小化されているという意見や、「英会話」と同意義語で使用されているという見方もある。本特講では下記の授業計画に沿って現代社会の持つ「異文化コミュニケーション」のあり方、理論的基盤を検討することを目標とする。

【授業計画】

1. Course Orientation
2. 序章：現代社会と異文化コミュニケーション
3. 第1章：研究の歴史的背景
4. 第2章：研究の方法と視点
5. 第3章：研究と実践
6. 第4章：理論の概念と理論の構築および評価
7. 第5章：メッセージ中心の理論
8. 第6章：対人関係中心の理論
9. 第7章：集団・組織中心の理論
10. 第8章：異文化接触中心の理論
11. 第9章：新理論構築の意義
12. 第10章：情報代謝理論より異文化交流史研究へ
13. まとめ
14. 期末試験（またはレポート）

【評価方法】

期末試験、授業への参加状況、出席率などを総合的に評価判断する。

【テキスト】

異文化コミュニケーションの理論：新しいパラダイムを求めて（石井敏、久米昭元、遠山淳 有斐閣ブックス 2001）

【参考文献・資料】

Global Understanding: Success in International Business (Makoto Shishido, Bruce Allen Seibido 2003)

交渉・説得術特講 I・II

福本明子

【授業の概要】

「交渉」は「説得」の相互作用であるため、相互に関連が高い。「交渉術」「説得術」の発展の歴史や複数の理論を学習し、身の回りにこれらの理論がどのような形で利用・応用されているのか事例を取り上げ、学習します。前期に「説得」、後期には「交渉」を主に学習します。日本語・英語両方の文献を読み進めていきます。

【授業の目標】

理論を学習し、日常生活での作用・応用を分析できるようになることを目指します。

【授業計画】

1. 「現実」とは、社会的現実の構築
2. 「交渉術」「説得術」の発展の歴史
3. 「交渉術」「説得術」各種理論
4. 理論のケーススタディー
5. 理論の調査・分析・発表

【評価方法】

出席率、課題、ディスカッションやプレゼンテーション、授業への参加度合い等を総合して最終評価を行う。

【テキスト】

初回の授業にて発表

【参考文献・資料】

初回の授業にて発表

民法特講 I・II

石畔重次

【授業の概要】

現代の法化社会においては法との関わりなしに企業活動を維持していくことはできない。各種の契約の締結、担保の設定、債権回収など、法とビジネスとは密接不可分な関係にある。民法は最も基本的な私法であり、本講では、具体的なケースや判例を教材にして、契約法、物権法、不法行為法など、企業活動に必須の民法の知識を習得する。さらに、民法の枠にとどまることなく、関連する会社法、倒産法、労働法などにも幅広く触れていく。

【授業の目標】

民法を中心にして、企業人として不可欠な実務的な法的知識を幅広く修得し、あわせて法的思考能力を身につけることを目標とする。

【授業計画】

- 1 民法の基本原則
- 2 所有権その他の物権。物権変動と対抗要件
- 3 契約の成立と効力。契約の無効と取消
- 4 契約各論…売買、贈与、賃貸借、使用貸借、金銭消費貸借、雇用、請負、委任
- 5 債務の履行と保証
- 6 担保物権
- 7 不法行為と損害賠償

【評価方法】

レポートの提出により評価する。

【テキスト】

民法への招待（池田真朗著 税務経理協会）

【参考文献・資料】

ゼミナール民法入門（道垣内弘人著 日本経済新聞社）

国際ビジネスロー特講 I・II

JOLLY, James A.

【Course description】

現在の企業活動は、海外との取引を抜きにしては語れない。商習慣や法制度が異なる海外との取引においては、国内取引には無い解決困難な問題が発生し、慎重なリスク管理が要求される。本講においては、国際売買契約、国際販売・代理店契約、国際ライセンス契約、国際合弁契約などの基本形態に関する知識を習得しながら国際取引の特質について考察していく。

The aim of this course is to provide the candidate with a comprehensive review of the basic concepts of business law currently used in international trade. The student is expected to acquire a working knowledge of the legal principles of international private law customarily applied and practiced in international business relationships and communications.

【Course objectives】

1. To provide candidate with a basic understanding and appreciation of the legal concepts a work in international business transactions.
2. To assist candidate in developing his or her own field of research and to provide further training in the legal concepts applicable to such.

【Course schedule】

Class sessions will consist of lecture and discussion of one unit of assigned text material each week. A schedule of class dates and assignments will be provided. A bilingual approach will be used to facilitate acquisition of Japanese and English vocabulary in text and lecture instruction. Internet research of topics will supplement text materials. The topics to be covered include:

(first term)

1. Orientation - preview of course topics
2. Historical development of international law
3. International Chamber of Commerce and related trade guides
4. UN Commission on International Trade Law and related treaties and conventions
5. World Trade Organization and the Marrakesh Treaty provisions (second term)
6. Orientation - preview of course topics
7. INCOTERMS
8. UNIDROIT
9. UN Convention of the International Sales of Goods (UNCISG)

【Assessment】

Assessment will be based upon attendance and participation, as well as scores in the mid-term quiz and the final examination. Active participation in class will be valued highly.

【Textbooks】

The text materials for this course will be announced at the first class meeting

【Reference】

To be recommended individually as the need arises.

コンフロンテーションとディベート特講 I・II

鈴木哲至

【授業の概要】

2004年秋のブッシュとケリーのコンフロンテーションとディベートはまだ記憶に新しい。この特講では、欧米において古くから教育プログラムに取り入れられているコンフロンテーションとディベートを、ビジネス交渉術としていかにグローバル化の進む企業環境の中で生かしていくかを研究する。

【授業の目標】

ディベートを知的な道具として使う方法、さらにそれを人間的なコミュニケーション技術としてプレゼンテーション、ビジネス交渉術の中で応用する方法の会得を目標とする。

【授業計画】

- 1) はじめに、成功するコンフロンテーションとディベート
- 2) コンフロンテーション概説
- 3) ディベート概説
- 4) 論理的思考
- 5) 情報の収集
- 6) 情報の分析
- 7) シミュレーションの方法、
- 8) プレゼンテーションの方法、
- 9) ディベート各論（立論、反対尋問、作戦、反駁、審査法）
- 10) ディベート準備
- 11) コンフロンテーション、ディベートの実践
- 12) 講評、フィードバック、まとめ

【評価方法】

出席状況、授業態度、プレゼンテーション、ディベート結果、レポートを総合的に評価する。

【テキスト】

ザ・ディベート—自己責任時代の思考・表現技術（茂木秀昭著 ちくま新書）
決定版 ハーバード流"NO"と言わせない交渉術（フィッシャー著/斎藤精一郎訳 三笠書房）

ビジネス日欧比較特講 I・II

小池弘道

【授業の概要】

ヨーロッパの価値観、政治、経済、文化について主な国別に考える。そのうえで、日本との差異を把握する。それを踏まえて日本とヨーロッパの経済市場、労働市場、販売・品質・ブランドなどのビジネス分野における相違点を考察する。

【授業の目標】

日本とヨーロッパ諸国の価値観、政治、経済、文化面での違いを知る共に、その土台の上に成り立っているビジネス社会における仕事面での差異点を理解する。

【授業計画】

EUとして規模を大きくし、影響力を強めつつあるヨーロッパの現状と将来について考える。更に、日本とヨーロッパの主な国について、価値観、政治、経済、文化の相違点をはっきりさせる。その上で、そのような日本とヨーロッパとの違いが、ビジネス社会における仕事の仕方にどのように反映されているかを考察する。

【評価方法】

レポート・単位認定試験の成績と出席状況を総合して評価する。

【テキスト】

必要に応じ資料配布。

【参考文献・資料】

授業の中で、適宜指示する。

経営情報システム特講 I・II

林 誠

【授業の概要】

組織の維持・発展には、組織の内外の環境からいかに情報を収集し、それを処理・出力していくことが必要不可欠である。本講義は、経営に関連する情報を取り扱うしくみをシステムの視点で捉え、経営における情報システムはいかにあるべきかを研究するものである。21世紀はIT（情報技術）の時代とも言われるが、そうした言葉に翻弄されるのではなく、経営に役立つITを活用した情報システムはどのように設計されるべきか、またそのような情報システムの運用・管理のあり方についても研究する。「情報システムありき」からスタートするのではなく、情報システムはあくまでも人間のビジネス活動を補完するツールに過ぎないことを認識し、組織における人間相互の活動と情報システムとの相互作用により、あるべき経営活動を探求することが本講義の目的である。

【授業の目標】

企業組織とITの相互関係について、ケースを中心に理解を深める。企業の経営活動を知識創造、ビジネスプロセスを学習プロセスとしてとらえ、多次元構造の新しいビジネスモデルを追求する。

【授業計画】

経営情報システムを「企業の経営活動を支援し補完するツール」と位置づけた上で、Iでは、組織における人間相互の活動と情報システムとの相互作用に注目しつつ、あるべき経営活動を探求するのに対して、IIでは経営情報システムを、個人やグループの階層構造とIT活用による知的創造活動との融合の面から研究する。

【評価方法】

授業への出席、課題、ディスカッションへの積極的な参加度などを総合的に評価する。

【テキスト】

適時指示する。

ジェンダー特講 I・II

國信潤子

【授業の概要】

ジェンダーに敏感な視点で国内外の男女雇用機会均等の実態、労使関係、常用雇用者と非常勤労働者との格差、家庭的責任を持つ労働者の問題など有償・無償労働の両面について産業社会学的手法で比較検討する。各種資料、統計データ等から、生活、ビジネス、地域などでの性別役割の実態、セクシュアルハラスメント、配偶者間暴力問題の実態、さらに労働環境における男女の組織関係、行動様式および意思決定などにおけるジェンダー間異同を検討する。

【授業の目標】

大学院生各自の問題意識探求のために先行研究を十分検討する。英語専門学術論文を講読できるようにする。修士論文執筆をする。

【授業計画】

ビジネスにおけるジェンダー格差を統計など国際比較可能なデータを検討しつつ、事例的にその組織内ジェンダー格差形成の要因を検討する。学生各自が自分の研究テーマを絞り、それにそってリサーチ、報告を行う。例えばテーマとしては、雇用機会均等法の実施状況、少子化社会への対策などを取り上げ、日本社会のビジネスとジェンダーを概観する。まず、統計資料の検討、各種法制の詳細な検討を行うことが必要である。

【評価方法】

履修態度、出席状況、期末レポート、討議を行うなどこれらの総合評価による。

【テキスト】

学生の問題意識に沿って随時資料提示する。

【参考文献・資料】

随時、資料を提示する。

情報倫理特講 I・II

梅田敏文

【授業の概要】

情報倫理は、どのような体系を持ちどのような課題に挑戦しているのか、また今までの研究の経緯や成果はどのようなものがあるかなどを明確にする。

当講義では、技術倫理、プライバシー、知的財産権、情報モラル、コンピュータ犯罪などの内容を事例に即して検討した後、情報倫理の必要性、情報倫理が新しい学問分野として認識されてきた経緯、情報倫理のフレームワークなどを論じる。

【授業の目標】

情報倫理の必要性を理解し、情報倫理の中でどのような論点が問題とされているのかを学習する。

【授業計画】

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 情報倫理の基礎（1）
- 第3講 情報倫理の基礎（2）
- 第4講 情報倫理の基礎（3）
- 第5講 技術倫理
- 第6講 プライバシー
- 第7講 知的財産権
- 第8講 情報モラル
- 第9講 個人情報保護
- 第10講 コンピュータ犯罪
- 第11講 法律と情報倫理
- 第12講 倫理思想と情報倫理
- 第13講 情報倫理のフレームワーク
- 第14講 まとめ

【評価方法】

レポートで評価する。

【テキスト】

適宜、レジュメを配布する。

【参考文献・資料】

情報倫理（村田潔編） 経営情報学会情報倫理研究部会著 有斐閣

システム開発特講 I・II

三浦信宏

【授業の概要】

情報システム開発のプロセスを理解し、それぞれの開発局面において必要となるソフトウェアの設計技法を習得する。また、ソフトウェア工学的な知識だけでなく、プロジェクトを運営していくための計画・管理技法についても取り上げる。

【授業の目標】

ソフトウェア開発の手順と管理を修得する。

【授業計画】

1. 情報システム開発のプロセス
2. 要件定義技法 I
3. 要件定義技法 II
4. ソフトウェア外部設計技法 I
5. ソフトウェア外部設計技法 II
6. ソフトウェア内部設計技法 I
7. ソフトウェア内部設計技法 II
8. テスト技法
9. 情報システムの運営と管理
10. 情報システム開発プロジェクトの管理 I
11. 情報システム開発プロジェクトの管理 II
12. 情報システム開発プロジェクトの管理 III
13. まとめ
14. 発表と討論

【評価方法】

出席状況、授業中の課題討議、発表等の成績により総合的に評価する。

【テキスト】

ソフトウェア工学 (河村一樹著 近代科学社)

【参考文献・資料】

授業の途中に適宜、資料を配布する。

プログラミング特講 I・II

西荒井学

【授業の概要】

情報資源の管理・運営システムを構築するのに必要なシステム分析からシステム設計に至る範囲内の問題を追究する。特に、コンピュータ処理を実現するのに最も重要であるとおもわれるプログラミング設計部分、言い換えればアルゴリズムの問題を中心に考えていく。

【授業の目標】

情報システムの設計・開発に関わる諸問題を受講者相互の報告、議論を通じて、探求していく。

【授業計画】

- 1) 既存ソフトウェアの機能分析
- 2) ソフトウェアの機能動作試験
- 3) ソフトウェアのカスタマイズ
- 4) 総合検討

各種システムの構築に関わる問題を探究していくための題材として、既存ソフトウェアの機能分析を課題として与えることとする。受講者は、担当部分の機能特性を明らかにした上で、逐次互いに種々の問題点を検討していく。

- 1) 要求定義 (機能設計、情報設計) の問題
- 2) システム設計技法の問題
- 3) プログラム設計技法の問題
- 4) プログラミング技法の問題

各種システムの構築に関わる問題を探索していくための題材として、『システム設計に関する学習プログラム』の作成を課題として与えることとする。受講生は、担当部分のモジュールの特性を考慮した上で、適切なアルゴリズムの展開を図り、最終的にコンピュータ処理段階まで移行させていくことによって、種々の問題点を互いに検討していく。

なお、受講者は、ある程度のコンピュータ利用経験、特にプログラミング経験を持つことを希望する。

【評価方法】

課題の進捗状況、報告内容、ならびに最終レポートによって評価する。

【テキスト】

使用せず

リスク管理特講 I・II

上原 衛

【授業の概要】

インターネットを中心とした情報通信ネットワークを活用した e ビジネスの進展とともに、現在の情報社会はビジネスリスクや通信ネットワークのリスクが増大している。本講ではこれらのリスクを概観し、その発生のメカニズム、リスクの評価・認識・管理について検討する。特に、ネットワーク上でのコミュニケーション時のリスクと情報社会におけるビジネスリスクに焦点を当てる。

【授業の目標】

リスク管理に関して、まず戦略的統合リスク管理を理解した上で、情報セキュリティ管理からビジネスリスク管理に至るまで理解を深めること。

【授業計画】

1. 戦略的統合リスク管理について
2. 情報システム、経営システムにおけるリスクについて
3. 情報社会におけるビジネスリスク、システムリスクについて
4. 情報社会におけるリスクの増大について
5. 情報セキュリティ (コンピュータ・ウイルス)
6. 情報セキュリティ (不正アクセス)
7. 情報セキュリティ (電子商取引・電子マネー)
8. 情報セキュリティ (知的所有権・個人情報保護)
9. ビジネスリスク (ネット告発)
10. ビジネスリスク (不祥事・不正とレピュテーション・リスク)
11. 情報セキュリティ管理 (1)
12. 情報セキュリティ管理 (2)
13. リスク・アセスメント、リスク分析 (1)
14. リスク・アセスメント、リスク分析 (2)
15. リスク・マネジメント

【評価方法】

受講態度、討議・研究内容、提出課題等により総合的に評価する。

【テキスト】

適宜指定する。

プログラミング特講 III・IV

石橋善弘

【授業の概要】

情報化社会においては、問題解決のためにコンピュータを活用することは必須要件である。本科目は、プログラムの設計開発に際して要求される論理的思考能力の養成を目的とする。講義においては、プログラミングの背景となる数学的基礎、プログラミングの基本的な考え方および手法を解説し、また実習による体験を通じて、日常生活、社会活動、研究活動等において有用な諸プログラムを作成する能力を養成する。

【授業の目標】

論理的思考能力の養成およびプログラミング技術の習得

【授業計画】

1. プログラミングの基礎
2. プログラミングに必要な数学的基礎 I
3. プログラミングに必要な数学的基礎 II
4. プログラミング実習 (市販統計ソフトを用いた問題解決、図表化)
5. プログラミング (1) 変数、式、演算子
6. プログラミング (2) 関数
7. プログラミング実習 (変数、式、演算子、関数)
8. プログラミング (3) のり返し
9. プログラミング実習 (のり返し)
10. プログラミング (4) 条件による分岐、フローチャート
11. プログラミング実習 (条件による分岐)
12. プログラミング (5) 作図、グラフ作成
13. プログラミング実習 (作図、グラフ作成)
14. 補足とまとめ

1. プログラミング概論
2. 統計学基礎 I
3. 統計学基礎 II
4. プログラミング実習 (市販統計ソフトを用いた問題解決、図表化)
5. プログラミング実習 (正規分布、二項分布)
6. プログラミング実習 (平均、標準偏差)
7. プログラミング実習 (共分散、相関係数、回帰分析)
8. コンピュータシミュレーション基礎 I
9. コンピュータシミュレーション基礎 II
10. プログラミング実習 (シミュレーション)
11. プログラミング実習 (シミュレーション)
12. プログラミング実習 (ゲーム用プログラム)
13. プログラミング実習 (総括)
14. 補足とまとめ

【評価方法】

出席状況およびレポートまたは試験の成績により総合的に評価する。

【テキスト】

未定

プログラミング特講V・VI

伊藤 雅

【授業の概要】

「プログラミング」=「アルゴリズム」+「データ構造」である。対象を高級言語に限れば、高級言語はさらに手続き型言語と非手続き型言語に分類できる。前者の代表格がCであり、後者のそれがJavaである。プログラミング言語をひとつ決めるとそのプログラミングパラダイム（考え方）が決まる。アルゴリズムやデータ構造もそのプログラミングパラダイムに依存する。JavaはC、C++といった手続き型言語を発展させて誕生したオブジェクト指向言語である。本特講では、C言語のポインタや構造体といった概念からスタートし、C++言語のクラス概念を経て、Java言語で簡単なクライアント/サーバ・アプリケーションが構築できるまでを修得する。

プログラミングの最近の主流はオブジェクト指向プログラミングである。さらに一歩進めたアスペクト指向プログラミングというのも存在する。さて、身近なオブジェクト指向言語のひとつにJavaがある。JavaはC、C++といった手続き型言語を発展させて誕生した言語である。本特講では、CやC++言語をある程度理解しているものとしてJavaについての造詣を深める。GUIプログラミングやネットワークプログラミングといったJavaアプリケーションだけに留まらず、JavaスクリプトやJavaアプレットについても言及する。

【授業の目標】

プログラミング特講Vの目標はGUIプログラミングの理解と実践である。同VIの目標はネットワークアプリケーションの構築である。

【授業計画】

- | | |
|----------------------------|-------------------|
| 1. 開発環境の整備 | 1. 開発環境の整備 |
| 2. C言語の特長 | 2. C言語の特長 |
| 3. ポインタと構造体 | 3. ポインタと構造体 |
| 4. Cによるファイル処理 | 4. C++言語の特長 |
| 5. C++言語の特長 | 5. クラス概念 |
| 6. クラス概念 | 6. Java言語の特長 |
| 7. コンストラクタとデストラクタ | 7. Javaスクリプト |
| 8. 単一継承・多重継承 | 8. インターフェースと抽象クラス |
| 9. C++によるストリーム処理 | 9. イベント処理 |
| 10. Java言語の特長 | 10. 例外処理 |
| 11. インターフェースと抽象クラス | 11. GUIプログラミング |
| 12. AWTとSwingによるGUIプログラミング | 12. ネットワークプログラミング |
| 13. クライアント/サーバ・アプリケーションの構築 | 13. Javaアプレット |
| 14. 補遺 | 14. 補遺 |

【評価方法】

半期に3課題を適宜提示する。そのレポートを提出されたい。
レポートは毎回A、B、C、Dで評価する。
100点満点として、60点以上でC、70点以上でB、80点以上でAとする。

【テキスト】

理工系のJavaプログラミングテキスト（山本富士男著 技術評論社）
補足的にプリントを配付する。

【参考文献・資料】

コア Java 2 Vol.1 基礎編（Cay S. Horstmann, Gary Cornell著 福龍興業訳 アスキー）
コア Java 2 Vol.2 応用編（Cay S. Horstmann, Gary Cornell著 福龍興業訳 アスキー）

会計測定特講I・II

杉本典之

【授業の概要】

企業会計は、ビジネス社会における国際的に共通の情報システムになった。つまり、企業会計制度の国際化が進んだ。これに伴い各国の会計基準は大きく変容している。そこで、各国の会計基準設定主体や国際会計基準理事会等が公表する会計基準や概念的枠組みを比較分析することによって企業会計の現状と課題を確認し、主として会計測定の局面に関わる問題の解決策を考察する。

【授業の目標】

現代社会では、営利目的の企業組織において発達してきた企業会計方式の情報システムが、公的な組織でも非営利目的の組織でも重要視され採用されるようになってきた。情報システムとしての企業会計は、大別して、会計測定のプロセスと会計伝達のプロセス（及び会計監査のプロセス）から成り立っている。この授業では、主として会計測定のプロセスに焦点を合わせて考察し、企業会計の情報システムとしての汎用性と重要性についての理解を深めるように努めたい。

【授業計画】

- 下記の事項について、それぞれ複数回に分けて考察し、かつ討論する。
1. 情報システムとしての企業会計
 2. 企業会計の基本的構造と会計基準の位置づけ
 3. 会計測定の基本的構造と会計基準の機能
 4. 勘定記録と会計情報の有機的関連
 5. 会計情報を搬送する決算財務諸表
 6. 決算財務諸表をめぐる会計基準
 7. 各国の会計基準と国際会計基準
 8. 会計基準の国際的統合

【評価方法】

平常の報告、討論、レポート等を総合して成績を評価する。

【テキスト】

特定しない。下記3点の拙著をコピーして使用する場合もある。（1）引当経理と繰延経理—その構造と機能—（同文館、1981年）、（2）会計理論の探究—会計情報システムへの記号論的接近—（同文館、1991年）、（3）キャッシュフロー計算書—その国際的調和化の現状と課題—（共著、東京経済情報出版、1995年）。

【参考文献・資料】

企業会計に関する単行本や雑誌だけに限ることなく、経済問題を扱う週刊誌や新聞（日刊紙）の経済面も、さらにはインターネットも活用して、各自積極的に情報収集してほしい。必読・必見の参考文献・資料やその入手方法については、学生からの問い合わせに応じて個別具体的に紹介・教示する。

財務会計特講I・II

石川雅之

【授業の概要】

企業の外部利害関係者に対する財務報告を目的とする財務諸表制度について、その理論的構造と制度的問題を研究する。具体的には財務諸表制度を支える各種法令について、それぞれの基本的考え方を批判的に検討するとともに、それぞれの規定がどのような意味をもち、またどのような役割が期待されているのかを検討する。また、現行制度の改善すべき点についても、どのような方法が考えうるのかという点についても検討する。

【授業の目標】

現代企業会計の制度上の問題点がどこにあるのかを理解できるようにすること。

【授業計画】

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 第1回 会計の領域と会計制度 | 第16回 総合償却 |
| 第2回 会計公準と会計主体 | 第17回 減価償却と級数法 |
| 第3回 会計理論の変遷 | 第18回 固定資産取得に係る借入金利息 |
| 第4回 貸借対照表論 | 第19回 無形固定資産の会計1 |
| 第5回 会計制度論における資産評価 | 第20回 無形固定資産の会計2 |
| 第6回 取得原価主義会計の基礎 | 第21回 繰延資産の会計 |
| 第7回 取得原価主義会計の諸問題 | 第22回 繰延資産と研究開発費 |
| 第8回 会計制度上の資産評価基準の変遷 | 第23回 負債会計の総論 |
| 第9回 流動資産総論 | 第24回 負債性引当金 |
| 第10回 棚卸資産評価論 | 第25回 ワラントの会計問題 |
| 第11回 売価還元原価法 | 第26回 資本会計総論 |
| 第12回 有形固定資産の会計1 | 第27回 資本概念の変遷 |
| 第13回 有形固定資産の会計2 | 第28回 剰余金の会計 |
| 第14回 有形固定資産の交換・贈与 | 第29回 自己株式 |
| 第15回 有形固定資産の減価償却 | 第30回 総括 |

【評価方法】

筆記試験およびレポートに平常点を加味して総合的に評価する。
なお、受講に際しては日商簿記2級程度を理解していることが前提となる。

【テキスト】

演習財務会計（五十嵐邦正 森山書店）
財務会計概論（加古宜士 中央経済社）
会計法規集

原価計算特講I・II

三浦克人

【授業の概要】

Iでは、原価計算の比較的新しい分野、たとえばABC/ABM、原価企画、ライフサイクル・コスト、スルーブット会計などを検討する。IIでは、ジョンソンやキャプランが1990年代に提起した新しい管理手法を再点検する。これらを通じて、原価計算手法に関する議論の歴史と最新の論点を整理してみたい。

【授業の目標】

講義でとりあげるさまざまなトピックスに対する議論の歴史と最新の研究動向を整理することを目標とする。

【授業計画】

以下のトピックスについて、内外の研究論文を読み、受講者全員で議論する。受講生の興味に応じて、その他のトピックスをとりあげることもある。

1. ABC/ABM
2. 原価企画
3. ライフサイクル・コスト
4. スルーブット会計
5. バランス・スコアカード

【評価方法】

出席状況、授業への参画、レポートなどを総合して評価する。

【テキスト】

適宜指示する。

【参考文献・資料】

適宜紹介する。

管理会計特講 I・II

吉村文雄

【授業の概要】

グローバル時代、IT時代に要求される管理会計の理論とスキルを鳥瞰し、実務能力と洞察力を培う。管理会計の基礎概念（財務諸表、原価計算、CVP分析、関連原価分析、資本予算等）、利益管理会計（経営戦略、企業価値経営、経営計画、予算、分権制組織ならびに多国籍企業の利益管理）、原価管理会計（製造プロセス、標準原価管理、活動基準原価管理、原価企画と原価改善、ライフ・サイクル・コスト・マネジメント）をカバーする。

【授業の目標】

テキストにそって授業を進めるが、各自のテーマに基づいて進めることもある。いずれにせよ、会計の制度的枠組みと問題解決プロセスの相互依存の関係を把握するように努める。

【授業計画】

- | | |
|------------------------|--------------------|
| 第1回 管理会計とファイナンス部門の役割 | 第16回 責任センター |
| 第2回 管理会計の基礎（管理会計総説） | 第17回 分権組織と管理 |
| 第3回 問題発見のための会計（財務諸表分析） | 第18回 国際管理会計 |
| 第4回 意思決定に役立つ管理会計の基礎理論 | 第19回 企業財務と管理会計 |
| 第5回 経営管理に役立つ管理会計の基礎理論 | 第20回 経営領域別の管理会計 |
| 第6回 企業経営と企業会計 | 第21回 管理会計情報システム |
| 第7回 管理階層別の管理会計 | 第22回 コスト・マネジメントの会計 |
| 第8回 経営戦略の管理会計 | 第23回 原価企画 |
| 第9回 マネジメント・コントロールの管理会計 | 第24回 原価改善と原価維持 |
| 第10回 個別構造計画と個別業務計画 | 第25回 原価管理会計 |
| 第11回 短期利益計画 | 第26回 製造プロセスの管理 |
| 第12回 長期総合利益計画 | 第27回 標準原価管理 |
| 第13回 予算管理の諸問題1 | 第28回 管理会計の新たな課題 |
| 第14回 予算管理の諸問題2 | 第29回 ITと管理会計 |
| 第15回 業績評価会計 | 第30回 環境管理会計 |

【評価方法】

出席状況、課題レポート、期末試験により評価する。

【テキスト】

吉村文雄『組織会計論』森山書店

【参考文献・資料】

講義を進めるなかで、適宜指示する。

会計監査特講 I・II

前川三喜男

【授業の概要】

企業経営において、会計監査がなぜ必要とされるのかを制度論的に説明し、社会的コントロール・システムとしての監査の有効性の理解を深める。

【授業の目標】

会計監査の実務を理解する。

【授業計画】

監査実務について監査契約の締結から監査計画、リスクアプローチ、内部統制の評価、監査手続、監査結果、監査意見形成に至る過程を学習する。

【評価方法】

概ね授業4回ごとに学習した内容に関するテスト（10～15分程度）を実施し、合計3度のテストの結果で評価する。

【テキスト】

なし

レジメで対応

内部監査特講 I・II

友杉芳正

【授業の概要】

社会的公正性の達成を志向する監査が種々の組織体において必要不可欠な用具と認識されている点を理解するため、内部監査が会計、業務、経営の各種情報の信頼性の保証を果たし、システムの合理的評価を行うことを論じる。

【授業の目標】

企業社会においてコーポレート・ガバナンスと企業監視機構のあり方が極めて重要であるため、内部監査が企業経営において戦略的経営活動の適法性と妥当性を求める中で、経済性、効率性、効果性を追求することを理解する。

【授業計画】

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 内部監査特講 I | 内部監査特講 II |
| 1) コーポレート・ガバナンス | 1) 現代内部監査の動向 |
| 2) 内部監査の定義 | 2) リスク・マネジメントと内部監査 |
| 3) 外部監査と内部監査 | 3) 内部統制の有効性の評価 |
| 4) 公認会計士監査と会計監査人監査 | 4) 不正・誤謬への対応 |
| 5) 監査役監査と監査役会監査 | 5) 内部監査規程と内部監査計画 |
| 6) 委員会設置会社と監査委員会監査 | 6) 内部監査部門と内部監査人 |
| 7) 会計参与の現状と課題 | 7) 内部監査のアウト・ソーシング |
| 8) アメリカ内部監査人協会 | 8) 内部監査の実施形態 |
| 9) 日本内部監査協会 | 9) 内部監査証拠 |
| 10) 内部監査基準 | 10) 内部監査報告書 |
| 11) 内部牽制と内部監査 | 11) フォロアップ |
| 12) 内部統制と内部監査 | 12) 内部監査の品質保証 |
| 13) 企業不祥事と内部監査 | 13) 内部監査の国際化 |

【評価方法】

レポートを課し、評価のポイントについては、授業にて説明する。

【テキスト】

講義において、指示する。

【参考文献・資料】

講義において、指示する。

システム監査特講 I・II

浦山章二

【授業の概要】

システム監査は情報システムの信頼性、安全性、効率性の向上を図り、情報化社会の健全化に資するため、情報システムを総合的に点検・評価し、助言・勧告しフォローアップするものであると定義されている。この授業では重要性の高いシステム監査の理論と実践について学習する。

【授業の目標】

情報システムは多様化、複雑化し、それに伴いさまざまなリスクが顕在化している。コンピュータウイルスや、コンピュータを利用した不正処理、電話通信システムや銀行オンラインシステムなど社会インフラシステムのシステムダウンなど、社会生活や経済活動に重大な影響を与える、情報システムにまつわるトラブルが毎日のように発生している。

システム監査はこのような情報システムにまつわるリスクに対するコントロールが適切に整備・運用されていることを担保することを目的としており、情報システムの安全性と信頼性を確保する手段として、その重要性と必要性はますます高まってきている。

この授業ではシステム監査の基本的な理論の理解と、具体的な実践方法について研究し、システム監査の実践に役立てることを目的としている。

【授業計画】

- 1 変貌する情報化社会
- 2 システム監査の必要性
- 3 企業の諸監査とシステム監査の関係
- 4 システム監査に関する諸施策
- 5 システム監査の導入と実施
- 6 評価とフォローアップ
- 7 各種開発環境における監査のポイント
- 8 事例研究

【評価方法】

出席状況、期末試験などにより総合的に評価する。

【テキスト】

情報システム監査実践マニュアル（日本システム監査人協会 編、工業調査会）

経営分析特講 I・II

浅野敬志

【授業の概要】

会計情報による経営分析の基本的な手法についての理解を深め、実際に企業が公表している会計情報をもとに経営分析を行い、企業価値の評価方法や株主価値を高める事業戦略などを習得する。

【授業の目標】

実践的かつ高度な経営分析の手法を身に付け、実際に身近な企業を客観的かつ詳細に分析できるようになること。

【授業計画】

- 第1回 企業評価の必要性
- 第2回 資本利益率 (ROA・ROE) の意義と問題点
- 第3回 株主価値の創造と EVA™
- 第4回 投下資本利益率 (ROIC) と加重平均資本コスト (WACC)
- 第5回 実例を使った EVA™ 計算
- 第6回 実例を使った EVA™ 分析
- 第7回 財務分析の意義と問題点
- 第8回 企業評価モデル (1) - DCF モデル
- 第9回 企業評価モデル (2) - Ohlson モデル
- 第10回 実例を使った企業評価 (1)
- 第11回 実例を使った企業評価 (2)
- 第12回 株主価値を高める事業戦略 (1)
- 第13回 株主価値を高める事業戦略 (2)

【評価方法】

出席状況、課題、単位認定試験の成績によって総合的に評価する。

【テキスト】

必要に応じて、適宜資料を配布する。

【参考文献・資料】

企業分析シナリオ (西山茂著 東洋経済新報社)

公会計特講 I・II

中村雅文

【授業の概要】

公会計に係る会計制度、監査制度について現状を認識し、企業会計制度との違いを通して問題点を理解し、公会計の今後を探る。あわせて、公益法人等周辺領域の会計制度についても考察する。

【授業の目標】

公会計は企業会計とどこが異なるのかを考察することで、公会計改革についての必要性和方向性を理解し、同時に地方自治体が取り組むさまざまな行政手法の改革に会計は如何に関わることができるのかを研究する。

【授業計画】

- | 公会計特講 I | 公会計特講 II |
|-------------------|--------------------|
| 第1回 公会計の意義と目的 | 第1回 行政評価制度 (1) |
| 第2回 公会計の領域 | 第2回 行政評価制度 (2) |
| 第3回 公会計制度の概要 (1) | 第3回 指定管理者制度 |
| 第4回 公会計制度の概要 (2) | 第4回 包括外部監査制度 (1) |
| 第5回 公会計と企業会計 (1) | 第5回 包括外部監査制度 (2) |
| 第6回 公会計と企業会計 (2) | 第6回 財政制度の概要 (1) |
| 第7回 公会計と企業会計 (3) | 第7回 財政制度の概要 (2) |
| 第8回 独立行政法人の会計 (1) | 第8回 一般会計と特別会計 (1) |
| 第9回 独立行政法人の会計 (2) | 第9回 一般会計と特別会計 (2) |
| 第10回 公益法人等の会計 (1) | 第10回 公会計改革の現状 (1) |
| 第11回 公益法人等の会計 (2) | 第11回 公会計改革の現状 (2) |
| 第12回 公益法人等の会計 (3) | 第12回 公会計原則の概要 |
| 第13回 監査制度の概要 (1) | 第13回 公会計改革の方向性 (1) |
| 第14回 監査制度の概要 (2) | 第14回 公会計改革の方向性 (2) |
| 第15回 予備 | 第15回 予備 |

【評価方法】

出席状況と試験及びレポートで総合的に評価する。

【参考文献・資料】

授業において指示する。

税務会計特講 I・II

森恒夫

【授業の概要】

税務会計に関するテーマのなかから、財務会計と法人税との関連に焦点をあてて、その会計処理および表示に関する諸問題について検討する。これをとらえて、法人税法の基本的内容を学ぶ。

【授業の目標】

税務会計の中心的領域をなす『法人所得税務会計』を主題として、その仕組みと体系、専門技術的な内容を、企業の損益計算と貸借対照表計算の実際に即応できるようになる事を目指す。

【授業計画】

以下の項目等につき、講義及び内容の検討と討論を行う。

- (1) 税務会計という語の定義
- (2) 税務会計の基礎理論
課税所得概念
税務会計の公準、原則など
- (3) 課税所得の計算構造
- (4) 税務収益会計
- (5) 税務費用会計
- (6) 税務資産会計
- (7) 税務負債・資本金計
- (8) 組織再編税務・連結納税

【評価方法】

出席状況、討論、レポートなどを総合して評価する。

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

随時資料配布又は適宜指定する。

国際会計特講 I・II

白木俊彦

【授業の概要】

基本的な英文会計の用語からさらに専門領域に関する用語について理解を深めていくとともに、国際会計基準および米国 FASB の会計基準のなかで関心があるテーマを取り上げて財務諸表の用語・様式について各自の報告と理解に対応しながら講義する。必要な範囲で国際会計基準の条文自体も取り上げるほか、実際の英文による財務諸表と国内基準による財務諸表との比較も行う。

【授業の目標】

具体的な米国企業の英文財務諸表を入手し、貸借対照表、損益計算書及びキャッシュ・フロー計算書のそれぞれの課題について検討し会計理論についての理解を深められるようになることを目標としたい。

【授業計画】

講義と演習方式で行う。以下の内容について解説し、用語等については演習をして理解を確認しながら進めていく。

1. 英語による会計用語の確認及び解説
2. 国際財務報告基準の用語の確認及び解説
3. FASB 基準書及び国際財務報告基準の内容
4. アニュアルレポートの理解
5. 上記以外の理論的な文献研究

【評価方法】

講義の中で行う演習結果と出席状況及びレポートの内容も含めた総合評価による。

【テキスト】

講義の中で指示する。

【参考文献・資料】

国際財務報告基準、FASB 基準書
各社ホームページに開示されるアニュアルレポート等

会社法特講 I・II

上田純子

【授業の概要】

会社法は、市場経済と企業環境の動きを機敏に受け止めながら、洋の東西を問わずめぐるしい変遷を見せている。わが国においては、2006年5月から新会社法が施行されることになった。従来の商法（第2編と商法特例法および有限会社法）を一新する内容であるため、従来の商法等の規定と照らし合わせつつ、制度変更点の把握とその趣旨を正しく掴む必要がある。講義の前半ではわが国の新会社法について専門書や研究論文を中心に読みこなすことにより、個別の論点を深く掘り下げたことを目標とする。講義後半では、外国の企業法制にも触れながら（原語での講義が中心となる）、比較法の視点からわが国の会社法制の現状と望ましいあり方を考究することにする。

【授業の目標】

多くの文献にあたりながら、会社法の個別論点を深く掘り下げるとともに、比較法的な考察も行い、いくつかの立法モデルから望ましい会社法制のあり方を探ることを目標とする。

【授業計画】

- 1 新会社法制定の経緯・総論的考察
- 2 株式会社の設立
- 3 株式
- 4 株式会社の機関
- 5 監査・会計
- 6 株式会社の資金調達
- 7 株式会社の定款変更・組織変更
- 8 資本減少
- 9 社債
- 10 企業結合
- 11 委員会等設置会社
- 12 持分会社
- 13 外国会社法に関する基本的文献の講読（英米、ドイツ、フランス、欧州連合、英連邦など）（12～13週）
- 14 比較法的考察（3週）
- 15 まとめ

【評価方法】

講義への出席状況、授業態度、報告やプレゼンテーションの内容、提出物の提出状況と各期末に課されるレポートの内容とを総合的に判断して評価する。

【テキスト】

未定。六法（新会社法が掲載されているもの）を持参されたい。

商事法特講 I

藤田修輔

【授業の概要】

現代企業がビジネスの分野において直面する法的問題は会社法の領域のみでなく様々な分野に及ぶものであるが、その中でも商事法を中心として、現実発生した紛争すなわち判例の事案を個別に分析してゆくことを通じ、企業経営に必要な商事法の知識と事案に対する分析能力を身につける。

【授業の目標】

商事法の知識を身につけることは最低限必要であるが、それよりむしろ個別の事案において法的にどのような考え方を示すべきかを個別事案の分析を通じて身につける。

【授業計画】

平成17年に商法改正の結果成立した「会社法」により、従来の商事法が様変わりしている。そこで授講義に入る前に受講者の新「会社法」に対する概略の理解を固めておく必要があることから、その度合いによっては授業の進行が若干変更になる可能性があるが、現在のところ以下の概要で計画している。

- 1) 株式会社の株式などについての判例の分析
- 2) 会社の組織（株主総会・取締役会・監査役など）をめぐる判例の分析
- 3) 企業の資金調達（新株発行・社債）をめぐる判例の分析
- 4) 企業が行う各種契約（売買・賃貸借・消費貸借などの契約）に関する判例の分析
- 5) 企業をめぐる不法行為責任に関する判例の分析
- 6) 商行為に関わる判例の分析
- 7) 手形・小切手に関する判例の分析
- 8) その他

【評価方法】

筆記試験を行う。評価のポイントは授業において説明する。

【テキスト】

商事法の個別事案・判例の分析を中心に授業を進めるので、テキストは使用しない。ただし、商事法の判例の概略という趣旨で、商法判例集（山下友信・神田秀樹編 有斐閣）を使用する予定である。

【参考文献・資料】

講義において個別に指示する。

商事法特講 II

原 秀六

【授業の概要】

日米独の会社をめぐる法規制の比較検討を行う。

【授業の目標】

日本・アメリカ・ドイツの法規制を外国語で読み込み、正確に理解できる能力を養う。英・独の語学力が要求される。

【授業計画】

以下のテーマにつき検討を加える。

- * 会社の経営機構と法規制
- * 会社の資金調達と法規制
- * 企業結合と法規制
- * 企業会計規制

【評価方法】

毎回作成が義務づけられるレジュメ・授業中のパフォーマンス・出欠状況を総合的に判断して評価する。

演習 I・II・III・IV

研究指導教員

【授業の概要】

演習指導教員の個別指導により修士論文・制作として結実させる。

【授業の目標】

修士論文の作成・完成

【授業計画】

2年間にわたり個人指導をする。

【評価方法】

演習にて明示する。

ビジネス特殊研究Ⅰ

石橋善弘

【授業の概要】

マーケティング、システム論、金融工学、情報数学に関係の深い分野の中から、学生が興味をもつ研究テーマを選び、研究指導を行う。

【授業の目標】

論文作成能力の養成

【授業計画】

テーマに関係の深い著書の講読。
テーマに関係の深い論文の紹介。
研究の進展状況についての報告。
研究成果についての検討、討議。
研究成果の発表技術の習得。
研究成果についての論文作製。

【評価方法】

得られた研究成果によって評価する。

ビジネス特殊研究Ⅲ

吉村文雄

【授業の概要】

現代の企業組織における内部志向的な会計を規定するものとして、コントロールと意思決定の構造化をめぐる問題がある。管理会計行為を導く構造としてのルーチンとルール、そしてそれらと調和のとれた会計手段・会計過程を追究する新たな会計学的視点が求められている。最近検討が加えられている戦略管理の諸要求に応える会計システムの設計に関する問題は新たな研究課題といえる。そのような問題を組織会計論として考察する。

【授業の目標】

管理会計論やその成果としての諸技法と企業の計数管理実務との相互規定関係をしっかりとつかむこと。

【授業計画】

1. 組織会計論の分析視角
2. 組織目標と動機づけ
3. 問題解決とコントロール
4. 戦略的原価削減
5. 戦略的原価管理のシステム・デザイン
6. 競争優位と会計
7. 事例研究
8. サプライチェーン分析
9. 戦略的意思決定の評価
10. 業績測定とコントロール
11. バランス・スコアカードの意義
12. 内部統制論の検討

【評価方法】

課題レポート、論文作成状況などによって総合的に評価する。

【テキスト】

最初の授業で指示する。

【参考文献・資料】

授業中に随時指示する。

ビジネス特殊研究Ⅱ

杉本典之

【授業の概要】

企業会計がビジネス社会における国際的に共通の情報システムになり、会計制度の国際化が進展してきたという歴史的事実と、その根底に貫徹する複式簿記の論理とに注目しつつ、企業会計の基本的構造と社会的機能とを記号論的に多角的に考察していただく。そして、そのような考察の成果を複数の学術論文にまとめ、それらの論文をさらに体系的に編集し直すことによって博士論文を完成させる、というように指導する。

【授業の目標】

現代社会では、営利目的の企業組織において発達してきた企業会計方式の情報システムが、公的な組織でも非営利目的の組織でも重要視され採用されるようになってきた。情報システムとしての企業会計は、大別して、会計測定のプロセスと会計伝達のプロセス（及び会計監査のプロセス）から成り立っている。この授業では、そのような一連のプロセスからなる企業会計の情報システムとしての汎用性と重要性に関する研究成果を論文化するように努めたい。

【授業計画】

各年次共に、博士論文の作成に資するように授業を進める。

【評価方法】

平常の報告、討論、投稿論文等を総合して成績を評価する。

【テキスト】

特定しない。

【参考文献・資料】

必読・必見の参考文献・資料やその入手方法については、学生からの問い合わせに応じて個別具体的に紹介・教示する。

ビジネス特殊研究Ⅳ

ジョリー幸子

【授業の概要】

当コースは、博士課程後期において博士論文のための研究をし、執筆するにあたり、広範囲な異文化コミュニケーション的分野の中から、国際ビジネスに関連する下位テーマを選択し、その当該分野について深い知識と情報を収集し、学術的な論文を作成することを目的とするものである。

【授業の目標】

博士論文作成のために、学生による資料検索、統計の正しいとり方等の適切な指示や指導が与えられ、創造的、且つビジネス・コミュニケーション分野への貢献度の高い論文を完成させたい。

【授業計画】

学生の選択したテーマに関係のある著書、論文などについての指示、紹介
研究の進展状況についての報告と指示
研究成果についての検討、討議、評価
研究成果の発表技術の指導、習得、実践

【評価方法】

上記計画に沿っての学生のオーラル・レポート、関連論文読解、発表能力、論文進展度などについて総合的に判断、評価する。

【テキスト】

履修する個々の学生の選択したテーマに沿って適切な教材を指示する。

ビジネス特殊研究V

森下允之

【授業の概要】

第二次戦後の自由経済体制を推進してきたGATT、WTOにより、モノ、カネ、ヒトの国境を越える移動、配分が自由になり、現在はグローバルなメガ・コンペティション時代といわれる。しかしながら、多角、無差別な自由化は限界に達し、これからは仲間をつくる「(地域)自由貿易協定」-FTA-が世界的な流れとなっている。

ビジネス特殊研究Vでは、アジア、ヨーロッパ、アメリカにおけるFTAの状況を内外の論文統計を使い調査し、本邦企業の海外戦略に及ぼす影響を分析する。

【授業の目標】

博士論文の作成、完成

【授業計画】

各年次共に、博士論文の制作に資するように授業を進める。

【評価方法】

平常の報告、討論、投稿論文等を総合して成績を評価する。

【テキスト】

特定しない。

【参考文献・資料】

必読・必見の参考文献・資料やその入手方法については、学生からの問い合わせに応じて個別具体的に紹介・教示する。

ビジネス特殊研究VII

藤井正志

【授業の概要】

金融業の情報開示制度、銀行業と証券業をはじめとする業際間の規制、銀行グループの金融コングロマリット化とその検査および監督体制の日米比較を通して、望ましい銀行規制・監督体制および金融システムのあり方について研究する。

【授業の目標】

金融業の情報開示制度、銀行業と証券業をはじめとする業際間の規制、銀行グループの金融コングロマリット化とその検査および監督体制の日米比較を通して、望ましい銀行規制・監督体制および金融システムのあり方を考える。

【授業計画】

参考書および論文の講読
研究の進展状況に関する報告
研究成果についての報告・検討

【評価方法】

平素の取り組み姿勢および研究成果によって評価する。

【テキスト】

適宜指定する。

ビジネス特殊研究VI

國信潤子

【授業の概要】

この講座は学部科目の産業社会学へジェンダーへの延長上にある内容である。学生各自の問題意識に沿ってテーマ、講読資料を決定する。英語資料の講読も必須である。内容として日本の雇用環境における雇用均等施策の実態、職場、家族、地域におけるジェンダー関係分析、起業と男女の家族的責任などがある。また国際支援活動におけるジェンダー視点からの事例研究特にアジア・太平洋諸国の国際的NGO活動研究も可能である。

【授業の目標】

日本のアジア太平洋地域での位置づけをみると先端的技術、経済活動においては主導的位置にあるが社会的な男女労働者の関、外国人労働者の地位などをみると極めて多くの問題がある。これらの問題を学生の問題意識にあわせて講義・資料講読、学生発表を行い、実態を理解してゆくことを目的とする。

【授業計画】

- 1) 開発社会学という領域とは
- 2) 日本の国際開発協力の概要
- 3) 開発理論の歴史的展開
- 4) アジア近隣諸国の社会的状況：国連統計資料分析
- 5) 国際協力活動の実態と問題点：ジェンダー視点からの分析

【評価方法】

出席状況、報告内容、討議貢献度、主体的参加度、期末レポート

【テキスト】

ジェンダーと開発 (田中他 国際開発出版会)

【参考文献・資料】

開発社会学 (恩田 ミネルヴァ書房)

ビジネス特殊研究VIII

梅田敏文

【授業の概要】

コンピュータをベースとした情報学と、哲学的な倫理学を基礎にもつ情報倫理は、技術的な観点からのアプローチや、人文科学・社会科学の観点からのアプローチなど多彩な取り組みが行われている。ここでは、さまざまな論点を体系的に把握するアプローチを論じる。

【授業の目標】

受講者の個別の要望に対応して、情報学や情報倫理に関するテーマを提供する。

【授業計画】

個別指導を行う。

【評価方法】

コースへの参加状況と調査研究の進展度で評価する。

【テキスト】

必要に応じてレジュメなどを配布する。

ビジネス特殊研究IX

真田幸光

【授業の概要】

本授業は担当教員が行うビジネス研究科前期課程を履修していることを前提に、

- (1) 国際経済情勢の分析
- (2) 国際情勢下に於ける日本経済の現状分析
- (3) 日本の国際経済外交戦略に於ける分析と考察

を行った上で、東アジアの安定的システム構築に向けた「具体策」を策定していくこととする。従って、単なる机上の空論ではなく、日本政府や国際機関等に対して提言を行うことを念頭に授業展開を行うこととする。

【授業の目標】

本授業では院生がビジネスマンの視野から見たアジア経済、就中、東アジア経済の発展の方向性を議論、その上で今後のアジア経済のあり方について具体的なアクションプランを作成する能力をも体得できるようにすることを目標としている。

【授業計画】

1. ガイダンス及び本授業の目的等の再確認
2. 世界経済の潮流 (概観説明)
3. 国際経済下に於ける日本経済に関する現状認識 (概観説明)
4. 日本の経済政策に関するディベート
5. 日本の外交政策に関するディベート
6. 国際機関にあり方に関するディベート
7. 東アジア情勢に関する現状認識 (概観説明)
8. 東アジアの課題と今後の展望に関するディベート
9. これ以降は各院生がそれぞれ具体策・提言書作りに向けた個別準備に入る。

そして、授業の最終段階では授業内発表を行い、また担当教員が優れた提言が出たと判断する場合には、内閣府 and/or 国会議員に対する提言発表を行う。

【評価方法】

授業に於ける議論や文章を参考としつつ最終的に作成される「具体策」の内容を以って評価する。

【テキスト】

特になし。

【参考文献・資料】

- * モノグラフ・シリーズ7 「北東アジア開発銀行 (NEADB) の創設と日本の対外協力政策」 (東京財団)
- * 韓国経済の解剖 (文真堂)
- * モンゴル/市場経済下の企業改革 (新評論)
- * 早わかり韓国 (日本実業出版社)

ビジネス特殊研究X

石川雅之

【授業の概要】

財務会計分野のトピックについて履修者それぞれが研究テーマを選択し、そのテーマに沿って進める。

【授業の目標】

博士論文の執筆

【授業計画】

履修者それぞれの研究テーマについての発表をもとに討論を行う。

【評価方法】

研究成果の進捗・内容によって総合的に評価する。

ビジネス特殊研究 XI

JOLLY, James A.

【Course description】

The aim of this course is to provide the candidate with expanded studies into the growing body of law from customary practice and from international agreements as is being currently used in international trade. The student will be asked to maintain daily search of current periodicals to note stories related to the currently discussed topics. A primary purpose of this study is to become knowledgeable to the trends of international law development.

【Course objectives】

1. To provide candidate with introduction and exposure to the various sources of developments in international law and to access legal research materials.
2. To provide guidance to candidate in the development and progressions of his or her chosen research topic.

【Course schedule】

Class sessions will consist of lecture and discussion of one unit of assigned text material each week. A schedule of class dates and assignments will be provided at. A bilingual approach will be used to facilitate acquisition of Japanese and English vocabulary in text and lecture instruction. Internet research of topics will supplement text materials. The following topics to be specially covered, in addition to other related topics as the student may find helpful in the course of study:

1. Orientation - preview of course topics
2. Regulations and trade guides of the ICC
3. UNCITRAL treaties and drafts
4. European Community trade laws
5. WTO agreements and conventions

【Assessment】

Assessment will be based upon attendance and participation, as well as scores in the mid-term quiz and the final examination. Active participation in class will be valued highly.

【Textbooks】

The text materials for this course will be announced at the first class meeting.

【Reference】

To be recommended individually as the need arises.

文化創造総論（異文化理解と創造）

榎田勝利 島田修三 清水良典 皆川修吾

【授業の概要】

主体的かつ創造的な表現に必要な人間性や知的な奥行き、そして日本の伝統文化への造詣、また国際交流に必要な異文化理解や現状認識、それに実践的処理能力など、より高度な文化創造への素養や姿勢、加えて人間の感性や理性に働き掛ける心理的・社会的状態など文化創造の根元について学ぶ。

(オムニバス方式)
(島田教授) 日本文化の伝統的特質を古典文学の表現を通して学び、日本人が歴史的に培った固有性およびグローバルな普遍性への志向を探る。
(清水教授) 現代日本における多様化しグローバル化した文化状況を現代文学の表現を通して学び、日本固有の文化創造の可能性を考える。
(皆川教授) 地球存続に必要なグローバル共生文化の涵養プロセスと共生文化の理念を軸とした異文化理解や現状認識の術を学ぶ。
(榎田教授) 国際交流の実践に必要な素養や姿勢を学び、創造されつつあるグローバル市民社会の現状を検証し、発展的に将来像を探る。

【授業の目標】

文化創造研究科での学習に必要な基本的な素養や姿勢を修得すること。

【授業計画】

- 第1回 日本古典文学における伝統と文化の意識の発生
- 第2回 日本古典文学における中国文学の受容とその独自の再編
- 第3回 日本古典文学における文化的独創性の獲得
- 第4回 近代文学の文体について
- 第5回 言文一致運動期の文体模索について
- 第6回 現代文学の文体実験について
- 第7回 文化とは何か ー文化の必要性和文化変容条件
- 第8回 多元文化（異文化）間コミュニケーション ー文化相対主義の有効性と限界
- 第9回 グローバリゼーションとグローバル・ガヴァナンス ー相互依存の管理体制
- 第10回 国際社会の変容とシビリアン・パワー
- 第11回 シビリアン・パワーとしてのNGO
- 第12回 シビリアン・パワーの現状と将来

【評価方法】

出席点および各教員の講義ごとに1200字のレポートを課し、総合的に評価する

【テキスト】

授業中に適宜、プリントを配布する

【参考文献・資料】

各講義ごとに授業中に指示する

文化創造特論Ⅱ（東洋文化論）

角田達朗

【授業の概要】

日本及びアジアの文化的基盤を形成している中国思想の影響の諸相を比較検討したうえで、東洋文化の特質を時に舞台芸術も材料としながら学ぶ。

【授業の目標】

東洋文化の特質を理解するとともに、比較文化の視点から文化現象を解説する能力を養う。

【授業計画】

英雄、それは超人的な活躍を見せる存在であり、神と人との中間に位置する者とも見なされるとともに、人々の多様な願望を映し出す鏡となる。この授業では、中国と日本、古典と現代という縦横の比較を軸として様々な英雄像について考察する。

- 第1～4回 『今昔物語集』に見る安倍清明像
- 第5～7回 『搜神記』に見る左慈像
- 第8回 夢枕漢『陰陽師』に見る安倍清明像
- 第9回 岡野玲子『陰陽師』に見る安倍清明像
- 第10回 滝田洋二郎監督『陰陽師』に見る安倍清明像
- 第11回 能『鉄輪』に見る安倍清明像
- 第12回 実相寺昭雄監督『故郷は地球』に見るウルトラマン像

【評価方法】

レポート・平常点

【テキスト】

プリントを配布する。

【参考文献・資料】

授業内で適宜指示する。

文化創造特論Ⅰ（西洋文化論）

杉本一直

【授業の概要】

ロシア・東欧を含めた西洋現代文学の代表作品を解説する。各作品に現れている思想や構造の分析を通して、現代の西洋文化の根底に流れるさまざまな形而上の問題提起を明らかにする。

【授業の目標】

現代西洋文学に内在するいくつかの基本的主題を理解する。

【授業計画】

- 第1回、第2回 ロシア人作家V.ナボコフの作品を取り上げる。「過去と現在との混交」、「記憶と現実との相克」といったテーマかどのような形で具現化されているかを探る。
- 第3回、第4回 アルゼンチン人作家J.L.ボルヘスの作品を取り上げる。形而上的な思考の遊びに、フィクションの具象性が付与されていく創作過程を分析する。
- 第5回、第6回 アイルランド人作家S.ベケットの作品を取り上げる。「死」「無」「消失」へと向かう退行運動のなかで言葉が生成していくという、逆説的な創作方法を分析する。
- 第7回、第8回 ポーランド人作家S.レムの作品を取り上げる。SF小説の枠のなかで「他者」という概念が異様なまでに巨大化し、主体を圧迫していく構図を分析する。
- 第9回、第10回 チェコ人作家F.カフカの作品を取り上げる。「不条理」、あるいは「迷宮」といった言葉でしばしば形容されるカフカの作品世界を、幻想小説のひとつの原型として定義づけることを試みる。
- 第11回、第12回 アメリカ人作家P.オースターの作品を取り上げる。犯人も事件も存在しない形骸化された推理小説を通して、主人公を「存在と非存在の境界線」へと導く独自の物語構造を分析する。

※受講生は担当教員の指示に従って「研究ノート」を作成し、提出する。

【評価方法】

上記の「研究ノート」提出と出席状況により評価する。

【テキスト】

ロリータ（ナボコフ 新潮文庫）、ソリスの陽のもとに（スタニスワフ・レム ハヤカワ文庫）ほか。

【参考文献・資料】

授業において随時指示する。

文化創造特論Ⅲ（国際映画論）

平野勇治

【授業の概要】

世界の映画文化を国際的な異文化交流の視点から捉え、それぞれの国の文化特性を比較しつつ、それが普遍的な映画表現を介して受容されていく現実と将来の可能性について考える。

【授業の目標】

映画独自の表現方法を理解し、それを通じて異文化についての認識を深めること。

【授業計画】

1. 授業内容について概説する。
2. 最初期（発明直後）の映画における異文化の扱い方を概説する。
3. 異文化社会において活動した映画人を、映画史的側面をふまえて概説する。
4. 異文化を扱ったさまざまな映画について、具体的に概説し、討議する。
5. 全体のまとめを行う。

【評価方法】

出席状況、課題への対応を考慮しつつ、最終的には学期末レポートにより評価する。

レポートのテーマについては、授業内で提示する。

【テキスト】

特になし。

【参考文献・資料】

授業内で随時示す。

文化創造特論Ⅳ（メディア表現論）

川澄未来子

【授業の概要】

進展著しいコンピュータグラフィックス等の電子メディアを主な手がかりとして、メディア表現の具体的な技術や方法、芸術的特質や今後の可能性について、理論と実践の両面から多角的に学ぶ。

【授業の目標】

実際の制作でどのようにして表現を扱っていくのかを具体的に学びながら、マルチメディア検定2級レベルの知識習得を目指す。

【授業計画】

画像・映像教材、電子的な教材などを利用して、次のトピックスについて考察を深める。

- (1) コミュニケーションデザインの概念
- (2) マルチメディアコンテンツデザイン
- (3) コミュニケーションデザインの方法
- (4) コンテンツデザイン制作の実際
- (5) メディア環境とデザイン
- (6) マルチメディアデザインにおける人間要素
- (7) 知的所有権と表現

【評価方法】

出席状況、受講態度、提出課題、試験の総合評価によって決める。(評価点の配分は授業にて説明する。)

【テキスト】

コミュニケーションデザイン編マルチメディア標準テキストブック (CG-ARTS 協会)

文化創造特論Ⅵ（言語文化論）

中野弘三

【授業の概要】

言語に文化や社会のあり方がどのように反映されるかを、異文化接触による言語の変化や語彙体系の変化などを通して考察する。日英語の歴史や借用語が考察の中心となる。

【授業の目標】

異文化接触や社会状況の変遷によって言語がどのように変化するか、また、言語使用者が属する社会の体制や文化が言語にどのような影響を与えるかについて理解を深める。

【授業計画】

- <異文化（言語）接触と言語>
1. 異文化（言語）接触と言語の変化
 2. 異文化（言語）接触と英語の発達
 3. 日本語の語彙に見られる異文化（言語）接触の影響
- <言語と文化>
4. 言語と言語使用者が属する社会の文化との関係
 5. 言語に反映された社会の変化
 6. 言語相対性 (linguistic relativity)

【評価方法】

平常点・課題などにより評価する。

【テキスト】

プリントを使用。

【参考文献・資料】

Pragmatics (1996 G. Yule / Oxford University Press)
Language, Society and Power (1999 L. Thomas et al. / Routledge)
An Historical Study of English (1991 J. Smith / Routledge)
Language and Culture (1998 C. Kramsch / Oxford University Press)
Watching English Change (1994 L. Bauer / Longman)

文化創造特論Ⅴ（アジア文化論）

チョ スルソップ

【授業の概要】

仏教を土壌としてかたちづけられてきたアジア諸地域文化の本質を、南アジア文化圏、東南アジア文化圏および東アジア文化圏に大別し、各文化圏の社会と歴史、思想と宗教の領域を対照することにより解明していく。

【授業の目標】

仏教の進化および伝播の様相を通してアジア諸地域文化の核心を究明する。

【授業計画】

- 1) 『ウバニシャッド』とインド哲学
- 2) パラモン教と仏教、ジャイナ教
- 3) 『南海寄帰内法伝』の世界1
- 4) 『南海寄帰内法伝』の世界2
- 5) 南伝仏教と北伝仏教
- 6) 三蔵法師と『西遊記』の世界1
- 7) 三蔵法師と『西遊記』の世界2
- 8) 顕教と密教
- 9) 『冥報記』中の仏教説話
- 10) 貴族仏教と大衆仏教
- 11) 『三国遺事』中の仏教説話
- 12) 比叡山の天台宗と高野山の真言宗
- 13) 『日本霊異記』中の仏教説話

【評価方法】

出席、授業のための準備、レポートを総合して評価する。

【テキスト】

プリント中心

【参考文献・資料】

ウバニシャッド (講談社学術文庫)
南海寄帰内法伝 (義浄 法蔵館)
西遊記 (吳承恩 岩波文庫)
冥報記の研究1・2 (勉誠出版)
三国遺事 (一然 明石書店)
日本霊異記 (景戒 講談社学術文庫)

文化創造基礎Ⅰ（文学表現論）

早川由美

【授業の概要】

日本古典文学の代表的なテキストをたどりながら、古典に現れた特長的な文学表現の諸相に検討を加える。また、現代の文学表現に影響を与えている表現的特質について、相互のテキストを比較しながら、その具体的な関係を学ぶ。

【授業の目標】

日本古典文学作品の創造の仕方の一つである「パロディ」の創作方法について理解する。

【授業計画】

第一講義 授業の方針の説明。
第二講義 『徒然草』『伊勢物語』の概説、及びそれを典拠とする作品。
第三講義から第十五講義は、具体的に『伊勢物語』『徒然草』を典拠として、小説、随筆、演劇、俳諧などにおいて俗化したり、男女の逆転を起こしてみたり、続きを想像したりした作品をいくつか取り上げて、解説講義を行う。

【評価方法】

レポートの評価をもってする。

【テキスト】

徒然草

文化創造基礎Ⅲ（映像表現論）

一尾直樹

【授業の概要】

映像表現の作品、特に映画における表現の固有の性格や方法を、主として日本映画史をたどりながら考察し、同時に時代状況や時代の芸術的思潮を敏感に反映した代表的な映画理論の変遷をもとらえていく。

【授業の目標】

映画作品を分析的に見ることで、映画共通の表現法やその作品独特の表現法を発見し、言語化できるようにする。

【授業計画】

- 映画分析の方法1：シナリオの構成を見る
映画分析の方法2：撮影を見る
a) 構図について
b) レンズについて
c) カメラの動きについて
映画分析の方法3：光（照明）を見る
映画分析の方法4：編集を見る
映画分析の方法5：非劇映画（個人映画・実験映画）の分析

【評価方法】

レポートと出席状況による。

文化創造基礎Ⅱ（創造表現論）

小倉 斉

【授業の概要】

主として文学的な韻文および散文のテキストを教材として、創造的行為としての文学表現を構成する題材・モチーフ・テーマ・思想・方法・レトリック等の多角的な観点からつぶさに検証し、創造表現の全体像を学ぶ。

【授業の目標】

創造表現の全体像を学ぶために、近代日本の怪談・奇談の系譜をたどることを通して、近代における「物語」の変容・行方について検証・考察し、物語分析の方法を実践的に身につける。

【授業計画】

- （物語の行方—怪談・奇談を中心に—）
1 〈牡丹燈籠〉物語の系譜と三遊亭圓朝の「近代」
2 ラフカディオ・ハーンの「物語」
3 『夜窓鬼談』の世界
4 『夜窓鬼談』の継承者たち—芥川龍之介・田中貢太郎・澁澤龍彦—
5 怪異譚の時空間—漱石・科学・時間—
6 妖異の絵図—泉鏡花の物語世界—

【評価方法】

授業への参加状況、発表およびレポートの内容によって総合的に評価する。

【テキスト】

怪談牡丹燈籠（三遊亭圓朝 岩波文庫）、怪談・奇談（小泉八雲 講談社学術文庫）、夜窓鬼談（石川鴻斎著 小倉斉・高柴慎治訳註 春風社）、妖婆・アグニの神（芥川龍之介 プリント）、田中貢太郎 日本怪談事典（東雅夫編 学研M文庫）、日本怪談大全Ⅱ・幽霊の館（田中貢太郎 国書刊行会）、ねむり姫（澁澤龍彦 河出文庫）、うつろ舟（澁澤龍彦 福武文庫）、倫敦塔・幻影の盾 他五編（夏目漱石 岩波文庫）、高野聖・眉かくしの霊（泉鏡花 岩波文庫）

文化創造基礎Ⅳ（ディベート技法論）

渡辺真澄

【授業の概要】

基礎技術として、立論の立て方、尋問の仕方、反駁・反論の仕方、試合準備の仕方、すなわち、情報収集方法や効果的なディベート技法などを指導する。

【授業の目標】

ディベートという“科学的検証のプロセス”を理解し、実践する。つまり、“ある仮説から論理的に導き出された結論を、事実の観察や実験の結果と照らし合わせて、その真偽を確かめる”検証のプロセスをオーラル・コミュニケーションを通じて実践、習得することを目標とする。

【授業計画】

ディベートの理論と実践を通してコミュニケーション技能の向上を目指す。授業では、ディベートの概要や理論の解説に加え、受講者には実際にスピーチやディベートを行ってもらい、言語運用能力、論理的な思考能力、情報収集能力などの向上を目指す。

- 第1講 ディベートの概要
第2講 スピーチ実践（1）：ラベリング・ナンバリングの意義
第3講 ディベートの試合の流れ：フローシートの取り方
第4講 スピーチ実践（2）：二項対立的テーマスピーチ
第5講 ディベートの論理的推論（蓋然的議論とは？）
第6講 ディベート論題決定のブレインストーミング
第7講 プレゼンテーション実践：グループ発表
第8講 グループリサーチ
第9講 立論の作成と反駁の準備
第10講 ディベート実践（1）：ディベートの試合
第11講 ディベート実践（2）：ディベートの試合
第12講 論題研究（積極的安楽死）
第13講 ディベート実践（3）：ディベートの試合
第14講 ディベート実践（4）：ディベートの試合
第15講 まとめ

"There are only two parts to a speech: You make a statement and you prove it."

(ARISTOTYLE, RHETORIC.)

【評価方法】

出席状況、授業での活動状況、レポートなどを総合的に評価する。

【テキスト】

使用しない。毎回ハンドアウトを配布する。

【参考文献・資料】

頭を鍛えるディベート入門（松本茂著 講談社）

詩歌創作理論Ⅰ

荒川洋治

【授業の概要】

韻文作品を成立させる方法論や、その表現技術を支える修辞学等の創作に関わる基礎的な理論を取り上げ、どのように創作理論が実際の韻文テキストを構築していくか、という問題を創作のプロセスと関連させながら考えていく。

【授業の目標】

詩論の理念や語調が、時代の流れとともに革新されるようすを感じとれるようにする。

【授業計画】

現代詩前期（明治・大正・昭和）の詩論を読む。

- ・漢詩、和歌、俳諧の詩学
- ・岩野泡鳴の詩論
- ・萩原朔太郎の詩論
- ・西脇順三郎の詩論
- ・小野十三郎の詩論
- ・伊藤信吉の詩人論
- ・武者小路実篤と詩語

【評価方法】

出席状況とレポートによる。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

日本文学史（小西甚一著 講談社学術文庫）
 伊藤信吉著作集第4巻（沖積舎）
 詩を読む人のために（三好達治著 岩波文庫）

詩歌創作理論Ⅱ

荒川洋治

【授業の概要】

韻文作品を成立させる方法論・技術論・修辞学に関する体系的理論のうち、主として現代詩に関する代表的なものを検討すると同時に、そうした創作理論と現代詩のテキストとの相互性を多角的に検証し、理論と実作の有機的な関係をとらえる。

【授業の目標】

現代の多様な詩論が、実際の作品にどのように影響したかを検証する力をやしなう。

【授業計画】

戦後の詩論を読む。

- ・小野十三郎の詩論
- ・田村隆一の詩論
- ・高見順「三人の詩について」
- ・栗津則雄の現代詩史

【評価方法】

出席状況とレポートによる。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

現代詩手帖（小野十三郎著 創元社）
 高見順全集第16巻（勁草書房）

散文創作理論Ⅰ

小倉 斉

【授業の概要】

近代・現代の代表的な作家における小説作法や小説観等の創作に関わる理論的な発言を検討しながら、それらが実際の小説作品の上にどのような表現として反映されているか、という問題を解析的に考えていく。

【授業の目標】

日本の近・現代を代表する短編小説の精読を通して、「小説を読む」という行為を意識化するとともに多様な読みを生み出す分析方法や文学研究の理論・方法を実践的に身につける。

【授業計画】

〈短篇小説の方法—作品をどう読み、どう論ずるか—①〉

- 1 『にごりえ』精読（2回）
- 2 『少女病』精読（2回）
- 3 『半日』精読（2回）
- 4 『サラサーテの盤』精読（2回）
- 5 『百萬圓煎餅』精読（2回）
- 6 『馬』精読（2回）
- 7 『風流夢譚』精読（2回）

【評価方法】

レポート、授業への参加状況、レジュメの内容、発表の様子などによる。

【テキスト】

にごりえ（樋口一葉 プリント）、少女病（田山花袋 プリント）、半日（森鷗外 プリント）、サラサーテの盤（内田百閒 プリント）、百萬圓煎餅（三島由紀夫 プリント）、馬（小島信夫 プリント）、風流夢譚（深沢七郎 プリント）

散文創作理論Ⅱ

小倉 斉

【授業の概要】

リアリズム理論をはじめとする、近代・現代の体系的な小説創作理論を検討し、創作主体の姿勢・素材の選択・主題による素材の再構成・プロットの構想・登場人物の設定等の小説を成立させる諸問題との関係を考えていく。

【授業の目標】

日本の近・現代を代表する短編小説の精読を通して、「小説を読む」という行為を意識化するとともに多様な読みを生み出す分析方法や文学研究の方法・理論を実践的に身につける。

【授業計画】

〈短篇小説の方法—作品をどう読み、どう論ずるか—②〉

- 1 『だらだら坂』精読（2回）
- 2 『阿久正の話』精読（2回）
- 3 『陽気な夜回り』精読（2回）
- 4 『幼児狩り』精読（2回）
- 5 『木の箱』精読（2回）
- 6 『樹影譚』精読（2回）
- 7 『レキシントンの幽霊』精読（2回）

【評価方法】

レポート、授業への参加状況、レジュメの内容、発表の様子などによる。

【テキスト】

だらだら坂（丸谷オー プリント）、阿久正の話（長谷川四郎 プリント）、陽気な夜回り（古井由吉 プリント）、幼児狩り（河野多恵子 プリント）、木の箱（金井美恵子 プリント）、樹影譚（丸谷オー プリント）、レキシントンの幽霊（村上春樹 プリント）

映像創作理論Ⅰ

若松孝二

【授業の概要】

多くの創作表現ジャンルの中で、映画という動く映像表現の際立った特性を、その制作方法に関わる基礎的な理論および技術を通して考える。教材として、日本・外国映画の代表的な作品を用い、具体的な検討をしていく。

【授業の目標】

作品を分析することから、映画の作り方を知る。

【授業計画】

映画製作のための作品分析と技法を学ぶ

1. 映画を作ることは？
2. 「寝盗られ宗介」鑑賞
3. 同作品の分析と技法の解明
4. 「エンドレスワルツ」鑑賞
5. 同作品の分析と技法の解明
6. 「キスより簡単」鑑賞
7. 同作品の分析と技法の解明
8. 「最新作TV作品」鑑賞
9. 同作品の分析と技法の解明
10. 映像の表現とカメラ位置について
11. シナリオの作成方法
12. シナリオ実習（2コマ）

【評価方法】

作品を分析したレポートで評価する

創造表現特別演習Ⅰa（詩）

荒川洋治

【授業の概要】

現代詩の優れたテキストを読みこみ、実践的な創作方法や技術を踏まえながら、詩作品の創作演習を行っていく。同時に、創作作品に対する批評も行い、実作と批評の基礎的な知識と技能を学んでいく。

【授業の目標】

詩的言語の発生の事情、行分けによる展開、変転について理解を深める。

【授業計画】

現代詩（戦後）の作品をもとに、実作の基本を学ぶ。

- ・西脇順三郎「旅人かへらず」
- ・草野心平「原音」他、年次詩集
- ・山之口鏡と詩集
- ・田村隆一、黒田三郎の世界
- ・北村太郎、石原吉郎、石垣りんの作品
- ・改行という思想
- ・飛躍とは何か
- ・構成と秩序
- ・ことばの化学

【評価方法】

出席状況とレポートによる。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

西脇順三郎詩集（岩波文庫）
草野心平詩集（岩波文庫）
山之口鏡詩文集（講談社文芸文庫）
現代詩文庫・田村隆一詩集（思潮社）他

映像創作理論Ⅱ

若松孝二

【授業の概要】

映画の創作理論として、モンタージュ理論・リアリズム理論・フォトジェニー論等多くの歴史的成果が挙げられるが、これらをつぶさに検討しながら、現代映画が時代社会や、そこに生きる人間を映像化していく新たな理論の可能性について考えていく。

【授業の目標】

映画の製作面での具体的事例から、各パートの役割を知る。
演出、撮影の練習を行う。

【授業計画】

映画とテレビの表現方法の相違、海外での製作、プロデューサーの役割について探究する。

1. テレビドラマ「ウェディング・ベル」の鑑賞と分析
2. 映画とテレビ製作との相違について
3. 「シンガポール・スリング」鑑賞
4. 海外での映画製作の実態について
5. 「愛のコリーダ」鑑賞
6. プロデューサーの役割について
7. 映画の予算の組み立て方
8. 俳優を指導する方法
9. シナリオの役割について

【評価方法】

作品を分析したレポートで評価する。

創造表現特別演習Ⅰb（詩）

荒川洋治

【授業の概要】

「創造表現特別演習Ⅰa（詩）」に継続する演習授業であり、基本的には上記授業と同じ方法で行う。詩作品の創作演習とその批評の積み重ねを通して、文学作品としての完成度を備えた作品の創造を授業のねらいとする。

【授業の目標】

社会一般の言語と、詩的言語の対立や融和を観察する力をそだてる。

【授業計画】

1970年以降の作品を読みながら、現代詩の実作を試みる。

- ・飯島耕一「ゴヤのファースト・ネームは」
- ・永瀬清子「あけがたにくる人よ」
- ・鈴木志郎康「青草の上に」
- ・井坂洋子、福岡健二、松井啓子の作品
- ・北村太郎「ぼくの現代詩入門」
- ・意味、リズム、呼吸
- ・「あたらしき」とは何か
- ・時代と時間

【評価方法】

出席状況とレポートによる。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

現代詩文庫・井坂洋子詩集（思潮社）他
北村太郎の仕事第3巻（思潮社）
詩とことば（荒川洋治著 岩波書店）

創造表現特別演習Ⅱ a (短歌)

島田修三

【授業の概要】

主として前衛短歌から現代短歌にいたる多様な現代短歌のテキストを読みながら、短歌作品の創作演習を行っていく。また提出された作品には、必ず歌会形式の相互批評・鑑賞を行い、実作と批評・鑑賞の基本的な素養を学んでいく。

【授業の目標】

現代短歌史の具体的な諸相を学び、現代短歌に関する高度な専門知識を培うと同時に、実践的な創作能力を深める。

【授業計画】

- 第1回 授業プログラムの概説
- 第2回 戦後短歌の概説と討議 1
- 第3回 戦後短歌の概説と討議 2
- 第4回 前衛短歌の概説と討議 1
- 第5回 前衛短歌の概説と討議 2
- 第6回 前衛短歌の概説と討議 2
- 第7回 ポスト前衛短歌の概説と討議 1
- 第8回 ポスト前衛短歌の概説と討議 2
- 第9回 ポスト前衛短歌の概説と討議 3
- 第10回 課題創作演習 1
- 第11回 課題創作演習 2
- 第12回 課題創作演習 3
- 第13回～個人指導

【評価方法】

出席状況・課題創作作品の評価・学期最終レポートの評価以上の3点を総合して評価する。

【テキスト】

プリントその他を配付する。

【参考文献・資料】

- ・現代短歌全集 第1巻～第17巻(筑摩書房)
- ・現代歌人文庫(国文社)
- ・現代短歌文庫(砂子屋書房)

創造表現特別演習Ⅲ a (小説・評論)

清水良典

【授業の概要】

主に戦後から現代にいたる小説と評論を読みながら、現代文学の特質を検討しつつ、それを踏まえながら小説・評論の創作演習を行う。同時に相互間の真剣な批評を行い、それを通して批評眼と創作のセンスを高める。

【授業の目標】

修士論文(制作)につながる力量と見識を高める。

【授業計画】

中上健次の小説『枯木灘』と柄谷行人の評論『日本近代文学の起源』をテキストとして購読しながら、並行して、学んだことを各自のモチーフに反映させた創作(10～20枚)を発表しあい、討議する。

- 第1～3回 『枯木灘』購読
- 第4・5回 創作討議
- 第6～11回 『日本近代文学の起源』購読
- 第12・13回 創作討議

なお、前期授業終了後の夏期休暇期間に30枚～50枚程度の創作を、後期に備えて執筆しなければならない。

【評価方法】

皆出席を原則とする。討議の態度と質、創作の質等を総合的に評価する。

【テキスト】

- 枯木灘(中上健次著 河出文庫)
- 日本近代文学の起源(柄谷行人 講談社文芸文庫)
- 上記以外にも、現代作家の作品をできる限り入手し、読むことが求められる。

【参考文献・資料】

- 戦後短篇小説再発見 1～18巻(講談社文芸文庫)

創造表現特別演習Ⅱ b (短歌)

島田修三

【授業の概要】

「創造表現特別演習Ⅱ a (短歌)」に継続する授業であり、授業方法は基本的には変わらない。継続的に義務づけられる、短歌作品の創作演習とその批評・鑑賞によって、より高い水準を示す現代短歌の創作をはかる。

【授業の目標】

「創造表現特別演習Ⅱ a (短歌)」に引きつづき、現代短歌史の具体的な諸相を学び、現代短歌に関する高度な専門知識を培うと同時に、実践的な創作能力を深める。

【授業計画】

- 第1回 授業プログラムの概説
- 第2回 現代短歌新作の読解と討議 1
- 第3回 現代短歌新作の読解と討議 2
- 第4回 自由創作演習 1
- 第5回 自由創作演習 2
- 第6回 現代短歌新作の読解と討議 3
- 第7回 現代短歌新作の読解と討議 4
- 第8回 自由創作演習 3
- 第9回 自由創作演習 4
- 第10回 現代短歌新作の読解と討議 5
- 第11回 自由創作演習 5
- 第12回 課題創作演習 6
- 第13回～個人指導

【評価方法】

出席状況・課題創作作品の評価・学期最終レポートの評価以上の3点を総合して評価する。

【テキスト】

プリントその他を配付する。

【参考文献・資料】

- ・現代の短歌-100人の名歌集(篠弘 三省堂)
- ・現代歌人文庫(国文社)
- ・現代短歌文庫(砂子屋書房)
- ・月刊短歌総合誌「短歌」、「短歌研究」、「歌壇」、「短歌往来」

創造表現特別演習Ⅲ b (小説・評論)

清水良典

【授業の概要】

創造表現特別演習Ⅲ a に継続する演習授業であり、基本的には上記と同じ方法で行う。小説・評論の実践的創作演習と相互間の批評の積み重ねを通して、文学作品としての完成度を備えた作品の創造を目指す。

【授業の目標】

修士論文(制作)に向けて、相互の批評を通して、創作作品を完成させる。

【授業計画】

授業に先立って、50枚程度の創作(評論作品も含む)を提出する。また、第3回終了時、第6回終了時にも、それぞれ30枚程度の創作を提出する。

- 第1～3回 創作合評 1
- 第4～6回 創作合評 2
- 第7～9回 創作合評 3
- 第10～12回 討議

修了作品として100枚程度の創作を仕上げ、公募の新入文学賞に応募する。

【評価方法】

皆出席を原則とする。討議の態度と質、創作の質等を総合的に評価する。

【テキスト】

毎月の各文芸雑誌(『新潮』『群像』『文学界』『すばる』『文芸』等)を購読する。
特に、各誌の新人賞受賞作品は必ず授業で取り上げ、討議する。

【参考文献・資料】

- 戦後短篇小説再発見 1～18巻(講談社文芸文庫)

創造表現特別演習Ⅳ a (童話)

酒井晶代

【授業の概要】

近代から現代にかけての童話を批評的に読むことを通して、童話に対する問題意識を高めながら、創作演習を行う。同時に相互間の真剣な批評を行い、それを通して批評眼と創作のセンスを高める。

【授業の目標】

自らの問題意識や研究方法を明らかにしながらテキストを読み解き、小論文や批評的な創作を仕上げる(詳細は授業時に説明する)。

【授業計画】

演習Ⅳaでは、主として近代童話をとりあげる。「作者/読者」「子ども/大人」「文学/教育」等を着眼点としてテキストを精読し、童話・児童文学のジャンルの特質を考察したい。さらに、創作する(書く)立場からテキストに向き合うことを通して、歴史的評価の再検討や作品の読みかえを試みるのができれば、と思っている。

第1回 授業の進め方、全体計画について

第2回 近代児童文学史をふりかえる(1):明治期

第3回 近代児童文学史をふりかえる(2):大正期

第4回 近代児童文学史をふりかえる(3):昭和戦前・戦中期

第5回~作品の講読とディスカッション(創作演習を含む)

授業は、レポーターが調査・分析したことをレジュメにより報告し、受講者全員で討議する演習形式で進めていく。報告のまとめとして小論文の提出を求めることがある。テーマ設定によっては、小論文に代わって短編創作を課題とすることもありうる。

【評価方法】

出席状況、発表内容や質疑応答の様子、課題などにより総合的に評価する。

【テキスト】

未定。授業時に指示する。

【参考文献・資料】

- ・日本児童文学大系<全30巻>(ほるぷ出版)
 - ・児童文学名作全集<全5巻>(井上ひさし編 福武文庫)
 - ・日本児童文学名作集<上・下>(桑原三郎・千葉俊二編 岩波文庫)
 - ・日本の童話名作選<全2巻>(講談社文芸文庫編 講談社)
- その他の参考文献は、授業時に適宜指示する。

創造表現特別演習Ⅳ b (童話)

酒井晶代

【授業の概要】

創造表現特別演習Ⅳaに継続する演習授業であり、基本的には上記と同じ方法で行う。童話の実践的創作演習と相互間の批評の積み重ねを通して、文学作品としての完成度を備えた作品の創造を目指す。

【授業の目標】

自らの問題意識や研究方法を明らかにしながらテキストを読み解き、小論文や批評的な創作を仕上げる(詳細は授業時に説明する)。

【授業計画】

演習Ⅳbでは、主として現代児童文学をとりあげる。引き続き「作者/読者」「子ども/大人」「文学/教育」等を着眼点としながら、作品と評論を並行して精読し、現代児童文学の方法的到達点と課題を考察、創作の糧とすることを目指す。

第1回 授業の進め方、全体計画について

第2回 現代児童文学の起点をめぐって

第3回~作品と評論の講読、ディスカッション(創作演習を含む)

前期と同様、授業はレポーターが調査・分析したことをレジュメにより報告し、受講者全員で討議する演習形式で進めていく。報告のまとめとして小論文の提出を求めることがある。テーマ設定によっては、小論文に代わって短編創作を課題とすることもありうる。

【評価方法】

出席状況、発表内容や質疑応答の様子、課題などにより総合的に評価する。

【テキスト】

未定。授業時に指示する。

【参考文献・資料】

- ・児童文学名作全集<全5巻>(井上ひさし編 福武文庫)
 - ・現代童話<全5巻>(今江祥智・山下明生編 福武文庫)
 - ・新潮現代童話館<全2巻>(今江祥智・灰谷健次郎編 新潮文庫)
 - ・戦後児童文学の50年(日本児童文学者協会編 文溪堂)
 - ・キャラクター小説の作り方(大塚英志 講談社現代新書)
 - ・きむら式童話の作り方(木村裕一 講談社現代新書)
- その他の参考文献は、授業時に適宜指示する。

創造表現特別演習Ⅴ a (映画)

若松孝二

【授業の概要】

世界の映画を参照しつつ、日本映画の歴史と技法を学びながら、現代的なニーズに応える映画の創作演習を行う。そのためにまずシナリオを書き、相互間で批評を交わしながら、演出のセンスを高めていく。

【授業の目標】

シナリオを各自作成し、その中からすぐれた作品を選び制作を準備する。技術テクニックを向上させる。

【授業計画】

前後期を通して4本の作品を、各自のシナリオをもとに映画製作する。

1. シナリオを各自作成する
2. シナリオの選評と映画製作のためのシナリオを選出する。
3. カメラ、照明器具の役割について
4. グループ別に映画製作に入る
- 5~10. 映画製作
11. 12. 編集作業
13. 音入れ
14. 製作作品の発表と合評

【評価方法】

シナリオ及び監督作品と製作過程における各自の活動で評価する。

創造表現特別演習Ⅴ b (映画)

若松孝二

【授業の概要】

創造表現特別演習Ⅴaに継続する演習授業であるが、シナリオ創作のちに映画の制作演習を行う。撮影と編集の実践演習と相互間の批評の積み重ねを通して、映画作品としての完成度を備えた作品の創造を目指す。

【授業の目標】

映画を完成させる。その作品の発表と合評を行う。

【授業計画】

後期は、前期の方法論を受け継ぎ、さらに2本の作品を別監督で映画製作する。

1. シナリオを各自作成する
2. シナリオの選評と映画製作のためのシナリオを選出する。
3. グループ別に映画製作に入る
- 4~10. 映画製作
11. 12. 編集作業
13. 音入れ
14. 製作作品の発表と合評

【評価方法】

シナリオ及び監督作品と製作過程における各自の活動で評価する。

創造表現特別演習VI a (アニメ・コミック)

とりいかずよし

【授業の概要】

現代のアニメ・コミックの特質と技術を検討しつつ、それを踏まえながらアニメ・コミックの創作演習を行う。同時に相互間の真剣な批評を行い、それを通して批評眼と創作のセンスを高める。

【授業の目標】

実践的創作の習得

【授業計画】

基本的アニメ・コミックの習得

- A 多様化における実態と検証
- B 国内と外国との比較論
- C 売りたいものと売れなくてもよいものとは何か？
(以上アニメ、コミックについてのことです)

【評価方法】

感性、考察、着眼点、説得力

【テキスト】

その都度、授業内容とテーマに合わせて作成

【参考文献・資料】

広範なコミック雑誌、単行本、アニメビデオ等
※入手可能な成否を精査し検討

ライフ・ライティング実作演習 (随筆・自分史)

梅田卓夫

【授業の概要】

3週間程度の限定された期間で、随筆あるいは自分史の実践的な創作を試み、ワークショップ作品として提出する。

【授業の目標】

ある程度文章力のある人が、文章の質をさらに一ランク高めることをめざす。自分の掛け替えのない生活経験や思索を、文学的にも価値のある作品としてまとめるには、どのようなことに留意したらよいか、実作演習によって習得する。

【授業計画】

講義内で文章を書きながら、そのつど相互批評をしていくが、第10回までに各自分のモチーフに従った課題作品(10~20枚程度)を執筆提出する。

- 第1回 ライフ・ライティングとは何か
- 第2・3回 「記憶」を書く
- 第4回 相互批評
- 第5~7回 文体づくりの試み
- 第8・9回 相互批評
- 第10・11回 提出課題作品の相互批評
- 第12回 全体講評

【評価方法】

集中講義なので、皆出席を原則とし、提出された作品の質によって評価する。

【テキスト】

中高年のための文章読本(梅田卓夫著 ちくま学芸文庫)

【参考文献・資料】

講義のなかで適宜指示する

創造表現特別演習VI b (アニメ・コミック)

とりいかずよし

【授業の概要】

創造表現特別演習VI aに継続する演習授業であり、基本的には上記と同じ方法で行う。アニメ・コミックの実践的創作演習と相互間の批評の積み重ねを通して、作品としての完成度を備えた作品の創造を目指す。

【授業の目標】

課題作品の創作を通して、個々の能力を判別する

【授業計画】

実践的アニメ・コミックの創作

- A テーマの見つけ方
- B シナリオ(ネーム)の作り方
- C 作品制作
 - (1) コマ割り
 - (2) 構成
 - (3) キャラ作り

【評価方法】

テーマの発想、感性、自己表現力、絵の巧拙

【テキスト】

その都度作成

【参考文献・資料】

広範なコミック雑誌、単行本、アニメビデオ等
※入手可能な成否を精査し検討

フィクション実作演習 I (短篇小説)

堀田あけみ

【授業の概要】

2週間程度の限定された期間で、短篇小説の実践的な創作を試み、ワークショップ作品として提出する。

【授業の目標】

ことば全般に関する広い関心を保ちつつ、文章による作品の創作を目指す。

【授業計画】

- ステップ1 「ことばとは何か」
 - ことばに関して科学的な見方のトレーニング。
 - 人がことばを身につける過程を理解する。
 - ことばの理解・産出のシステムについて考える。
- ステップ2 「創作と評価」
 - 各人が小説を創作する。
 - 同時に様々な作風の作品を、選り好みせずに鑑賞し、評価する。
- ステップ3 「書くことについて考える」
 - 創作に関する広範なレクチャー。
 - 一方的なものではなく、意見を求めるので、積極的な議論への参加が望ましい。
- ステップ4 「最終課題」

【評価方法】

ステップ2・4の作品をもとに評価する。

【テキスト】

使用せず

【参考文献・資料】

使用せず

フィクション実作演習Ⅱ(童話・ファンタジー)

浜たかや

【授業の概要】

3週間程度の限定された期間で、童話あるいはファンタジーの実践的な創作を試み、ワークショップ作品として提出する。

【授業の目標】

文学創作の1ジャンルであるファンタジーの特殊性を理解し、その創作方法を習得する。

【授業計画】

- 1 書き方の基本についての講義
まずファンタジー作品の書き方の最も基本的な部分を一般論として講義することになるが、これは受講生のキャリアによって、その講義につかわれる時間も、講義の内容もことなる。
- 2 ストーリー・プロット・構成・文体の検討
各受講生が本講座のなかで書く作品の構想について、話させ、受講生全員でそれについて意見を述べさせる。この時間は受講生の数によって変動。
文体についても同じように検討。教室で、作品の一部を書かせて、読みあって、これも各人の意見を述べさせ、そのあと個人的な指導。
- 3 作品の実作
家で書いてきた作品の指導。
- 4 受講生が、いままでに書いた作品があれば、持ってきて読み合い、作者の個性について語り合う。
- 5 作品の実作と批評。各受講生それぞれの指導
この間に、一般論を講義すること、あるいは参考になる作品の紹介などを交える。
- 6 5を繰り返した後、総評

【評価方法】

1 物語をみつける能力、或いは作る能力 2 構成力 3 内容を深める力、あるいは内容をかく表現する能力 4 文章力
以上の4点について採点する。

【テキスト】

特になし

【参考文献・資料】

各受講生が作品を書いていく上で、参考になる作品、あるいは評論、心理学系の本などを推奨する。あらかじめ用意するものはなし。

現代短歌実作演習

篠 弘

【授業の概要】

3週間程度の限定された期間で、現代短歌の実践的な創作を試み、ワークショップ作品として提出する。

【授業の目標】

日常生活の中から、いかにして詩を見出すか。その表現の技術的向上を具体的に推進したいこと。

【授業計画】

定型詩としての短歌、その機能と魅力を理解するところから、表現の基本をつかむ。提出された短歌の添削と批評を実施し、現代短歌のレベルを目指した実作の指導をおこなう。

1. 定型のなりたち
2. 叙事と叙情
3. 心情の具象化
4. 写実の役割
5. 発想の単純化
6. 用語の選択
7. 比喩の活用
8. 個性の発見
9. 生活態度の反映
10. 連作の試み
11. 作品鑑賞の要点

【評価方法】

出席状況、授業内に提出された短歌、さらに題詠の成果等を総合的に評価する。

【テキスト】

生き方の表現 (篠弘著 日本放送出版協会)
疾走する女性歌人 (篠弘著 集英社新書)

現代詩実作演習

荒川洋治

【授業の概要】

3週間程度の限定された期間で、現代詩の実践的な創作を試み、ワークショップ作品として提出する。

【授業の目標】

詩編の配列、構成などの吟味を通して、書き手と読み手の関係をとらえるようにする。

【授業計画】

15編前後の「量的」詩作を試み、一冊の「詩集」を提示する。

- ・ 詩集の著者とは何か
- ・ テーマについての考え方
- ・ 題名と配列
- ・ 割付と活字
- ・ 詩集の余白と美術
- ・ 詩集の形態と流通
- ・ ことばはどこから、詩になるのか
- ・ 詩のつくり方と、こわし方
- ・ 発表と読者

【評価方法】

提出された作品で評価する。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

特になし。

シナリオ実作演習

海上宏美

【授業の概要】

3週間程度の限定された期間で、シナリオの実践的な創作を試み、ワークショップ作品として提出する。

【授業の目標】

抽象的な思考と具体的な手法を往還する発想法を練習する。

【授業計画】

1. 主題を考える
2. 物語の語り手は誰なのかを考える
3. 叙情なのか叙事なのか語り口を考える
4. 物語の場面構成を考える
5. ジェンダーを考える
6. 台詞の役割と分量を考える
7. 始まりと終わりを考える

【評価方法】

出席状況と提出作品で評価する。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

適宜授業内で指示する。

創造表現特講Ⅰ（現代詩）

担当者未定

【授業の概要】
 【授業の目標】
 【授業計画】
 【評価方法】
 【テキスト】

詳細は掲示にて発表する。

創造表現特講Ⅲ（現代小説）

清水良典

【授業の概要】

戦後から現在までの代表的な創作や評論を主な手がかりとして、現代小説の変遷を検討するとともに、文学理論・主題・モチーフ・人物造型・文体といった方法を多角的に検討し、小説は時代の病理や問題をどのように作品化し得るか、あるいはどのように時代を超え得るかという創作方法について学ぶ。

【授業の目標】

各人のモチーフをもとに、現代小説の意欲的な解釈を試みる。

【授業計画】

テキスト購読と講義を主としつつ、相互の討議と調査・報告を課す。

- 第1回 現代文学概論
- 第2～4回 村上春樹を解説する
- 第5～7回 高橋源一郎を解説する
- 第8～10回 村上龍を解説する
- 第11～12回 総括と討議

なお、指定テキスト以外にも、現代文学関係の書籍を大量に読む必要がある。

【評価方法】

出席は皆出席を前提とする。受講態度ならびに討議の積極性、調査・報告の質等を総合的に考慮して評価する。

【テキスト】

- 世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド（村上春樹著 新潮文庫）
- さよなら、ギャングたち（高橋源一郎著 講談社文芸文庫）
- トバース（村上龍著 角川文庫）
- 上記以外は、指示する。

【参考文献・資料】

文学がどうした!?（清水良典著 毎日新聞社）

創造表現特講Ⅱ（現代短歌）

篠弘

【授業の概要】

戦後短歌から前衛短歌にいたる戦後短歌史を踏まえながら、主として1980年代以降の代表的歌人の作品を題材に、その創作理論・主題・修辞といった方法を多角的に検討し、現代をどのように作品化していくかという創作方法について学ぶ。

【授業の目標】

人間の生き方を詠める詩形として、短歌による自己表現の可能性を理解し、自由自在に着手させたいこと。

【授業計画】

- 第1回 近代短歌から現代へ
- 第2回 戦後短歌の運動
- 第3回 第二芸術論議
- 第4回 民衆詩としての短歌
- 第5回 前衛短歌の時代
- 第6回 女性歌人の興隆
- 第7回 リアリズムの変質
- 第8回 主題の獲得
- 第9回 喩的表現の拡大
- 第10回 美意識の深化
- 第11回 文体の確立
- 第12回 口語的発想
- 第13回 アイロニカルトーン
- 第14回 アニミズムの浸透
- 第15回 自然観の変容

【評価方法】

出席状況、授業内の数回の小レポート、学期末の課題レポート等を総合的に評価する。

【テキスト】

現代の短歌—100人の名歌集（篠弘編著 三省堂）

創造表現特講Ⅳ（童話）

酒井晶代

【授業の概要】

近現代の代表的な創作や児童文学論を主な手がかりとして、日本児童文学史を検証するとともに、主題・モチーフ・文体等の方法のみならず、広く社会史や文化史の視点から子ども観の変容を検討し、「子どもの文学」の創作方法とその独自性について学ぶ。

【授業の目標】

理論書の講読を通して、児童文学研究の現状と課題を理解・考察し、自らの研究や創作に応用すること（詳細は授業時に説明する）。

【授業計画】

近年刊行された児童文学（児童文化を含む）関係の理論書から一冊を選び、演習形式で講読していく。児童文学研究は、作家・作品論のほか、読者論やメディア論といった社会・文化史的なアプローチなど、さまざまな文学理論の影響下でその幅を広げつつある。一方で、研究の深まりや多様化とともに、従来の「文学」の枠組みを解体する、より大きな視座の必要性も指摘されるようになってきた。理論書の講読を通して、児童文学をめぐる言説の最前線と現代的課題を考える場としたい。

- 第1回 授業の進め方、全体計画について
- 第2回 児童文学研究の現在
- 第3回～理論書の講読

授業は、レポーターが調査・分析したことをレジュメにより報告し、受講者全員で討議する演習形式で進めていく。報告のまとめとして小論文の提出を求めることができる。

【評価方法】

出席状況、発表内容や質疑応答の様子、課題などにより総合的に評価する。

【テキスト】

未定。授業時に指示する。

【参考文献・資料】

研究＝日本の児童文学＜全5巻＞（日本児童文学学会編 東京書籍）
 その他の参考文献は、授業時に適宜指示する。

創造表現特講V (アニメ・コミック)

とりいかずよし

【授業の概要】

手塚治虫作品とその影響下にある戦後漫画・コミックおよび宮崎駿などのアニメーション作品を主な題材として、広く社会史や文化史の視点も導入しながら、表象文化としてのアニメ・コミックの芸術的特質や機能を考察し、その可能性を生かした創作方法について学ぶ。

【授業の目標】

実践的創作の習得

【授業計画】

- 漫画と漫画の周辺
- A 漫画とテレビの比較
 - B 漫画と映画の比較
 - C 漫画と小説の比較

【評価方法】

感性、表現、創作、将来性等の巧拙
批評の説得力の有無

【テキスト】

その都度対応して作成

【参考文献・資料】

授業の進行に応じ準備

創造表現各論I (詩学)

担当者未定

【授業の概要】
【授業の目標】
【授業計画】
【評価方法】
【テキスト】

詳細は掲示にて発表する。

創造表現各論II (シナリオ論)

海上宏美

【授業の概要】

近現代の代表的なシナリオ作品を主な手がかりとして、放送史をはじめとするメディアの変遷も念頭に置きながら、主題・ストーリー・人物造型・台詞・場面構成などの方法を多角的に検討し、シナリオ表現の特質や創作に関する諸方法について学ぶ。

【授業の目標】

言葉であるシナリオに基づいて表現された作品構造全体において、その基盤となるシナリオの言葉がどのような機能を担っているのかを、構造(主義)・話法・技法(史)などの面から探っていく。

【授業計画】

1. メディアの変遷
2. 観客の変遷
3. テキスト(シナリオ)の位置
4. 話法と人称性の問題
5. 大きな物語と小さな物語の違い
6. 台詞における口語的表現と文語的表現の違い
7. 描く対象(主題)の選択が意味するもの
8. 表象文化・神話作用について
9. 表象されるジェンダーについて
10. 物語と無意識

【評価方法】

出席状況とレポート提出で評価する。

【テキスト】

授業内で適宜指示する。

【参考文献・資料】

授業内で適宜指示する。

創造表現各論III (舞台芸術論)

角田達朗

【授業の概要】

演劇の重要な構成要素である「舞台」の歴史的展開を主な手がかりとして、様々な舞台効果にも目配りしながら、演劇空間あるいは場面転換装置としての舞台の機能や特質とその解説方法について多角的かつ理論的に学ぶ。

【授業の目標】

演劇表現の特質を理解するとともに、古典に対する解釈力を養う。

【授業計画】

能を主な題材として、主題がいかにか演劇的に、また文学的に表現されるかを考察する。授業の方法としては、能の台本(能本と言われる)を読むことと、能の上演のビデオを鑑賞することが中心となる。ただし、舞台芸術は生(ライブ)の芸術であり、生の上演に接することなしに舞台芸術への理解を深めることは不可能である。よって、この授業では1~2本の鑑賞課題も設定する。鑑賞のための経費として3~5千円の公演入場料を必要とする。

【評価方法】

レポート・平常点

【テキスト】

プリントを配布する。

【参考文献・資料】

授業内で適宜指示する。

国際社会貢献研究Ⅰ（国際協力）

榎田勝利

【授業の概要】

「非軍事的なあらゆる手段で途上国の人々を支援する試み」と定義されている国際協力の基礎的な理念、仕組みを検証するとともに、国際協力の新しいアプローチを作り出している背景要因を学ぶ。

【授業の目標】

- 国際協力の理念、活動主体の役割と活動方法、多分野にわたる開発課題の現状を理解し、その課題解決法を提言できること。

【授業計画】

1. 講義のねらいと評価の方法
2. 国際協力の概念
3. 国際協力の新しい潮流
4. 国際協力のアクター（国連、国際機関）
5. 国際協力のアクター（政府援助機関－JICA・OECD、USAID、AFD、CIDA、GTZ、DFID）
6. 国際協力のアクター（NGO、欧米のNGOと日本のNGO）
7. 国際協力の方法（政府開発援助－ODA）
8. 国際協力の方法（地方自治体）
9. 国際協力の方法（NGO、ボランティア）
10. 開発課題と国際協力（貧困、人口、食料、教育、保健、難民、ジェンダー、児童労働、少数民族、環境、都市スラム、開発と保存）
11. 国際協力事業の評価
12. 国際協力の果たす役割

【評価方法】

平常の出席・遅刻状況、毎回の講義の際の貢献度、最終課題レポートにて評価する。

【テキスト】

使用しない。毎回プリントを配付する。

【参考文献・資料】

- 国際協力（下村・辻・稲田・深川著 有斐閣選書）
- 国際協力（功刀達郎編著 サイマル出版会）
- 国際連合の基礎知識（国際連合広報局 世界の動き社）
- 政府開発援助（ODA）白書（2004年版外務省・経済協力局発行）
- UNDP・人間開発報告書（2004年版 国連開発計画編 国際協力出版会）
- 国際協力用語集第2版（国際開発ジャーナル社）
- ボランティア学のすすめ（内海成治編著 昭和堂）

国際文化交流研究Ⅰ（言語研究）

大野清幸

【授業の概要】

言語学の研究対象や研究分野を概観し、日英語の比較研究を通して言語研究の方法を学ぶと共に、新しい言語理論に基づく日英語研究の現状を知ることによって、言語を科学的に分析する視点を学ぶ。

【授業の目標】

理論的枠組みとして「動的文法理論」を用いた研究論文を精読し、「動的文法理論」と「第一言語獲得」の基本を学ぶ。

【授業計画】

- 第1講 PC実践教室において、授業計画指示など。必ず出席すること！
- 第2講 PC実践教室において、「動的文法理論」の関連情報を検索・探索する。
- 第3講 学術論文などを利用して、演習を行う。

【評価方法】

- 出席状況・平常点・課題などによる。
授業においては、基本的に、学術論文を精読し、議論する。
学期末レポート：現代英語に関する研究題材を選び、
- (1) 先行研究を調査し、
 - (2) 仮説をたて、
 - (3) データを採集・整理し、
 - (4) 理論の枠組みで分析し
 - (5) 論文としてまとめ、提出する。

【テキスト】

学術論文。授業時に、指示する。演習を中心に行う。
※授業・課題などにおいて電子メールなどインターネットを利用しますので、インターネット利用を日常化しておいて下さい。理想的には、自宅においてインターネット環境を実現しておいて下さい。

【参考文献・資料】

- 詳細は、授業にて配布する。
- Kajita, Masaru. 1977. Towards a dynamic model of syntax. *Studies in English Linguistics* 5.44-76.

国際社会貢献研究Ⅱ（国際秩序）

皆川修吾

【授業の概要】

「国際秩序の統治」と定義されているグローバル・ガバナンスの概念の国際関係における有効性と限界について研究し、国際秩序が制度化されていくプロセスを経験的に学ぶ。

【授業の目標】

国際秩序を歴史と理論の対話を通して学ぶ。

【授業計画】

- 第1講 国際システムの構造とプロセス
- 第2講 バランス・オブ・パワーの教訓
- 第3講 集団安全保障の挫折
- 第4講 冷戦
- 第5講 権力と国際法
- 第6講 国際連合の役割
- 第7講 相互依存の管理体制の必要性
- 第8講 1) 開発政策
- 第9講 2) 世界経済
- 第10講 3) 国際協力
- 第11講 グローバル・ガバナンスの構造
- 第12講 国際秩序制度化の今後の課題
- 第13講 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績と出席状況との総合評価による。

【テキスト】

国際紛争（ジョセフ・ナイ著 有斐閣）

【参考文献・資料】

- 現代国際関係学（新藤栄一著 有斐閣）
- グローバル・ガバナンス：政府無き秩序の模索（渡辺昭夫編著 東大出版）
- グローバル化とは何か（デヴィット・ヘルド編著 法律文化社）
- 現代国際関係学（新藤栄一著 有斐閣）
- 地球政治の構想（猪口孝著 NTT出版）
- グローバル・ポリティクス（小林誠・遠藤誠治編著 有信堂）

国際文化交流研究Ⅱ（文化探求）

杉本一直 平林美都子

【授業の概要】

20世紀に入って顕著になってきた異文化接触のコロニアリズムやポストコロニアリズムなどの諸問題を、様々な文化批評理論から系統的に学ぶ。

【授業の目標】

文化批評の方法を習得する

【授業計画】

前半（平林担当）Frantz Fanon, Homi Bhabha, Edward Saidらのコロニアリズム、ポスト・コロニアリズム理論を理解する。

なお、英文原書の講読が中心のため、英語力が必要である。

- 1) ポストコロニアリズムと翻訳
- 2) "Translation"
- 3) 「帝国」「サバルタン」「ポジションナリティ」「ナショナリズム」
- 4) "Orientalism"
- 5) "Orientalism"
- 6) "Orientalism"

後半（杉本担当）現代文化におけるポスト・モダニズムの傾向を理解するため、ポップカルチャー、パロディ、メタフィクションについて理論的考察をする。

参考とするテキストは、Joke Hermes "Re-reading Popular Culture", Linda Hutcheon "A Theory of Parody", Patricia Waugh "Metafiction: the theory and practice of self-conscious fiction".

- 7) "Re-reading Popular Culture"
- 8) "Re-reading Popular Culture"
- 9) "A Theory of Parody"
- 10) "A Theory of Parody"
- 11) "Metafiction"
- 12) "Metafiction"

【評価方法】

出席およびレポートによる。

【テキスト】

適宜配布する。

【参考文献・資料】

適宜指示する。

国際文化交流研究Ⅲ（文化翻訳）

CURRAN, Beverley チョ スルソッフ

【Course description】

21世紀の国際社会はグローバル化していく一方、異文化間の違いが表出している。異文化間の相互理解のため、言語・文化翻訳研究を行い、特に英米文化および東アジア文化圏の言語・文化の交通性と異質性を理解し、言語・社会的役割・機能を体系的に学ぶ。

【Course objectives】

このコースの目標は「翻訳研究」を紹介することがある。忠実、文化、思想、架空に関する翻訳理論を調べながら、翻訳の想像、保存、そしてグローバル社会の重要な役割を果たすことを研究する。そして、翻訳のプロセスとクラスディスカッションのように、英語の理解や表現などを上達する目標がある。

【Course schedule】

第1回	Introduction
第2回	異言語翻訳—transparency/foreignization
第3回	翻訳者の日記—think aloud protocol
第4回	翻訳者の役割
第5～6回	映画の翻訳—字幕/subtitles
第7回	メディア・トランスレーション—脚本/adaptation
第8回	翻訳とジェンダーの関係
第9回	フィクションや映画における架空翻訳者—fictional translators
第10回	研究プロジェクトの紹介
第11～13回	研究中
第14回	オーラル・プレゼンテーション
第15回	レポートを提出する

【Assessment】

参加における努力、プレゼンテーションとレポートのように評価することである。

【Textbooks】

受講生の興味関心によって決定する。

国際社会貢献演習 I b（ODA・NGO）

榎田勝利

【授業の概要】

国際交流特別演習 I a（ODA・NGO）に継続する演習授業であり、基本的には上記授業と同じ方法で行う。とくに、ODAとNGOとの連携の現状を学び、理論と実践の整合性を検討する。

【授業の目標】

- ・国際協力NGOのマネジメント、国際協力プログラムの企画・運営・評価法を実践から学ぶ。

【授業計画】

授業は、国際交流特別演習 I a（ODA・NGO）を基礎として、より実践的なODA、NGOの方法論について学ぶ。具体的には、情報収集・調査・分析、協力事業の企画立案、海外における危機管理、フィールドワークの基礎を学ぶとともに、NGOのマネジメント（リクルートメント、リサーチ、企画立案・運営、ファンドレイジング、広報、会計、ボランティア・マネジメント等）についても学ぶ。授業は、講義、調査、発表、討論という形式で受講者全員の参加を基本にしてすすめる。受講者には、国際協力現場でのフィールドワーク、インターンシップ、ボランティア参加をすすめる。

【評価方法】

試験は行わない。出席・遅刻状況、毎回の演習での貢献度、発表・討議の内容を、総合的に評価して採点する。

【テキスト】

- 国際協力プロジェクト評価（NPO法人アークス編 国際開発ジャーナル社）その都度プリントを配布する。

【参考文献・資料】

- NGO運営の基礎知識（A SEED JAPAN/POWER共編 アルク）
- 国際プログラム・オフィサー（GAP（国際公益活動研究会）著 アルク）
- フィールドワークの新技法（中村尚司・広岡博之著 日本評論社）

国際社会貢献演習 I a（ODA・NGO）

榎田勝利

【授業の概要】

政府開発援助（ODA）の基本理念、国際協力スキームの検証と現状、および非政府組織（NGO）の基本理念と特長、実態を学ぶとともに、ODAとNGOとの連携を検討する。

【授業の目標】

- ・日本のODAの理念、方針、具体的な事業体系、実施方法を理解し、具体的なプロジェクトに関して評価できる能力を養う。

【授業計画】

授業では、我が国の政府開発援助（ODA）の中でも、「顔の見える国際協力」といわれる技術協力に焦点をあて、その実践事例を視聴覚教材を用いてODAを考察する。具体的には、技術協力実施機関である独立行政法人「国際協力機構」（JICA）の国際協力スキーム（技術協力、無償資金協力、国際緊急援助、評価、プロジェクト・マネジメント）を検証するとともにJICAが派遣する専門家、青年海外協力隊、シニアボランティア等の活動事例も紹介する。また、授業では、非政府組織（NGO）の基本理念と特徴、現状における課題・問題点等について、NGOの活動事例を視聴覚教材を用いて考察する。さらに、ODAと地方自治体、ODAとNGOとの望ましい連携のあり方についても実践事例をもとに考察する。授業は、講義、調査、発表、討論という形式で受講者全員の参加を基本にしてすすめる。

【評価方法】

試験は行わない。出席・遅刻状況、毎回の演習での貢献度、発表・討議の内容を、総合的に評価して採点する。

【テキスト】

- 連続講義 国際協力NGO（今田克司・原田勝広編著 日本評論者）その都度プリントを配布する。

【参考文献・資料】

- 国際協力の基礎知識（国際協力事業団監修 国際開発ジャーナル社発行）
- 政府開発援助（ODA）白書（2002年版 外務省・経済協力局発行）
- ODA大綱の政治経済学（下村・中川・斎藤著 有斐閣）
- ODAの正しい見方（草野厚著 筑摩書房）
- 日本のODAをどうする（渡辺利夫・草野厚著 NHKブックス）
- NGOとは何か（伊勢崎賢治著 藤原書房）
- NGOダイレクトリー2004（国際協力NGOセンターJANIC編集・発行）
- NGOデータブック2004（国際協力NGOセンターJANIC編集・発行）

国際社会貢献演習 II a（非営利組織）

ブイ トルン

【授業の概要】

非営利組織（NPO）の台頭の背景、定義、役割等の基本的概念を検証するとともに、非営利組織のマネジメント（支援者、マーケティング、財源、広報、事業評価、人材育成等）の実務を検討する。

【授業の目標】

NPO/NGOの発展や組織運営に関する諸要因を分析・検討することによってNPO/NGOにより社会貢献活動および社会的役割を理解すること。

【授業計画】

本演習は国際開発協力活動を行う国内の非営利組織のマネジメントにおける様々な現況や課題を取り上げ、実務的組織発展のために内部要因、外部要因及び社会環境等を分析・検討する。

各組織の年度報告書はじめ資料収集を行い、また可能であればそれぞれの団体より担当者を招き、説明や議論に参加させる。

ワークショップ形式やプレゼンテーション手法を多く活用することによって参加・協力型学習を通して非営利組織運営の可能性を追求する。

院生には修論課題に関連させ議論等を進める。

【評価方法】

演習における参加姿勢、発表等により総合的に評価する。

【テキスト】

- 開講時に参加者全員で協議して決める。

【参考文献・資料】

- 随時参考文献やプリントを配布する。

国際社会貢献演習Ⅱb (非営利組織)

ブイ トルン

【授業の概要】

国際社会貢献演習Ⅱa (非営利組織) に継続する演習授業であり、基本的には上記授業と同じ方法で行う。

非営利組織のマネジメントの実態と問題点を学習する。

【授業の目標】

NPO/NGOの発展や組織運営に関する諸要因を分析・検討することによってNPO/NGOにより社会貢献活動および社会的役割を理解すること。特に海外NPO/NGOの活動・組織運営の手法を理解すること。

【授業計画】

基本的には国際社会貢献演習Ⅱaと同様な授業計画を行う。内容は国際社会貢献演習Ⅱaが国内NGOを取り上げるのに対して、この演習は海外の主なNGOを対象とするものである。英文資料等を基に演習を行う。国際比較により広範的な組織マネジメントを学習できる。

院生には修論課題に関連させ議論を進める。

【評価方法】

演習における参加姿勢、発表等により総合的に評価する。

【テキスト】

開講時に参加者全員で協議して決める。

【参考文献・資料】

随時参考資料、文献やプリントを配布する。

国際社会貢献演習Ⅲb (グローバル政治過程)

皆川修吾

【授業の概要】

国際社会貢献演習Ⅲa (グローバル政治過程) に継続する演習授業であり、基本的には上記授業と同じ方法で行う。国際公共政策「人間の安全保障」の現状とその政治過程を学び、問題点を学習する。

【授業の目標】

国内・国際・グローバルな政治過程を体系的に理解すること。

【授業計画】

講義「国際社会貢献研究Ⅱ (国際秩序)」に併せて、下記のテキストごとに課題を設定し、ディスカッション形式で理解を深める。

【評価方法】

分担部分の発表内容・討議内容、および課題に対するレポートなどを総合して評価する。

【テキスト】

現代が受けている挑戦 (A.J.トインビー著 新潮文庫)
文明の衝突と21世紀の日本 (S.ハンチントン著 集英社新書)
暴走する世界 (A.ゲデンズ ダイヤモンド社)

【参考文献・資料】

外交フォーラム (外務省編 都市出版社)
国際政治 (国際政治学会編 有斐閣)
政治学 (日本政治学会編 岩波書店)

国際社会貢献演習Ⅲa (グローバル政治過程)

皆川修吾

【授業の概要】

冷戦崩壊後の分権化・民営化・民主化のグローバルな動きを検討し、グローバル化の負の側面に対する国際公共政策「人間の安全保障」の実態を検討する。

【授業の目標】

国内・国際・グローバルな政治過程を体系的に理解すること。

【授業計画】

講義「国際社会貢献研究Ⅱ (国際秩序)」に併せて、下記のテキストごとに課題を設定し、ディスカッション形式で理解を深める。

【評価方法】

分担部分の発表内容・討議内容、および課題に対するレポートなどを総合して評価する。

【テキスト】

政治学 (久米郁男他共著、有斐閣)
国際政治とは何か (中西寛著 中公新書)

【参考文献・資料】

国際紛争 (ジョセフ・ナイ著 有斐閣)
グローバル・ガバナンス: 政府無き秩序の模索 (渡辺昭夫編著 東大出版)
グローバル化とは何か (デヴィット・ヘルド編著 法律文化社)
国際社会論 (ヘドリー・ブル著 岩波書店)
現代国際関係学 (新藤栄一著 有斐閣)
比較政治学 (ジョヴァンニ・サルトルーリ著 早稲田大学出版部)
参照専門誌:
外交フォーラム (外務省編 都市出版社)
国際政治 (国際政治学会編 有斐閣)
政治学 (日本政治学会編 岩波書店)

国際文化交流演習Ⅰa (言語研究)

中野弘三

【授業の概要】

英語の文や節の発話の意味構造を、意味論と語用論の両面から明らかにし、また文の発話のさまざまな意味機能を分析し、発話と場面の関係を検討する。

【授業の目標】

1. 発話された文の意味構造を理解する。
2. 文の意味の意味論的、語用論的分析方法を理解する。

【授業計画】

1. 発話の場における文の意味の概観
2. 文の発話の意味構造
3. 発話行為
4. 命題態度
5. 命題の種類
6. 命題の種類と補文の関係
7. 文の意味構造と統語構造

【評価方法】

出席状況・平常点・課題などにより評価する。

【テキスト】

関係論文のコピーを使用。

【参考文献・資料】

Semantics (2000 K. Kearns / Macmillan Press)
Semantics (2nd Edition 1997 J.I.Saeed / Blackwell Publishing)
Doing Pragmatics (1995 P.Grundy / Edward Arnold)
Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics (2000 A. Cruse / Oxford University Press)
The Theory of Functional Grammar Part 1 (2nd Edition 1997 S. Dik / Mouton de Gruyter)

国際文化交流演習 I b (言語研究)

中野弘三

【授業の概要】

国際文化交流 I a (言語研究) に継続する演習授業であり、基本的には上記授業と同じ方法で行う。英語の文の意味構造を理解し、さまざまな意味機能分析の問題点を学習する。

【授業の目標】

1. 機能語 (法表現、否定辞、接続詞、副詞など) の意味機能を正確に理解する。
2. 英語の文の意味構造と統語構造の関係を理解する。

【授業計画】

1. 法表現の分析
2. 時制の分析
3. 否定文の分析
4. 疑問文の分析
5. 接続詞の分析
6. 副詞表現の分析
7. 動詞の意味とその補文の関係

【評価方法】

出席状況・平常点・課題などにより評価する。

【テキスト】

関係論文のコピーを使用。

【参考文献・資料】

- Semantics* (2000 K. Kearns / Macmillan Press)
Semantics (2nd Edition 1997 J.I. Saeed / Blackwell Publishing)
Doing Pragmatics (1995 P. Grundy / Edward Arnold)
Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics (2000 A. Cruse / Oxford University Press)
The Theory of Functional Grammar Part 1 (2nd Edition 1997 S. Dik / Mouton de Gruyter)

国際文化交流演習 II b (言語研究)

大野清幸

【授業の概要】

国際文化交流演習 II a (言語研究) に継続する演習授業であり、基本的には、同授業と同じ方法で行う。英語や日本語などにおける特定の研究対象を選択し、新言語学における特定の理論 (たとえば、動的文法理論) に基づき、言語を科学的に分析する実際の学び。日本語と英語の第一言語獲得研究も研究対象となる。

【授業の目標】

英語学研究者は、「動的文法理論」などの枠組みを利用して、言語の本質的な部分について考察する。第一言語獲得研究者は、「動的文法理論」などの生成文法理論および発達心理学関連分野を視野に入れつつ、第一言語獲得に関する、狭く限定した研究主題のいくつかを考察する。

【授業計画】

- 第1講 PC実践教室において、授業計画指示など。必ず出席すること!
- 第2講 PC実践教室において、関連情報を検索・探索する。
- 第3講 学術論文などを利用して、演習を行う。

【評価方法】

出席状況・平常点・課題などによる。
基本的には、学術論文を精読し、議論する。

【テキスト】

学術論文。授業時に、指示する。演習を中心に行う。
※授業・課題などにおいて電子メールなどインターネットを利用しますので、インターネット利用を日常化しておいて下さい。理想的には、自宅においてインターネット環境を実現しておいて下さい。

【参考文献・資料】

- 詳細は、授業にて配布する。
Clancy, Patricia M. 1985. *The acquisition of Japanese. The crosslinguistic study of language acquisition. Volume 1: The data*, ed. by Dan Isaac Slobin, 373-524. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
Synchronic and diachronic approaches to language: A festschrift for Toshio Nakao on the occasion of his sixtieth birthday (Shuji Chiba et al. (eds.) 1994. Liber Press)
Studies in English linguistics: A festschrift for Akira Ota on the occasion of his eightieth birthday (Masatomo Ukaji et al. (eds.) 1997. The Taishukan Publishing Company)
Empirical and theoretical investigations to language: A festschrift for Masaru Kajita on the occasion of his sixtieth birthday (Shuji Chiba et al. (eds.) 2003. Kaitakusha Co. Ltd.)

国際文化交流演習 II a (言語研究)

大野清幸

【授業の概要】

英語や日本語などにおける特定の研究対象を選択し、新言語学における特定の理論 (たとえば、動的文法理論) に基づき、言語を科学的に分析する実際の学び。日本語と英語の第一言語獲得研究も研究対象となる。

【授業の目標】

英語学研究者は、「動的文法理論」などの枠組みを利用して、言語の本質的な部分について考察する。第一言語獲得研究者は、「動的文法理論」などの生成文法理論および発達心理学関連分野を視野に入れつつ、第一言語獲得に関する、狭く限定した研究主題のいくつかを考察する。

【授業計画】

- 第1講 PC実践教室において、授業計画指示など。必ず出席すること!
- 第2講 PC実践教室において、関連情報を検索・探索する。
- 第3講 学術論文などを利用して、演習を行う。

【評価方法】

出席状況・平常点・課題などによる。
基本的には、学術論文を精読し、議論する。
学期末レポート: 現代英語に関する研究題材を選び、
(1) 先行研究を調査し、
(2) 仮説をたて、
(3) データを採集・整理し、
(4) 理論の枠組みで分析し、
(5) 論文としてまとめ、提出する。

【テキスト】

学術論文。授業時に、指示する。演習を中心に行う。
※授業・課題などにおいて電子メールなどインターネットを利用しますので、インターネット利用を日常化しておいて下さい。理想的には、自宅においてインターネット環境を実現しておいて下さい。

【参考文献・資料】

- 詳細は、授業にて配布する。
Clancy, Patricia M. 1985. *The acquisition of Japanese. The crosslinguistic study of language acquisition. Volume 1: The data*, ed. by Dan Isaac Slobin, 373-524. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
Synchronic and diachronic approaches to language: A festschrift for Toshio Nakao on the occasion of his sixtieth birthday (Shuji Chiba et al. (eds.) 1994. Liber Press)
Studies in English linguistics: A festschrift for Akira Ota on the occasion of his eightieth birthday (Masatomo Ukaji et al. (eds.) 1997. The Taishukan Publishing Company)
Empirical and theoretical investigations to language: A festschrift for Masaru Kajita on the occasion of his sixtieth birthday (Shuji Chiba et al. (eds.) 2003. Kaitakusha Co. Ltd.)

国際文化交流演習 III a (文化探求)

平林美都子

【授業の概要】

文学の表象のあり方、それに視覚イメージから構成される絵画や映画も対象に、われわれの文化に対する思考形式などを批判的に検討する。

【授業の目標】

英語の短編小説の文学表現方法を理解する。女性の文学表現、文学批評を合わせて学ぶ。

【授業計画】

Katharine Mansfieldの短編小説と文学理論

- 1 イントロダクション
- 2-12 "Bliss"
"Miss Brill"
"Her First Ball"
"An Ideal Family"
"The Lady's Maid" その他

【評価方法】

出席とレポートによる。

【テキスト】

The Garden Party and Other Stories. (Katherine Mansfield Penguin Books.)

批評関連のテキストは、最初の授業で指示する。

【参考文献・資料】

適宜、授業中に指示する。

国際文化交流演習Ⅲb（文化探求）

平林美都子

【授業の概要】

国際文化特別演習Ⅲa（比較文化）に継続する演習授業であり、基本的には上記授業と同じ方法で行う。文化に対する思考形式などを比較検討し、体系的に学習する。

【授業の目標】

英語の短編小説の文学表現方法を理解する。フェミニズム文学批評について理解する。

【授業計画】

「女性と英語文学」

フェミニズム文学批評は英語文学の重要な分析方法である。本年はMargaret Atwoodの短編*Wilderness Tips*を読みながら、フェミニズム分析に有効な文学理論を合わせて学び、応用していく。

【評価方法】

出席とレポートによる。

【テキスト】

Wilderness Tips (Margaret Atwood Seal Books)

批評論文は、最初の授業時に指示する。

【参考文献・資料】

適宜、授業中に指示する。

国際文化交流演習Ⅳb（文化探求）

杉本一直

【授業の概要】

亡命ロシア人の文学作品や芸術作品を購読・鑑賞し、「国文学」「伝統文化」とは対極のないわば「脱領域」的な表現様式を獲得しようとした亡命者たちの創作意識を考察する。

【授業の目標】

亡命者文化の本質を理解する

【授業計画】

原典講読を中心とし、あわせて文学研究の方法論を学ぶ。原典講読のテキストとして、Vladimir Nabokovの代表作『ロリータ』を使用する。また、サブテキストとして、Nabokovを含めた亡命作家たちの文学について論じた研究書などを使用する。

【評価方法】

出席およびレポートによる。

【テキスト】

The Annotated Lolita (Vladimir Nabokov Random House Inc)

【参考文献・資料】

言語の都市（トニー・タナー著 白水社）

脱領域の知性（ジョージ・スタイナー著 河出書房新社）

国際文化交流演習Ⅳa（文化探求）

杉本一直

【授業の概要】

亡命ロシア人の文学作品や芸術作品を購読・鑑賞し、「国文学」「伝統文化」とは対極のないわば「脱領域」的な表現様式を獲得しようとした亡命者たちの創作意識を考察する。

【授業の目標】

亡命者文化の本質を理解する

【授業計画】

原典講読を中心とし、あわせて文学研究の方法論を学ぶ。原典講読のテキストとして、Vladimir Nabokovの代表作『ロリータ』を使用する。また、サブテキストとして、Nabokovを含めた亡命作家たちの文学について論じた研究書などを使用する。

【評価方法】

出席およびレポートによる。

【テキスト】

The Annotated Lolita (Vladimir Nabokov Random House Inc)

【参考文献・資料】

徹夜の塊／亡命文学論（沼野充義著 作品社）

国際文化交流演習Ⅴb（文化翻訳）

チョ スルソップ

【授業の概要】

中国、韓国・朝鮮を中心とする東アジア諸社会の文学を通文化的な比較の観点から講読・討論・翻訳実践を行う。

【授業の目標】

東アジア諸社会における文化諸相の理解を深め、東アジア諸国の相互理解および共生を可能にする翻訳法を模索していく。

【授業計画】

- 1) 前言
- 2) 「春香伝」の世界
- 3) 「春香伝」、日本語訳書籍とその世界 1
- 4) 「春香伝」、日本語訳書籍とその世界 2
- 5) 「春香伝」映像化とその流布
- 6) 「源氏物語」の世界
- 7) 「源氏物語」、韓国語訳書籍とその世界 1
- 8) 「源氏物語」、韓国語訳書籍とその世界 2
- 9) 「源氏物語」映像化とその流布
- 10) 「紅樓夢」の世界
- 11) 「紅樓夢」日本語訳書籍とその世界
- 12) 「紅樓夢」韓国語訳書籍とその世界
- 13) 「紅樓夢」映像化とその流布
- 14) まとめ

【評価方法】

出席、授業のための準備、レポートを総合して評価する。

【テキスト】

プリント中心

【参考文献・資料】

春香伝（高麗書林）

源氏物語（紫式部 角川文庫）

紅樓夢（曹雪芹 岩波文庫）

国際文化交流演習VI a (文化翻訳)

CURRAN, Beverley

【Course description】

翻訳には、言語的な要素があり、想像力を使わなければならない。同一言語および他言語との比較の中で、文芸翻訳(小説や映画など)の実践的な学習を通して言語能力を高める。

【Course objectives】

このコースの目標は、学生に色々な翻訳の例文を紹介する。実践的な学習を通して言語能力、また翻訳者の意識を高めることである。

【Course schedule】

第1回	Introduction
第2-3回	マンガ
第4-5回	児童文学
第6-7回	文学
第8-9回	映画
第10回	歌
第11回	情報パンフレット
第12-14回	翻訳プロジェクト
第15回	オーラル・プレゼンテーション

【Assessment】

参加における努力、プレゼンテーションのように評価することである。

【Textbooks】

なし

【Reference】

受講生の興味関心によって決定する。

国際社会貢献実践演習 I (短期)

榎田勝利

【授業の概要】

国際交流基金などの政府機関、国際助成財団、国内外のNGO、自治体国際化協会などのインターンシップを通し、対外折衝能力、問題発見・解決能力、組織マネジメント能力を育成する。

【授業の目標】

- ・米国のNPO、NGOでのインターンシップを通し、専門研究分野の現場体験、英語によるコミュニケーション能力の増進を図る。
- ・NPO・NGOの組織運営能力を実践的に学ぶ。

【授業計画】

米ワシントンDCにあるCivil Society Consulting Group(CSCG)との共同プログラム。

学生の専門分野、専門的知識・経験、英語でのコミュニケーション能力等を考慮し、米国の民間非営利組織(NPO)、国際NGOでのインターンシップを実施する。インターンシップ期間中の滞在は、米国人の一般家庭でのホームステイを原則とする。活動可能分野は、老人、児童・青少年、自然・環境、識字教育、障害者、家族、ホームレス、ジェンダー、文化・芸術、スポーツ、バイリンガル教育、外国人支援、国際交流・国際協力、博物館・美術館、図書館、その他。

- ・事前研修 インターンシップの活動分野の決定、日米のNPO・ボランティアに関する学習、日本のNPO・ボランティア団体へのフィールドワーク、英会話トレーニング、米国側ディレクターによる合宿研修
- ・現地プログラム オリエンテーション合宿
インターンシップ(月曜日から金曜日の5日間)
1日特別研修プログラム
ポートフォリオの作成、評価会、修了式、さよならパーティー
- ・事後研修 フォローアップ研修と発表会、報告書の作成

【評価方法】

米国側受入団体(CSCG)の評価に基づき総合的に評価する。

【テキスト】

米国側指定の英文資料

国際文化交流演習VI b (文化翻訳)

CURRAN, Beverley

【Course description】

異文化翻訳に継続する演習授業であり、基本的には前期授業と同じ方法で行う。そして翻訳理論に照らしながら、翻訳は異言語と異文化も関係がある。

【Course objectives】

このコースの目標は、学生に色々な異文化的な翻訳の例文を紹介する。実践的な学習を通して言語能力、また翻訳者の意識を高めることである。

【Course schedule】

第1回	Introduction: descriptive studies
第2-3回	マンガ ONE PIECE(日本語・英語)
第4-5回	児童文学: Alice in Wonderland・不思議な国のアリス
第6-7回	文学における翻訳者
第8-10回	映画: Shall We ダンス?・Shall We Dance?
第11回	英語のセリフ・日本語の字幕/吹き替え(Love Actually)
第12回	情報パンフレット(インターネット)
第13回	新聞の記
第14回	オーラル・プレゼンテーション

【Assessment】

参加における努力、プレゼンテーションのように評価することである。

【Textbooks】

なし

【Reference】

受講生の興味関心によって決定する。

国際社会貢献実践演習 II (短期)

ブイ チトルン

【授業の概要】

国際機関へインターンシップを申請し、認められた大学院生は夏期及び春期休暇中のインターンシップを通して異文化間共生能力、危機管理能力、コミュニケーション能力を身につける。

【授業の目標】

- * インターン事業に関する知識を取得すること。
- * 国際交流・協力機関の活動を理解すること。
- * アジア各国の国際協力現場を体験・理解すること。
- * 企画書・報告書を作成すること。

【授業計画】

- A. 国内対象コース:
 1. 数人で担当チームを作り、協議した上で国内の国際交流・協力機関の活動調査、発表する
 2. インターンシップ内容・目標・計画等をプレゼンテーション
 3. インターンシップ計画書作成、受け入れ交渉
 4. インターン後に報告書や成果報告会を通して単位取得
- B. 海外対象コース:
 1. ベトナム、タイ、インド等アジア各国の国際協力現場を調査・学習する
 2. また可能な限り現地視察・調査も行う予定
 3. テーマ、視察先等事前研修・計画づくり及び実施については国内インターンシップ事業に準じる
 4. 現地視察後に報告書や成果報告会を通して単位取得
- C. 演習主旨:
 1. 開発協力内容の学習および協働の仕組み・事業運営・組織運営に重点を置く
 2. 院生の立案・計画・組織運営能力を高め、育成する

【評価方法】

演習における参加姿勢、発表等により総合的に評価する。

【テキスト】

開講時に参加者全員で協議して決める。

【参考文献・資料】

随時参考資料、文献やプリントを配布する。

国際社会貢献実践演習Ⅲ（長期）

ブイ トルン

【授業の概要】

海外の関係大学および国際機関へインターン等を申請し、認められた大学院生は長期にわたる調査・研究・活動を通して異文化間共生能力、危機管理能力、コミュニケーション能力、海外生活体験を身につける。

【授業の目標】

- * インターン事業に関する知識を取得すること。
- * 国際交流・協力機関の活動を理解すること。
- * アジア各国の国際協力現場を体験・理解すること。
- * 海外の大学で授業を受けられること。
- * 現地の言語能力を高めること。
- * 立案・計画・組織運営能力を高めること。
- * 企画書・調査書・報告書を作成すること。

【授業計画】

1. 研究テーマ選定
2. インターンシップ内容・目標・計画等をプレゼンテーション
3. インターンシップ企画書作成、受け入れ交渉
4. ベトナム、タイ、インド等アジア各国の国際協力現場を調査・学習する
5. また可能な限り現地調査、長期滞在・活動する
6. 帰国後に報告書や成果報告会を通して単位取得

【評価方法】

演習における計画・参加姿勢、報告発表または受け入れ機関による評価を参考に総合的に評価する。

【テキスト】

開講時に参加者全員で協議して決める。

【参考文献・資料】

随時参考資料、文献やプリントを配布する。

国際社会貢献特講 I

伊藤道雄

【授業の概要】

国際協力の主要なアクターである国連・国際開発機関、政府開発援助（ODA）、非政府組織（NGO）の存在意義・役割・活動を研究するとともに、非営利組織の実践的なマネジメントを学ぶ。

【授業の目標】

国境を超えた市民による協力・支援活動が、どのような国内外の文脈の中で生まれ、どのようなビジョンを描き、達成するための活動をデザインし実践してきたのか、そして、国際協力においてどのような結果をもたらしてきたのか等について考察し、国境を超えた市民活動が今後どのような方向性を辿り、どのような役割が期待されるのかについて展望する。

【授業計画】

1. 講義のねらい
2. 日本社会における国際協力 NGO の位置づけと概況
3. 戦前：日中戦争とキリスト教徒による難民支援
4. 戦後の経済復興：宗教的背景を持った人たちのイニシアティブと国際協力（'60年代初頭）
5. 多様化する国際協力 NGO の担い手たちと活動（'70年代）
6. カンボジア難民と国際協力への市民参加の広がり（'70年代後半～'80年代前半）
7. 日本社会の「国際化」と世界的事件の続発と NGO（'80年代半ば～）
8. 欧米 NGO の日本への進出と活動の拡大（'80年代～）
9. 地球環境問題と環境 NGO の活躍（'80年代後半～）
10. 国際協力 NGO 間のネットワーク化の流れとその後（'80年代後半～）
11. 拡大する政府の国際協力 NGO 支援（'90年代前半～）
12. 政府と国際協力 NGO の公式対話の始まりと NGO による提言活動（'90年代後半～）
13. 法的認知を受ける国際協力 NGO の増大（'90年代後半～）
14. 米国多発テロ（9.11）事件と日本の国際協力 NGO の対応（'01年～）
15. 総括：グローバル化の中における日本の国際協力 NGO の課題と今後

【評価方法】

授業での積極的な参加と貢献、課題レポートの内容を評価する。

【テキスト】

とくになし。随時、関係図書・資料を紹介し、プリントを配布する。

【参考文献・資料】

連続講義：国際協力 NGO（今田克司・原田勝広編著 日本評論社）。その他、各 NGO が出版している図書・資料など。詳細は、最初の講義で紹介する。

国際文化交流実践演習 I（短期）

大野清幸

【授業の概要】

ネットワークでの事前研究・交流をベースにして現地訪問を行い、英語教育のフィールドワークを通して問題解決能力・自己判断能力・コミュニケーション能力を習得する。

【授業の目標】

インターネットを利用した事前研究・交流をベースにして現地訪問（過去2回は、ASEP in Taiwan）を行い、英語教育のフィールドワークを通して問題解決能力・自己判断能力・コミュニケーション能力を習得する。「総合的学習の時間」などにおいて、実質的な国際交流を実行できる力をつけるため、OJT (On the Job Training) を経験する。

【授業計画】

- 事前研修
- 第1講 事前指導1=PC実践教室において、授業計画指示など、必ず出席すること
 - 第2講 事前指導2=PC実践教室において、関連分野の本物情報検索・探索する。現地プログラム（期間は、長期休暇中で、集中授業形式。昨年度は、台湾にて開催された、ASEP 2005に参加。12月下旬実施。）
 - 第3講 第1-2講 現地訪問を行い、英語教育のフィールドワークを実施する。（訪問校の、教育関係機関などを訪問する。）
- 事後研修
- 第13講 事後指導1=受講生は、パワーポイントで報告書を作成し、プレゼンテーションを行う。
 - 第14講 事後指導2=受講生は、パワーポイントで報告書を作成し、プレゼンテーションを行う。
 - 第15講 事後指導3=受講生は、プレゼンテーション時のコメントを参考に、最終報告書を作成し、提出する。

【評価方法】

出席状況・平常点・課題などによる。
現地での評価（受け入れ団体など）を考慮し、全体評価を行う。
受講生は、パワーポイントで報告書を作成し、プレゼンテーションを行う。
受講生は、プレゼンテーション時のコメントを参考に、最終報告書を作成し、提出する。
学期末レポート：研究主題を狭く限定して選び、
(1) 先行研究を調査し、
(2) 仮説を立て、
(3) データを採集・整理し、
(4) 分析し、
(5) 報告書としてまとめ、提出する。

【テキスト】

授業時に、指示する。
※授業・課題などにおいて電子メールなどインターネットを利用しますので、インターネット利用を日常化しておいて下さい。
理想的には、自宅においてインターネット環境を実現しておいて下さい。
・履修希望者は、後日掲示の指示に従って、説明会に参加し、別送申込をする。
※履修を認められた者の履修登録は教務課が行うので各自で登録は不要。原則、取消不可。

【参考文献・資料】

詳細は、授業にて配布する。
<http://www.japannet.gr.jp/w/2005/>
<http://www.japannet.gr.jp/w/2004/>
<http://www.japannet.gr.jp/w/2003/>
<http://www.japannet.gr.jp/w/2002/>
<http://www.japannet.gr.jp/w/2001/>
<http://www.japannet.gr.jp/w/2000/>
<http://www.japannet.gr.jp/nic/index.html>
<http://ajds.nsysu.edu.tw/1000214853/asep2004/>
<http://ajds.nsysu.edu.tw/1000214853/asep2004/html/schedule.htm>
http://www.google.co.jp/search?hl=ja&ie=Shift_JIS&q=ASEP2004&lr=
<http://ajds.nsysu.edu.tw/1000211908/asep2003/>
<http://ajds.nsysu.edu.tw/1000211908/asep2003/html/schedule.htm>
http://www.google.co.jp/search?hl=ja&inlang=ja&ie=Shift_JIS&q=ASEP2003&lr=

国際文化交流特講 I

小松諄悦

【授業の概要】

日本の国際文化交流の歴史、政策とその実践の推移をたどり、国際文化交流の目的とその具体的活動について検証する。

【授業の目標】

戦前から今日までの日本の国際文化交流の歴史を概観し、その間の政策の変遷と活動を考察し、国際文化交流の目的とその実践について理解する。

【授業計画】

1. 日本の国際文化交流の歴史（1）
2. 同（2）
3. 日本の国際文化交流概観
4. 日本語教育（1）
5. 同（2）
6. 芸術交流（1）
7. 同（2）
8. 日本研究・知的交流（1）
9. 同（2）
10. アジアとの文化交流
11. アメリカとの文化交流
12. 中東との文化交流
13. 日本の文化交流政策と目的

【評価方法】

レポート。（評価のポイントについては授業にて説明する。）

【テキスト】

なし。（レジュメを配布する。）

【参考文献・資料】

授業で説明する。

国際文化交流特講Ⅱ

中野弘三

【授業の概要】

英語を主な対象に、言語学や文学およびコミュニケーションなどのさまざまな角度から多角的かつ実践的にとらえ、言語や文化に対する新たな視点や思考を提供する。

【授業の目標】

1. 社会の状況や社会のあり方が言語にどのように反映されているかを理解する。
2. 言語と言語使用者の意図や文化の関係を理解する。

【授業計画】

<言語と社会>

1. コミュニケーションの場の分析
2. Politeness
3. 英語における性差別語の問題

<言語の表現力・言語と文化>

4. Metaphor, Metonymy
5. Hedge
6. 言語表現と視点 (point of view)

【評価方法】

出席状況・平常点・課題などにより評価する。

【テキスト】

プリントを使用。

【参考文献・資料】

- Pragmatics* (1996 G. Yule / Oxford University Press)
Women, Men and Politeness (1995 J. Holmes / Longman)
Minimum Essential Politeness: A Guide to the Japanese Honorific Language (1991 A.M. Niyekawa / Kodansha International)
Language and Culture (1998 C. Kramsch / Oxford University Press)
Cognitive Linguistics: An Introduction (2001 L. David / Oxford University Press)

課題研究 I a (国際社会貢献)

ブイ チトルン

【授業の概要】

修士論文作成指導。研究テーマに関する問題意識を深め、研究テーマの先行研究分析を行い、文献検索・資料収集の方法や専門知識・分析手法を教授し、修士論文作成にいたるまでの具体的な助言と指導を行う。

【授業の目標】

- * 研究テーマ最終決定
- * 内容に関して資料収集・分析・議論
- * 修士論文の概略作成・報告

【授業計画】

修士論文の研究テーマと研究内容により資料収集や分析の手順を企画し、計画的に実施する。実施状況如何により計画の見直し作業をする。

【評価方法】

課題研究過程での研究意欲、独創性、分析力など総合的に評価する。

課題研究 I a (国際社会貢献)

榎田勝利

【授業の概要】

修士論文作成指導。研究テーマに関する問題意識を深め、研究テーマの先行研究分析を行い、文献検索・資料収集の方法や専門知識・分析手法を教授し、修士論文作成にいたるまでの具体的な助言と指導を行う。

【授業の目標】

修士論文作成のための文献、資料収集等を終了する。

【授業計画】

修士論文の研究テーマと研究内容により資料収集や分析の手順を企画し、計画的に実施する。実施状況如何により計画の見直し作業をする。

【評価方法】

課題研究過程での研究意欲、独創性、分析力など総合的に評価する。

課題研究 I a (国際社会貢献)

皆川修吾

【授業の概要】

修士論文作成指導。研究テーマに関する問題意識を深め、研究テーマの先行研究分析を行い、文献検索・資料収集の方法や専門知識・分析手法を教授し、修士論文作成にいたるまでの具体的な助言と指導を行う。

【授業の目標】

修士論文作成指導。

【授業計画】

修士論文の研究テーマと研究内容により資料収集や分析の手順を企画し、計画的に実施する。実施状況如何により計画の見直し作業をする。

【評価方法】

課題研究過程での研究意欲、独創性、分析力など総合的に評価する。

課題研究 I b (国際社会貢献)

榎田勝利

【授業の概要】

修士論文作成指導。研究テーマに関する問題意識を深め、研究テーマの先行研究分析を行い、文献検索・資料収集の方法や専門知識・分析手法を教授し、修士論文作成にいたるまでの具体的な助言と指導を行う。

【授業の目標】

修士論文を完成させる。

【授業計画】

修士論文の研究テーマと研究内容により資料収集や分析の手順を企画し、計画的に実施する。実施状況如何により計画の見直し作業をする。

【評価方法】

課題研究過程での研究意欲、独創性、分析力など総合的に評価する。

課題研究 I b (国際社会貢献)

ブイ チトルン

【授業の概要】

課題研究 I a (国際社会貢献) に継続する課題研究授業であり、研究テーマに関する問題意識を深め、研究テーマに即した文献検索・資料収集の方法や専門知識・分析手法を教授し、修士論文作成にいたるまでの具体的な助言と指導を行う。

【授業の目標】

- * 課題分析手法を教授
- * 修士論文完成

【授業計画】

修士論文の研究テーマと研究内容により資料収集や分析の手順を企画し、計画的に実施する。実施状況を最終点検し、修士論文を完成する。

【評価方法】

論文の内容や構成などを総合的に評価する。

課題研究 I b (国際社会貢献)

皆川修吾

【授業の概要】

課題研究 I a (国際社会貢献) に継続する課題研究授業であり、研究テーマに関する問題意識を深め、研究テーマに即した文献検索・資料収集の方法や専門知識・分析手法を教授し、修士論文作成にいたるまでの具体的な助言と指導を行う。

【授業の目標】

修士論文作成指導。

【授業計画】

修士論文の研究テーマと研究内容により資料収集や分析の手順を企画し、計画的に実施する。実施状況を最終点検し、修士論文を完成する。

【評価方法】

論文の内容や構成などを総合的に評価する。

課題研究 II a (国際文化交流)

大野清幸

【授業の概要】

「動的文法理論」などの枠組みを利用した言語研究を行ってもらい、受講生が修士論文を書くための指導を行う。

【授業の目標】

英語学研究者は、「動的文法理論」などの枠組みを利用して、英語学に関する、狭く限定した研究主題について研究する。第一言語獲得研究者は、「動的文法理論」などの生成文法理論および発達心理学関連分野を視野に入れつつ、第一言語獲得に関する、狭く限定した研究主題について研究する。

【授業計画】

- 第1講 PC実践教室において、授業計画指示など。必ず出席すること!
- 第2講 PC実践教室において、関連情報を検索・探索する。
- 第3講 学術論文などを利用して、演習を行う。

【評価方法】

- 出席状況・平常点・課題などによる。
基本的には、学術論文を精読し、議論する。
学期末レポート：現代英語に関する研究題材を選び、
(1) 先行研究を調査し、
(2) 仮説をたて、
(3) データを採集・整理し、
(4) 理論の枠組みで分析し、
(5) 論文としてまとめ、提出する。

【テキスト】

学術論文。授業時に、指示する。演習を中心に行う。
※授業・課題などにおいて電子メールなどインターネットを利用しますので、インターネット利用を日常化しておいて下さい。理想的には、自宅においてインターネット環境を実現しておいて下さい。

【参考文献・資料】

- 詳細は、授業にて配布する。
Clancy, Patricia M. 1985. The acquisition of Japanese. The crosslinguistic study of language acquisition, Volume 1: The data, ed. by Dan Isaac Slobin, 373-524. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
Synchronic and diachronic approaches to language:
A festschrift for Toshio Nakao on the occasion of his sixtieth birthday (Shuji Chiba et al. (eds.) 1994. Liber Press)
Studies in English linguistics:
A festschrift for Akira Ota on the occasion of his eightieth birthday (Masatomo Ukaji et al. (eds.) 1997. The Taishukan Publishing Company)
Empirical and theoretical investigations to language:
A festschrift for Masaru Kajita on the occasion of his sixtieth birthday (Shuji Chiba et al. (eds.) 2003. Kaitakusha Co. Ltd.)

課題研究Ⅱ a (国際文化交流)

CURRAN, Beverley

【Course description】

国際文化交流(文化翻訳)における自己学習を踏まえ、各専任教員及び兼任講師の個別指導のもとに、各自の研究課題のもとで研究レポートを作成する。

【Course objectives】

研究のプロセスは(1)研究(2)論文を書く(3)論文を編集するといった段階がある。この前期のコースの目標は研究の段階に集中することである。適当な研究課題を決定、資料を集め、研究レポートを書くことである。

【Course schedule】

- | | |
|---------|-----------------------------|
| 第1回 | 紹介 |
| 第2回 | 研究課題を選択 |
| 第3回 | 研究課題を決定し、計画を立つ |
| 第4-8回 | 研究 |
| 第9回 | Reality Check: プロGRESS・レポート |
| 第10-11回 | 参考文献について |
| 第11-12回 | 研究レポートを書く |
| 第13-14回 | 研究レポートを編集する |
| 第15回 | レポートを提出する |

【Assessment】

参加における努力、研究の計画、レポートの評価

【Textbooks】

なし

【Reference】

研究課題を決定した後で、リディング・リストを提案する。

課題研究Ⅱ a (国際文化交流)

中野弘三

【授業の概要】

言語の機能の解明を目標として、受講生はそれぞれその解明に向けての課題を持ち、その課題を言語学的手法を用いて研究する。

【授業の目標】

言語の機能についての知識を深め、言語機能の研究を進める方法論を習得した上で、その方法論に基づき論文を作成することを目指す。

【授業計画】

1. 言語の機能の解明を目的とした先行研究の紹介
2. 言語の機能的分析法の解説
3. 研究テーマに即した文献検索・資料収集の方法や専門知識の教授

【評価方法】

平常点・課題などにより評価する。

【テキスト】

関係論文のコピーを使用。

【参考文献・資料】

適宜授業中に指示する。

課題研究Ⅱ a (国際文化交流)

杉本一直

【授業の概要】

修士論文の執筆指導。

【授業の目標】

修士論文構想の完成と資料の十分な分析。

【授業計画】

論文執筆の進行状況の報告と、それに対する指導を授業の中心とする。また、先行研究の論文講読も必要に応じておこなう。

【評価方法】

論文執筆への取り組み態度による。

【テキスト】

とくになし。

【参考文献・資料】

必要に応じて選定する。

課題研究Ⅱ a (国際文化交流)

平林美都子

【授業の概要】

国際文化探求のコースで学んだ自己学習を踏まえ、各専任教員及び兼任講師の個別指導のもとに、各自の研究テーマのもとで修士論文を作成する。

【授業の目標】

修士論文構想の完成と資料の十分な分析。

【授業計画】

論文執筆の進行状況の報告と、それに対する指導を授業の中心とする。また、先行研究の論文講読も必要に応じておこなう。

【評価方法】

論文執筆への取り組み態度による。

【テキスト】

とくになし。

【参考文献・資料】

必要に応じて選定する。

課題研究 II b (国際文化交流)

大野清幸

【授業の概要】

課題研究 II a (言語研究) に継続する演習授業であり、基本的には上記授業と同じ方法で行う。「動的文法理論」などの枠組みを利用した言語研究を行ってほしい、受講生が修士論文を書くための指導を行う。

【授業の目標】

英語学研究者は、「動的文法理論」などの枠組みを利用して、英語学に関する、狭く限定した研究主題について研究する。第一言語獲得研究者は、「動的文法理論」などの生成文法理論および発達心理学関連分野を視野に入れつつ、第一言語獲得に関する、狭く限定した研究主題について研究する。

【授業計画】

- 第1講 PC実践教室において、授業計画指示など。必ず出席すること
- 第2講 PC実践教室において、関連情報を検索・探索する。
- 第3講 学術論文などを利用して、演習を行う。

【評価方法】

- 出席状況・平常点・課題などによる。
基本的には、学術論文を精読し、議論する。
学期末レポート：現代英語に関する研究題材を選び、
- (1) 先行研究を調査し、
 - (2) 仮説をたて、
 - (3) データを採集・整理し、
 - (4) 理論の枠組みで分析し、
 - (5) 論文としてまとめ、提出する。

【テキスト】

学術論文。授業時に、指示する。演習を中心に行う。
※授業・課題などにおいて電子メールなどインターネットを利用しますので、インターネット利用を日常化しておいて下さい。理想的には、自宅においてインターネット環境を実現しておいて下さい。

【参考文献・資料】

- 詳細は、授業にて配布する。
- Clancy, Patricia M. 1985. The acquisition of Japanese. The crosslinguistic study of language acquisition, Volume 1: The data, ed. by Dan Isaac Slobin, 373-524. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Synchronic and diachronic approaches to language: A festschrift for Toshio Nakao on the occasion of his sixtieth birthday (Shuji Chiba et al. (eds.) 1994. Liber Press)
- Studies in English linguistics: A festschrift for Akira Ota on the occasion of his eightieth birthday (Masatomo Ukaji et al. (eds.) 1997. The Taishukan Publishing Company)
- Empirical and theoretical investigations to language: A festschrift for Masaru Kajita on the occasion of his sixtieth birthday (Shuji Chiba et al. (eds.) 2003. Kaitakusha Co. Ltd.)

課題研究 II b (国際文化交流)

杉本一直

【授業の概要】

修士論文の執筆指導。

【授業の目標】

修士論文の完成。

【授業計画】

論文執筆の進行状況の報告と、それに対する指導を授業の中心とする。また、先行研究の論文講読も必要に応じておこなう。

【評価方法】

修士論文の査読による。

【テキスト】

とくになし。

【参考文献・資料】

必要に応じて選定する。

課題研究 II b (国際文化交流)

CURRAN, Beverley

【Course description】

研究のプロセスに引き続き、各専任教員及び兼任講師に個別指導を受け、卒業研究レポートを完成させ提出する。

【Course objectives】

後期の授業の目標は、前期の研究課題に関するプロジェクトに引き続き、論文を書き、編集に集中することである。

【Course schedule】

- 第1回 紹介
- 第2回 論文の introduction を書く
- 第3-6回 論文を書く
- 第7回 Reality Check: プログレスについて、オーラル・レポート
- 第8-10回 論文を書く
- 第11-12回 論文を編集する
- 第13回 レジューメを書く。参考文献をチェックする
- 第14回 ディスカッション
- 第15回 論文を提出する

【Assessment】

研究プロセスや論文を評価する。

【Textbooks】

なし

【Reference】

研究に関する資料

課題研究 II b (国際文化交流)

チヨ スルソッフ

【授業の概要】

東アジア文化圏における文化の諸象を概説的な講義、資料講読を通じて多方向から対照研究する。また、論文執筆予定者には、論文のテーマに関する研究報告をしてもらう。

【授業の目標】

異文化間の交流を効果的に行うための視点を養成すると同時に文化研究および文化再創造の土台を構築する。

【授業計画】

- 1) 歳時風俗
- 2) 『荆楚歳時記』の世界1
- 3) 『荆楚歳時記』の世界2
- 4) 『荆楚歳時記』の世界3
- 5) 現代中国の歳時風俗
- 6) 『東国歳時記』の世界1
- 7) 『東国歳時記』の世界2
- 8) 『東国歳時記』の世界3
- 9) 現代韓国・朝鮮の歳時風俗
- 10) 『閩里歳時記』の世界1
- 11) 『閩里歳時記』の世界2
- 12) 現代日本の歳時風俗
- 13) まとめ

【評価方法】

出席、授業のための準備、レポートあるいは論文のテーマに関する研究報告を総合して評価する。

【テキスト】

プリント中心

【参考文献・資料】

- 荆楚歳時記 (宗懐著 東洋文庫 平凡社)
朝鮮歳時記 (洪錫謨他著 東洋文庫 平凡社)
閩里歳時記 (川野邊寛著 日本庶民生活資料集成 三一書房)

課題研究Ⅱb (国際文化交流)

中野弘三

【授業の概要】

課題研究Ⅱaに継続して言語の機能の解明を目標とした課題の研究を行う。

【授業の目標】

言語の機能についての知識を深め、言語機能の研究を進める方法論を習得した上で、その方法論に基づき論文を作成することを目指す。

【授業計画】

1. 研究テーマに即した文献検索・資料収集の方法や専門知識の教授 (課題研究Ⅱaより継続)
2. 言語の機能の解明を目的とした研究の指導
3. 受講生による論文の中間報告

【評価方法】

平常点・課題などにより評価する。

【テキスト】

関係論文のコピーを使用。

【参考文献・資料】

適宜授業中に指示する。

課題研究Ⅱb (国際文化交流)

平林美都子

【授業の概要】

国際文化探求のコースで学んだ自己学習を踏まえ、各専任教員及び兼任講師の個別指導のもとに、各自の研究テーマのもとで修士論文を作成する。

【授業の目標】

修士論文の完成。

【授業計画】

論文執筆の進行状況の報告と、それに対する指導を授業の中心とする。また、先行研究の論文講読も必要に応じておこなう。

【評価方法】

修士論文の査読による。

【テキスト】

とくになし。

【参考文献・資料】

必要に応じて選定する。

プレゼンテーション特講

影戸 誠

【授業の概要】

基礎技術として、問題提示、諸説の比較検討、論点・論拠の提示、研究調査結果、成果の集約や発表、今後の展望など効果的なプレゼンテーション技法を指導する。

【授業の目標】

オーディエンス・コンシャス (聞き手の理解) に焦点をあてた効果的なプレゼンテーションのあり方を探る。構成・話し方・ファイルの作成方法について、その評価基準を明らかにしながら展開する。

【授業計画】

プレゼンテーションは「Public Speaking」と「File making」に分かれる。実習は、この2つの観点に常に留意し展開していく。

- 第1回 プレゼンテーションとは
- 第2回 プレゼンテーション評価の観点
- 第3回 プレゼンテーションサンプル評価
- 第4回 プレゼンテーションと画像
- 第5回 プレゼンテーションと動画
- 第6回 プレゼンテーションとエクセルデータ
- 第7回 プレゼンテーションの構成
- 第8回 マッピング
- 第9回 アプリケーション間の連携
- 第10回 話す力
- 第11回 アイコンタクトとボディランゲージ
- 第12回 オーディエンスとインタラクション
- 第13回 作品評価
- 第14回 作品評価
- 第15回 作品評価

【評価方法】

出席状況、授業態度、課題提出 (インターネット利用) を通じて評価する。プレゼンテーションを実際に行い、その作品を通しての評価が中心となる。

【テキスト】

実践プレゼンテーション (影戸誠・渡辺浩行著 日本文教出版 ISBN 4-536-40099-0)

【参考文献・資料】

- 魅せる先生 (影戸誠他著 インプレス 4-8443-7009-X)
実習情報基礎 (影戸誠他著 インプレス)
翼をもったインターネット (影戸誠著 日本文教出版)

コーパス言語学特講

柳 朋宏

【授業の概要】

インターネット、CD-ROMなどで利用可能なコーパス (大規模言語データベース) の分析方法を実践的に学び、使用頻度・用例・語法などの研究を行う。

【授業の目標】

コーパスを利用した効率的なデータの収集方法とそのデータに基づいた分析方法の習得を目標とする。

【授業計画】

コーパスとコーパス言語学の概要を解説した後、受講生の関心事に一致するものについて講義・演習を行なう。また、受講生にはコーパスから得られたデータに基づいた研究発表と学期末にレポートの提出をしてもらう。取り上げる主な内容は以下の通り。

1. コーパスの定義とその種類 (概要)
2. コーパス言語学とは何か
3. 検索ツールと正規表現
4. 共時的コーパスの利用と分析
5. 通時的コーパスの利用と分析
6. 学習者コーパスの利用と分析
7. パラレルコーパスの利用と分析

※第1回目に授業の説明をするので必ず出席すること。

毎時間コーパスや検索ソフトの操作などを行なうので、欠席するといけなくなるので注意すること

【評価方法】

研究発表とレポート、及び授業への貢献度等により総合的に評価する。

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

- 英語コーパス言語学 [改訂新版] (齊藤俊雄他編 研究社出版)
English Corpora under Japanese Eyes (Nakamura, J. et al. Rodopi)

国際公共政策特講

皆川修吾

【授業の概要】

グローバル化の負の側面に対する「人間の安全保障」政策の主体、政策目的、形成過程、政策の実施と評価など国際公共政策の政治過程を体系的に研究する。

【授業の目標】

国際市民主義的視角から国際公共政策の諸相研究。

【授業計画】

- 第1講 国際公共政策とは何か
- 第2講 国際公益、地球公財の概念
- 第3講 国際公共政策の研究課題と方法
- 第4講 グローバル化の中の政策転換1：
環境、エネルギー
- 第5講 グローバル化の中の政策転換2：
科学技術・情報
- 第6講 グローバル化の中の産業経済政策2：
中小企業、農業、労働
- 第7講 グローバル化の中の市民社会活性化政策1：
都市、福祉
- 第8講 グローバル化の中の市民社会活性化政策2：
教育、自治体
- 第9講 グローバル化の中の対外政策1：
外交、安全保障
- 第10講 グローバル化の中の対外政策2：
開発援助、平和協力
- 第11講 国際公共政策の評価と今後の課題
- 第12講 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績と出席状況との総合評価による。

【参考文献・資料】

公共政策学（足立幸男・森脇俊雅編著 ミネルヴァ書房）
国際行政学（福田耕治著 有斐閣ブックス）
国際公共政策（進藤栄一著 国際公共政策叢書2 日本経済評論社）

比較経済体制特講

家本博一

【授業の概要】

旧ソ連邦・東欧諸国における「現代社会主義」の特徴、基本性格、問題点を歴史的な事象を振り返りながら検討し、併せて1990年代以降における社会主義体制から資本主義体制への「体制移行」の現実について考察する。

【授業の目標】

本講義では、社会主義体制と資本主義体制の比較分析に関する基本視点と分析視座を学びつつ、社会主義体制の展開過程に関して、自己崩壊の要因を考察する。

【授業計画】

本授業では、「ロシア革命」以降における旧ソ連邦・東欧の「現代社会主義」に関して、その成立から自己崩壊に至る全過程を歴史的に再検討する。

<授業の進め方>

1. 「ロシア革命」とその後—その実像と虚像
2. レーニンの死と「一国社会主義論」
3. 「農業集団化」と「工業化論争」
4. スターリン独裁体制（1）—第二次大戦前
5. スターリン独裁体制（2）—第二次大戦中
6. スターリン独裁体制（3）—第二次大戦後
7. 「東欧」の成立と「スターリン主義の嵐」
8. スターリンの死と「東欧」の激動—1950年代後半
9. 「プラハの春」（1968年）事件と「ブレジネフ・ドクトリン」
10. 1970年代における東西経済関係の新展開
11. ポーランド「連帯」運動とゴルバチョフ政権の「バレストロイカ」
12. 「東欧」における「現代社会主義」の自己崩壊
13. 「ソ連邦の消滅」と「脱社会主義」
14. 1990年代における体制転換過程—中欧三ヶ国について
15. 中欧のEU正式加盟への道

本授業では、受講生の理解を深めるため、適宜、インターネット上の各種情報、ビデオ・DVD教材、地図、年表なども利用する。

【評価方法】

出席状況、課題レポート、討論という三つの点を総合的に評価する。

【テキスト】

ショック療法から真の療法へ—ポスト社会主義の体制移行（グジェゴシュ・コウォトコ著 家本博一・田口雅弘・吉井昌彦共訳 三恵社 2004年）
ポーランド「脱社会主義」への道—体制内改革から体制転換へ（家本博一著 名古屋大学出版会 1994年）

【参考文献・資料】

中欧の体制移行とEU加盟（上）—チェコとスロヴァキア（桑原進著 三恵社 2003年）
中欧の体制移行とEU加盟（下）—ポーランド（家本博一著 三恵社 2004年）
関連年表と講義概要は、授業の際に配布する。
なお、インターネット情報も活用するので、授業の中でPCを利用することを勧める。

国際協力特講

ブイ トルン

【授業の概要】

国際協力の新しいアプローチの理念、政策、実施体制を学ぶとともに、グローバル・イシューへの新しいアクターとして、非政府組織（NGO）や地方自治体の動きを発展的に検証する。

【授業の目標】

- * 国際協力に関する日欧米の相違を理解すること
- * 各セクターによる国際協力活動の現状と課題を理解すること
- * 国際協力機関の組織運営を理解すること

【授業計画】

- A. 総論：
 1. 国際協力の潮流：欧米・日本
 2. New Approach：人間の安全保障と世界平和の構築
- B. 各論：
 1. 国際協力活動の現状：
 - * 政府・中央省庁・外務省・JICA（ODA関係）
 - * 地方自治体の国際協力、CLAIRとモデル事業
 - * NGO：創設期>成熟期>発展期
 2. 組織運営論：
 - * 個別活動：組織運営・会員獲得
 - * 活動基礎構築のために：内部要因としての理念・目標・運営形態
 - * 活動展開のために：環境整備
 - * 協力者・協力体制の構築
 - * 協働活動：
 - * 地方自治体とNGO
 - * ジャパン・プラットフォーム等の事例検討
 - * 協働の可能性・現状と今後の課題

【評価方法】

授業への参加状況と期末レポート提出による。

【テキスト】

プリント配布及び授業時に指示する。

【参考文献・資料】

開講時に指示する。

通訳特講

中村幸子

【授業の概要】

日英語間の通訳に必要な基礎知識と技能を習得するとともに、通訳の準備作業として不可欠な情報収集の具体的方法を演習形式で学ぶ。

【授業の目標】

国際交流や国際協力の舞台で通訳者として活躍できる実践的な実力を養成することを目的とし、通訳者養成のために一般的に採用されている各種通訳訓練法を行い、即解力、即応力、口頭表現力、語彙力を飛躍的に高めながら通訳スキルの向上を目指す。プロ通訳者の業務に準じた事前準備資料を使用する。インターネットで公開されているAuthenticな音声なども積極的に利用していく。通訳に必要な背景知識を得るため様々な分野の資料の訳出を含めた分析を行い、知的ベースの充実も目指す。学期末にはプレゼンテーション形式の模擬通訳発表会を実施する。

【授業計画】

- 第1回 通訳概要
- 第2回 英日逐次通訳の基礎1
- 第3回 英日逐次通訳の基礎2
- 第4回 英日逐次通訳の基礎3
- 第5回 資料分析1
- 第6回 日英逐次通訳の基礎1
- 第7回 日英逐次通訳の基礎2
- 第8回 日英逐次通訳の基礎3
- 第9回 資料分析2
- 第10回 英日・日英逐次通訳の実践1
- 第11回 英日・日英逐次通訳の実践2
- 第12回 英日・日英逐次通訳の実践3
- 第13回 資料分析3
- 第14回 英日逐次通訳の仕上げ
- 第15回 日英逐次通訳の仕上げ

【評価方法】

出席（非常に大切）、授業内でのパフォーマンス、リサーチ課題、および模擬通訳の取り組みなどにより評価。

【テキスト】

オリジナルテキストを授業開始時に配布、およびオンライン配信。

【参考文献・資料】

Interpreting as Interaction (Cecilia Wadensjo Longman 1998)
英語通訳への道（日本通訳協会編 大修館書店）
グローバル時代の通訳（水野真木子他 三修社）
トランド日米表現辞典（小学館）
他

文芸翻訳特講

宮澤淳一

【授業の概要】

文芸翻訳（文芸作品や人文書の翻訳）を、学術研究の社会的還元という発想から捉え直す。歴史と理論、解釈と変換、密度とリダグンデンシー、誤訳の構造などを考察しつつ、主に英語から日本語への翻訳を演習する。

【授業の目標】

1. 「翻訳」とは何か。それを理論と実践両面から理解する。
2. 世の中で流通する「翻訳」に対して、批判的な目を養うと同時に、「誤訳」に対する寛容な態度を身につける。
3. 「翻訳」を通して、他者の論理や発想を理解し、文章を「書く」とはどういうことなのかを自分なりに見つめ直す。

【授業計画】

1. 文芸翻訳とは何か（歴史と理論、学術研究との関係）
2. 英文和訳、逐語訳、意識、「超訳」……（解釈と変換）
3. 等量等価の翻訳は可能か（密度とリダグンデンシー）
4. 誤訳とは何か、どう防げるか（誤訳の構造）
5. 翻訳と情報リテラシー（まとめ）

※3コマ5日間の集中講義です。毎日、翻訳をめぐる大切なトピックを論じつつ、関連する題材で演習を行ない、ディスカッションをします。英語以外の言語から日本語への翻訳に関心のある学生も歓迎します。

【評価方法】

出席状況、授業での積極性、課題の取り組み方から総合的に評価する。

【テキスト】

ハンドアウトを配布し、用いる。

【参考文献・資料】

初回授業にて指示する。

環境と開発特講

高島忠義

【授業の概要】

開発を経済成長と同義の概念と捉えていた時代から、女性の参加などを含む社会開発さらには人間開発へという、開発理論の変遷について検討する。その後、具体的な開発協力政策として、EUのそれを取り上げる。

【授業の目標】

開発理論の歴史の変遷を追うと同時に、冷戦終結後に欧米諸国が掲げている「持続可能な開発」（環境などに配慮した開発）や「グッド・ガバナンス」（民主主義に基づく統治）といった新しい開発の「理念」についても理解を深める。

【授業計画】

前半の授業では、社会・人間開発に関する日本語のテキストを使用して開発の歴史の変遷を検討する。そして、後半の授業では、EU委員会と欧州理事会の策定した新しい開発協力政策を分析しながら、日本のODA政策の問題点についても検討する。

【評価方法】

授業への出席と予習。

産業翻訳特講

長沼美香子

【授業の概要】

翻訳技能のさらなる向上を目標として、英語と日本語の構造的な相違、話法・時制・句読法などについての言語学的知識を演習形式で学ぶ。

【授業の目標】

1. 英文和訳と翻訳との違いを明確に区別し、実践できること。
2. 翻訳に必要なリサーチが綿密にできること。
3. 翻訳理論研究の視点が意識できること。

【授業計画】

- 第1講 授業概要説明（必ず出席すること）
- 第2講 講義、演習、ディスカッションを通して、翻訳の理論と実践を習得

【評価方法】

出席（意欲）、演習、課題提出等を総合して評価する。

【テキスト】

プリント配布（翻訳関連の書籍をクラスにて指定する場合もある。）

【参考文献・資料】

In Other Words (Mona Baker 著 Routledge 出版)

Introducing Translation Studies (Jeremy Munday 著 Routledge 出版)

ジェンダーと開発特講

中西久枝

【授業の概要】

ジェンダーと開発について基礎的知識を身につけ、現実の開発問題においてジェンダーの問題がどのような実態として存在しているか、またジェンダー的視点から開発支援を実施するために必要な知見と手法について学ぶ。

【授業の目標】

「開発におけるジェンダー」(WID) から「ジェンダーと開発」(GAD) および「ジェンダーの主流化」への理論的変遷を学ぶ一方、理論と現実のギャップを事例により理解する。

【授業計画】

- 1) ジェンダーとは何か、フェミニズムの視点との違いについて
- 2) 開発支援の基礎知識
- 3) 途上国及び先進国でおこっているジェンダー差別の問題
- 4) 「開発におけるジェンダー」の枠組みの様々なアプローチ法
- 5) 「開発におけるジェンダー」(GAD) の枠組みによる支援策
- 6) 「ジェンダーの主流化」戦略の枠組みと実践についての現状と課題
- 7) 「見えない労働」、インフォーマル経済と経済発展
- 8) 教育とジェンダー
- 9) 環境とジェンダー
- 10) リプロダクティブ・ヘルスとジェンダー
- 11) エンパワーメント・アプローチとエンタイトルメント・アプローチ
- 12) 国家、NGO、国際機関の連携と調整について
- 13) 21世紀の開発支援・協力とジェンダーの課題

【評価方法】

レポートによる評価50%、授業中の参加・報告50%とする。

【テキスト】

開発とジェンダー（田中由美子・大沢真理。伊藤るり編著 国際協力出版会 2002年）

【参考文献・資料】

別途指示・配布する。

国際交流政策特講

榎田勝利

【授業の概要】

グローバル化の影響で国際社会、国内社会の変容は顕著である。日本においても、国家主導から民間主導へ、中央集権から地方分権、市民社会へと移行してきている。国際交流の主体も多様化し、多文化共生の新たな課題を抱えている。官民対立から「民」のイニシアティブや主体性を活かした官民の協働の模索が行われている。授業では、「自治体の国際交流対策」に焦点を当て、戦後の自治体の国際交流活動の変遷、地方自治体の国際交流活動の現状と課題検証していく。

【授業の目標】

地方自治体の国際交流政策の現状と課題を明確に理解し、望ましい国際交流活動のあり方を理解できる。

【授業計画】

1. 戦後の地方自治体の国際交流の変遷
2. 地方自治体はなぜ国際交流を行うのか
3. 地方自治体の国際交流施策の現状
 - ① 姉妹都市提携の推移と現状
 - ② 地方自治体の国際交流施策の主要類型
都道府県・政令指定都市・地方中核都市・市町村レベル
4. 自治体国際化協会
5. 自治体の国際貢献・国際協力
6. 多文化共生社会の形成
7. 国際交流事業の評価

【評価方法】

レポート、授業への積極的な参加姿勢等で評価する。

国際観光マネジメント特講

加納和彦

【授業の概要】

「国内旅行業務取扱管理者試験」の試験科目である「法令」「約款」「国内旅行実務」のそれぞれを体系的に学び、更に演習にまで発展させる。

【授業の目標】

「国内旅行業務取扱管理者試験」の受験、合格を最終目標に置きながら、旅行会社におけるマネジメントの一端を身に付ける。

【授業計画】

- 1) 国内旅行実務・国内観光資源
- 2) 国内旅行実務・国内運賃料金1
- 3) 国内旅行実務・国内運賃料金2
- 4) 国内旅行実務・国内運賃料金3
- 5) 旅行業法1
- 6) 旅行業法2
- 7) 旅行業法3
- 8) 旅行業法4
- 9) 旅行業約款1
- 10) 旅行業約款2
- 11) 旅行業約款3
- 12) 各種約款
- 13) まとめ

【評価方法】

出席状況と課題提出により評価する。

【テキスト】

2006旅行管理者試験国内短期完成（風声舎）

【参考文献・資料】

授業の中で適宜紹介する。

第三世界政治特講

若松孝司

【授業の概要】

国際交流を意義のあるものとするため、その対象のひとつである第三世界諸国・地域の政治状況についての理解を深める。

【授業の目標】

自らの研究対象とすべき特定の第三世界諸国の低開発と政治的不安定について、専門的な知識を習得し、それについて自らの見識を有することを目標とする。

【授業計画】

第三世界諸国・地域の開発と民主主義の問題について、以下の項目を中心に受講生による報告を踏まえたうえで議論する。

- 1) 理論的整理
- 2) 植民地時代の遺制
- 3) 国家建設の課題
- 4) 民主主義と軍政
- 5) 第三世界の連帯形成

【評価方法】

授業における報告と議論への参加状況、期末のレポートによって評価する。

【テキスト】

別途指示する。

【参考文献・資料】

別途指示する。

心理アセスメント演習

伊藤勝也 加藤正子 永田忠夫 西村辨作 吉田 敬

【授業の概要】

(概要) 心理的援助を行う場合、クライアントの情報を科学的にとらえ、多面的、総合的、全人的な角度から客観的に評価・査定することが必要である。この評価・査定の方法として、特に「面接法」「観察法」「検査法」を用いる。心理アセスメント演習では、各検査法や行動観察の構成、標準化、実施手順等について実践的に学習する。また、質問紙作成法、面接技法、資料分析の技法についても理解を深める。

(オムニバス方式)

(伊藤勝也) 心理面接法
(加藤正子) 構音検査・発達検査
(永田忠夫) 心理検査法全般・性格検査
(西村辨作) 知能検査および言語発達検査
(吉田敬) 失語症検査

【授業の目標】

心理アセスメント演習では、各検査法や行動観察の構成、標準化、実施手順等について実践的に学習する。また、質問紙作成法、面接技法、資料分析の技法についても理解を深める。

【授業計画】

第1回 ガイダンス (加藤正子)

心理評価法

第2回-第4回 心理面接法 (伊藤勝也)
第5回-第7回 心理検査全般 (永田忠夫)

言語評価法

第8回-第10回 言語発達検査 (西村辨作)
第11回-第12回 発声発語検査 (加藤正子)
第13回-第15回 高次脳機能検査 (吉田敬)

【評価方法】

出席、演習態度、レポートにより総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献・資料】

授業内で述べる。

社会調査法演習

原 幸一

【授業の概要】

社会調査をするにあたって基本的な方法を習得することを目標とする。社会調査の方法は目的の性質や手続きによって統計調査や事例調査などに分けられる。統計調査においては特定化した仮説—作業仮説を立てて、それに基づき調査票を作成する。それぞれの作業仮説に適切な調査方法・質問紙の作成法・分析方法などについて、具体的に演習を行ないながら理解を深める。

【授業の目標】

調査法に関わる基礎的な知識を前提として個人またはグループで社会調査を行うことができ、また他の調査結果を解釈できるようになることを目的とする。

【授業計画】

1. 外観・調査の流れ
2. 調査の方法・データの見方
3. 調査目的の作成
4. 調査項目の作成
5. 調査方法の決定
6. サンプリングの方法
7. 統計手法について
8. データのまとめかた
9. 調査の実際1
10. 調査の実際2
11. 調査の実際3
12. データの分析、解釈
13. まとめ

【評価方法】

作業レポートにより評価を行う。

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

よくわかる心理統計 (ミネルヴァ書房 山田剛史・村井純一郎著)

心理学実験演習

井脇貴子 川嶋英嗣 高橋啓介 高橋伸子 宮田 Susanne

【授業の概要】

(概要) 心理学実験を通して、心理物理学的測定法や尺度構成法、独立変数の操作と実験計画、実験における統制、実験結果の処理法と結果のまとめ方、実験レポートの書き方について、実践的に学習する。

(オムニバス方式)

(井脇貴子) 上下法を用いた聴覚の閾値測定
(川嶋英嗣) 調整法を用いた心理学実験
(高橋啓介) 極限法を用いた心理学実験
(高橋伸子) 信号検出理論を用いた心理学実験
(宮田 Susanne) 言語行動の観察

【授業の目標】

心理物理学的測定法に習熟することで、独自のテーマに対する研究を行うための基礎力を養う。

【授業計画】

- | | |
|-----------|-------------|
| 第1回 | オリエンテーション |
| 第2回 | 実験計画の基礎 |
| 第3回~第4回 | 調整法による実験 |
| 第5回 | レポートの書き方 |
| 第6回~第7回 | 上下法による実験 |
| 第8回~第9回 | 極限法による実験 |
| 第10回~第11回 | 行動観察 |
| 第12回~第13回 | 信号検出理論による実験 |
| 第14回~第15回 | まとめ |

【評価方法】

出席、演習態度、課題レポートにより総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献・資料】

必要に応じて、授業中に指定する。

医療福祉統計演習 I

行松慎二

【授業の概要】

医療福祉分野において扱われる多様な事象について、統計的な考え方に基いて情報を客観的に記述、解釈することは、実証的な調査研究のためばかりでなく科学的論理的思考の何たるかを知る上で不可欠である。本演習では、医療福祉に関わる統計的データ解析の基本的な考え方とその意義について理解し、表計算ソフトおよび統計解析ソフトの利用方法を習得するとともに、適切な統計的手法の選択および解析結果の解釈と推論のための技能を修得する。

【授業の目標】

1. 統計的な思考に必要な基礎的な知識を習得する。
2. 統計的仮説検定の考え方の原理について理解する。
3. データの処理及び記述のためのソフトウェアの利用方法を習得する。

【授業計画】

1. 統計の基礎
2. 標本と母集団
3. 検定の基礎
4. 2群の平均値の比較
5. 3群以上の平均値の比較

【評価方法】

平常点 (出席状況、受講態度) および授業内課題により評価する。

【テキスト】

特定の教科書は使用せず、必要に応じて資料を配布する。

【参考文献・資料】

参考図書、推薦図書などは授業中に随時紹介する。

医療福祉統計演習Ⅱ

奥田達也

【授業の概要】

コンピュータの利用拡大に伴って高度な統計手法が比較的容易に適用できるようになってきた。この演習では表計算ソフトおよび統計解析ソフトを利用して、多変量データを扱う場合の基本的な考え方と各種統計モデルおよびその応用について理解し、出力された分析結果の基本的な解釈の方法について習得するとともに、統計モデルの適用限界の理解と、誤用を避けるための的確な処理イメージの構築を目標とする。

【授業の目標】

医療福祉の領域では多種多様な社会統計が現場の実務に用いられる。しかしこのような公的な統計データの他にも、医療福祉現場ではクライアントのニーズを直接調査しなければならない状況も頻繁に生じる。この演習では、そうした調査の企画・設計と、そこから得たデータから何を読み取るかを中心に進めていく。そのための方法の一つとして多変量解析によるデータ解析を実習することを目的とする。

【授業計画】

1. はじめに：講義概略の説明、受講者の基礎知識の確認
2. 調査法の基礎（1）：調査実施方法
3. 調査法の基礎（2）：標本抽出法とサンプリング
4. 質問紙作成技法（1）：質問紙の設計
5. 質問紙作成技法（2）：質問紙のワーディング
6. 質問紙作成技法（3）：質問紙の構成
7. 多変量解析の基礎（1）：多変量解析とは何か
8. 多変量解析の基礎（2）：多変量解析の種類と適応
9. 多変量解析の実習（1）：SPSSを用いた多変量解析
10. 多変量解析の実習（2）：分析結果の読み取り
- 11～14. 実習

【評価方法】

各自のデータに基づいた実習を行いレポートを作成する

【テキスト】

特に定めない（必要な資料は講義中に指示する）

【参考文献・資料】

すぐわかるSPSSによるアンケートの調査・集計・解析（内田治 東京図書）
SPSSでやさしく学ぶ多変量解析（室淳子・内田治 東京図書）
誰も教えてくれなかった因子分析（松尾太加志・中村知靖 北大路書房）

医療福祉英語演習Ⅱ

MAGNUSON, Kurt

【Course description】

英語論文を読むための知識の向上と、英語論文を書くための基礎、英語での発表やプレゼンテーションなどにおける話すこと・聞くことの基本について習得する。専門性の高い医療福祉分野の英語論文を演習形式によって講読し、英語論文を読む技術と語彙力を高めるとともに、英語論文の内容把握や要約、ヒアリングの技術と語彙力を養う。また、英語論文や英語による要約の作成、英語プレゼンテーションのために必要な英語の基本を習得する。

【Course objectives】

各自の研究テーマに沿った先行研究原著論文を読みこなす力高めるとともに、英語論文作成および英語でのプレゼンテーションの基礎を習得する。

【Course schedule】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回～第3回 英語論文作成の基礎
- 第4回～第5回 英語プレゼンテーションの基礎
- 第6回～第9回 原著論文の講読
- 第10回～第13回 原著論文の報告
- 第14回～第15回 まとめ

【Assessment】

出席、演習における報告およびレポートにより総合的に評価する。

【Textbooks】

特に指定しない。

【Reference】

必要に応じて、授業中に指定する。

医療福祉英語演習Ⅰ

MAGNUSON, Kurt

【Course description】

医療福祉分野やその関連分野についての最新の研究成果や先行研究についての情報を得るためには、英語文献を検索し、必要な英語文献を読みこなす必要がある。医療福祉英語演習Ⅰでは、医療福祉分野の英語文献講読のための基礎について学ぶ。演習形式による医療福祉分野の英語文献の講読を行い、講読を通して英語原著論文を正確に読むために必要な専門的術語の知識やスキル、論文の構成の基本について実践的に学習する。

【Course objectives】

医療福祉分野の英語原著論文の講読を通して、各自の研究テーマに沿った先行研究原著論文を読みこなすための基礎力を養う。

【Course schedule】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回～第3回 文献検索
- 第4回～第13回 原著論文の講読
- 第14回～第15回 まとめ

【Assessment】

出席、演習態度、テストにより総合的に評価する。

【Textbooks】

特に指定しない。

【Reference】

必要に応じて、授業中に指定する。

医療福祉政策特論

大野竜三

【授業の概要】

日本の医療制度の実態について理解を深めると共に、健康保険制度や年金制度などの国際比較に関する特論である。まず日本の医療政策・医療制度・健康保険制度・年金制度についての現状を学ぶ。さらにアメリカ・ヨーロッパ、アジアの諸国における医療の実態についても概観し、日本医療の現状と比較を行なう。

【授業の目標】

医療・福祉の現場で必要とされる医療制度・福祉制度の基礎について学ぶとともに、諸外国の現状との比較を通じて国際的な観点から日本の医療・福祉のシステムや法制度についての理解を深める。

【授業計画】

- 内容
1. オリエンテーション
 2. 日本の医療福祉政策の現状
 - (1) 医療制度と医療保険制度
 - (2) 社会福祉制度と社会保障制度
 - (3) 年金制度
 3. 医療福祉政策の国際比較
 - (1) 欧米諸国における現状
 - (2) アジア諸国における現状
 4. 医療福祉政策の問題点と今後の展望
 5. まとめ

【評価方法】

出席状況およびレポートと筆記試験の成績により評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献・資料】

必要に応じて、授業中に指定する。

医療福祉倫理学特論

伊藤春樹

【授業の概要】

医療および福祉に携わるものにとって、倫理の問題は非常に重要になってきている。医療・福祉サービスを行なうにあたって、当事者の自己決定権、個人の尊厳、プライバシーなどを真の意味でいかに守るかという問題は等閑視できない。これらの概念とともに、どのような制度や仕組みによってそれらが守られているかを学ぶ。また、盲聾者・視覚障害者・肢体不自由児・精神障害者・高齢者などの置かれている現状を知り、倫理の問題について考える。

【授業の目標】

- 1、医療・福祉にかかわる基本的概念の理解を深める
- 2、医療・福祉を利用する人々の理解を深める
- 3、医療・福祉サービス提供者と利用者の関係を把握する
- 4、サービス提供者としての個人の尊厳、利用者としての個人の尊厳
- 5、情報の医療・福祉における意味を理解を深める
- 6、倫理的に医療・福祉を再考する

【授業計画】

- 1) 健康の概念
- 2) 障害の概念
- 3) 高齢者とは
- 4) 弱者とは
- 5) 治療とは
- 6) 介護とは
- 7) 支援とは何か
- 8) 自己決定が治療や介護にとってどのような意味を持つのか(1)
- 9) 自己決定が治療や介護にとってどのような意味を持つのか(2)
- 10) 治療や介護における個人の尊厳とは何か(1)
- 11) 治療や介護における個人の尊厳とは何か(2)
- 12) 治療や支援とその情報、情報テクノロジーにおける倫理問題
- 13) 情報公開条例と個人情報保護条例
- 14) 個人と社会(倫理的側面から)
- 15) 医療と福祉を倫理の側面から

【評価方法】

主に出席、授業への参加態度とレポートにて総合して評価する。

【テキスト】

プリントを配布する。

【参考文献・資料】

授業の際に、必要に応じて紹介する。

発達障害学特論

渡邊一功

【授業の概要】

小児神経科学的立場から神経系の発達の諸問題について学ぶ。てんかん、脳性麻痺、精神遅滞、言語発達遅滞、自閉症、学習障害、染色体異常、先天性代謝異常、変性疾患、末梢神経疾患や筋ジストロフィーを含む筋疾患等、小児期に見られる様々な神経、筋肉の疾患や発達障害に関する知識を習得し、その診断方法や各疾患に対応した治療方法について学ぶ。そして、運動や知的発達の遅れ、及び言語発達障害について探求し、その問題点についても考えていく。

【授業の目標】

脳性麻痺、精神遅滞、言語発達遅滞、てんかん、広汎性発達障害、注意欠陥障害、学習障害、染色体異常、先天性代謝異常、変性疾患、神経筋疾患など、広義の発達障害に関する知識を習得し、その診断方法や各疾患に対応した治療方法や問題点について理解する。

【授業計画】

- 第1回 発達障害の概念・遺伝子異常
- 第2回 先天代謝異常
- 第3回 先天性脳形成異常
- 第4回 染色体異常
- 第5回 先天奇形症候群・胎内環境の異常
- 第6回 周生期脳障害・出生後脳障害
- 第7回 精神遅滞・言語発達遅滞・学習障害
- 第8回 広汎性発達障害・注意欠陥障害
- 第9回 脳性麻痺・不随意運動
- 第10回 神経筋疾患
- 第11回 てんかん
- 第12回 発達障害児の医療的ケア(1)
- 第13回 発達障害児の医療的ケア(2)
- 第14回 発達障害児の療育
- 第15回 試験

【評価方法】

出席状況と期末試験による

【テキスト】

発達障害児の医療・療育・教育(松本昭子・土橋圭子編 金芳堂 ISBNコード:4-7653-1063-9)

【参考文献・資料】

発達障害の基礎(熊谷公明, 栗田広編 日本文化科学社 1999.)
発達障害の臨床(熊谷公明, 栗田広編 日本文化科学社 2000.)
Child Neurology (John H Menkes, Lippincott Williams & Wilkins, 2005)

障害学特論

伊藤春樹 谷口明広

【授業の概要】

(概要)「障害」という問題にたいして、どのように捉え、考えていくか。既存の概念にとらわれず、その根本から考え直していく。そのことから、現代の障害者の置かれている状況や、これからの目標について学ぶ。

(オムニバス方式)

(伊藤春樹) 障害の問題を基本的に学んだ後、さらに、障害のうちでも、特に視覚障害や精神障害などを中心に学ぶ。

(谷口明広) 障害のうち、知的障害、身体障害について探求する。さらに、その現状の問題点についても考えていく。

【授業の目標】

- 1、「障害」の捉え方と考え方の理解を深める。
- 2、歴史的な障害者支援方法の理解を深める
- 3、障害者が抱える問題と自立支援法の狙いの理解を深める。
- 4、本来あるべきと見えかた、考え方を模索する。

【授業計画】

- 1) 「障害学」とは何か(ICFを基本にして)
- 2) 障害をどのように理解するか(視覚障害を中心に)
- 3) 視覚障害とは
- 4) 障害をどのように理解するか(精神障害を中心に)
- 5) 精神障害とは
- 6) 障害をどのように理解するか(知的障害を中心に)
- 7) 知的障害とは
- 8) 障害をどのように理解するか(身体障害を中心に)
- 9) 身体障害とは
- 10) 障害をもつ人々に対する制度(支援費制度から自立支援法)
- 11) 施設収容、自立生活運動、地域生活支援(知的障害、身体障害支援の歴史から)
- 12) 障害をもつ人々に対する制度(支援費制度から自立支援法)
- 13) 脱施設化の意味(視覚障害、精神障害を中心に)
- 14) 地域移行の意味(知的障害、身体障害を中心に)
- 15) 障害者支援の問題と展望

【評価方法】

主に出席と個人発表、期末レポートを総合して評価する。

【テキスト】

プリントを配布する。

【参考文献・資料】

授業中、適宜紹介する。

発達心理学特論

久世淳子

【授業の概要】

胎児期から老年期までの各発達段階における心理的特徴を理解し、その過程を説明するさまざまな発達理論について学習し、医療福祉分野における発達の基礎的事項について理解を深める。具体的には、身体、心理、運動、言語、感覚・認知、パーソナリティ、社会性などの諸側面の発達について、医療・福祉との関連を視野に入れながら、そのメカニズムや問題点について理解を深める。

【授業の目標】

人の一生について学び、発達の諸相を理解する。

【授業計画】

以下の5つのトピックについて1-3回の授業をあてる。

- 1) 発達とは
- 2) 発達の理論
- 3) 各発達段階とその特徴
- 4) 諸側面の発達
- 5) 発達と医療福祉

【評価方法】

レポートを課す。また、講義中に報告を課す。評価のポイントや課題などについては授業にて説明する。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

授業にて適宜紹介する。

老年学特論

柴山 漢人

【授業の概要】

高齢者の心身の変化について、基礎的に学ぶ。加齢によって、聴覚・視覚など、様々な感覚が変化する。また、精神的にも大きな変化が起こってくる。これらの変化について、基礎的・生物学的側面から理解し、その行動面・心理面の理解につなげていく。まず生物学的な変化については、細胞レベルの生化学・生理学的な変化から聴覚・視覚の生理学的変化、脳の器質的変化まで広範に学ぶ。さらにそれによる心理的・精神的な病理についても学んでいく。

【授業の目標】

*高齢者の生理的老化と病的老化（疾病など）について学び、特に「生活習慣病」および「認知症」について深く理解してもらい、一般市民の啓発の役割も果たせるとよりモチベーションが上がることを期待したい。

*更に、リハビリテーションやケア（介護）についても理解してもらう。

【授業計画】

- 1) 老化について
- 2) 高齢者の特徴（疾患、症状、検査値、薬物動態、その他）
- 3) 高齢者の生活機能障害の評価
- 4) 精神疾患（神経症、うつ病、アルツハイマー病、血管性認知症、レビー小体病、前頭側頭型認知症、など）
- 5) 神経疾患（脳血管障害、パーキンソン病、など）
- 6) 呼吸器疾患（肺炎、肺がん、など）
- 7) 心臓疾患（うっ血性心不全、虚血性心疾患、など）
- 8) 腎・泌尿器疾患（腎不全、脱水、尿路感染症、など）
- 9) 骨・運動器疾患（骨粗しょう症、骨折、など）
- 10) その他の疾患
- 11) ケアとリハビリテーション
- 12) 権利擁護と倫理的側面

【評価方法】

*レポートを課す予定

【テキスト】

*日本老年医学会編：老年医学テキスト（メジカルビュー社）

【参考文献・資料】

*随時 紹介予定

医療福祉環境デザイン特論

藤本 尚久

【授業の概要】

高齢者や障害者のQOLを高める視点によって生活環境を見直すバリアフリーから、すべての人間が快適に生活するためのユニバーサルデザインへと広がった環境デザインについて概観し、住環境・都市環境のユニバーサルデザインを創出する基礎を学習する。また具体的にどのような建築・都市計画・環境デザインが用いられているかなど、現状についても学び、今後の課題についても検討する。

【授業の目標】

福祉と医療の施設と住居空間の成り立ちを理解し、よりよい施設と環境空間の機能とデザインについて考える基礎力を身に付ける

【授業計画】

- 1) 医療福祉環境デザインの理念と領域
- 2) 福祉施設の成り立ちと歴史
- 3) 医療施設の成り立ちと歴史
- 4) 現代の医療施設の機能と空間構成
- 5) 住宅・都市と集住の歴史
- 6) 居住空間の原理と建築人間工学
- 7) 福祉環境の設備と機器
- 8) 高齢者福祉と住居のデザイン
- 9) 高齢者福祉の施設空間計画
- 10) 児童福祉と施設空間のデザイン
- 11) ハンデキャップと住居・施設空間のデザイン
- 12) 歩行安全環境と公共施設の計画
- 13) 交通施設・交通機関のバリアフリー
- 14) サインのユニバーサルデザイン
- 15) 要点と全体のまとめ

【評価方法】

レポートを課し、その成果に出席状況を加味して評価する。

【テキスト】

使用しない。配布プリントと画像提示で授業を進める。

【参考文献・資料】

授業中に適宜紹介する。

ターミナルケア特論

大野 竜三

【授業の概要】

自尊の心を持って人生をまっとうするため、告知や蘇生術受け入れ、死を迎える場所について、自分らしい逝き方をしたい人のためのケア方法について学ぶ。現在の日本における癌医療やホスピスの実際について知り、終末期医療にのぞむにあたり、当事者・家族・医療スタッフが置かれている状況について学ぶ。さらに、スタッフとしての心構え対応法などについて、相互に意見交換しながら考えを深めていく。

【授業の目標】

医療福祉の現場において必ず直面するであろうターミナルケアについて、医療福祉スタッフとして知っておくべき終末期医療の実態を理解し、どのように対応するのが当事者・家族にとって最良であるかを考えることができるスタッフになれることを目標とする。

【授業計画】

1. 平均寿命と健康寿命
2. 現代医療と延命治療の実態
3. 一般病院におけるターミナルケア
4. ホスピスにおけるターミナルケア
5. インフォームド・コンセント
6. 患者の自己決定権の尊重
7. リビング・ウィル

【評価方法】

出席状況、発表内容、レポートの成績を総合して評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献・資料】

自分で選ぶ終末期医療（大野竜三著 朝日選書）ほか、授業の際、随時紹介する。インターネットを活用する。

自助活動特論

和田 ちひろ

【授業の概要】

同じ悩みを話し合うことで仲間がいることを確認する、当事者情報により疾病に関することばかりでなく、将来をも含めた生活全般に関する幅広い情報を得るなどの効果・意義が自助活動にある。自助活動を社会資源としてとらえ、適切に活用できるようなシステム作りや、運営者への負担増大、活動のマンネリ化という活動上の問題点、そして自助活動を支えるシステムについて先行研究を概観し、今後の関わりにおける方向性を考察する。データベースでの文献検索に加えて、これらの文献から実証研究に進んでいくための方法論についても理解を深める

【授業の目標】

授業にて明示する。

【授業計画】

授業にて明示する。

【評価方法】

授業にて明示する。

【授業の概要】

ヒトの感覚機能や運動機能の一部あるいは全部に障害がある場合、その機能を電子・機械的に補助して、より質の高い生活(QOL)を送ることができるよう支援する機器システムが要望される。本講ではこのような福祉支援機器システムの工学的基礎と現状の機器システムを学習し、真にQOLの高い人間生活が送れる新しい福祉機器の考案とシステムの構築を行える素養を習得する。とりわけヒトの感覚機能障害を補助・支援するハード及びソフトについて学ぶことを目的とする。

【授業の目標】

この講義では、感覚機能障害を補助・支援するアシスティブテクノロジーの現状と今後に関して討議します。具体的には、障害を持つ人や高齢者にコンピュータをはじめ様々な補助器具とそれらを操作する技術や環境を解説して、自立生活を支援できる知識と能力を向上させることを目的とします。

【授業計画】

スライドと文献を基に説明を行い、対話形式により意見を交換して疑問点を論議し、アシスティブテクノロジーの理解を進めます。具体的には、以下の項目を予定しています。

- ・重症心身障害児施設におけるATの導入とその効果を説明し、具体的な利用事例を通してATの理解を進めます。
- ・AT機器を実際に使用して操作技術を習得することにより、障害に応じて支援機器を提案し利用者を指導する能力を向上させます。
- ・研究論文を基にして、Neural InterfaceやBrain Computer Interfaceなど最新のAT研究動向を学びます。

【評価方法】

講義や討論への参加およびレポートから総合的に判断します。

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

適宜指示します。

社会福祉原論

岡本民夫

【授業の概要】

社会福祉の理念と概念、思想と価値およびその歴史の変遷、西欧・日本・アジア等における社会福祉の歴史の展開など社会福祉の基礎を踏まえ、社会福祉の原理と体系を学ぶ。これまで構築されてきた様々な社会福祉学領域における理論や学説を学ぶとともに、新たな分析概念と理論枠組みの構築による社会福祉研究方法論の開発等による今後の社会福祉の課題と展望を検討する。

【授業の目標】

社会福祉の本質を究明していくための原理、理論、歴史、学説及び研究方法論について学ぶ。

【授業計画】

- 1) 社会福祉の基本概念の検討
- 2) 社会福祉の理念、思想、価値、専門性
- 3) 社会福祉的援助の原理
- 4) 社会福祉学・研究方法論の検討
- 5) 対象認識
- 6) 視点
- 7) 方式
- 8) 手法
- 9) 評価と検証
- 10) 社会福祉における歴史的認識(外国の場合)
- 11) 社会福祉における歴史的認識(日本の場合)
- 12) 社会福祉の学説史
- 13) 社会福祉の機能と分野
- 14) 社会福祉の方法と過程
- 15) 総括と課題

【評価方法】

レポートと出席点

【テキスト】

社会福祉原論(岡村重夫 全国社会福祉協議会出版部 1968年)

【参考文献・資料】

社会福祉原理(岡本民夫・小林良二・高田真治編著 ミネルヴァ書房 2005年)
社会福祉原論 第3版(社会福祉士養成講座編 中央法規 2005年)

社会福祉制度特論

所 道彦

【授業の概要】

社会福祉制度の体制について、政策原理に基づきその全体像を把握する。さらに各制度の目的・対象・給付などについて学ぶ。また、日本の社会保障制度の基本構造(年金保険・医療保険・介護保険・健康保健など)とその特質について、歴史的な展望や国際的な比較のなかで、明らかにしていく。福祉サービスのあり方について、権利擁護、苦情解決、契約手続きなどについても理解を深める。

【授業の目標】

現代福祉国家における社会福祉制度の役割・機能を整理するとともに、日本における近年の制度改革を踏まえて、行政の新たな役割、利用者、サービス提供者との三者間の関係をめぐる問題を分析し、今後の制度的課題を明らかにする。

【授業計画】

- 1) 社会福祉制度分析の枠組み
- 2) 社会福祉におけるニーズ
- 3) 社会福祉における資源
- 4) 資源の供給主体
- 5) 資源の再分配と福祉国家
- 6) 資源供給の方法と原理
- 7) 社会保険と税
- 8) 選別主義と普遍主義
- 9) 福祉国家の類型
- 10) 日本型福祉システムの発展過程
- 11) 社会福祉基礎構造改革
- 12) 社会サービスと市場原理
- 13) 日本の社会福祉の将来展望

【評価方法】

レポートを課す(評価のポイントについては授業にて説明する)

【テキスト】

テキストは指定しない。
授業中に資料を配布する。

【参考文献・資料】

授業の最初に指示する。

社会福祉方法特論

春見静子

【授業の概要】

ソーシャルワークの価値、知識、技術の相互関連、およびソーシャルワークの主な構成要素について体系的に習得する。また、ソーシャルワークの歴史的な変化の中での、現代の制度について検証する。中でも障害者福祉におけるソーシャルワークのあり方について学ぶ。障害児・障害者とその家族のためのソーシャルワークの原則・課題・ケースマネジメントのあり方について具体的に考えることにより、理解を深める。

【授業の目標】

- 目標
- 1) ソーシャルワーク理論の発展について理解する
 - 2) ソーシャルワーク理論のモデルを理解する
 - 3) ソーシャルワークの体系を理解する
 - 4) ソーシャルワークの方法について理解する
 - 5) 障害のある子どもとその家族のソーシャルワークの実際を学ぶ

【授業計画】

- 内容
- 1) アメリカにおけるソーシャルワークの発展と今日の動向
 - 2) ソーシャルワークのさまざまなアプローチ、心理・社会的アプローチ、問題解決アプローチ、危機介入アプローチ、課題中心アプローチなど
 - 3) ソーシャルワークのアセスメントの方法
 - 4) 事例検討

【評価方法】

講義への参加状況とレポートにより総合的に評価する

【テキスト】

社会福祉援助技術論(深澤里子、春見静子編著 光生館)
ソーシャル・アセスメント-利用者の理解と問題の把握(J. ミルナー/P. オバーン著 ミネルヴァ)
社会福祉援助技術演習(深澤里子、スーザン・ヴォーゲル監修 光生館)

【参考文献・資料】

授業時にその都度紹介する

家族福祉特論

佐々木政人

【授業の概要】

社会福祉実践の目標は、地域・家庭における日常生活上の家族問題の解決にあるといえる。本特論では、様々な地域・家庭生活上の問題把握及びその解決に向けての家族ソーシャルワークの研究に焦点を当て、地域・家庭生活における人間行動の把握・分析のための基礎理論を基盤に、21世紀におけるソーシャルワーク実践のあり方を模索する。

【授業の目標】

- 1) 福祉援助方法論に関する歴史的経緯の理解
- 2) エコロジカル・ソーシャルワーク(ライフモデル)の理解
- 3) ライフモデルにおける家族問題の把握と援助展開過程の理解
- 4) 各種映像メディアやノンフィクション著作(家族問題関連)からの学びと理解

注) クラスは講義及びクラスディスカッション方式を採用する予定。

【授業計画】

- 1) 福祉援助方法論の歴史的経緯
- 2) 福祉ニーズの把握とソーシャルサービスプログラム開発の意義
- 3) ライフモデルの基本枠組(個人・家族ニーズのアセスメントを中心に)の把握
 - 1) 個人の成長にともなう変化と家族ニーズ(発達理論の理解)
 - 2) ライフサイクル上の家族変化と家族ニーズ(家族ストレス論の理解)
 - 3) 社会的地位・役割上の変化と家族ニーズ(役割理論の理解)
 - 4) 危機的出来事と家族ニーズ(危機理論の理解)
 - 5) その他(援助機関環境・コミュニケーション:組織論及びコミュニケーション理論の理解)
- 4) 家族支援の援助過程
 - 1) 出合い
 - 2) 交わりと協働
 - 3) 別れと旅立ち
- 5) 振り返りと評価

【評価方法】

出席状況、クラスでの発表・貢献、レポートの成績を総合して評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献・資料】

- (1) The Life Model of Social Work Practice (Germain, C.B. & Gitterman, A. Columbia Univ. Press 1996年)
- (2) 家族と生活ストレス(石原邦雄著 放送大学教育振興会 2000年)
- (3) 家族支援ハンドブック(インスー・キム・バーグ著 磯貝希久子監訳 金剛出版 2002年)
- (4) その他、授業の際、随時紹介する。

地域福祉特論

柴田謙治

【授業の概要】

地域福祉理論を構成する価値、思想、構成要件を明らかにし、その運営と実践についての理論を学ぶ。まず社会福祉において、地域福祉がどう位置づけられているか、その概念、理念の発展と現状を理解する。さらに地域福祉推進のための社会資源や推進方法を概観し、地域福祉推進のための知識について理解を深める。また先進的な地域福祉について事例を学ぶことで、具体的な地域福祉の手法についても学習する。

【授業の目標】

まずセツルメントの歴史から、社会福祉における地域福祉の位置づけや歴史、発展を学び、続いてイギリスのセツルメントと社会福祉協議会の事例から地域福祉を推進する方法を学ぶ。そして日本の社会福祉協議会から地域福祉の運営と実践の理論と実際を理解し、社会福祉協議会の歴史から地域福祉理論を構成する価値や思想、構成要件を学ぶ。こう書くといがいすべてパワーポイントで画像付き。

【授業計画】

- 1 社会福祉と地域福祉：横須賀基督教社会館と名古屋キリスト教社会館の社会関係の保存
 - 2 社会福祉と地域福祉：東京帝国大学セツルメントと興望館の自律支援
 - 3 社会福祉の開発的機能と社会資源：トインビーホールとパーミンガム・セツルメント
 - 4 イギリスのコミュニティワークの技術：農村地域協議会の事例から
 - 5 日本の社会福祉協議会の活動：名古屋と愛知の社協活動
 - 6 関西の社協による地域福祉の推進と運営方法：但東町社協などの事例から
 - 7 地域福祉の構成要件：全国社会福祉協議会はなぜできたのか
 - 8 住民主体の思想と地域組織化の方法：山形会議と山形における社協活動
 - 9～13 受講者が関心のある分野についての先進事例の報告
- 1～8回は柴田が講義形式ですすめ、9～13回は受講者が先進事例を調べて報告する形式をとる。

【評価方法】

9～13回の発表とそれをもとにしたレポートによる。評価のポイントは授業中に説明する。

【テキスト】

コミュニティワークの理論と実践を学ぶ（濱野一郎・野口定久・柴田謙治編著、みらい）

【参考文献・資料】

授業中に紹介する。

精神科医療特論

舟橋龍秀

【授業の概要】

精神科医療においてその対象となる疾患、特に統合失調症およびうつ病について詳しく学ぶ。また病院における、治療対応・病院チーム医療、精神科医・精神保健福祉士・作業療法士・看護師などの役割やおかれている現状などについて学ぶ。さらに、応急入院、措置入院における治療対応、および司法精神科医療についても実際の事例を通して理解する。

【授業の目標】

1. 精神保健福祉法、心神喪失者等医療観察法に基づいた精神科医療と精神保健福祉士の果たすべき役割について学ぶ。
2. 精神科医療におけるインフォームド・コンセント、責任能力論についての基本的知識を修得する。
3. 実際の事例に基づくケーススタディによって、多職種チームにおける精神保健福祉士の役割を学ぶ。

【授業計画】

- 1) 精神疾患概説（その1）統合失調症、感情障害
- 2) 精神疾患概説（その2）認知症、神経症、人格障害など
- 3) 精神科治療概説 心理療法、薬物療法、作業療法など
- 4) 精神科医療におけるインフォームド・コンセント、個人情報取り扱い
- 5) 責任能力論 心神喪失、心神耗弱の概念
- 6) 中間レポートについての発表・討論
- 7) 精神保健福祉法解説（その1）基本理念、精神医療審議会、精神保健指定医
- 8) 精神保健福祉法解説（その2）保護者、入院形態、精神病院における処遇その他
- 9) 成年後見制度
- 10) 心神喪失者等医療観察法解説（その1）基本的理念と制度、社会復帰調整官
- 11) 心神喪失者等医療観察法解説（その2）入院医療、通院医療、鑑定入院 多職種チームによる医療
- 12) ケーススタディ（その1）
- 13) ケーススタディ（その2）

【評価方法】

レポートによる評価（評価のポイント等については授業の中で説明する。）

【テキスト】

未定

【参考文献・資料】

授業の中で紹介する。

精神保健特論

諏訪真美 高橋俊彦

【授業の概要】

（概要）青年期の精神保健、および成人期の精神保健について学ぶ。

（オムニバス方式）

（諏訪真美）青年期のメンタルヘルスについて学ぶ。特にアスペルガー症候群などの軽度発達障害の青年の現状についてや、現代青年の心理的な問題・傾向について、社会的ひきこもり、神経症の症状変化などを通して考えていく。
（高橋俊彦）成人期の精神障害・メンタルヘルスについて学ぶ。基本的な障害から、現代病ともいわれる精神保健の問題まで、時代の病理・現状を通して考えていく。

【授業の目標】

精神保健に関して基本的な知識を学び、この問題に対する広い視点や考え方を身につける。

【授業計画】

1. 青年期の心理的な特徴について
2. 青年期の心理的な諸問題について
 - ・ひきこもり
 - ・青年期の広汎性発達障害
 - ・神経症の諸類型
3. 成人期の心理的な特徴について
4. 成人期の心理的な諸問題について
 - ・気分障害
 - ・躁うつ病・うつ病
 - ・境界例
 - ・妄想性障害
 - ・統合失調症
5. 実際の事例について検討する

【評価方法】

出席状況、受講態度、レポートおよび筆記試験の成績を総合して評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献・資料】

授業の際、随時紹介する。

高齢者援助技術演習

神波幸子

【授業の概要】

高齢者福祉の分野における援助について、文献講読や事例検討など具体的なテーマを通じて学んでいく。特に高齢者のケアマネジメント、在宅ケアのためのネットワーク作りへのソーシャルワーク、医療との連携など、高齢者を抱えた家族の支援、今日の課題となっているテーマについて詳しく学ぶ。さらにそれらを支える施設職員、ケアマネージャー、ソーシャルワーカーの役割についても検討していく。

【授業の目標】

高齢者援助の質について、高齢者及び認知症高齢者のスピリチュアルペインの視点と介護者家族への援助の視点などから考える。また、利用者及び介護者家族がどのような援助専門職者を望んでいるかを考えていく。

【授業計画】

受講者の関心に即して、決めていく。

【評価方法】

出席（50%） レポート・報告（50%）

【テキスト】

授業時に指示

【参考文献・資料】

授業時に指示

家族・児童援助技術演習

佐々木政人

【授業の概要】

児童福祉の分野における福祉援助について、文献講読や事例検討など具体的なテーマを通じて学んでいく。まず家族、家庭、家庭機能、家庭養育機能、ファミリーサービスなどの概念を整理する。そして現代の子ども家族のおかれている状況、離婚家族や高齢者や障害者などを抱える課題を負った家族などの実態を深く理解し、家族援助の視点を高める。さらに家族機能を改善することをめざすソーシャルワークについて具体的に学んでいく。

【授業の目標】

1. さまざまな家族問題の理解と支援モデル（家族エンパワメント）の把握
2. 家族支援技法の理解と開発
3. 家族支援サービスの理解と開発
4. 海外における家族支援サービスの動向把握

注）本年度は、特にニュージーランドで開発されたファミリー・グループ・カンファレンス（FGC）を中心に、欧米で導入・展開されている家族支援サービスモデルの研究に焦点を当て、クラスを運営する。

【授業計画】

1. FGCからの学びをとおして今日の家族問題を探る
2. FGCからの学びをとおして家族支援サービスのあり方を模索する
 - 1) 支援サービス理念の理解
 - 2) 支援サービス目標の理解
 - 3) 支援サービスを支える理論的把握
3. FGCからの学びをとおして家族支援過程を探る
 - 1) ステップⅠ（家族合意の段階）
 - 2) ステップⅡ（FGC 開催の段階）
 - 3) ステップⅢ（フォローアップとアフターケアの段階）
4. 各自が関心を持っている家族問題の発表
 - 1) コース 2) 支援目標 3) 支援モデル 4) 支援過程 5) 支援サービス 6) 支援技法
5. 各自が関心を持っている家族問題に対応するための支援サービスモデルの開発

【評価方法】

出席状況、クラスでの発表・貢献、レポートの成績を総合して評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献・資料】

- 1) *Effective Participatory Practice: Family Group Conferencing in Child Protection* (Connolly, M. & McKenzie, M.; Aldine De Gruyter 1999年)
- 2) 完璧な親なんていない! (ジャニス・ウッド・キヤクノ著 三沢直子監修 ひとなる書房 2002年)
- 3) よわかる家族福祉 (島中宗一編 ミネルヴァ書房 2002年)
- 4) 老人と家族のカウンセリング (J.J.ヘル & J.H.ウィーランド著 小森康他訳 金剛出版 1996年)
- 5) その他、授業の際、随時紹介する。

精神障害者援助技術演習

伊藤勝也 吉田みゆき

【授業の概要】

（概要）精神保健援助について文献講読を行なう。また病院での援助や地域援助に関する具体的な事例検討などを通じて学んでいく。

（オムニバス）

（伊藤勝也）地域精神保健の立場から生活支援を中心に検討する。保健所・市町村・精神保健福祉センターの機能を学び、そこでの精神保健福祉士の役割について考え、地域連携について学んでいく。

（吉田みゆき）医療の立場から見た生活支援を中心に検討する。特に SST などグループワークの技法を詳しく学ぶ。さらに医療機関と地域の社会復帰施設や行政機関とのかかわりについても理解を深める。

【授業の目標】

精神障害者の自立生活支援をめぐる、精神障害者の生活の現実を把握するとともに、地域現場の役割、医療現場の役割を整理し、精神保健福祉士としての専門援助技術の理解を深める。

【授業計画】

1. 精神科医療の動向と精神保健福祉士
 - ・相談援助
 - ・精神科リハビリテーションとグループワーク
 - ・チームワーク
 - ・地域関連領域との連携
2. 市町村を中心とした精神障害者福祉施策展開について
3. ケアマネジメント ネットワークキング コンサルテーション 啓発・普及活動
4. 当事者活動 家族会 ボランティア
5. 事例検討

【評価方法】

レポート 出席状況

【テキスト】

特に指定しない

【参考文献・資料】

随時紹介

障害者援助技術演習

春見静子

【授業の概要】

身体障害者・知的障害者福祉の分野における援助について、文献講読や事例検討など具体的なテーマを通じて学んでいく。特に障害者のエンパワメントやアドボカシーについて、その理念をしっかりと理解するとともに、具体的な事例を通して学習をする。さらにこれらの日本での実践、海外での実践について国際的な比較を行ない、幅広い視野から障害者の問題について考察を深める。

【授業の目標】

- 目標
- 1 障害を理解する
 - 2 障害のある人を理解する
 - 3 障害のある人とのコミュニケーションの方法を学ぶ
 - 4 障害のある人のエンパワメントの方法を学ぶ
 - 5 障害のある人のアドボカシーの方法を学ぶ
 - 6 障害のある人の家族の援助の方法を学ぶ
 - 7 障害のある人のケアマネジメントの方法を学ぶ

【授業計画】

内容

- 1 障害の理解：医学、教育学、心理学、社会福祉学からの理解 WHO の理解
- 2 障害のある人の理解：障害のある人の視点からの援助とはどのようなものか。障害のある人の生活の質を高めるために必要なことは何か
- 3 障害のある人とのコミュニケーション：面接やグループワークの実践
- 4 障害のある人のエンパワメント：インテグレーションの支援、就労支援、事例検討
- 5 障害のある人のアドボカシー：権利擁護事業、成年後見制度とソーシャルワーク
- 6 障害のある人の家族への援助：家族療法と家族ソーシャルワークの適用
- 7 障害のある人のケアマネジメント：ケアマネジメントの過程、ケアマネジメントの実践

【評価方法】

授業への参加状況と、レポートの提出を求める

【テキスト】

授業の中で紹介する

【参考文献・資料】

授業の中で紹介する

ソーシャルサービス研究

伊藤春樹 大野竜三 神波幸子 佐々木政人 諏訪真美
高橋俊彦 谷口明広 永田忠夫 春見静子

【授業の概要】

（概要）社会福祉および精神保健福祉の研究テーマについて担当教員がそれぞれの研究テーマについて解説する。その後、各自が「研究計画」の発表を行ってアドバイスを受け、研究の方向性および所属ゼミを決定する。

（オムニバス方式）

- （伊藤春樹）障害論を中心に解説
- （神波幸子）高齢者福祉政策について解説
- （大野竜三）ターミナルケアおよび医療福祉政策について解説
- （佐々木政人）児童福祉および家族療法について解説
- （谷口明広）身体障害・知的障害について解説
- （春見静子）社会福祉の基本について解説
- （諏訪真美）精神保健について解説
- （高橋俊彦）精神病理学について解説
- （永田忠夫）心理学研究について解説

【授業の目標】

本研究科ソーシャルサービス専攻における各教員の専門分野について概観することによって、学生が所属すべきゼミナールの選択のための情報を提供する。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション（春見静子/諏訪真美）（第1部）
- 第2回 社会福祉と障害論（伊藤春樹）
- 第3回 終末期医療とターミナルケア（大野竜三）
- 第4回 高齢者福祉（神波幸子）
- 第5回 児童福祉と家族援助（佐々木政人）
- 第6回 心理学研究（永田忠夫）
- 第7回 身体障害・知的障害（谷口明広）
- 第8回 社会福祉学（春見静子）
- 第9回 精神医学・精神保健学（諏訪真美）
- 第10回 精神医学・精神病理学（高橋俊彦）（第2部）
- 第11回 研究領域とテーマについて話し合い（関係教授）
- 第12回 研究領域とテーマについて話し合い（関係教授）
- 第13回 研究領域とテーマについて話し合い（関係教授）
- 第14回 研究テーマの決定（各指導教授）
- 第15回 まとめ（各指導教授）

【評価方法】

出席、演習態度とレポートにより総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定しない。必要に応じてハンドアウトを配布する。

【参考文献・資料】

必要に応じて、授業内で指示する。

社会福祉研究 I

伊藤春樹 大野竜三 佐々木政人 谷口明広 永田忠夫 春見静子

【授業の概要】

院生各自の研究テーマを検討し、計画に基づき討議していく。テーマに沿った調査や学習も行なう。そして、修士論文の中間発表会、関連学会等の発表なども利用して、院生の研究活動を指導し、修士論文の完成を支援する。社会福祉研究 I では、テーマの選択、事前調査、関連文献の調査を中心に、修士論文作成に向けての先行研究・関連研究の調査と問題点の整理に重点を置いた指導を行う。

【授業の目標】

- 1 修士論文の作成を支援する
- 2 文献研究の方法を理解する
- 3 量的調査および質的な調査の方法を理解する
(アンケート調査 インタビュー、ヒヤリング、参加観察の方法等)

【授業計画】

- イ 修士論文のテーマの選定
 - ロ 先行研究のレビュー
 - ハ 文献引用の仕方
 - ニ 論文の構成 論理性とオリジナリティ
 - ホ 研究方法 仮説の検証 文脈からの読み取り 新しい概念や理論の構築を学ぶために、
- 1 各自が関心のあるテーマに関する主要な国内、海外の論文を講読する
 - 2 主要な質的研究方法について文献から学ぶ

【評価方法】

授業への参加状況とレポートによる

【テキスト】

授業時に紹介する

精神保健福祉研究 I

高橋俊彦

【授業の概要】

院生各自の研究テーマを検討し、計画に基づき討議していく。テーマに沿った調査や学習も行なう。そして、修士論文の中間発表会、関連学会等の発表なども利用して、院生の研究活動を指導し、修士論文の完成を支援する。精神保健福祉研究 I では、テーマの選択、事前調査、関連文献の調査を中心に、修士論文作成に向けての先行研究・関連研究の調査と問題点の整理に重点を置いた指導を行う。

【授業の目標】

精神医学、特に神経症、妄想障害、統合失調症、躁うつ病、うつ病その他の疾病を理解し、その治療、環境調整、福祉的援助その他についての理解を深める。

【授業計画】

- 1 精神現象の捉え方、精神と身体の考え方
- 2 正常と異常の考え方
- 3 精神障害の成因
- 4 神経症 1) 成因論
- 5 神経症 2) 治療
- 6 神経症 3) 種類
- 7 境界例 1) 症状
- 8 境界例 2) 成因論
- 9 気分障害 (躁うつ病、うつ病)
- 10 うつ病
- 11 妄想障害
- 12 統合失調症 1) 歴史と処遇
- 13 統合失調症 2) 精神病理
- 14 統合失調症 3) 治療とリハビリ
- 15 期末試験

【評価方法】

レポートによる。

【テキスト】

授業の時に伝える。

【参考文献・資料】

精神病 (笠原嘉 岩波新書581)

精神保健福祉研究 I

諏訪真美

【授業の概要】

院生各自の研究テーマを検討し、計画に基づき討議していく。テーマに沿った調査や学習も行なう。そして、修士論文の中間発表会、関連学会等の発表なども利用して、院生の研究活動を指導し、修士論文の完成を支援する。精神保健福祉研究 I では、テーマの選択、事前調査、関連文献の調査を中心に、修士論文作成に向けての先行研究・関連研究の調査と問題点の整理に重点を置いた指導を行う。

【授業の目標】

修士論文作成のため院生各自の研究テーマについて、先行研究の知見を学ぶことによって絞込みを行い、具体的な研究課題を決定する。

【授業計画】

- 1 修士論文のテーマの選定
- 2 先行研究のレビュー
- 3 文献引用の仕方
- 4 論文の構成 論理性とオリジナリティ
- 5 研究方法 仮説の検証 文脈からの読み取り 新しい概念や理論の構築を学ぶために、
 - ・各自が関心のあるテーマに関する主要な国内、海外の論文を講読する
 - ・主要な質的研究方法・量的研究方法について学ぶ

【評価方法】

出席、演習態度、課題レポートにより総合的に評価する。

【テキスト】

授業時に紹介する。

【参考文献・資料】

授業の際、随時紹介する。

言語心理学特論

天野成昭

【授業の概要】

音声生成発達のシミュレーション、音声の縦断的音響特徴分析、新しい音声処理技術の応用、基本語彙データベースや音声データベースの構築などのテーマについて研究を進める際の信頼性と妥当性ある手順として、実際的なモデルを用いての作業仮説の設定、課題の提示、人間の反応の観測、作業仮説の検証などの言語心理学的手法について理解を深める。

【授業の目標】

音声を中心とした言語の認知と生成に関する基礎知識を獲得し、人間の言語情報処理について理解する。

【授業計画】

1. 音声とは
2. 音響音声学の基礎
3. 母音の知覚
4. 子音の知覚
5. カテゴリー知覚(範疇知覚)
6. 音声知覚の運動理論
7. 弁別的素性と音声素性検出器
8. 音響的不変性の理論
9. 両耳分離聴
10. 並列分散処理モデル:ボトムアップ対トップダウン
11. 乳児の音声知覚
12. 音声知覚の発達
13. 動物の音声知覚
14. 音声知覚の障害
15. 言語能力の測定

【評価方法】

テストまたはレポートを課す。

【テキスト】

音声知覚の基礎(ジャック・ライアルズ著 今富・荒井・菅原監訳 海文堂)

【参考文献・資料】

特になし。

言語聴覚病理学特論II

吉野眞理子

【授業の概要】

言語発達障害、聴覚障害、発声・構音障害や高次脳機能障害など言語聴覚障害に関わる器官の解剖学、生理学、生化学的知識を基礎として、臨床上重要な疾患の病態を画像による病変部位と症状との対応などから把握する。その上で各言語障害における評価法、最新の治療法(特に発語失行や失構音)、治療の目標設定、指導・訓練・相談・マネジメントの方法と実際について理解を深める。

【授業の目標】

言語聴覚障害の解剖学的・生理学的・生化学的基盤を理解し、後天性言語障害の評価・治療の概要について、指導・訓練・相談・マネジメントの方法と実際を含めて習得する。

【授業計画】

1. コミュニケーション障害の神経基盤
2. 後天性コミュニケーション障害の種類
3. 失語の症候学
4. 構音障害の症候学
5. 発語失行の症候学
6. 右半球損傷、痴呆、外傷に伴うコミュニケーション障害の症候学
7. 後天性コミュニケーション障害の回復と言語治療の効果
8. 失語の治療理論
9. 後天性コミュニケーション障害への心理社会的アプローチ
10. まとめ・ディスカッション

【評価方法】

出席状況と講義時の課題・討論への参加、レポートを総合的に評価する。

【テキスト】

授業にて紹介する。

【参考文献・資料】

授業にて紹介する。

言語聴覚病理学特論I

八田武志

【授業の概要】

左右の脳機能の違い(ラテラルティ)や相互関係に関する事、左ききの認知機能・行動特性について検討する利き手に関する事、脳損傷による非言語性認知障害および認知リハビリテーションを検討する脳損傷と認知機能に関する事、認知心理学的評価テストや人間関係構造の把握検査の開発などメンタル・ストレスに関する事、コンピュータを媒介とする情報伝達特性、日本語認知処理に関する事など最新の研究を通して、神経心理学的な側面から言語聴覚病理学についての理解を深める。

【授業の目標】

神経心理学的な側面から日本語認知特性の特徴を理解しつづ、それらの知識に基づく講師自身の研究を通して、言語聴覚病理学についての理解を深める。

【授業計画】

1. 離断脳研究について(動物研究、離断脳患者を中心に)
2. 視覚機能における左右脳機能差(ラテラルティ)
3. 聴覚機能における左右脳機能差(ラテラルティ)
4. 左右脳機能差(ラテラルティ)の性差と発現メカニズム
5. 左右脳機能差(ラテラルティ)の発達とその障害
6. 学習経験・訓練と左右脳機能差(ラテラルティ)
7. 利き手の起源とその評価方法
8. 左利きの脳機能
9. 認知機能の神経心理学的評価
10. 中高年者と脳損傷者の認知機能
11. 日本語認知処理の特性
12. 脳損傷による認知機能障害と認知リハビリテーション
13. 医療現場での人間関係の把握とメンタルストレスの評価

【評価方法】

試験による

【テキスト】

とくに指定しないがレジュメを適宜準備する

【参考文献・資料】

脳のはたらきと行動のしくみ(八田武志 医歯薬出版 2003)
左ききの神経心理学(八田武志 医歯薬出版 1996)
シンボル配置技法の理論と実際(八田武志(編) ナカニシヤ出版 2001)

言語聴覚療法特論

渋谷直樹

【授業の概要】

言語障害に対して言語的手段を用いる治療法は、いかなる機制で成立するのか。神経生理学、認知論、言語論、コミュニケーション論等の背景となる語理論の意義を検討する。また言語障害の性質を分析し、実際の言語治療を展開する上で各理論から導き出される実際ので根拠に基づいた方法論、指導・訓練・相談・マネジメントの方法と実際など、治療手技についてできるだけ具体例を交えながら理解を深める。

【授業の目標】

1. 障害された言語様式に対して、その障害構造を分析することにより適切な治療理論を選択できる。
2. 言語治療プログラムの例を文献研究し、適切な治療プログラムの立案について考察できる。
3. 具体的な治療例を比較検討することにより、訓練の効果や妥当性、マネジメントの適切性について考察できる。
4. 以上について失語を例にして論じることができる。

【授業計画】

- 1) 失語の言語症状と分類
- 2) 失語の言語治療の方法と適用 (1) 刺激・促進法など
- 3) 失語の言語治療の方法と適用 (1) 刺激・促進法など
- 4) 失語の言語治療の方法と適用 (2) 認知神経心理学的アプローチなど
- 5) 失語の言語治療の方法と適用 (2) 認知神経心理学的アプローチなど
- 6) 失語の言語治療の方法と適用 (3) 実用・グループ訓練など
- 7) 失語の言語治療の方法と適用 (3) 実用・グループ訓練など
- 8) 失語の言語治療例の抄読
- 9) 失語の言語治療例の抄読
- 10) 失語の言語治療例の抄読
- 11) 失語の言語治療の実践例の検討
- 12) 失語の言語治療の実践例の検討
- 13) 成人失語への環境システムアプローチの展望
- 14) 失語言語治療の最近の研究動向
- 15) 学習評価

【評価方法】

レポートを課す。

【テキスト】

追って知らせる。

【参考文献・資料】

授業にて資料を配布する

摂食嚥下障害学特論

長谷川和子

【授業の概要】

神経学的疾患や構造的原因による摂食・嚥下障害の発生のメカニズム、検査法・評価法、治療・訓練（間接訓練・直接訓練）、マネジメント、チーム医療について学ぶ。

【授業の目標】

摂食嚥下障害の神経学的・生理学的・心理学的発生機序について学び、様々な臨床像を分析し対応できる能力を養う。

【授業計画】

下記の項目について、体験や実技を交えて理解を深ながら講義する。

- 摂食嚥下機能の神経学的過程
- 摂食嚥下障害の様々な病態
- 評価と分析
- 治療法

【評価方法】

出席状況、授業態度、レポートの成績を総合して評価する。

【テキスト】

プリントを配布する。

【参考文献・資料】

授業の際、随時紹介する。

生理光学特論

鶴飼一彦

【授業の概要】

眼球光学系の特徴やその生理機能の基礎について学び、屈折異常や調節、瞳孔対光反応、眼球運動、輻輳の機能について理解を深める。また、調節と輻輳、調節と老視、調節と弱視、調節と輻輳における順応、ヘッドマウントディスプレイの使用による屈折・調節・輻輳機能への影響、眼精疲労、映像酔いなどのトピックについても取り上げ、解説する。

【授業の目標】

生理光学は、眼球の光学と視機能の基礎を扱う学問分野である。この分野に関しては、視能矯正学の基礎であり、すでにひととおり学習している事と思うが、そこで扱われているのは何十年前にも明らかにされた事が主で、最新の知見はわずかしか含まれていない。この分野も視覚に関する研究の進展とともに新しい知見が続々と得られており、それらについてともに考えて行きたい。

【授業計画】

- 1) 光学の基礎（波としての光、幾何光学）
- 2) 視覚の基礎 1. 眼球光学
- 3) 視覚の基礎 2. 屈折と調節
- 4) 視覚の基礎 3. 眼球運動
- 5) 視覚の基礎 4. 両眼視機能
- 6) 視覚の基礎 5. 形態覚
- 7) 視覚の基礎 6. 運動視
- 8) 学生による論文紹介
- 9) 平衡覚と視覚
- 10) 自律神経と視機能
- 11) 視機能臨床検査と視覚の基礎
- 12) 視覚人間工学
- 13) 学生による論文紹介

【評価方法】

いくつかの候補の中から各自で選んだ論文の内容を発表する。発表の際に基礎的事項をどの程度理解しているかを評価する。

【テキスト】

なし

【参考文献・資料】

Vision Research, Journal of Vision, Ophthalmic and Physiological Optics, Investigative Ophthalmology, Optometry and Vision Science, などの雑誌に掲載された論文

視覚心理学特論

河本健一郎

【授業の概要】

人間の「見え」の機能とそのメカニズムの基礎について概説する。明るさの知覚、色覚、人間の色弁別特性、形の知覚、図と地の分化、錯視、運動視、奥行き視に関するトピックを取り上げ、その現象と理論について学ぶとともに、視覚心理学の研究法、視覚心理学を応用した画像等の表示性能の評価、高齢者やロービジョン者の視覚特性の測定・評価について理解を深める。

【授業の目標】

視覚心理学の概要を紹介するとともに、視覚心理学の知見を応用に役立てるための方法について理解を深める。

【授業計画】

- 1) 視覚系の構造
- 2) 明るさの知覚
- 3) 色覚 1
- 4) 色覚 2
- 5) 形の知覚
- 6) 運動視
- 7) 立体視
- 8) 高齢者・ロービジョン者の視覚情報受容特性
- 9) 工学・臨床との接点
- 10) 色の知覚と情報伝達
- 11) 視覚研究の方法 1
- 12) 視覚研究の方法 2
- 13) まとめ

【評価方法】

レポートによる評価。詳細は授業にて説明する。

【テキスト】

プリントを配布する。また必要に応じて、授業にて指定する。

【参考文献・資料】

必要に応じて、授業にて指定する。

視覚病理学特論 I

大庭紀雄

【授業の概要】

臨床で重要な眼疾患の病態、特に遺伝性の眼底疾患の臨床と研究の動向について概説し、その検査法、治療法について理解を深める。眼科領域にはさまざまな遺伝性の眼底疾患があるので、眼の発生と遺伝について基本的事項を説明するとともに、網膜色素変性症をはじめとする視細胞変性、脈絡膜変性、硝子体網膜変性の各種症候群について実際の症例を示してその成因、病態、診断について解説する。

【授業の目標】

1. 眼の発生についての基本事項を理解し説明することができる。
2. 眼の遺伝についての基本事項を理解し説明することができる。
3. 眼の発生異常についての基本事項を理解し説明することができる。
4. 眼の遺伝性疾患についての基本事項を理解し説明することができる。

【授業計画】

1. 眼球、付属器、視路、視覚中枢の発生に関する基礎的知識
2. 眼の発生に関する基礎的知識
3. 眼の遺伝病についての基礎的知識
4. 眼の先天異常や遺伝病についてのカウンセリングについての基礎的知識
5. 眼の先天異常や遺伝病の研究手法

【評価方法】

出席状況、受講態度、レポートおよび筆記試験の成績を総合して評価する。

【テキスト】

プリントを配布する。

【参考文献・資料】

授業の際、随時紹介する。

視覚障害学特論

小田浩一

【授業の概要】

視覚障害者の障害の特性や心理社会的側面における現状と課題について学習する。具体的には、視機能の特性や高次の認知機能に関する障害の基礎について学ぶとともに、弱視レンズや各種補助器具の特徴と問題点について取り上げ、障害の特性に応じた教育的支援・福祉的支援、中途失明者のリハビリテーション訓練、視覚障害者の福祉的支援のあり方について理解を深める。

【授業の目標】

視覚機能が低下したときに、我々人間の行動はどう変化するのか?特に、視覚に損傷を受けると、コミュニケーションや読書がどのように困難になるのか?エイトの開発や処方を含めて、それに対して知覚・認知心理学的にどのような解決策を提示できるのかを考える。また、その解決策が社会福祉制度としてどのように実現されているか、いないか、今後どのようにすることが望ましいかを考える。

【授業計画】

1. ロービジョンと視覚障害
2. 視覚障害による大学生活へのインパクトと、画面読みソフトや画面拡大ソフトの紹介
3. 目が悪いと視覚障害の関係、視力とは?屈折異常とは?
4. 視覚障害の公的定義と公的サービス
5. ロービジョンのタイプ分け-1/4:視力低下
6. ロービジョンのタイプ分け-2/4:コントラスト低下
7. ロービジョンのタイプ分け-3/4:視野障害、求心性視野狭窄と中心視野欠損
8. ロービジョンのタイプ分け-4/4:照明への不適応=まぶしさ(Glare)/夜盲
9. ロービジョン・シミュレーションと補助具による困難の解消-1/3
10. ロービジョン・シミュレーションと補助具による困難の解消-2/3
11. ロービジョン・シミュレーションと補助具による困難の解消-3/3
12. 全体のまとめ

【評価方法】

講義に関連した内容のレポートを課す。また、講義の途中で実習や課題の内容を平常点として加味する。レポートと平常点の割合はレポート70%平常点30%とする。

【テキスト】

特に使用しない。ハンドアウトを用いる。

【参考文献・資料】

弱視と認知 (1993) 小田浩一・中野泰志著
視覚障害と認知 (pp.52-00) 鳥居修晃(編) 東京:放送大学教育振興会
視覚情報処理ハンドブック 13章 発達・加齢・障害 Pp.519-561. (小田浩一著 日本視覚学会編 朝倉書店:東京 2000)
視覚の発達、ことばとこころの発達と障害 (小田浩一著 永井書店 2005)

発声発語障害学演習

織田千尋 加藤正子

【授業の概要】

(概要) 言語聴覚障害の中で音声言語の産生に関して学ぶ。機能性構音障害や口唇口蓋裂、舌切除後、鼻咽腔閉鎖不全などの器質性構音障害、および脳血管障害に派生する運動性構音障害など発声発語障害を主症状とする成人及び小児の言語障害について理解を深める。発声発語障害の評価・診断・治療に対する原理と具体的な方法などを文献と事例に基づき検討する。

(オムニバス方式)

(加藤正子) 小児の構音障害と言語管理について
(織田千尋) 成人の構音障害

【授業の目標】

発声発語の産生機序について学ぶ。
成人と小児の構音障害の評価・診断・治療に対する原則と臨床について、理解する。

【授業計画】

1. 発声発語の産生の基礎知識
構音器官の解剖・生理
臨床音声学
構音障害の発症原因
2. 小児の構音障害
小児の構音とその障害について理解する。
音の誤りの分析、評価法、診断法、治療法について学ぶ。
3. 成人の構音障害
成人の構音障害の中でも、特に運動障害性構音障害について理解する。
構音障害の種類、評価法、診断法、治療法について学ぶ。

【評価方法】

出席、演習態度とレポートにより総合評価する。

【テキスト】

授業内で指示する。

【参考文献・資料】

授業内で指示する。

言語発達障害学演習

西村辨作 宮田 Susanne

【授業の概要】

(概要) 小児の言語発達とその遅れについて理解を深める。まず、健常児の音韻、語彙、文法、意味、語用の発達を学習する。しかる後に、言語発達遅れの原因によって状態像の特徴、評価と診断の方法、治療の方策について最新の研究を探り、遅れの改善のあり方を考察する。

(オムニバス方式)

(宮田Susanne) 健常児の言語発達と言語運用などについて学ぶとともにその縦断データの解析について学ぶ。

(西村辨作) 言語発達障害児の言語発達と言語獲得について、障害別の特徴、評価、およびアプローチの実際について学ぶ。

【授業の目標】

1. 健常児の言語発達と言語運用などについて理解する。
2. 言語発達障害児の言語発達と言語獲得の特徴について理解する。
3. 障害別の特徴、評価法、アプローチの実際について学ぶ。

【授業計画】

前半7回(宮田) 言語発達の文献の講読。

後半8回(西村) 言語発達障害に関する論文の講読。

【評価方法】

レポートにもとづく。

【参考文献・資料】

『よくわかる言語発達』(岩立志津夫・小椋たみ子編 ミネルヴァ書房)

高次脳機能障害学演習

吉田 敬

【授業の概要】

失語症を中心とした高次脳機能障害の症状、評価法、指導法などについて考える。特に認知神経心理学的な観点に基づき日本語失語症者の言語症状を多面的に評価する方法や会話データの解析方法、失文法における意味的役割の解明など、その結果を訓練に反映させる実践的な治療方法について学ぶ。さらに履修者による文献研究ないし臨床研究の発表をもとに討論を行い理解を深める。

【授業の目標】

高次脳機能障害の各領域について、受講者の研究テーマを深める。

【授業計画】

1. 高次脳機能障害の研究の概略
2. コミュニケーション障害
3. 注意障害
4. 記憶障害
5. 遂行機能障害
6. その他の高次脳機能障害

【評価方法】

授業内での研究発表、期末レポートにより評価する。

【テキスト】

受講生の興味に応じて決定する。

【参考文献・資料】

授業内で指定する。

聴覚障害学演習

井脇貴子 丹羽英人

【授業の概要】

(概要) 聴覚障害について医学的見地から障害のメカニズムについて学び、聴覚障害の原因とその聴覚検査法に基づく評価、および一次および高次聴覚野の機能、抹消と中枢での聴覚の役割について理解を深める。また言語面から聴覚障害について評価、聴覚補償、聴覚活用、アプローチの方法について検討する。

(オムニバス方式)

(井脇貴子) 言語聴覚障害学の立場から聴覚障害者の心理的サポート、言語聴覚環境の整備、語音聴取評価と日常聴覚活用訓練プログラムの実践について学ぶ。

(丹羽英人) 聴覚医学の立場から聴覚障害の機序についての基礎、およびその検査・診断と治療について学ぶ。

【授業の目標】

医学的側面と言語聴覚学的側面から聴覚障害について学び、独自のテーマに対する研究を行うための基礎力を養う。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回～第7回 聴覚医学の基礎を中心とする事例を取り上げ講義する。
- 第8回～第13回 Audiology、Speech pathologyの観点から、講義形式と討論形式で授業を行う。
- 第14回～第15回 まとめ

【評価方法】

出席、態度、課題レポートにより総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献・資料】

必要に応じて、授業中に指定する。

視能検査学演習

田邊宗子

【授業の概要】

視器の解剖学、生理学の知識を基礎として、主に眼科における写真学を中心に学ぶ。眼科写真学の基礎、一眼レフを使用したものから細隙灯写真及び、眼底カメラの応用による前眼部写真の技法の習得、また、カラー眼底写真から蛍光眼底撮影(フルオレセイン蛍光眼底造影・ICG(indocyanine green) 蛍光眼底造影)及びその他特殊撮影(単色光撮影、立体撮影)について概説し、造影検査を含む眼底写真による検査方法とその評価の仕方について理解を深める。

【授業の目標】

視器の解剖学、生理学の知識を基に各疾患にあった客観的な記録及び診断に必要な写真を撮るための技法の習得。

【授業計画】

- 1) 外眼部撮影
- 2) 方向眼位
- 3) 細隙灯写真及び、眼底カメラの応用による前眼部写真
- 4) 眼底写真
 - 1) カラー眼底写真(後極部・パノラマ)
 - 2) 蛍光眼底造影(FA・ICG)
 - 3) 特殊撮影(単色光撮影・立体撮影)

【評価方法】

出席状況・受講態度・レポート及び筆記試験

【テキスト】

プリントを配布

【参考文献・資料】

授業の際、随時紹介

視覚心理学演習

高橋啓介 高橋伸子

【授業の概要】

(概要) 視覚心理学の現象と理論について基礎を学び、運動知覚、奥行知覚、形の知覚、視空間、明るさの知覚、色の知覚、体制化、視覚記憶のトピックについて文献講読を中心とする演習を通じて、人間の「見え」の機能とメカニズムに関する理解を深める。

(オムニバス方式)

(高橋啓介) 視覚的枠組みと視空間の知覚、奥行き知覚、明るさの知覚、色の知覚。

(高橋伸子) 運動知覚、形の知覚、統合と体制化、視覚記憶。

【授業の目標】

当該分野における最新の知見について知識を深め、研究の基礎能力を高める。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回～第8回 原著論文の講読(高橋伸子)
- 第9回～第15回 原著論文の講読(高橋啓介)

【評価方法】

出席、演習態度とレポートによって総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献・資料】

必要に応じて、授業中に指定する。

視能矯正学演習

平井淑江

【授業の概要】

通常ヒトは2つの眼球が6 cm 程離れて眼窩に収まっているのにも関わらず単一眼として働いている。その単一眼は一つ眼小僧のように顔の中央、鼻根部にあって、身体を中心として位置関係を的確に認識している。演習では、この問題に関するケプラー、ニュートン、ヘリング、ヘルムホルツから最近に至る文献講読を通して両眼視機能について学び、また、身近な材料を用いた両眼視機能検査用具の作成を試みる。

【授業の目標】

両眼視研究の起源から現代までの流れを文献講読を通して理解する。
両眼視に関する独自のテーマを考える。

【授業計画】

- 単眼視と両眼視の違いを理解する。
- 両眼視についての文献を読む。
- 両眼視検査のための各眼分離の方法を考える。
- 両眼視機能検査用具を作成する。

【評価方法】

理論的思考・独自性等を総合的に判断する。

【テキスト】

特になし。国内外の論文を購読する。

視覚障害学演習 I

川嶋英嗣 田中恵津子

【授業の概要】

視覚障害者の障害の特性や心理社会的側面における現状と課題について演習を通じて実践的に学ぶ。演習では障害に応じた視機能の特性や文字の読みをはじめとする認知機能の特性、障害に応じて必要な補助器具や教育的支援・福祉的支援について実際の器具や実例をもとに解説し、理解を深める。演習の運営や指導のための必要から、二人の担当者が同時に担当する。

【授業の目標】

ロービジョンの行動評価の方法について理解するとともに、個々の視機能の特性に応じた支援のあり方について考える力を養う。

【授業計画】

下記の内容について集中授業を行う予定である。
授業に必要な準備については迫って指示する。

- ・ロービジョンに関する行動評価の実際
- ・ロービジョンに関する最新知見の文献購読

【評価方法】

出席、演習態度、レポートにより総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献・資料】

必要に応じて、指示する。

コミュニケーション障害研究

井脇貴子 大庭紀雄 加藤正子 川嶋英嗣 高橋啓介 高橋伸子
西村辨作 丹羽英人 平井淑江 宮田 Susanne 吉田 敬 渡邊一功

【授業の概要】

(概要) 言語聴覚学および視覚科学の研究テーマについて広く学習し、各自の研究テーマの方向性を検討して所属ゼミを決定する。

(オムニバス方式)
(井脇貴子) 聴覚言語障害学
(加藤正子) 構音障害
(西村辨作) 言語発達障害学
(丹羽英人) 聴覚医学
(宮田 Susanne) 言語発達と言語心理学
(吉田敬) 高次脳機能障害学
(渡邊一功) 発達障害学
(大庭紀雄) 遺伝性疾患と視覚病理学
(川嶋英嗣) 視覚障害学と視覚心理学
(高橋啓介) 視空間知覚・興行き知覚と視覚心理学
(高橋伸子) 運動知覚・形の知覚と視覚心理学
(平井淑江) 視能矯正学
(三宅義三) 電気生理学的検査と視覚病理学

【授業の目標】

本研究科コミュニケーション障害学専攻における各教員の専門分野について概観することによって、学生が所属すべきゼミナールの選択のための情報を提供する。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション (高橋啓介)
第1部 言語聴覚学領域
- 第2回 言語発達と言語心理学 (宮田 Susanne)
- 第3回 言語発達障害学 (西村辨作)
- 第4回 発達障害学 (渡邊一功)
- 第5回 高次脳機能障害学 (吉田敬)
- 第6回 聴覚医学 (丹羽英人)
- 第7回 聴覚言語障害学 (井脇貴子)
- 第8回 構音障害 (加藤正子)
第2部 視覚科学領域
- 第9回 視覚障害学と視覚心理学 (川嶋英嗣)
- 第10回 視空間知覚・興行き知覚と視覚心理学 (高橋啓介)
- 第11回 運動知覚・形の知覚と視覚心理学 (高橋伸子)
- 第12回 電気生理学的検査と視覚病理学 (三宅義三)
- 第13回 遺伝性疾患と視覚病理学 (大庭紀雄)
- 第14回 視能矯正学 (平井淑江)
- 第15回 まとめ (高橋啓介)

【評価方法】

出席、演習態度とレポートにより総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定しない。必要に応じてハンドアウトを配布する。

【参考文献・資料】

必要に応じて、授業内で指示する。

視覚障害学演習 II

川瀬芳克

【授業の概要】

光学的補助具の特性をレンズ光学および眼光学の立場から解説し、網膜像の拡大および波長の選択性について演習する。

【授業の目標】

目標

1. 各種レンズの光学的特性の理解
2. 網膜像の拡大および縮小の方法とその効果および限界の理解
3. 波長特性のあるフィルターの分光特性と視機能の関係の理解

【授業計画】

内容

1. 光学的補助具
 - 1) レンズの基本
 - 2) 手持ち型拡大鏡の光学的特性
 - 3) 卓上型拡大鏡の光学的特性
 - 4) 単眼鏡の光学的特性
 - 5) 光学的補助具と屈折異常の関係
 - 6) 光学的補助具の選択と指導
2. 波長特性と視機能
 - 1) 波長特性のあるフィルターの基本
 - 2) 羞明、コントラストと波長特性の関係
3. 光学的補助具選定の実際

【評価方法】

出席、演習態度とレポートにより総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定しない。必要に応じて資料を配布する。

【参考文献・資料】

必要に応じて、授業内で指示する。

言語聴覚学研究 I

井脇貴子 加藤正子 西村辨作 丹羽英人 吉田 敬 渡邊一功

【授業の概要】

院生各自の研究テーマを検討し、計画に基づき討議していく。テーマに沿った調査や学習も行なう。そして、修士論文の中間発表会、関連学会等の発表なども利用して、院生の研究活動を指導し、修士論文の完成を支援する。言語聴覚学研究 I では、テーマの選択、事前調査、関連文献の調査を中心に、修士論文作成に向けての先行研究・関連研究の調査と問題点の整理に重点を置いた指導を行う。

【授業の目標】

修士論文作成のための学生各自の研究テーマについて、先行研究の知見を学ぶことによって絞込みを行い、具体的な研究課題を決定する。

【授業計画】

- | | |
|-----------|-------------|
| 第1回 | オリエンテーション |
| 第2回～第4回 | 研究テーマの決定 |
| 第5回～第8回 | 先行研究原著論文の購読 |
| 第9回～第12回 | 研究計画の策定 |
| 第13回～第15回 | 予備的調査・実験 |

【評価方法】

出席、演習態度、課題レポートによって総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献・資料】

必要に応じて、授業内で指示する。

視覚科学研究 I

大庭紀雄 川嶋英嗣 高橋啓介 高橋伸子 平井淑江

【授業の概要】

院生各自の研究テーマを検討し、計画に基づき討議していく。テーマに沿った調査や学習も行なう。そして、修士論文の中間発表会、関連学会等の発表なども利用して、院生の研究活動を指導し、修士論文の完成を支援する。視覚科学研究 I では、テーマの選択、事前調査、関連文献の調査を中心に、修士論文作成に向けての先行研究・関連研究の調査と問題点の整理に重点を置いた指導を行う。

【授業の目標】

修士論文作成のための学生各自の研究テーマについて、先行研究の知見を学ぶことによって絞込みを行い、具体的な研究課題を決定する。

【授業計画】

- | | |
|-----------|-------------|
| 第1回 | オリエンテーション |
| 第2回～第4回 | 研究テーマの決定 |
| 第5回～第8回 | 先行研究原著論文の購読 |
| 第9回～第12回 | 研究計画の策定 |
| 第13回～第15回 | 予備的調査・実験 |

【評価方法】

出席、演習態度、課題レポートによって総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献・資料】

必要に応じて、授業内で指示する。

学校経営と学校図書館

小栗正彦

【授業の概要】

学校教育における学校図書館の教育的意義を確認し、より効果的な学校図書館の活用を目指し、教職員のみでなく、生徒会及びPTAとの連携を視野に入れた望ましい学校図書館の組織と運営はいかにあるべきかを、次の点に視座をあてて、具体的な成功事例を紹介し学習する。

【授業の目標】

司書教諭及び学校図書館司書教諭の資格取得のために必要な基礎的知識を習得する。

【授業計画】

1. 学校図書館の理念と教育的意義
 - (1) 学校教育における学校図書館の役割
 - (2) 館種別にみた図書館の世界
2. 学校図書館の発展と課題
 - (1) 学校図書館法の成立と展開
 - (2) 国内外の先進事例
 - (3) レファレンスサービスの実践
3. 教育行政と学校図書館
4. 学校図書館の経営
学校図書館の経営組織のあり方
5. 司書教諭の役割とその問題点
6. 学校図書館メディアの内容と構成
7. 学校図書館活動と社会のつながり

【評価方法】

課題の提出、学習態度、出席状況などにより、総合的に評価する。

【テキスト】

必要に応じて資料を配付する。

【参考文献・資料】

授業時に紹介する。

学習指導と学校図書館

加納篤憲

【授業の概要】

学校図書館は、教育に必要な資料を生徒及び教員の利用に供することによって、(1) 学校の教育課程の展開に寄与するとともに、(2) 生徒の健全な教養を育成することを目的としている。

この授業では、(1) の目的を達成するために学校図書館はどのようなものでなければならないかを、蔵書構成や利用指導の現状と実践例、教科学習や総合学習における図書館利用の方法と実践例について学ぶ。

また、司書教諭の役割とこれからの学校教育に占める重要性について学習するとともに、利用指導の図書館実習を体験することによって、司書教諭の仕事への理解を深める。

【授業の目標】

学校図書館司書および司書教諭に必要な基礎的知識と心得を習得させるとともに、学習指導における学校図書館の重要性について認識させる。

【授業計画】

1. 教育課程と学校図書館
2. 学習活動を促進する学校図書館——実践例
3. 学校図書館の現状と問題点——蔵書冊数・蔵書構成・図書館利用
4. 各教科・科目の学習指導と図書館——実践例
5. 「総合学習」における図書館利用
6. 図書館利用における学級担任及び生徒図書委員の役割
7. 図書館実習——テーマ学習における司書教諭の指導について
8. 討論——中学・高校時代の経験を踏まえて、学校図書館及び司書教諭の望ましいあり方について考える。

【評価方法】

期末試験、レポートの成績と出席状況を総合して評価。

【テキスト】

自作プリント教材（付資料）

【参考文献・資料】

特になし

学校図書館メディアの構成

中村和夫

【授業の概要】

情報化の著しい進展と共に、従来の活字メディア中心の学校図書館は児童生徒の活字離れにより、大きく変容を迫られている。これからの学校図書館は、児童生徒が喜んで利用できるよう、そのニーズに応え、多様なメディアを取り入れなければならない。この点を中心にして、これからの学校図書館のメディア構成を考えてみたい。

【授業の目標】

1. 学校図書館の各種メディアを特性を理解し、収集、選択する上での諸問題を考察する。
2. 学校図書館メディアの組織化（分類、目録、件名）とその機能を習熟する。
3. これからの理想とする学校図書館のあり方を考える。

【授業計画】

1. 1. 児童生徒が喜んで利用するメディア構成
 - (1) 現在の学校図書館メディアの実態分析
 - (2) 児童会・生徒会図書委員会と学校図書館の資料選定
 - (3) 児童生徒が学校図書館に期待するものは何か
2. 教育課程にマッチしたメディア構成
 - (1) 教養図書中心から教科学習に必要な資料の収集へ
 - (2) 「総合学習の時間」の視点からのメディア構成
 - (3) 「情報」、「オーラル英語」等新しい教科科目への対応
3. 情報化時代にふさわしいメディアの特質の理解
 - (1) ビデオ、DVD、CD等の視聴覚的メディア
 - (2) FD、CD-ROM等の活字メディアに代わるもの
 - (3) Webサイトに代表されるネットワーク系メディアの活用と問題点
4. 学校図書館メディアの組織化
 - (1) 分類の意義と分類作業の基本
 - (2) 目録の種類と目録作業の基本、目録の機械化

【評価方法】

出席状況及びレポート等による。

【テキスト】

使用しない。

【参考文献・資料】

学校図書館メディアの構成（小田光宏編 樹村房）
分類・目録法入門（木原通夫・志保田務 新改訂第3版 第一法規）

読書と豊かな人間性

梅田卓夫

【授業の概要】

現在、児童生徒の読書離れの傾向は拡大し、まったくと言っていいほど本を読まなくなってきた。

児童生徒の読書離れの要因と実態を解明するとともに、学校図書館が「読書と豊かな人間性」の視点に立って、どのような役割を果たすべきかを、具体的な事例を紹介するとともに、一方的な講義に終わることなく、受講者自身の体験も取り入れ、以下のような視座に立った参加型授業を展開する。

【授業の目標】

人類の歴史の中で、図書館・本・読書はどのような役割を果たしてきたか。また個人の成長の過程で読書はどのような意味を持つか。人間精神と読書との関わりを、事例によって見ながら、学校図書館が「豊かな人間性」のために果たすべき役割を考える。

【授業計画】

1. 読書のよること
 - (1) 人はどのようにして読書の楽しみと出会うのか
 - (2) 代表的な先人の読書経験から学ぶ
2. 人間形成と読書
 - (1) 幼児期における読み聞かせの教育的意味
 - (2) 少年期・青年期の決定的・運命的な読書との出会い
 - (3) 読書における、内省、思索の意義
3. 学校教育における読書指導
 - (1) 教師による本の紹介、読み聞かせ
 - (2) 「十分間読書」「朝の黙読」等の実践例
4. 読書と仲間作り
 - (1) 家庭・友人間での読書、対話、読書会
 - (2) 学区図書館を利用した共同研究
5. 読書の技術
 - (1) 情報化時代の読書のあり方
 - (2) 愛読書、好きな作家

【評価方法】

出席状況及びレポートによる。

【テキスト】

使用しない。

【授業の概要】

学校図書館の高度情報化は21世紀には避けて通れない状況である。現在の状況は必ずしも満足はできないが、学校図書館に将来関係すると思われる新しいメディアの運用についての基礎知識と技能は、今後学校図書館の仕事に携わる教員にとって必須だと言える。以上の観点から、次のテーマで実践的な学習を行ない、これからの情報化される学校図書館の効果的な活用を目標とする。

【授業の目標】

教育の情報化にあつて、学校図書館にはその中枢機関としての機能が求められる。その前提となるのがメディアを活用する能力である。その根底となる考え方に焦点を当てる。

【授業計画】

1. 学校図書館と情報機器
 - (1) 学校図書館におけるコンピュータの役割と活用
 - (2) 学校図書館に設置する情報機器
2. 学校図書館とコンピュータとの関わり
 - (1) 図書検索とコンピュータ (OPAC)
 - (2) インターネットを使用する資料の収集
3. 学校図書館の情報メディアの活用
 - (1) 視覚メディアとしてのVTR等
 - (2) 聴覚メディアとしてのDVD、CD等
 - (3) 活字メディアに代わるCDRom、マイクロフィルム等
 - (4) 情報メディアの今後の動向とその対応

【評価方法】

授業内での課題及び試験による。

【テキスト】

使用しない。

英語海外セミナーII (オーストラリア)

NORRIS, Harry T.

【Course description】

Students will be in an English Emersion course with Canberra University. Students will study English and English usage in class, have many English activities out of class and weekly excursions to places of interest around Canberra. Students will home-stay for the entire period in Canberra.

【Course objectives】

This course hopes to improve students' fluency and confidence in using English. Being emerged in English, it is hoped students will stop translating and interpreting into Japanese, but to understand and think in English.

This ability will assist the students greatly in the listening comprehension section of the TOEIC test.

【Course schedule】

After welcome and introductions on the first day. Daily schedules will include morning classes with afternoon activities. Wednesday afternoons will be set aside for excursions to places of interest such as a farm, the National gallery and the interactive science museum "Questacon".

The course will conclude with a 4 day excursion to Jervis Bay and then on to Sydney, activities and sight seeing are preplanned.

【Assessment】

Assessment will be based on Canberra University's standards. These standards are based on ability to use English, willingness to try to use English and improvement in English ability.

【Textbooks】

No text, as necessary worksheets will be given.

米国 NPO インターンシッププログラム

榎田勝利

【授業の概要】

米国ワシントンD.C.にあるCivil Society Consulting Group (CSCG) との共同プログラムとして、毎年2月中旬から約1ヵ月間実施する。米国の民間非営利組織 (NPO) でのインターンシップの体験を通して米国社会が抱える深刻な社会問題を理解し、その問題解決の方法を学ぶ。インターンシップの期間中は、一般の米国人の家庭でのホームステイをし、日常生活を体験する。インターンシップの受け入れ場所は、ワシントンD.C.および周辺地域で、学生の関心分野、英語力、専門的知識、経験等を考慮し、受け入れ団体を決める。

(活動可能な分野) 老人、児童・青少年、自然・環境、識字教育、障害者、家族、ホームレス、ジェンダー、文化・芸術、スポーツ、バイリンガル教育、外国人支援、国際交流・国際協力、博物館・美術館、図書館、その他。

(米国側協力団体) Civil Society Consulting Group (CSCG)

【授業の目標】

実践の場を通して、異文化コミュニケーション能力と情報技術能力の向上を図り、学生の将来のキャリア形成の一助となる機会を提供する。

【授業計画】

(事前研修)・インターンシップの活動分野の決定・日米のNPO、ボランティア団体等の現状学習・日本のNPO、ボランティア団体へのフィールドワーク・英会話のトレーニング・米国側ディレクターによる宿泊オリエンテーション

(現地プログラム)・オリエンテーション宿泊・基本的に月曜から金曜までの5日間のインターン・1日特別研修プログラム・インターンシップの体験報告書の作成と提出・評価会、修了式、さよならパーティ

(事後研修)・フォローアップ研修、報告書作成

【評価方法】

現地での評価(受け入れ団体、ホストファミリー等と報告書)を考慮し総合評価を行う。

【テキスト】

米国側提出の英文資料

【参考文献・資料】

研修時にその都度資料を提供する

Japan's Global Interface I

藤井正志 森下允之 福本明子 真田幸光 JOLLY, James A.

【授業の概要】

本講義は、日本のビジネスの国際的側面を中心に議論し、日本社会・文化を深く認識すること、同時に、異文化理解を深め、今後の日本のあり方を考える。受講対象者は、特別科目等履修生(ただし交換留学による者)・留学生別科生・一定の資格を満たす学部生・大学院生(含む外国人留学生)である。

The omnibus lectures will be conducted in English and mainly introduce the global aspect of Japanese business to students. Focusing on Japan's global interface, students will obtain a deeper knowledge of Japanese culture, society, business, and intercultural exchange as well as what Japan should do in the future.

This lecture is open to:

- Special Credit-Auditors (exchange students only)
- Students enrolled in the Japanese Studies Program at the Center for Japanese Language and Culture
- Undergraduate students, graduate Students and overseas students. (Basic English skills are required.)

【授業の目標】

日本のビジネスの国際的側面を中心とした英語の授業を通して、日本社会・文化を深く認識すること、および異文化理解を深め、今後の日本のあり方を考える力を養うこと。

Through the omnibus lectures conducted in English mainly on the global aspect of Japanese business, students are supposed to obtain a deeper knowledge of Japanese culture, society, business, and intercultural exchange as well as what Japan should do in the future.

【授業計画】

Schedule

1	FUJII, Masaashi	Introduction
2	FUJII, Masaashi	Business Society in Japan
3	FUEMOTO, Akiko	Intellectual Property and Cultures
4	FUEMOTO, Akiko	Intellectual Property and Cultures
5	FUEMOTO, Akiko	Intellectual Property and Cultures
6	SANDA, Yukimitsu	East Asian Economy and Japan
7	SANDA, Yukimitsu	East Asian Economy and Japan
8	MOESHITA, Tadayuki	Overseas Strategy of Japanese Firms
9	MOESHITA, Tadayuki	Overseas Strategy of Japanese Firms
10	MOESHITA, Tadayuki	Overseas Strategy of Japanese Firms
11	JOLLY, James	International Business and Law
12	JOLLY, James	International Business and Law
13	JOLLY, James	International Business and Law

【評価方法】

Assessment

Assessment will be made based on attendance and a report to be written by the students in the final lecture conducted by Professor Jolly. Students will be given 1/2 hour to finalize the report. Even though they are absent from the final lecture, they will still have a chance to write a report and submit it. In that case, it is unlikely for them to be given a good assessment.

出席点及び最後の授業において実施されるレポートにより、総合的に評価する。

【テキスト】

To be announced

【参考文献・資料】

To be announced

Japan's Global Interface II

藤井正志 太田浩司 宮田 Susanne ブイ チトルン
國信潤子 梅田敏文 JOLLY, James A. 福本明子

【授業の概要】

本講義は、国際交流・国際協力・国際ビジネスなどのテーマを通して日本の文化や社会の理解を深める。受講対象者は、特別科目等履修生(ただし交換留学による者)・留学生別科生・一定の資格を満たす学部生・大学院生(含む外国人留学生)である。

This omnibus lecture will be conducted in English and introduce students to cultural exchange, international cooperation and international business, and the part Japan plays in these intercultural movements. Along with increasing an awareness of Japan's global interface will come a deeper understanding of Japanese culture and society. This lecture is open to: Special Credit-Auditors (exchange students only) Students enrolled in the Japanese Studies Program at the Center for Japanese Language and Culture Undergraduate students, graduate Students and overseas students. (Basic English skills are required.)

【授業の目標】

国際交流・国際協力・国際ビジネスなどのテーマで英語で行われる授業を通して日本の文化、ビジネス、社会および異文化理解を深めることを目的とする。Through the omnibus lectures conducted in English mainly on cultural exchange, international cooperation and international business, students are supposed to obtain a deeper knowledge of Japanese culture, society, business and inter-cultural exchange.

【授業計画】

1	FUJII, Masaashi	Introduction
2	OTA, Hiroshi	Language Use in Japan
3	OTA, Hiroshi	Language Use in Japan
4	MIYATA, Susanne	Intercultural Communication from a Psychological Point of View
5	MIYATA, Susanne	Intercultural Communication from a Psychological Point of View
6	BUI, Chi Trung	Intercultural Communication Through NPO Activities
7	KUNINOBU, Junko	Gender Relations in Japanese Society
8	UMEDA, Toshifumi	Information Technology and Information Ethics
9	UMEDA, Toshifumi	Information Technology and Information Ethics
10	FUKUMOTO, Akiko	History and Representations
11	FUKUMOTO, Akiko	History and Representations
12	JOLLY, James	Developing International Business Practices
13	JOLLY, James	Developing International Business Practices

【評価方法】

Assessment

Assessment will be made based on attendance and a report to be written by the students in the final lecture conducted by Professor Jolly. Students will be given 1/2 hour to finalize the report. Even though they are absent from the final lecture, they will still have a chance to write a report and submit it. In that case, it is unlikely for them to be given a good assessment.

出席点及び最後の授業において実施されるレポートにより、総合的に評価する。

【テキスト】

To be announced

【参考文献・資料】

To be announced

初級簿記（3級程度）＊基礎総合

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校の講師が日商簿記検定3級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネートをを行う。前期は2コマ（3時間）ずつ週2回のペースで、後期は2コマ（3時間）ずつ週1回のペースで講義を行う。この講義は初学者向けの講義であり、簿記の仕組みから精算表の作成まで簿記の基礎とされる内容を一通り学習した後、全国公開模擬試験などの問題を通して日商簿記検定3級の合格サポートを行う。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定3級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 簿記の目的・取引・仕訳・勘定口座の記入方法
- 第2回 試算表・商品売上の記帳方法、現金預金の記帳
- 第3回 手形の記帳方法、その他の勘定の記帳方法
- 第4回 その他の勘定記帳方法、主要簿および補助簿
- 第5回 主要簿および補助簿、伝票
- 第6回 直前総まとめ問題集解説（補助簿、試算表、伝票対策）
- 第7回 決算整理（売上原価）、英米式決算法、精算表
- 第8回 決算整理（貸倒、減価償却、固定資産の売却、繰延・見越）
- 第9回 決算整理（消耗品、現金過不足、売買目的有価証券、引出金）
- 第10回 直前総まとめ問題集解説（仕訳、精算表対策）
- 第11回 直前答練第1回、解説
- 第12回 直前答練第2回、解説
- 第13回 直前答練第3回、解説
- 第14回 全国公開模擬試験、解説
- 第15回 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

中級簿記（2級程度）B ＊工業簿記

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校の講師が日商簿記検定2級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネートをを行う。2コマ（3時間）ずつ、週1回のペースで講義を行う。この講義は日商簿記検定3級の合格者およびそれに相当する者向けの講義であり、日商簿記検定2級の試験範囲のうち「工業簿記」を取り扱う。同じ2級の試験範囲である「商業簿記」は中級簿記（2級程度）Aで取り扱うので、同時履修が望ましい。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定2級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 工業簿記の基礎、個別原価計算の体系
- 第2回 材料費会計
- 第3回 労務費会計
- 第4回 経費会計、製造間接費会計
- 第5回 工企業の財務諸表
- 第6回 部門別会計、工場会計
- 第7回 工業簿記の基礎、総合原価計算の体系
- 第8回 単純総合原価計算
- 第9回 減損および仕損
- 第10回 組別・等級別原価計算
- 第11回 標準原価計算
- 第12回 損益分岐点分析、直接原価計算、固定費調整
- 第13回 総まとめ
- 第14回 単位認定試験第1回
- 第15回 単位認定試験第2回

【評価方法】

2回の単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

中級簿記（2級程度）A ＊商業簿記

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校の講師が日商簿記検定2級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネートをを行う。2コマ（3時間）ずつ、週1回のペースで講義を行う。この講義は日商簿記検定3級の合格者およびそれに相当する者向けの講義であり、日商簿記検定2級の試験範囲のうち「商業簿記」を取り扱う。同じ2級の試験範囲である「工業簿記」は中級簿記（2級程度）Bで取り扱うので、同時履修が望ましい。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定2級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 簿記一巡、固定資産
- 第2回 減価償却、銀行勘定調整表、引当金
- 第3回 その他の引当金、商品の評価、税金
- 第4回 株式の発行、利益処分
- 第5回 会社の合併、社債の発行、決算整理
- 第6回 社債の償還、決算法、財務諸表
- 第7回 伝票会計
- 第8回 帳簿組織
- 第9回 特殊商品売買
- 第10回 仕入割引、売上割引、研究開発費、有価証券
- 第11回 債務保証、手形の不渡り、裏書譲渡
- 第12回 本支店会計
- 第13回 総まとめ
- 第14回 単位認定試験第1回
- 第15回 単位認定試験第2回

【評価方法】

2回の単位認定試験の成績に応じて評価をする。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

中級簿記（2級程度）C ＊実践

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校の講師が日商簿記検定2級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネートをを行う。この講義は中級簿記（2級程度）AまたはBの受講者を対象とした講義であり、検定試験直前期に集中的に行う。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定2級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 直前答練第1回、解説
- 第2回 直前答練第2回、解説
- 第3回 直前答練第3回、解説
- 第4回 直前答練第4回、解説
- 第5回 全国公開模擬試験、解説
- 第6回 ファイナルチェック問題、解説
- 第7回 直前総まとめ
- 第8回 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

上級簿記（1級程度）A * 商業簿記

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校が日商簿記検定1級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネーターを行う。2コマ（3時間）ずつ、週1回のペースで講義を行う。この講義は日商簿記検定2級の合格者およびそれに相当する者向けの講義であり、日商簿記検定1級の試験範囲のうち「商業簿記」を取り扱う。同じく1級の試験範囲である「会計学」、「原価計算」、「工業簿記」は上級簿記（1級程度）B、C、Dで取り扱うので、履修することが望ましい。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定1級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 総論、企業会計原則、簿記一巡
- 第2回 一般販売、特殊商品売買Ⅰ
- 第3回 特殊商品売買Ⅱ
- 第4回 特殊商品売買Ⅲ
- 第5回 棚卸資産
- 第6回 固定資産Ⅰ
- 第7回 固定資産Ⅱ
- 第8回 減損会計、繰延資産
- 第9回 研究開発費、引当金Ⅰ
- 第10回 引当金Ⅱ、退職給付会計Ⅰ
- 第11回 退職給付会計Ⅱ、社債Ⅰ
- 第12回 社債Ⅱ、資本Ⅰ
- 第13回 資本Ⅱ
- 第14回 合併会計、会社分割
- 第15回 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

上級簿記（1級程度）C * 原価計算

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校が日商簿記検定1級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネーターを行う。2コマ（3時間）ずつ、週1回のペースで講義を行う。この講義は日商簿記検定2級の合格者およびそれに相当する者向けの講義であり、日商簿記検定1級の試験範囲のうち「原価計算」を取り扱う。同じく1級の試験範囲である「商業簿記」、「会計学」、「工業簿記」は上級簿記（1級程度）A、B、Dで取り扱うので、履修することが望ましい。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定1級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 総論、原価・営業量・利益関係の分析Ⅰ
- 第2回 原価・営業量・利益関係の分析Ⅱ
- 第3回 予算編成
- 第4回 予算統制Ⅰ
- 第5回 予算統制Ⅱ、売上数量差異の分析
- 第6回 事業部制、セグメント別損益計算
- 第7回 業務的意思決定Ⅰ
- 第8回 業務的意思決定Ⅱ
- 第9回 業務的意思決定Ⅲ、最適セールス・ミックス
- 第10回 構造的意決定Ⅰ、設備投資の意決定
- 第11回 構造的意決定Ⅱ
- 第12回 構造的意決定Ⅲ
- 第13回 戦略的原価計算Ⅰ、品質原価計算
- 第14回 戦略的原価計算Ⅱ、原価企画、活動基準原価計算
- 第15回 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

上級簿記（1級程度）B * 会計学

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校が日商簿記検定1級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネーターを行う。夏季集中授業時間に集中的に講義を行う。この講義は日商簿記検定2級の合格者およびそれに相当する者向けの講義であり、日商簿記検定1級の試験範囲のうち「会計学」を取り扱う。同じく1級の試験範囲である「商業簿記」、「原価計算」、「工業簿記」は上級簿記（1級程度）A、C、Dで取り扱うので、履修することが望ましい。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定1級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 現金および預金、債権、有価証券
- 第2回 金融資産および金融負債、デリバティブ取引
- 第3回 ヘッジ会計、為替換算会計
- 第4回 外貨建取引処理基準、為替予約
- 第5回 税効果会計、一時差異等の会計処理Ⅰ
- 第6回 一時差異等の会計処理Ⅱ
- 第7回 本店会計
- 第8回 連結会計、取得日連結
- 第9回 連結会計、取得後連結Ⅰ
- 第10回 連結会計、取得後連結Ⅱ
- 第11回 連結会計、持分の段階取得、売却、増資
- 第12回 持分法、連結税効果会計、在外子会社連結
- 第13回 キャッシュ・フロー会計
- 第14回 連結キャッシュ・フロー会計
- 第15回 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

上級簿記（1級程度）D * 工業簿記

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校が日商簿記検定1級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネーターを行う。春季集中授業期間および春季特別授業期間に、集中的に講義を行う。この講義は日商簿記検定2級の合格者およびそれに相当する者向けの講義であり、日商簿記検定1級の試験範囲のうち「工業簿記」を取り扱う。同じく1級の試験範囲である「商業簿記」、「会計学」、「原価計算」は上級簿記（1級程度）A、B、Cで取り扱うので、履修することが望ましい。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定1級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 総論、単純個別原価計算
- 第2回 部門別個別原価計算
- 第3回 部門別計算Ⅰ
- 第4回 部門別計算Ⅱ
- 第5回 実際総合原価計算Ⅰ、総論
- 第6回 全部原価計算と直接原価計算、固定費調整
- 第7回 実際総合原価計算Ⅱ、減損、仕損
- 第8回 実際総合原価計算Ⅲ、異常減損・仕損
- 第9回 工程別総合原価計算
- 第10回 組別・等級別原価計算、練産品・副産物・作業屑
- 第11回 標準原価計算Ⅰ
- 第12回 標準原価計算Ⅱ、歩減が発生する場合
- 第13回 標準原価計算Ⅲ、配合差異・歩留差異
- 第14回 工程別標準原価計算、直接標準原価計算
- 第15回 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

上級簿記（1級程度）E *実践

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校の講師が日商簿記検定1級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネーターを行う。この講義は上級簿記（1級程度）A、B、C、Dのうちいずれか1つを受講した者を対象とした講義であり、検定試験直前期に集中的に行う。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定1級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 直前答練第1回、解説
- 第2回 直前答練第2回、解説
- 第3回 直前答練第3回、解説
- 第4回 直前答練第4回、解説
- 第5回 全国公開模擬試験、解説
- 第6回 ファイナルチェック問題、解説
- 第7回 直前総まとめ
- 第8回 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

ASU TOEIC I B

天野純子 太田晶子

【授業の概要】

TOEICスコア470点以上の学習者を対象とする全学向けのTOEIC対策講座。日本人教員担当の「ASU TOEIC I」、ネイティブスピーカー担当の「ASU TOEIC II」から成る。最高期に2コマ（I、IIの両科目を受講した場合）、4年間続けて履修できる。週1回に2単位とする。毎回、授業外での読解演習（60分×7日×13回）とリスニング演習（60分×7日×13回）（それぞれ91時間相当）が課せられる。課題は毎回チェックされる。授業中に演習に取り組む態度、出席、課題などにより総合的な評価を行う。

【授業の目標】

学期末のTOEIC受験における得点アップを最大の目標とする。ただし、各自目標を設定し、到達度・進捗度を確認することが望ましい。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーションおよび模擬演習
- 第2回～第14回 演習・解説、Vocabularyテスト
 - ・1週間の宿題の範囲からVocabularyの小テスト・採点・解説（15分）
 - ・前回の宿題で間違いが多かった点の解説（15分）
 - ・演習（文法問題・Reading・リスニング）（30分）
 - ・問題解説（25分）
- 第15回 模擬テスト
- *宿題 読解演習・文法問題（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）
リスニング演習（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）

【評価方法】

出席・演習に取り組む態度・宿題の遂行度合いなどにより総合的に評価する。

【テキスト】

掲示（外国語教育センターの掲示板）を参照のこと。

ASU TOEIC I A

天野純子 太田晶子

【授業の概要】

TOEICスコア470点以上の学習者を対象とする全学向けのTOEIC対策講座。日本人教員担当の「ASU TOEIC I」、ネイティブスピーカー担当の「ASU TOEIC II」から成る。最高期に2コマ（I、IIの両科目を受講した場合）、4年間続けて履修できる。週1回に2単位とする。毎回、授業外での読解演習（60分×7日×13回）とリスニング演習（60分×7日×13回）（それぞれ91時間相当）が課せられる。課題は毎回チェックされる。授業中に演習に取り組む態度、出席、課題などにより総合的な評価を行う。

【授業の目標】

学期末のTOEIC受験における得点アップを最大の目標とする。ただし、各自目標を設定し、到達度・進捗度を確認することが望ましい。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーションおよび模擬演習
- 第2回～第14回 演習・解説、Vocabularyテスト
 - ・1週間の宿題の範囲からVocabularyの小テスト・採点・解説（15分）
 - ・前回の宿題で間違いが多かった点の解説（15分）
 - ・演習（文法問題・Reading・リスニング）（30分）
 - ・問題解説（25分）
- 第15回 模擬テスト
- *宿題 読解演習・文法問題（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）
リスニング演習（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）

【評価方法】

出席・演習に取り組む態度・宿題の遂行度合いなどにより総合的に評価する。

【テキスト】

掲示（外国語教育センターの掲示板）を参照のこと。

ASU TOEIC II A

STEPHENSON, Brett PUDWILL, Larry A.

【授業の概要】

TOEICスコア470点以上の学習者を対象とする全学向けのTOEIC対策講座。日本人教員担当の「ASU TOEIC I」、ネイティブスピーカー担当の「ASU TOEIC II」から成る。半期に2コマ（I、IIの両科目を受講した場合）、4年間続けて履修できる。週1回に2単位とする。毎回、授業外での読解演習（60分×7日×13回）とリスニング演習（60分×7日×13回）（それぞれ91時間相当）が課せられる。課題は毎回チェックされる。授業中に演習に取り組む態度、出席、課題などにより総合的な評価を行う。

【授業の目標】

学期末のTOEIC受験における得点アップを最大の目標とする。ただし、各自目標を設定し、到達度・進捗度を確認することが望ましい。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーションおよび模擬演習
- 第2回～第14回 演習・解説、Vocabularyテスト
 - ・1週間の宿題の範囲からVocabularyの小テスト・採点・解説（15分）
 - ・前回の宿題で間違いが多かった点の解説（15分）
 - ・演習（リスニング・Reading）（30分）
 - ・問題解説（25分）
- 第15回 模擬テスト
- *宿題 読解演習・文法問題（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）
リスニング演習（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）

【評価方法】

出席・演習に取り組む態度・宿題の遂行度合いなどにより総合的に評価する。

【テキスト】

掲示（外国語教育センターの掲示板）を参照のこと。

ASU TOEIC II B

STEPHENSON, Brett PUDWILL, Larry A.

【授業の概要】

TOEICスコア470点以上の学習者を対象とする全学向けのTOEIC対策講座。日本人教員担当の「ASU TOEIC I」、ネイティブスピーカー担当の「ASU TOEIC II」から成る。半期に2コマ（I、IIの両科目を受講した場合）、4年間続けて履修できる。週1回に2単位とする。毎回、授業外での読解演習（60分×7日×13回）とリスニング演習（60分×7日×13回）（それぞれ91時間相当）が課せられる。課題は毎回チェックされる。授業中に演習に取り組む態度、出席、課題などにより総合的な評価を行う。

【授業の目標】

学期末のTOEIC受験における得点アップを最大の目標とする。ただし、各自目標を設定し、到達度・進捗度を確認することが望ましい。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーションおよび模擬演習
第2回～第14回 演習・解説、Vocabularyテスト
- ・1週間の宿題の範囲からVocabularyの小テスト・採点・解説（15分）
 - ・前回の宿題で間違いが多かった点の解説（15分）
 - ・演習（リスニング・Reading）（30分）
 - ・問題解説（25分）
- 第15回 模擬テスト
- *宿題 読解演習・文法問題（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）
 - リスニング演習（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）

【評価方法】

出席・演習に取り組む態度・宿題の遂行度合いなどにより総合的に評価する。

【テキスト】

掲示（外国語教育センターの掲示板）を参照のこと。

Get together and Talk II

NORRIS, Harry T.

【授業の概要】

対話力養成モジュールの1つとして、学生同士の意見交換を活発に行うことで、説得力のある議論を口頭で展開する方法を、実際の経験を通して学ぶことを目標とします。

Get together and Talk IIでは、本学学生同士の意見交換のみならず、インターネットのブロードバンド接続によるビデオコンファレンス機能（アップルコンピュータ社のiChat）を利用して、キャンベラ大学の学生と意見交換を行います。

さまざまなテーマに基づいて、キャンベラ大学の学生と意見を交換することで、英語運用力を高めるのみならず、日本語と英語の違い、日本とオーストラリアの文化・考え方の違いなどさまざまな違いを発見することが期待されます。

【授業の目標】

- There are three main objectives.
1. To allow students to converse with native speakers, helping the students' listening and speaking fluency skills.
 2. Discuss topics of interest with people of a similar age who live in a different country.
 3. Listening to native English speakers speaking in Japanese will help students understand their own speaking difficulties and increase their awareness and confidence.

【授業計画】

This lesson will be held over 2nd and 3rd periods, 10.50 - 2.50.

During this time there will be 4 time periods, 1. Preparation, 2. Chat, 3. Review, and 4. Lunch! Due to the time difference between Japan and Australia it may be necessary to have a flexible lunch period.

May (2), 9, 16, 23 and 30. Will be used for real time chat with Canberra University students. Topics for discussion will include

1. Death penalty
2. The article no.9 of Japanese constitution
3. Marriage between the same sex couple
4. Should we accept more refugees?

【評価方法】

Assessment will be based on
50% Homework and Chat preparation
50% Participation

【テキスト】

No text

【参考文献・資料】

<http://www.apple.com/support/isight/>

Get together and Talk I

石橋千鶴子 福本明子 太田晶子 二村慎一 WOODMAN, Jo-Anne

【授業の概要】

事前英語集中授業、フィールドワーク、合宿、プレゼンテーションなどから構成される英語対話実践セミナー。本学および中部地区在住の留学生が、セミナー・アシスタントとしてフィールドワーク、合宿、プレゼンテーションに参加する。多様な文化背景を持つ留学生と行動を共にし、共通語の英語を使ってコミュニケーションを持つことにより、英語対話力の強化を目指す。

各学期終了時（集中授業期間内 前期：8/7（月）～11（金）、後期：2007年2/13（火）～17（土））に実施予定であるが、詳細は掲示および説明会（前期：6月中旬、後期：11月下旬の予定）で発表する。指定された期間（前期：6月末、後期：12月上旬）に外国語教育センターを通じて履修の申し込みを行う。

*注意

本科目は申し込み者多数の場合、抽選により履修できない場合もある。また、1年生は学期の合計履修単位に上限が設定されているので、本科目の履修を希望する場合、余裕を持って登録すること。

【授業の目標】

異なる文化背景を持つ留学生とのコミュニケーションを通して、英語運用能力の向上を目指すと共に、文化の多様性に対する認識を深め、それに対応できる柔軟な視点の育成を目指す。

【授業計画】

前期 8/7（月）～11（金）、
後期 2007年2/13（火）～17（土）を予定。
事前英語集中授業、フィールドトリップなどを含む15コマ相当の活動を行う。
詳細は掲示で発表。

【評価方法】

全日程の活動を総合的に評価する。

【テキスト】

英文パンフレットなどを使用。

【参考文献・資料】

インターネットなどを通して資料は各自検索する。

<履修条件>

- 1) 英語コミュニケーション科目2科目（4単位）以上を取得済みであること。
- 2) 英語でのコミュニケーション実践に十分な「意欲」があること。
- 3) 全日程に出席できること。

上級英語セミナー 2006 A

WOODMAN, Jo-Anne WRINGER, Paul

【授業の概要】

この科目は、2人の担当教員による週2日の授業で1セット（4単位）を基本とする全学対象の上級英語科目である。TOEICスコアで選抜を行い、少人数クラスを編成する。多様な授業活動を通して語彙力を増強し、総合的英語運用能力の強化を目指す。学期末のTOEIC受験およびその得点アップが期待される。各自、到達度・進捗度を確認することが望ましい。4年間続けて履修できる。（ただし、1年生および編入生（1年目）は前期開講の本科目「上級英語セミナー2006A」は受講できない。）

【授業の目標】

Woodman
Improved knowledge of idiomatic and colloquial English expressions will allow students to "get" more of what native English speakers are "on about".

Wringer

1. To help students to integrate new ideas, vocabulary and idioms into everyday speech
2. To help students recognize organizational patterns in preparation for the TOEIC test

【授業計画】

Woodman

Each lesson will involve a combination of activities (reading, writing, listening and speaking) utilizing new vocabulary.

Wringer

Students will be expected to discuss a variety of topics each week from the following themes: People; Relationships; Workplace; Family; and Society.

【評価方法】

「上級英語セミナー2006A」は、週2回コースの授業で4単位の科目である。木曜日1限（担当教員：WRINGER, Paul）、金曜日1限（担当教員：WOODMAN, Jo-Anne）の両方の授業への出席が必要である。それぞれの評価の平均を、この科目の評価とする。

【テキスト】

Woodman : No text required,
Wringer : To be announced.

上級英語セミナー 2006 B

WOODMAN, Jo-Anne WRINGER, Paul

【授業の概要】

この科目は、2人の担当教員による週2日の授業で1セット(4単位)を基本とする全学対象の上級英語科目である。TOEICスコアで選抜を行い、少人数クラスを編成する。多様な授業活動を通して語彙力を増強し、総合的英語運用能力の強化を目指す。学期末のTOEIC受験およびその得点アップが期待される。各自、到達度・進捗度を確認することが望ましい。4年間続けて履修できる。

【授業の目標】

Woodman

Improved knowledge of idiomatic and colloquial English expressions will allow students to "get" more of what native English speakers are "on about".

Wringer

1. To help students to integrate new ideas, vocabulary and idioms into everyday speech
2. To help students recognize organizational patterns in preparation for the TOEIC test

【授業計画】

Woodman

Each lesson will involve a combination of activities (reading, writing, listening and speaking) utilizing new vocabulary.

Wringer

Students will be expected to discuss a variety of topics each week from the following themes: People; Relationships; Workplace; Family; and Society.

【評価方法】

「上級英語セミナー2006B」は、週2回コースの授業で4単位の科目である。木曜日1限(担当教員: WRINGER, Paul)、金曜日1限(担当教員: WOODMAN, Jo-Anne)の両方の授業への出席が必要である。それぞれの評価の平均を、この科目の評価とする。

【テキスト】

Woodman: No text required,
Wringer: To be announced.

上級英語セミナー 2006 D

横山綾子 WOODMAN, Jo-Anne

【授業の概要】

この科目は、2人の担当教員による週2日の授業で1セット(4単位)を基本とする全学対象の上級英語科目である。TOEICスコアで選抜を行い、少人数クラスを編成する。多様な授業活動を通して語彙力を増強し、総合的英語運用能力の強化を目指す。学期末のTOEIC受験およびその得点アップが期待される。各自、到達度・進捗度を確認することが望ましい。4年間続けて履修できる。

【授業の目標】

横山

通訳の訓練には、言語の知識、訳出技術、論理的思考、また自主的な発言能力など様々な要素が求められます。このクラスでは、First in First out (FIFO) の訓練を中心にスピーディーな訳出、日本語のわかりやすく美しい表現など学習します。

Woodman

The objectives of this course are two-fold. Firstly, it will encourage the students to improve their general knowledge of world affairs. Secondly, it will help the students to improve their English discussion skills.

【授業計画】

横山

- 第1回 通訳一般概論 Sight translation
第2~10回 The Student Timesからの記事使用(テープ)
Shadowing, Sight translation, メモ取り、逐次通訳演習、同時通訳入門

Woodman

This course will operate on a 3-week cycle.

- Week 1: Discussion questions based on materials provided by the teacher.
Week 2: Discussion-based on newspaper/internet articles provided by the teacher.
Week 3: Discussion-based on newspaper/internet articles prepared by the students.

【評価方法】

「上級英語セミナー2006D」は、週2回コースの授業で4単位の科目である。火曜日3限(担当教員: 横山綾子)、金曜日4限(担当教員: WOODMAN, Jo-Anne)の両方の授業への出席が必要である。それぞれの評価の平均を、この科目の評価とする。

【テキスト】

横山: *The Student Times* その他
Woodman: No text required.

上級英語セミナー 2006 C

横山綾子 WOODMAN, Jo-Anne

【授業の概要】

この科目は、2人の担当教員による週2日の授業で1セット(4単位)を基本とする全学対象の上級英語科目である。TOEICスコアで選抜を行い、少人数クラスを編成する。多様な授業活動を通して語彙力を増強し、総合的英語運用能力の強化を目指す。学期末のTOEIC受験およびその得点アップが期待される。各自、到達度・進捗度を確認することが望ましい。4年間続けて履修できる。(ただし、1年生および編入生(1年目)は前期開講の本科目「上級英語セミナー2006C」は受講できない。)

【授業の目標】

横山

通訳の訓練には、言語の知識、訳出技術、論理的思考、また自主的な発言能力など様々な要素が求められます。このクラスでは、First in First out (FIFO) の訓練を中心にスピーディーな訳出、日本語のわかりやすく美しい表現など学習します。

Woodman

The objectives of this course are two-fold. Firstly, it will encourage the students to improve their general knowledge of world affairs. Secondly, it will help the students to improve their English discussion skills.

【授業計画】

横山

- 第1回 通訳一般概論 Sight translation
第2~10回 The Student Timesからの記事使用(テープ)
Shadowing, Sight translation, メモ取り、逐次通訳演習、同時通訳入門

Woodman

This course will operate on a 3-week cycle.

- Week 1: Discussion questions based on materials provided by the teacher.
Week 2: Discussion-based on newspaper/internet articles provided by the teacher.
Week 3: Discussion-based on newspaper/internet articles prepared by the students.

【評価方法】

「上級英語セミナー2006C」は、週2回コースの授業で4単位の科目である。火曜日3限(担当教員: 横山綾子)、金曜日4限(担当教員: WOODMAN, Jo-Anne)の両方の授業への出席が必要である。それぞれの評価の平均を、この科目の評価とする。

【テキスト】

横山: *The Student Times* その他
Woodman: No text required.

上級英語セミナー 2006 E

難波豊子 CURRAN, Beverley

【授業の概要】

この科目は、2人の担当教員による週2日の授業で1セット(4単位)を基本とする全学対象の上級英語科目である。TOEICスコアで選抜を行い、少人数クラスを編成する。多様な授業活動を通して語彙力を増強し、総合的英語運用能力の強化を目指す。学期末のTOEIC受験およびその得点アップが期待される。各自、到達度・進捗度を確認することが望ましい。4年間続けて履修できる。(ただし、1年生および編入生(1年目)は前期開講の本科目「上級英語セミナー2006E」は受講できない。)

【授業の目標】

Bev Curran

To create a community of supportive language learners and to develop each student's confidence in their ability to express their ideas in prepared presentations and extemporaneous discussion in English.

難波豊子

英語を通して様々な国内、海外の実状、社会問題等の背景知識を広げ、英語、日本語を問わず、要点をまとめて発表する習慣を身につける。

【授業計画】

Bev Curran

Each week, in my class, a different student will be responsible for selecting a topic and introducing a discussion about it in English. The other students will listen with attention and then continue the discussion through their own questions and comments. The goal in each class is to engage in animated discussion for 90 minutes, giving each student an opportunity to grow more comfortable and confident in initiating and continuing a conversation or discussion in English. Special guests will also be invited to the class to talk about themselves with the students in a relaxed and supportive atmosphere.

難波豊子

スラッシュ・リーディングによって英文を頭から情報処理する練習、英文メッセージを短時間で把握する練習、分かりやすい日本語の検討、逐次通訳・同時通訳の訓練などを通して、英語運用能力の総合的な向上を図る。

【評価方法】

「上級英語セミナー2006E」は、週2回コースの授業で4単位の科目である。火曜日2限(担当教員: 難波豊子)、金曜日5限(担当教員: CURRAN, Beverley)の両方の授業への出席が必要である。それぞれの評価の平均を、この科目の評価とする。

【テキスト】

授業中に配布、指示する。

上級英語セミナー 2006 F

難波豊子 CURRAN, Beverley

【授業の概要】

この科目は、2人の担当教員による週2日の授業で1セット(4単位)を基本とする全学対象の上級英語科目である。TOEICスコアで選抜を行い、少人数クラスを編成する。多様な授業活動を通して語彙力を増強し、総合的英語運用能力の強化を目指す。学期末のTOEIC受験およびその得点アップが期待される。各自、到達度・進捗度を確認することが望ましい。4年間続けて履修できる。

【授業の目標】

Bev Curran
To continue to give students practice in preparing and leading a discussion, as well as sustaining a discussion through careful listening and questions. The group discussion aims to form a community of supportive language learners and to develop each student's ability to express their ideas in English.

難波豊子

英語を通して様々な国内、海外の実状、社会問題等の背景知識を広げ、英語、日本語を問わず、要点をまとめて発表する習慣を身につける。

【授業計画】

Bev Curran
In the second semester, discussions will continue, and students will be encouraged to take more responsibility for engaging in discussion and offering support to the speaker through a thoughtful consideration of the topic. Each week will be a chance to grow closer as a group of engaged language learners whose communal energy will motivate individual student growth in English ability and self-confidence. Special guests will also be invited to the class to talk to the students in English in a relaxed but lively atmosphere.

難波豊子

スケジュール・リーディングによって英文を頭から情報処理する練習、英文メッセージを短時間で把握する練習、分かりやすい日本語の検討、逐次通訳・同時通訳の訓練などを通して、英語運用能力の総合的な向上を図る。

【評価方法】

「上級英語セミナー2006F」は、週2回コースの授業で4単位の科目である。火曜日2限(担当教員:難波豊子)、金曜日5限(担当教員:CURRAN, Beverley)の両方の授業への出席が必要である。それぞれの評価の平均を、この科目の評価とする。

【テキスト】

授業中に配布、指示する。

Central Japan

福本明子 山田久美子 小沢 茂 横関美津紀 McGOLDRICK, Gemma

【授業の概要】

中部地方から世界に向かって進出する企業の第一線で活躍している方をゲストスピーカーとして迎え、社会の中での企業の役割、その活動、経験等を英語で講義してもらう。この講義は、ゲストスピーカーの授業に際しての、事前・事後の学習もおこなう。

【授業の目標】

地元企業で活躍する方をゲストスピーカーとして招き、その講義を聞き、実社会における企業の役割、また厳しい現状等を理解し、より広い視野を育てることを目標とする。授業での内容を理解し、それをまとめることができるようにする。

【授業計画】

ゲストスピーカー

ミツカン酢

日本経済新聞

中部電力

ブラザー工業

ヒルトンホテル

デンソー

太陽科学株式会社 など。

詳しくは、最初の授業の時に説明する。

【評価方法】

レポート 80% (各授業のレポート等)

出席 20%

【テキスト】

プリント

Traditional Arts in Japan

山田久美子 小沢 茂 二村慎一 McGOLDRICK, Gemma

【授業の概要】

日本の伝統文化に携わる方をゲストスピーカーとして招き、伝統文化に直に触れ、その歴史、現状などを英語で学ぶ。

【授業の目標】

伝統文化に直に接する機会は、日常生活では多くない。この授業を通して、一から伝統文化を学び、日本の優れた文化を理解し、それを自らの言葉で表現できるようにする。

【授業計画】

日本の伝統文化に携わる専門家をゲストスピーカーとして招き、講義を受ける。講義の際、あらかじめ、その伝統文化についての学習を行う。

日本舞踊(西川流)

尺八

琴

からくり

華道

歌舞伎

能・狂言

などの分野からのゲストスピーカーを迎える。詳しくは、最初の授業の時に説明する。

【評価方法】

レポート 80% (各授業のレポート等)

出席 20%

【テキスト】

プリント

Multiculturalism in Aichi

ブイ チトルン

【授業の概要】

社会のグローバル化とともに一つの地域や国だけでは解決できない問題などが生み出されている。愛知県においても製造業の発展に伴い諸外国から移住してきた人々が年々増加している。多様な人種・文化・価値観が混在している愛知県における多文化社会の実態を理解し共生社会構築への道を考える。

【授業の目標】

- * 日本社会および愛知県における多文化性を理解すること
- * 行政・企業・NPOによる多文化共生事業の現状を理解すること
- * 県内における外国人コミュニティの実態を理解すること
- * 外国人労働者等を送り出し国の現状を理解すること
- * 在住外国人支援事業を理解すること

【授業計画】

- A. 総論: 多元文化社会について
- ① 多元文化社会としての日本社会(ブイ チトルン)
- B. 各論1: 多文化共生支援事業について
- ② 総務省および地域国際化協会の政策、事業について(外部講師・東京から)
- ③ 愛知県および愛知県国際交流協会の事業について(外部講師・県内)
- ④ 名古屋市および名古屋国際センターの事業について(外部講師・県内)
- ⑤ 豊田市および豊田市国際交流協会の事業について(外部講師・県内)
- ⑥ 経済産業界の事業について(外部講師・県内)
- C. 各論2: 外国人コミュニティからの実態について
- ⑦ コリアンコミュニティ(外部講師・県内)
- ⑧ 中国人コミュニティ(外部講師・県内)
- ⑨ フィリピン人コミュニティ(外部講師・県内)
- ⑩ ブラジル人コミュニティ(外部講師・県内)
- ⑪ アメリカ人コミュニティ(外部講師・県内)
- ⑫ 留学生について(外部講師・県内)
- ⑬ 外国人研修生の送り出し国からの報告
- タイ王国から(外部講師・タイ王国から)・前期
- ベトナムから(外部講師・ベトナムから)・後期
- D. 各論3: 在住外国人支援事業について
- ⑭ 生活相談事業について(外部講師・県内)
- ⑮ 日本語教育支援事業について(外部講師・県内)

【評価方法】

出席率、レポートおよび授業中の発表にて評価する。

【テキスト】

プリント資料など配布。テキストは授業中適宜に指示する。

【参考文献・資料】

授業初回に指示する。

PowerPoint Presentations

NORRIS, Harry T.

【授業の概要】

所属学科に関係なく様々な卒業研究の成果、多文化共生理解モジュールや講演会の事後学習の成果を、動画・音声・写真などを盛り込みながらPowerPointを使ってまとめ、英語による情報発信が行えるよう訓練する。

【授業の目標】

- ・コンピュータを使って、これまでの学習・研究成果を視覚的効果の高い情報発信ができる手法を身に付ける。
- ・アイデアや意見を英語で論理的に口頭発表できる自己表現力を身に付ける。
- ・他者のプレゼンテーションを聴いて、英語で討論を行える能力を身に付ける。

【授業計画】

以下の項目を学習する。

- ・アイデアの要約
- ・口頭発表に必要な論理的展開方法
- ・動画・音声・写真などのマテリアルの収集や作成方法
- ・プレゼンテーションソフトの効果的な使用方法

【評価方法】

- ・出席状況
- ・プレゼンテーション
- ・ディスカッション参加への積極性

【テキスト】

なし

【参考文献・資料】

授業中に随時紹介する

Booklet Publishing

NORRIS, Harry T.

【授業の概要】

所属学科に関係なく様々な卒業研究、多文化共生理解モジュールや講演会の事後学習の成果を、視覚的効果を高めてポスター、冊子、レポートにまとめ、英語を使って世界に向けた情報公開が行えるよう訓練する。

【授業の目標】

- ・コンピュータを使って、これまでの学習・研究成果を視覚的効果の高い情報発信ができる手法を身に付ける。
- ・新聞・雑誌・パンフレットで活用されている見出し効果やテキストの段落構成について理解する。
- ・英語で短く分かりやすい文章を作る能力を身に付ける

【授業計画】

以下の項目を学習する。

- ・アイデアの要約
- ・英語での自己表現方法
- ・図や表を使った表現方法
- ・タイトルや見出しの効果
- ・文章の段落構成

【評価方法】

- ・出席状況
- ・ブックレットなどの完成作品

【テキスト】

なし

【参考文献・資料】

授業中に随時紹介する

英語海外セミナーII (オーストラリア)

NORRIS Harry T.

【Course description】

Students will be in an English Emersion course with Canberra University. Students will study English and English usage in class, have many English activities out of class and weekly excursions to places of interest around Canberra. Students will home-stay for the entire period in Canberra.

【Course objectives】

This course hopes to improve students' fluency and confidence in using English. Being emersed in English, it is hoped students will stop translating and interpreting into Japanese, but to understand and think in English.

This ability will assist the students greatly in the listening comprehension section of the TOEIC test.

【Course schedule】

After welcome and introductions on the first day. Daily schedules will include morning classes with afternoon activities. Wednesday afterwards will be set aside for excursions to places of interest such as a farm, the National gallery and the interactive science museum "Questacon".

The course will conclude with a 4 day excursion to Jervis Bay and then on to Sydney, activities and sight seeing are preplanned.

【Assessment】

Assessment will be based on Canberra University's standards. These standards are based on ability to use English, willingness to try to use English and improvement in English ability.

【Textbooks】

No text, as necessary worksheets will be given.

Japan's Global Interface I

藤井正志 森下允之 福本明子 真田幸光 JOLLY, James A.

【授業の概要】

本講義は、日本のビジネスの国際的側面を中心に議論し、日本社会・文化をより深く認識するとともに、異文化理解を深め、今後の日本のあり方を考える。受講対象者は、特別科目等履修生（ただし交換留学生による者）・留学生別科生・一定の資格を満たす学部生・大学院生（含む外国人留学生）である。

The omnibus lectures will be conducted in English and mainly introduces the global aspect of Japanese business to students. Focusing on Japan's global interface, students will obtain a deeper knowledge of Japanese culture, society, business, and intercultural exchange as well as what Japan should do in the future.

This lecture is open to:

- Special Credit-Auditors (exchange students only)
- Students enrolled in the Japanese Studies Program at the Center for Japanese Language and Culture
- Undergraduate students, graduate Students and overseas students. (Basic English skills are required.)

【授業の目標】

日本のビジネスの国際的側面を中心とした英語の授業を通して、日本社会・文化をより深く認識すると、および異文化理解を深め、今後の日本のあり方を考える力を養うこと。

Through the omnibus lectures conducted in English mainly on the global aspect of Japanese business, students are supposed to obtain a deeper knowledge of Japanese culture, society, business, and intercultural exchange as well as what Japan should do in the future.

【授業計画】

Schedule	
1 FUJII, Masashi	Introduction
2 FUJII, Masashi	Business Society in Japan
3 FUKUMOTO, Akiko	Intellectual Property and Cultures
4 FUKUMOTO, Akiko	Intellectual Property and Cultures
5 FUKUMOTO, Akiko	Intellectual Property and Cultures
6 SANDA, Yukimitsu	East Asian Economy and Japan
7 SANDA, Yukimitsu	East Asian Economy and Japan
8 MOBISHITA, Tadayuki	Overseas Strategy of Japanese Firms
9 MOBISHITA, Tadayuki	Overseas Strategy of Japanese Firms
10 MOBISHITA, Tadayuki	Overseas Strategy of Japanese Firms
11 JOLLY, James	International Business and Law
12 JOLLY, James	International Business and Law
13 JOLLY, James	International Business and Law

【評価方法】

Assessment will be made based on attendance and a report to be written by the students in the final lecture conducted by Professor Jolly. Students will be given 1/2 hour to finalize the report. Even though they are absent from the final lecture, they will still have a chance to write a report and submit it. In that case, it is unlikely for them to be given a good assessment.出席点及び最後の授業において実施されるレポートにより、総合的に評価する。

【テキスト】

To be announced

【参考文献・資料】

To be announced

米国 NPO インターンシッププログラム

榎田勝利

【授業の概要】

米国ワシントン D.C.にある Civil Society Consulting Group (CSCG) との共同プログラムとして、毎年 2 月中旬から約 1 ヶ月間実施する。米国の民間非営利組織 (NPO) でのインターンシップの体験を通して米国社会が抱える深刻な社会問題を理解し、その問題解決の方法を学ぶ。インターンシップの期間中は、一般の米国人の家庭でのホームステイをし、日常生活を体験する。インターンシップの受け入れ場所は、ワシントン D.C. および周辺地域で、学生の関心分野、英語力、専門的知識、経験等を考慮し、受け入れ団体を決める。

(活動可能な分野) 老人、児童・青少年、自然・環境、識字教育、障害者、家族、ホームレス、ジェンダー、文化・芸術、スポーツ、バイリンガル教育、外国人支援、国際交流・国際協力、博物館・美術館、図書館、その他。

(米国側協力団体) Civil Society Consulting Group (CSCG)

【授業の目標】

実践の場を通して、異文化コミュニケーション能力と情報技術能力の向上を図り、学生の将来のキャリア形成の一助ともなる機会を提供する。

【授業計画】

(事前研修) インターンシップの活動分野の決定・日米の NPO、ボランティア団体等の現状学習・日本の NPO、ボランティア団体へのフィールドワーク・英会話のトレーニング・米国側ディレクターによる合宿オリエンテーション

(現地プログラム) オリエンテーション合宿・基本的に月曜から金曜までの 5 日間のインターン・1 日特別研修プログラム・インターンシップの体験報告書の作成と提出・評価会、修了式、さよならパーティ

(事後研修) フォローアップ研修、報告書作成

【評価方法】

現地での評価 (受け入れ団体、ホストファミリー等と報告書) を考慮し総合評価を行う。

【テキスト】

米国側提出の英文資料

【参考文献・資料】

研修時にその都度資料を提供する

Japan's Global Interface II

藤井正志 太田浩司 宮田 Susanne ブイ チトルン
國信潤子 梅田敏文 JOLLY, James A. 福本明子

【授業の概要】

本講義は、国際交流・国際協力・国際ビジネスなどのテーマを通して日本の文化や社会の理解を深める。受講対象者は、特別科目等履修生（ただし交換留学生による者）・留学生別科生・一定の資格を満たす学部生・大学院生（含む外国人留学生）である。

This omnibus lecture will be conducted in English and introduce students to cultural exchange, international cooperation and international business, and the part Japan plays in these intercultural movements. Along with increasing an awareness of Japan's global interface will come a deeper understanding of Japanese culture and society. This lecture is open to: Special Credit-Auditors (exchange students only) Students enrolled in the Japanese Studies Program at the Center for Japanese Language and Culture Undergraduate students, graduate Students and overseas students. (Basic English skills are required.)

【授業の目標】

国際交流・国際協力・国際ビジネスなどのテーマで英語で行われる授業を通して日本の文化、ビジネス、社会および異文化理解を深めることを目的とする。

Through the omnibus lectures conducted in English mainly on cultural exchange, international cooperation and international business, students are supposed to obtain a deeper knowledge of Japanese culture, society, business and intercultural exchange.

【授業計画】

1 FUJII, Masashi	Introduction
2 OTA, Hiroshi	Language Use in Japan
3 OTA, Hiroshi	Language Use in Japan
4 MIYATA, Susanne	Intercultural Communication from a Psychological Point of View
5 MIYATA, Susanne	Intercultural Communication from a Psychological Point of View
6 BUI, Chi Trung	Intercultural Communication Through NPO Activities
7 KUNINOBU, Junko	Gender Relations in Japanese Society
8 UMEDA, Toshifumi	Information Technology and Information Ethics
9 UMEDA, Toshifumi	Information Technology and Information Ethics
10 FUKUMOTO, Akiko	History and Representations
11 FUKUMOTO, Akiko	History and Representations
12 JOLLY, James	Developing International Business Practices
13 JOLLY, James	Developing International Business Practices

【評価方法】

Assessment will be made based on attendance and a report to be written by the students in the final lecture conducted by Professor Jolly. Students will be given 1/2 hour to finalize the report. Even though they are absent from the final lecture, they will still have a chance to write a report and submit it. In that case, it is unlikely for them to be given a good assessment.出席点及び最後の授業において実施されるレポートにより、総合的に評価する。

【テキスト】

To be announced

【参考文献・資料】

To be announced

初級簿記（3級程度）＊基礎総合

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校の講師が日商簿記検定3級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネートをを行う。前期は2コマ（3時間）ずつ週2回のペースで、後期は2コマ（3時間）ずつ週1回のペースで講義を行う。この講義は初学者向けの講義であり、簿記の仕組みから精算表の作成まで簿記の基礎とされる内容を一通り学習した後、全国公開模擬試験などの問題を通して日商簿記検定3級の合格サポートを行う。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定3級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 簿記の目的・取引・仕訳・勘定口座の記入方法
- 第2回 試算表・商品売上の記帳方法、現金預金の記帳
- 第3回 手形の記帳方法、その他の勘定の記帳方法
- 第4回 その他の勘定記帳方法、主要簿および補助簿
- 第5回 主要簿および補助簿、伝票
- 第6回 直前総まとめ問題集解説（補助簿、試算表、伝票対策）
- 第7回 決算整理（売上原価）、英米式決算法、精算表
- 第8回 決算整理（貸倒、減価償却、固定資産の売却、繰延・見越）
- 第9回 決算整理（消耗品、現金過不足、売買目的有価証券、引出金）
- 第10回 直前総まとめ問題集解説（仕訳、精算表対策）
- 第11回 直前答練第1回、解説
- 第12回 直前答練第2回、解説
- 第13回 直前答練第3回、解説
- 第14回 全国公開模擬試験、解説
- 第15回 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

中級簿記（2級程度）B ＊工業簿記

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校の講師が日商簿記検定2級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネートをを行う。2コマ（3時間）ずつ、週1回のペースで講義を行う。この講義は日商簿記検定3級の合格者およびそれに相当する者向けの講義であり、日商簿記検定2級の試験範囲のうち「工業簿記」を取り扱う。同じく2級の試験範囲である「商業簿記」は中級簿記（2級程度）Aで取り扱うので、同時履修が望ましい。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定2級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 工業簿記の基礎、個別原価計算の体系
- 第2回 材料費会計
- 第3回 労務費会計
- 第4回 経費会計、製造間接費会計
- 第5回 工企業の財務諸表
- 第6回 部門別会計、工場会計
- 第7回 工業簿記の基礎、総合原価計算の体系
- 第8回 単純総合原価計算
- 第9回 減損および仕損
- 第10回 組別・等級別原価計算
- 第11回 標準原価計算
- 第12回 損益分岐点分析、直接原価計算、固定費調整
- 第13回 総まとめ
- 第14回 単位認定試験第1回
- 第15回 単位認定試験第2回

【評価方法】

2回の単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

中級簿記（2級程度）A ＊商業簿記

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校の講師が日商簿記検定2級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネートをを行う。2コマ（3時間）ずつ、週1回のペースで講義を行う。この講義は日商簿記検定3級の合格者およびそれに相当する者向けの講義であり、日商簿記検定2級の試験範囲のうち「商業簿記」を取り扱う。同じく2級の試験範囲である「工業簿記」は中級簿記（2級程度）Bで取り扱うので、同時履修が望ましい。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定2級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 簿記一巡、固定資産
- 第2回 減価償却、銀行勘定調整表、引当金
- 第3回 その他の引当金、商品の評価、税金
- 第4回 株式の発行、利益処分
- 第5回 会社の合併、社債の発行、決算整理
- 第6回 社債の償還、決算法、財務諸表
- 第7回 伝票会計
- 第8回 帳簿組織
- 第9回 特殊商品売買
- 第10回 仕入割引、売上割引、研究開発費、有価証券
- 第11回 債務保証、手形の不渡り、裏書譲渡
- 第12回 本店会計
- 第13回 総まとめ
- 第14回 単位認定試験第1回
- 第15回 単位認定試験第2回

【評価方法】

2回の単位認定試験の成績に応じて評価をする。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

中級簿記（2級程度）C ＊実践

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校の講師が日商簿記検定2級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネートをを行う。この講義は中級簿記（2級程度）AまたはBの受講者を対象とした講義であり、検定試験直前期に集中的に行う。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定2級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 直前答練第1回、解説
- 第2回 直前答練第2回、解説
- 第3回 直前答練第3回、解説
- 第4回 直前答練第4回、解説
- 第5回 全国公開模擬試験、解説
- 第6回 ファイナルチェック問題、解説
- 第7回 直前総まとめ
- 第8回 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

上級簿記（1級程度）A * 商業簿記

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校の講師が日商簿記検定1級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネーターを行う。2コマ（3時間）ずつ、週1回のペースで講義を行う。この講義は日商簿記検定2級の合格者およびそれに相当する者向けの講義であり、日商簿記検定1級の試験範囲のうち「商業簿記」を取り扱う。同じ1級の試験範囲である「会計学」、「原価計算」、「工業簿記」は上級簿記（1級程度）B、C、Dで取り扱うので、履修することが望ましい。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定1級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 総論、企業会計原則、簿記一巡
- 第2回 一般販売、特殊商品売買Ⅰ
- 第3回 特殊商品売買Ⅱ
- 第4回 特殊商品売買Ⅲ
- 第5回 棚卸資産
- 第6回 固定資産Ⅰ
- 第7回 固定資産Ⅱ
- 第8回 減損会計、繰延資産
- 第9回 研究開発費、引当金Ⅰ
- 第10回 引当金Ⅱ、退職給付会計Ⅰ
- 第11回 退職給付会計Ⅱ、社債Ⅰ
- 第12回 社債Ⅱ、資本Ⅰ
- 第13回 資本Ⅱ
- 第14回 合併会計、会社分割
- 第15回 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

上級簿記（1級程度）C * 原価計算

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校の講師が日商簿記検定1級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネーターを行う。2コマ（3時間）ずつ、週1回のペースで講義を行う。この講義は日商簿記検定2級の合格者およびそれに相当する者向けの講義であり、日商簿記検定1級の試験範囲のうち「原価計算」を取り扱う。同じ1級の試験範囲である「商業簿記」、「会計学」、「工業簿記」は上級簿記（1級程度）A、B、Dで取り扱うので、履修することが望ましい。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定1級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 総論、原価・営業量・利益関係の分析Ⅰ
- 第2回 原価・営業量・利益関係の分析Ⅱ
- 第3回 予算編成
- 第4回 予算統制Ⅰ
- 第5回 予算統制Ⅱ、売上数量差異の分析
- 第6回 事業部制、セグメント別損益計算
- 第7回 業務的意思決定Ⅰ
- 第8回 業務的意思決定Ⅱ
- 第9回 業務的意思決定Ⅲ、最適セールス・ミックス
- 第10回 構造的意決定Ⅰ、設備投資の意決定
- 第11回 構造的意決定Ⅱ
- 第12回 構造的意決定Ⅲ
- 第13回 戦略的原価計算Ⅰ、品質原価計算
- 第14回 戦略的原価計算Ⅱ、原価企画、活動基準原価計算
- 第15回 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

上級簿記（1級程度）B * 会計学

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校の講師が日商簿記検定1級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネーターを行う。夏季集中授業時間に集中的に講義を行う。この講義は日商簿記検定2級の合格者およびそれに相当する者向けの講義であり、日商簿記検定1級の試験範囲のうち「会計学」を取り扱う。同じ1級の試験範囲である「商業簿記」、「原価計算」、「工業簿記」は上級簿記（1級程度）A、C、Dで取り扱うので、履修することが望ましい。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定1級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 現金および預金、債権、有価証券
- 第2回 金融資産および金融負債、デリバティブ取引
- 第3回 ヘッジ会計、為替換算会計
- 第4回 外貨建取引処理基準、為替予約
- 第5回 税効果会計、一時差異等の会計処理Ⅰ
- 第6回 一時差異等の会計処理Ⅱ
- 第7回 本店会計
- 第8回 連結会計、取得日連結
- 第9回 連結会計、取得後連結Ⅰ
- 第10回 連結会計、取得後連結Ⅱ
- 第11回 連結会計、持分の段階取得、売却、増資
- 第12回 持分法、連結税効果会計、在外子会社連結
- 第13回 キャッシュ・フロー会計
- 第14回 連結キャッシュ・フロー会計
- 第15回 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

上級簿記（1級程度）D * 工業簿記

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校の講師が日商簿記検定1級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネーターを行う。春季集中授業期間および春季特別授業期間に、集中的に講義を行う。この講義は日商簿記検定2級の合格者およびそれに相当する者向けの講義であり、日商簿記検定1級の試験範囲のうち「工業簿記」を取り扱う。同じ1級の試験範囲である「商業簿記」、「会計学」、「原価計算」は上級簿記（1級程度）A、B、Cで取り扱うので、履修することが望ましい。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定1級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 総論、単純個別原価計算
- 第2回 部門別個別原価計算
- 第3回 部門別計算Ⅰ
- 第4回 部門別計算Ⅱ
- 第5回 実際総合原価計算Ⅰ、総論
- 第6回 全部原価計算と直接原価計算、固定費調整
- 第7回 実際総合原価計算Ⅱ、減損、仕損
- 第8回 実際総合原価計算Ⅲ、異常減損・仕損
- 第9回 工程別総合原価計算
- 第10回 組別・等級別原価計算、練産品・副産物・作業屑
- 第11回 標準原価計算Ⅰ
- 第12回 標準原価計算Ⅱ、歩減が発生する場合
- 第13回 標準原価計算Ⅲ、配合差異・歩留差異
- 第14回 工程別標準原価計算、直接標準原価計算
- 第15回 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

上級簿記（1級程度）E *実践

コーディネーター：浅野敬志・浅井敬一郎

【授業の概要】

大原簿記専門学校の講師が日商簿記検定1級の試験対策講座を行い、本学講師がそのコーディネートをを行う。この講義は上級簿記（1級程度）A、B、C、Dのうちいずれか1つを受講した者を対象とした講義であり、検定試験直前に集中的に行う。日商簿記検定は知名度・人気ともにナンバーワンの簿記資格であり、公認会計士、税理士試験に挑戦する人や金融関係を目指す人だけでなく、民間企業への就職志望者にとっても非常に有効な資格である。

【授業の目標】

日商簿記検定1級に合格すること。

【授業計画】

- 第1回 直前答練第1回、解説
- 第2回 直前答練第2回、解説
- 第3回 直前答練第3回、解説
- 第4回 直前答練第4回、解説
- 第5回 全国公開模擬試験、解説
- 第6回 ファイナルチェック問題、解説
- 第7回 直前総まとめ
- 第8回 単位認定試験

【評価方法】

単位認定試験の成績に応じて評価する。

【テキスト】

大原簿記専門学校のテキスト

ASU TOEIC I B

鈴木久子

【授業の概要】

TOEICスコア470点以上の学習者を対象とする全学向けのTOEIC対策講座。日本人教員担当の「ASU TOEIC I」、ネイティブスピーカー担当の「ASU TOEIC II」から成る。最高期に2コマ（I、IIの両科目を受講した場合）、4年間続けて履修できる。週1回に2単位とする。毎回、授業外での読解演習（60分×7日×13回）とリスニング演習（60分×7日×13回）（それぞれ91時間相当）が課せられる。課題は毎回チェックされる。授業中に演習に取り組む態度、出席、課題などにより総合的な評価を行う。

【授業の目標】

学期末のTOEIC受験における得点アップを最大の目標とする。ただし、各自目標を設定し、到達度・進捗度を確認することが望ましい。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーションおよび模擬演習
- 第2回～第14回 演習・解説、Vocabularyテスト
 - ・1週間の宿題の範囲からVocabularyの小テスト・採点・解説（15分）
 - ・前回の宿題で間違いが多かった点の解説（15分）
 - ・演習（文法問題・Reading・リスニング）（30分）
 - ・問題解説（25分）
- 第15回 模擬テスト
- *宿題 読解演習・文法問題（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）
- リスニング演習（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）

【評価方法】

出席・演習に取り組む態度・宿題の遂行度合いなどにより総合的に評価する。

【テキスト】

掲示（外国語教育センターの掲示板）を参照のこと。

ASU TOEIC I A

鈴木久子

【授業の概要】

TOEICスコア470点以上の学習者を対象とする全学向けのTOEIC対策講座。日本人教員担当の「ASU TOEIC I」、ネイティブスピーカー担当の「ASU TOEIC II」から成る。最高期に2コマ（I、IIの両科目を受講した場合）、4年間続けて履修できる。週1回に2単位とする。毎回、授業外での読解演習（60分×7日×13回）とリスニング演習（60分×7日×13回）（それぞれ91時間相当）が課せられる。課題は毎回チェックされる。授業中に演習に取り組む態度、出席、課題などにより総合的な評価を行う。

【授業の目標】

学期末のTOEIC受験における得点アップを最大の目標とする。ただし、各自目標を設定し、到達度・進捗度を確認することが望ましい。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーションおよび模擬演習
- 第2回～第14回 演習・解説、Vocabularyテスト
 - ・1週間の宿題の範囲からVocabularyの小テスト・採点・解説（15分）
 - ・前回の宿題で間違いが多かった点の解説（15分）
 - ・演習（文法問題・Reading・リスニング）（30分）
 - ・問題解説（25分）
- 第15回 模擬テスト
- *宿題 読解演習・文法問題（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）
- リスニング演習（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）

【評価方法】

出席・演習に取り組む態度・宿題の遂行度合いなどにより総合的に評価する。

【テキスト】

掲示（外国語教育センターの掲示板）を参照のこと。

ASU TOEIC II A

PUDWILL, Larry A.

【授業の概要】

TOEICスコア470点以上の学習者を対象とする全学向けのTOEIC対策講座。日本人教員担当の「ASU TOEIC I」、ネイティブスピーカー担当の「ASU TOEIC II」から成る。半期に2コマ（I、IIの両科目を受講した場合）、4年間続けて履修できる。週1回に2単位とする。毎回、授業外での読解演習（60分×7日×13回）とリスニング演習（60分×7日×13回）（それぞれ91時間相当）が課せられる。課題は毎回チェックされる。授業中に演習に取り組む態度、出席、課題などにより総合的な評価を行う。

【授業の目標】

学期末のTOEIC受験における得点アップを最大の目標とする。ただし、各自目標を設定し、到達度・進捗度を確認することが望ましい。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーションおよび模擬演習
- 第2回～第14回 演習・解説、Vocabularyテスト
 - ・1週間の宿題の範囲からVocabularyの小テスト・採点・解説（15分）
 - ・前回の宿題で間違いが多かった点の解説（15分）
 - ・演習（リスニング・Reading）（30分）
 - ・問題解説（25分）
- 第15回 模擬テスト
- *宿題 読解演習・文法問題（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）
- リスニング演習（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）

【評価方法】

出席・演習に取り組む態度・宿題の遂行度合いなどにより総合的に評価する。

【テキスト】

掲示（外国語教育センターの掲示板）を参照のこと。

ASU TOEIC II B

PUDWILL, Larry A.

【授業の概要】

TOEICスコア470点以上の学習者を対象とする全学向けのTOEIC対策講座。日本人教員担当の「ASU TOEIC I」、ネイティブスピーカー担当の「ASU TOEIC II」から成る。半期に2コマ（I、IIの両科目を受講した場合）、4年間続けて履修できる。週1回に2単位とする。毎回、授業外での読解演習（60分×7日×13回）とリスニング演習（60分×7日×13回）（それぞれ91時間相当）が課せられる。課題は毎回チェックされる。授業中に演習に取り組む態度、出席、課題などにより総合的な評価を行う。

【授業の目標】

学期末のTOEIC受験における得点アップを最大の目標とする。ただし、各自目標を設定し、到達度・進捗度を確認することが望ましい。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーションおよび模擬演習
第2回～第14回 演習・解説、Vocabularyテスト
- ・1週間の宿題の範囲からVocabularyの小テスト・採点・解説（15分）
 - ・前回の宿題で間違いが多かった点の解説（15分）
 - ・演習（リスニング・Reading）（30分）
 - ・問題解説（25分）
- 第15回 模擬テスト
- *宿題 読解演習・文法問題（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）
 - リスニング演習（60分×7日）＝毎回7時間相当分
（合計 7時間×13回＝91時間）

【評価方法】

出席・演習に取り組む態度・宿題の遂行度合いなどにより総合的に評価する。

【テキスト】

掲示（外国語教育センターの掲示板）を参照のこと。

Get together and Talk II

NORRIS, Harry T.

【授業の概要】

対話力養成モジュールの1つとして、学生同士の意見交換を活発に行うことで、説得力のある議論を口頭で展開する方法を、実際の経験を通して学ぶことを目標とします。

Get together and Talk IIでは、本学学生同士の意見交換のみならず、インターネットのブロードバンド接続によるビデオコンファレンス機能（アップルコンピュータ社のiChat）を利用して、キャンベラ大学の学生と意見交換を行います。

さまざまなテーマに基づいて、キャンベラ大学の学生と意見を交換することで、英語運用力を高めるのみならず、日本語と英語の違い、日本とオーストラリアの文化・考え方の違いなどさまざまな違いを発見することが期待されます。

【授業の目標】

- There are three main objectives.
1. To allow students to converse with native speakers, helping the students' listening and speaking fluency skills.
 2. Discuss topics of interest with people of a similar age who live in a different country.
 3. Listening to native English speakers speaking in Japanese will help students understand their own speaking difficulties and increase their awareness and confidence.

【授業計画】

This lesson will be held over 2nd and 3rd periods, 10.50 - 2.50.

During this time there will be 4 time periods, 1. Preparation, 2. Chat, 3. Review, and 4. Lunch! Due to the time difference between Japan and Australia it may be necessary to have a flexible lunch period.

May (2), 9, 16, 23 and 30. Will be used for real time chat with Canberra University students. Topics for discussion will include

1. Death penalty
2. The article no.9 of Japanese constitution
3. Marriage between the same sex couple
4. Should we accept more refugees?

【評価方法】

Assessment will be based on
50% Homework and Chat preparation
50% Participation

【テキスト】

No text

【参考文献・資料】

<http://www.apple.com/support/ishat/>

Get together and Talk I

石橋千鶴子 福本明子 太田晶子 二村慎一 WOODMAN, Jo-Anne

【授業の概要】

事前英語集中授業、フィールドワーク、合宿、プレゼンテーションなどから構成される英語対話実践セミナー。本学および中部地区在住の留学生が、セミナー・アシスタントとしてフィールドワーク、合宿、プレゼンテーションに参加する。多様な文化背景を持つ留学生と行動を共にし、共通語の英語を使ってコミュニケーションを持つことにより、英語対話力の強化を目指す。

各学期終了時（集中授業期間内 前期：8/7（月）～11（金）、後期：2007年2/13（火）～17（土））に実施予定であるが、詳細は掲示および説明会（前期：6月中旬、後期：11月下旬の予定）で発表する。指定された期間（前期：6月末、後期：12月上旬）に外国語教育センターを通じて履修の申し込みを行う。

*注意

本科目は申し込み者多数の場合、抽選により履修できない場合もある。また、1年生は学期の合計履修単位に上限が設定されているので、本科目の履修を希望する場合、余裕を持って登録すること。

【授業の目標】

異なる文化背景を持つ留学生とのコミュニケーションを通して、英語運用能力の向上を目指すと共に、文化の多様性に対する認識を深め、それに対応できる柔軟な視点の育成を目指す。

【授業計画】

前期 8/7（月）～11（金）、
後期 2007年2/13（火）～17（土）を予定。
事前英語集中授業、フィールドトリップなどを含む15コマ相当の活動を行う。
詳細は掲示で発表。

【評価方法】

全日程の活動を総合的に評価する。

【テキスト】

英文パンフレットなどを使用。

【参考文献・資料】

インターネットなどを通して資料は各自検索する。

<履修条件>

- 1) 英語コミュニケーション科目2科目（4単位）以上を取得済みであること。
- 2) 英語でのコミュニケーション実践に十分な「意欲」があること。
- 3) 全日程に出席できること。

上級英語セミナー 2006 A

難波豊子 CURRAN, Beverley

【授業の概要】

この科目は、2人の担当教員による週2日の授業で1セット（4単位）を基本とする全学対象の上級英語科目である。TOEICスコアで選抜を行い、少人数クラスを編成する。多様な授業活動を通して語彙力を増強し、総合的な英語運用能力の強化を目指す。学期末のTOEIC受験およびその得点アップが期待される。各自、到達度・進捗度を確認することが望ましい。4年間続けて履修できる。（ただし、1年生および編入生（1年目）は前期開講の本科目「上級英語セミナー2006A」は受講できない。）

【授業の目標】

Bev Curran

To create a community of supportive language learners and to develop each student's confidence in their ability to express their ideas in prepared presentations and extemporaneous discussion in English.

難波豊子

英語を通して様々な国内、海外の実状、社会問題等の背景知識を広げ、英語、日本語を問わず、要点をまとめて発表する習慣を身につける。

【授業計画】

各担当教員の授業の計画は以下の通りである。詳細は、1回目の授業で説明される。このほか、ゲストスピーカーによる授業も適宜、実施される。

Bev Curran

Each week, in my class, a different student will be responsible for selecting a topic and introducing a discussion about it in English. The other students will listen with attention and then continue the discussion through their own questions and comments. The goal in each class is to engage in animated discussion for 90 minutes, giving each student an opportunity to grow more comfortable and confident in initiating and continuing a conversation or discussion in English. Special guests will also be invited to the class to talk about themselves with the students in a relaxed and supportive atmosphere.

難波豊子

スラッシュ・リーディングによって英文を頭から情報処理する練習、英文メッセージを短時間で把握する練習、分かりやすい日本語の検討、逐次通訳・同時通訳の訓練などを通して、英語運用能力の総合的な向上を図る。

【評価方法】

月曜日5限（担当教員：難波豊子）、木曜日5限（担当教員：CURRAN, Beverley）の両方の授業への出席が必要である。それぞれの授業において、日常の授業態度、宿題に対する姿勢などにより総合的に評価し、それらの評価の平均をこの科目の評価とする。

【テキスト】

授業中に配布、指示する。

上級英語セミナー 2006 B

難波豊子 CURRAN, Beverley

【授業の概要】

この科目は、2人の担当教員による週2日の授業で1セット(4単位)を基本とする全学対象の上級英語科目である。TOEICスコアで選抜を行い、少人数クラスを編成する。多様な授業活動を通して語彙力を増強し、総合的英語運用能力の強化を目指す。学期末のTOEIC受験およびその得点アップが期待される。各自、到達度・進捗度を確認することが望ましい。4年間続けて履修できる。

【授業の目標】

Bev Curran
To continue to give students practice in preparing and leading a discussion, as well as sustaining a discussion through careful listening and questions. The group discussion aims to form a community of supportive language learners and to develop each student's ability to express their ideas in English.

難波豊子
英語を通して様々な国内、海外の実状、社会問題等の背景知識を広げ、英語、日本語を問わず、要点をまとめて発表する習慣を身につける。

【授業計画】

各担当教員の授業の計画は以下の通りである。詳細は、1回目の授業で説明される。このほか、ゲストスピーカーによる授業も適宜、実施される。

Bev Curran
In the second semester, discussions will continue, and students will be encouraged to take more responsibility for engaging in discussion and offering support to the speaker through a thoughtful consideration of the topic. Each week will be a chance to grow closer as a group of engaged language learners whose communal energy will motivate individual student growth in English ability and self-confidence. Special guests will also be invited to the class to talk to the students in English in a relaxed but lively atmosphere.

難波豊子
スラッシュ・リーディングによって英文を頭から情報処理する練習、英文メッセージを短時間で把握する練習、分かりやすい日本語の検討、逐次通訳・同時通訳の訓練などを通して、英語運用能力の総合的な向上を図る。

【評価方法】

月曜日5限(担当教員:難波豊子)、木曜日5限(担当教員:CURRAN, Beverley)の両方の授業への出席が必要である。それぞれの授業において、日常の授業態度・宿題に対する姿勢などにより総合的に評価し、それらの評価の平均をこの科目の評価とする。

【テキスト】

授業中に配布、指示する。

Central Japan

小沢 茂 福本明子 MCGOLDRICK, Gemma 山田久美子

【授業の概要】

中部地方から世界に向かって進出する企業の第一線で活躍している方をゲストスピーカーとして迎え、社会の中での企業の役割、その活動、経験等を英語で講義してもらう。この講義は、ゲストスピーカーの授業に際しての、事前・事後の学習もおこなう。

【授業の目標】

地元企業で活躍する方をゲストスピーカーとして招き、その講義を聞き、実社会における企業の役割、また厳しい現状等を理解し、より広い視野を育てることを目標とする。授業での内容を理解し、それをまとめることができるようにする。

【授業計画】

ゲストスピーカー

ミツカン酢

日本経済新聞

中部電力

ブラザー工業

ヒルトンホテル

デンソー

太陽科学株式会社 など。

詳しくは、最初の授業の時に説明する。

【評価方法】

レポート 80% (各授業のレポート等)

出席 20%

【テキスト】

プリント

Traditional Arts in Japan

小沢 茂 二村慎一 MCGOLDRICK, Gemma 山田久美子

【授業の概要】

日本の伝統文化に携わる方をゲストスピーカーとして招き、伝統文化に直接に触れ、その歴史、現状などを英語で学ぶ。

【授業の目標】

伝統文化に直接触れる機会は、日常生活では多くない。この授業を通して、一から伝統文化を学び、日本の優れた文化を理解し、それを自らの言葉で表現できるようにする。

【授業計画】

日本の伝統文化に携わる専門家をゲストスピーカーとして招き、講義を受ける。講義の際、あらかじめ、その伝統文化についての学習を行う。

日本舞踊(西川流)

尺八

琴

からくり

華道

歌舞伎

能・狂言

などの分野からのゲストスピーカーを迎える。詳しくは、最初の授業の時に説明する。

【評価方法】

レポート 80% (各授業のレポート等)

出席 20%

【テキスト】

プリント

Multiculturalism in Aichi

ブイ チトルン

【授業の概要】

社会のグローバル化とともに一つの地域や国だけでは解決できない問題などが生まれている。愛知県においても製造業の発展に伴い諸外国から移住されてきた人々が年々増加している。多様な人種・文化・価値観が混在している愛知県における多文化社会の実態を理解し共生社会構築への道を考える。

【授業の目標】

- * 日本社会および愛知県における多文化性を理解すること
- * 行政・企業・NPOによる多文化共生事業の現状を理解すること
- * 県内における外国人コミュニティの実態を理解すること
- * 外国人労働者等を送り出し国の現状を理解すること
- * 在住外国人支援事業を理解すること

【授業計画】

- A. 総論：多元文化社会について
①多元文化社会としての日本社会(ブイ チトルン)
B. 各論1：多文化共生支援事業について
②総務省および地域国際化協会の政策、事業について(外部講師・東京から)
③愛知県および愛知県国際交流協会の事業について(外部講師・県内)
④名古屋市および名古屋国際センターの事業について(外部講師・県内)
⑤豊田市および豊田市国際交流協会の事業について(外部講師・県内)
⑥経済産業界の事業について(外部講師・県内)
C. 各論2：外国人コミュニティからの実態について
⑦コリアンコミュニティ(外部講師・県内)
⑧中国人コミュニティ(外部講師・県内)
⑨フィリピン人コミュニティ(外部講師・県内)
⑩ブラジル人コミュニティ(外部講師・県内)
⑪アメリカ人コミュニティ(外部講師・県内)
⑫留学生について(外部講師・県内)
⑬外国人研修生の送り出し国からの報告
タイ王国から(外部講師・タイ王国から)・前期
ベトナムから(外部講師・ベトナムから)・後期
D. 各論3：在住外国人支援事業について
⑭生活相談事業について(外部講師・県内)
⑮日本語教育支援事業について(外部講師・県内)

【評価方法】

出席率、レポートおよび授業中の発表にて評価する。

【テキスト】

プリント資料など配布。テキストは授業中適宜に指示する。

【参考文献・資料】

授業初回に指示する。

PowerPoint Presentations

NORRIS, Harry T.

【授業の概要】

所属学科に関係なく様々な卒業研究の成果、多文化共生理解モジュールや講演会の事後学習の成果を、動画・音声・写真などを盛り込みながら PowerPointを使ってまとめ、英語による情報発信が行えるよう訓練する。

【授業の目標】

- ・コンピュータを使って、これまでの学習・研究成果を視覚的効果の高い情報発信ができる手法を身に付ける。
- ・アイデアや意見を英語で論理的に口頭発表できる自己表現力を身に付ける。
- ・他者のプレゼンテーションを聴いて、英語で討論を行える能力を身に付ける。

【授業計画】

以下の項目を学習する。

- ・アイデアの要約
- ・口頭発表に必要な論理的展開方法
- ・動画・音声・写真などのマテリアルの収集や作成方法
- ・プレゼンテーションソフトの効果的な使用方法

【評価方法】

- ・出席状況
- ・プレゼンテーション
- ・ディスカッション参加への積極性

【テキスト】

なし

【参考文献・資料】

授業中に随時紹介する

Booklet Publishing

NORRIS, Harry T.

【授業の概要】

所属学科に関係なく様々な卒業研究、多文化共生理解モジュールや講演会の事後学習の成果を、視覚的効果を高めてポスター、冊子、レポートにまとめ、英語を使って世界に向けた情報公開が行えるよう訓練する。

【授業の目標】

- ・コンピュータを使って、これまでの学習・研究成果を視覚的効果の高い情報発信ができる手法を身に付ける。
- ・新聞・雑誌・パンフレットで活用されている見出し効果やテキストの段落構成について理解する。
- ・英語で短く分かりやすい文章を作る能力を身に付ける

【授業計画】

以下の項目を学習する。

- ・アイデアの要約
- ・英語での自己表現方法
- ・図や表を使った表現方法
- ・タイトルや見出しの効果
- ・文章の段落構成

【評価方法】

- ・出席状況
- ・ブックレットなどの完成作品

【テキスト】

なし

【参考文献・資料】

授業中に随時紹介する